白猫の恋わずらい

みきまろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
白猫の恋わずらい

【Ｎコード】
Ｎ７２９６Ｗ

【作者名】
みきまろ

【あらすじ】
生まれつき色素がうすく、他人に気味悪がられて生きてきたルチノー。生まれ育った孤児院の閉鎖で、一人、猫となって生きていくことにした。冷たい雨の降る中、出会ったのはひげもじゃの大きな人で・・・？◆王道猫モノが書きたくて！後にいちゃらぶになる予定です。◆２０１１年１２月１２日２０時、本編完結。番外編数話続きます。

1　雨の中の出会い（前書き）

＊＊＊＊＊で視点が切り替わります。

1　雨の中の出会い

冷たい雨の降る日だった。
俺、カール＝ヘルベルト＝ヴュストは、外套の合わせ目を両手できっちりと閉めて家路を急いでいた。

なーぅ・・・・・

聞こえたのが奇跡のような、小さな声だった。
周囲を見渡すが、雨にけぶる田舎道は視界が悪く、草むらや木々の間に目をこらしてもわからない。
気のせいだったかと、歩を進めようとしたとき。

なーぅ・・

もう一度、聞こえた。
猫。
それもまだ小さい子猫の声だ。
代々猫好きで、実家では常に何匹もの猫を飼っていた。
ブルクハルト国の騎士団に入り宿舎で生活するようになると、猫を飼うことは許されず、道ですれ違う野良猫を時折からかうくらいだった。
そのうち戦果をあげ女を覚え、相応の部屋を与えられるようになると、猫をかまうことはなくなった。

それが今。
冤罪で辺境の警備などにまわされた自分に、子猫の声がする。

「こんな冷たい雨の中では・・死んでしまうぞ」

声を頼りに、草むらに分け入る。
なーぅ、なーぅと鳴いていたのが、だんだん弱弱しくなり、鳴き声の間隔があいてくる。

「おい、どこだ。おい！」

焦ってガサガサと藪をかきわける。
道からはずいぶん離れてしまった。
外套のフードは脱げて、伸ばしっぱなしの髪から冷たい雨がしたたる。

「んなー・・・・・」

ザッと勢いよく踏み出した足元で、思いがけず声がした。

「あぁ！こんなところに！」

危うく踏んでしまうところだった。
藪の中、丸まる小さな子猫。
そっと抱き上げると、ぐっしょりと濡れてなんとも情けない姿だった。
目は目やにがついて、ほとんど開けられないようだ。

「もう大丈夫だ。俺の家（うち）に来い。
男一人の何もない家だがな、雨風くらいはしのげるぞ」

子猫は灰色の体をぶるぶると震わせている。
外套の合わせ目を開いて、胸の内に抱きこんだ。
かなり冷(ひや)っとしたが、子猫に己の体温を分け与えるために我慢する。

「帰ったら風呂に入ろうな。ミルクも温めてやる。もう少しだ、がんばれ」

家につくまで、俺は子猫に話しかけ続けた。
この辺境の村にきて、仕事以外でこんなに話したのははじめてだった。
近所の村人ともろくに話はしなかった。
都落ちした自分を、村人がさげすんでいるような気がしたからだ。
それでもはじめは何かと世話を焼こうとしてくれていたが、露骨に避ける俺に、いつしか誰も話しかけなくなった。
気が楽になった反面、孤独感に襲われた。

あぁ、でも今日からは一人ではない。

守るべきものを見つけた俺は、足取りも軽く、しかし最大限に急いで家へと帰った。

＊＊＊＊＊

孤児院(うち)が閉鎖されることになった。

生まれつき髪が白く赤目の私は、生みの親にさえ気味悪がられて、１４年前、この街はずれの孤児院の前に置き去りにされた。
唯一の親とのつながりは、かろうじて覚えていた“ルチノー”という自分の名前だけ。
誕生日すらわからないが、たぶん今年１６歳になる。
それ以来孤児院の院長先生を義母（ははは）と呼び、後から来た義妹（いもうと）や義弟（おとうと）の面倒をみながら生活してきた。
しかし長年孤児院の後援者（パトロン）だった子爵が亡くなり（院長先生のお兄さんだそうだ）、経営が立ち行かなくなって閉鎖されることになった。

そして、とうとう明日、孤児院（うち）がなくなるという日。
院長先生と囲む夕餉の食卓は、どんよりと重い空気に包まれていた。

「あとはおまえだけだね・・・」

「はい・・・ごめんなさい、お義母さん。迷惑をかけて・・・」

「いいんだよ。おまえの良さは見た目なんかじゃわからないのにね。
いや、その髪もその瞳も、私はとても美しいと思っているよ。
ただ他の人にはね・・・」

孤児院の閉鎖に伴い、院長先生は子どもたちの里親を必死に探してくれた。
ごく小さい子やある程度の年ですぐ働き手になる子はすぐに行先が決まって、他の子もなんとか閉鎖前日の今日までには新しい扶養者の元へ旅立った。
でも私だけは、この髪や目が気味悪がられて売れ残ってしまった。

「まぁいざとなれば私が引き取ってやるさ。

おまえ1人くらいどうとでもなる」

院長先生は微笑もうとしたんだと思う。
でもそれは失敗に終わっていた。
蝋燭の炎に映し出されるその顔は、閉鎖が決まる前の資金繰りの心労と、連日の里親探しのため、ひどくやつれて深いしわを刻んでいた。
院長先生自身、親類の家に身を寄せると言っていたので、赤の他人の私などが一緒に行けるわけがない。
どこか働き口はないのか。
いっそ髪を染めて目をつぶして、夜の街にでも立とうか。
そんなことを考えたとき、コンコンと玄関の扉を叩く音がした。
こんな時間に誰だろう。

「夜分遅くに申し訳ありません。
旅の途中、日が暮れてしまい途方に暮れています。
一夜の宿をお貸し願えませんか」

のぞき窓から外を見ると、そこには外套を目深にかぶった細身の人影があった。
街はずれにたつ孤児院（ここ）には、時折こうして旅人が訪れることがある。
いつもなら下働きの男手などもあるので快く迎え入れていたが、今夜はもう私と院長先生の2人しかいない。
困っている人を助けたいのはやまやまだが、もし悪い人だったらどうしよう。
身の安全を考えると簡単には扉を開けることはできなかった。

私が扉の前で逡巡していると、院長先生がやってきて、場所を変わるように動作で示した。
背伸びをしてのぞき窓から外を伺う。

院長先生ももう年だからすっかり腰がまがってしまって、私でも届くのぞき窓が背伸びをしないと届かなくなっていた。

「怪しい者ではありません。どうか・・・・」

「ではフードを取ってくださらんか」

「あぁ、これは失礼」

旅人の顔を見て、院長先生は入れてあげることにしたようだ。
かんぬきをはずし、扉を開ける。

「ありがとうございます！本当に困っていたんです」

見ればその旅人は、人懐っこい目をした女性だった。
なるほど、院長先生が扉をあけるはずだ。
旅人はエメと名乗り、王都の知り合いのところへ行く途中で、東の国の魔術師だと言った。
この国にも魔術師はおり、主に病気の治療や占いなどをする。
悪い魔術師になると呪いを請け負うこともあるそうだが、エメさんはそんな風には見えなかった。
院長先生が部屋へ案内する間、私は調理室に戻り、夕餉の残りのスープを温めてエメさんに届けた。

「ありがとう！うわぁ、なんて良い匂い！
温かい食べ物なんて久しぶり！ずっと旅してきたからさぁ」

エメさんは温かいだけでたいした具も入ってないスープをおいしそうに口に含み、添えた固いパンもスープに浸しながらぺろりと平らげてしまった。

「おいしかった！これはあなたが作ったの？上手ね！」

エメさんは、私に目を合わせてそう言った。

「ほめてくださってありがとうございます。
あの・・・私が気持ち悪くないんですか？」

「気持ち悪い？なぜ？」

「だって・・・こんな見た目だから・・・」

「あぁそうか。あなたは自分がアルビノなことを気にしているんだね」

「アルビノ？」

「魔術の世界で希少価値の高い、生まれつき色素が薄い個体をそういうんだよ。
私たち魔術師にとっては貴重でとっても大事な存在なんだけどな」

貴重。
大事。

自分の見た目をそんな風に言われたことはなかった。

「じゃぁ魔術師なら私を高く買ってくれるんですか？」

「んん？そんな魅力的な話を気軽にしちゃいけないよ。
ふふ・・・なんてね。

まさか人を魔術の道具にするわけにはいかないでしょう。人の売買は禁止されてるしね」

「あぁ・・・そうですよね・・・」

「どうしたの？一宿一飯の恩で話くらいきくけど」

そして私は今の状況を話した。

「なるほどね。あなたは院長先生に迷惑をかけたくなくて、一人で生きていけるようになりたいんだ」

「はい・・・」

「その思い、本物なら協力できなくもないよ。
成功するかしないかはあなた次第だけどね」

エメさんがそう言って耳打ちしたのは、私にとってはすばらしい提案だった。

「猫になる！？」

次の日。
院長先生の部屋をたずねて、私は思い切って話をした。

「えぇ。エメさんが私に魔法をかけて猫にしてくださるそうです。
猫ならばどこでも生きていけますから。これ以上お義母さんに迷惑をかけたくないんです」

変化の術はそう簡単にできるものではない。
運のいいことに、エメさんはかなり高位の魔術師だったようだ。

「迷惑だなんてお言いでないよ。
おまえ・・・そんなことを考えていたなんて・・・・」

「大丈夫です。この魔法はルチノーちゃんがもう猫を辞めたいと思った時か生活が安定したときには解けるようにしておきます。
一生猫のままというわけではないんです」

いつの間にか隣に立っていたエメさんが口添えをしてくれた。

「そこまで言うのなら・・・・。でも私はかまわないんだよ。一緒に行こうよ、ルチノーや」

「ありがとうございます・・・。でも私、決めましたから」

「ルチノー・・・。
わかったよ。困ったときはいつでも頼っておくれ」

「はい！」

そうして私は魔術師（エメさん）の術を受け、猫になったのだった。

2　一緒にお風呂

＊＊＊＊＊

「さっぱりしたなぁ。おぉ、おまえ、白猫だったんだな！」

湯に入れて、石鹸で洗ってやると、真っ白な毛並みが現れた。
灰色だと思ったのは汚れだったらしい。
目やにはまだ完全にとれていなかったが、とりあえず風呂からあげてミルクを与える。
匂いをかいで、そぉっと口をつけたのを確かめてから、俺は茹でた鶏肉を細かくちぎって隣に置いた。
子猫は、今度は躊躇なくはぐはぐと勢いよく食べ始めた。

「ははっ・・・腹、減ってたんだな」

俺も鶏肉の茹で汁に細かく切った野菜を入れ塩コショウで味を調えてスープとし、自分で焼いたパンを添えて夕食とした。
与えた食事をすべて平らげた子猫は、ぷっくり膨れた腹を重そうに引きずってよたよたと部屋の隅へ歩いていったかと思うと、ぽてっと倒れた。
そのまま丸くなる。
これは・・・寝る態勢だ。

本当は一緒に寝たかったが、小さいとはいえ野良猫。

初めて会った人の前で餌を食べただけ上等だろう。
ピンクの鼻先がぴすぴすと動いている。
時々ぴくっとひげが揺れるが、もうすでに夢の中なのは確実だ。
外と違い、部屋の中は温かい。
生死の危険はないだろう。

「おやすみ、猫」

明日は名前を決めてやろう。
そう思いながら、俺も眠りについた。

＊＊＊＊＊

子猫になって、街へ出た。
１０年以上暮らした街である。
どこに何があるかはわかっている。
そうはいっても人の目線と猫の目線は違うので、はじめはずいぶん戸惑った。
すぐに着くと思ったところが意外と遠かったり、楽に通れると思っていたところが高すぎて通れなかったり。
逆に猫ならではの道もたくさんあった。
しかし誤算もいくつかあった。
１６と言えば人間ならそれなりの体格のはずだけど、なぜか猫になった私は小さな子猫だった。

「わー、なんだこの猫！目が赤いぞ！」

「うわぁ、捕まえろ！」

ある日子供たちに追いかけられ、とっさに私は通りがかりの馬車に飛び乗った。
荷物にまぎれこんで身を隠す。
ほっと一息ついた後、馬車の振動が心地よく、私は眠ってしまった。
どれくらい眠ったのだろう。

「うおっ、なんだ、猫か！あっち行け、シッシッ」

馬車の持ち主に追い立てられて目が覚めた。
思わず飛び出て呆然とした。全く知らない場所だったのだ。
人は少なく、緑ばかりの田舎の村。
勝手知ったる街だから生きていけると思った。
いざとなったら院長先生のところへ行けば私（ねこ）を私とわかってくれると思った。
こんな何もない場所で生きていけるのだろうか。
カラスにでもつつかれたら終わりである。
途方に暮れて、とにもかくにもとぼとぼと歩いた。

そのうち冷たい雨が降ってきた。
あぁ、もうだめ。
猫なんてやめる。
気味が悪いと言われたってこんなところで死ぬのは嫌だ。
嫌？
じゃぁ生きててどうなるっていうんだろう。
働く場所もなく体を売るしかないじゃないか。
そこまでして生きていたいだろうか。
それならいっそのこと自然に還り、他の生き物の糧となったほうがよっぽどいいじゃない？

そう思ったのだけど。

「なーぅ」

寒さと空腹と心細さに耐えきれず、一縷の望みを込めて鳴いてみた。

「なーぅ」

助けて。

「なーぅ」

誰か助けて・・・・。

「おい、どこだ。おい！」

それが私と彼との出会いだった。

3　名前は？

＊＊＊＊＊

カリカリカリ

カリカリカリ

頬を小さな爪でひっかかれて目が覚めた。

「・・・おはよう。なんだ、腹減ったのか？」

俺の胸の上に乗って、覗き込む子猫がいた。

目やにだらけの目をうっすら開けている。

「赤いなぁ。充血してるのか。

拭いてやるから、飯はその後だ」

子猫を肩に乗せ、台所にある水瓶に向かう。

子猫は小さな爪を精一杯伸ばして、俺の肩にしがみついている。

・・・一晩でずいぶん懐いたもんだ。

そう思うと口の端が無意識のうちに上がる。

昨日無理矢理寝台に連れ込まなかったのがよかったのか、子猫は自分から近づいてきた。

肩にかかる頼りない重さがくすぐったい。

濡らした手巾で丁寧に目元をぬぐってやると、ようやく子猫は両目をしっかり開けることができた。

「あれ、充血じゃないな。元々赤い目なのか。きれいだなぁ！」

わきの下に手を入れて抱き上げ、紅玉（ルビー）のような目をじぃっと見る。

白猫といえば青目か黄目。

左右の色彩が異なるオッドアイも飼ったことがあるが、赤目は初めてだ。

「真っ白で赤目か。うさぎみたいだな。名前、うさぎにするか」

「なぁうー」

「ん？嫌なのか。じゃぁスノゥは？」

たしたし！

手の甲を前足で叩かれた。

「それもだめか。ルビーでどうだ」

「なぅ！」

「ル？」

「んなっ！」

「ビー？」

たしたし！

「なんだよ。ビーはいらねぇのか。
じゃ、ルゥな。おまえの名前は今日からルゥだ」

なぁうー・・・

なんだかもう少し言いたいことがありそうだが、しょせん猫語。
名前はルゥにした。

「さて、俺は仕事だ。昨日の雨で異変がなかったか見回りをしてくる。
大人しくしてるんだぞ」

本音を言えばルゥと遊び倒したかったが、後ろ髪をひかれる思いで家を後にした。
今日は早く帰ってこよう。
そう心に決めて。

＊＊＊＊＊

私を拾ってくれた親切な人は、とっても大きかった。
子猫目線だからではないと思う。
室内の家具は一般的なものだと思うけれど、鴨居にいつも頭をぶつけそうになっていて通るたびにかがんでるし、寝台からは足がはみでていた。
体格もがっしりしていて筋肉質。

ごつごつした手は、私を撫でるときはとても優しい。
年はよくわからない。
髪だか髭だか区別がつかない毛が顔を覆っていて、はっきり見えないから。
４０代かな、と思ったけれど声は若いような気がする。
かろうじてわかるのは、髪の毛の隙間から覗く瞳が深い碧(みどり)であること。
私を見ると途端に細められ、笑顔の形になる・・・はずなのだがこれがとても怖い。
にんまり、というのかな。
ひげもじゃの口の端があがり、目じりが下がる。
本来ならごく一般的な笑みの形のはずだ。
それがこの人の場合、元々の不審者面(ふしんしゃづら)が奇妙に歪み、“悪鬼が残忍な方法で敵を葬る方法を思いついた”みたいな凶悪な顔になるのだ。
はじめてごはんをもらったとき、私を見つめるその顔があまりに怖くて部屋の隅に逃げてしまった。
本当あたたかそうな布団で寝たかったのに。

だから今日は勇気をだして起こしてみた。
彼の顔も見慣れれば平気になるかもしれない。
周囲に気味悪がられて生きてきた私が、人様(ひとさま)の顔に文句をつけるなんておこがましい。
ましてや彼は命の恩人。
怖いなどと言っては失礼だ。

しかも名前もつけてくれた。
「ルチノー」と一生懸命言ったんだけど、さすがにそれは通じなかったみたい。
でも「ルゥ」という本名に近い名前をつけてもらえた。
すごくうれしい。

早く帰ってこないかな。
今度は彼の名前を知りたい。

4　カールという人

＊＊＊＊＊

「隊長、今日はなんかご機嫌っすね」

辺境の警備隊。
王都でそれなりの地位にいた俺は、左遷され警備隊の隊長などという役職を与えられていた。
田舎の村のすぐそばに隣国との国境があり、この警備隊は一応その国境を見張る役目を負っている。
しかし３００年以上良好な関係を続けている両国に何かあるわけはなく、警備隊の主な仕事は雨で崩れた土塀を直したり、野生動物に壊された柵を修理したりすることだった。

今俺に話しかけてきているのは、前隊長で今は俺の補佐官となっているギュンターだ。
くすんだ金髪に灰色（グレー）の瞳。
多少軽薄そうではあるが、隊で唯一俺に気軽に話しかけてくる奴だ。
３か月前、俺が赴任したせいで隊長から補佐官となったにもかかわらず、恨む様子はない。

「隊長は顔が怖いんすよ。暗いしね。
隊長職？別にいりません。俺、所詮、牛飼いの小倅（こせがれ）っすから」

警備隊のほとんどはこの土地で徴兵されたもので、家の仕事を手伝いつつ警備の仕事もしている者ばかりだった。
専門の武官は俺一人といってもいい。

つまり俺の仕事は、辺境の警備といいつつも村の便利屋と隊の連中の訓練というわけだ。

「ほんと、何かありました？」

柵の修理に使う板を運びながら、ギュンターが尋ねてくる。
この男、俺がいくら無愛想にしてもひるむ様子がない。
図太いのか無神経なのか。
・・・たぶん後者だろう。

「猫を拾ってな」

あまりにしつこいのでしぶしぶ答えた。

「猫ぉ？」

「昨日の帰り、雨の中鳴いていたから保護した」

なんとなく言い訳じみてしまう。

「へぇ、そりゃお優しいことで。ま、猫一匹で隊長の機嫌がよくなるなら大助かりですよ。
隊の連中も最近は慣れてきたとはいえ、まだまだ隊長のこと怖がってますからね」

「・・・・」

「髪、切りゃいいんじゃないすか」

「・・・ふん」

今の自分の顔がお世辞にも人にいい印象を与えないのはわかっている。
王都にいたころは身ぎれいにし、もう少し愛想もよかったのだが、ここにきて何もかも面倒になってしまった。
目にかかるうっとおしい前髪も、外界と自分を分けてくれるようで安心する。

早く帰ってルゥを撫でたい。

その一心で、俺はこれ以上話しかけるなという気（オーラ）を放ち、兵どもとともに柵の修理に励んだ。

「ルゥ。ルゥ？」

夕方。
仕事を終え、勢い込んで玄関を開けたが子猫（ルゥ）の姿はなかった。
どこへいったのか。
すべて施錠して出たはずだから、逃げ出すとは思えない。

「ルゥ！」

さして広くもない家の中をどかどかと捜し歩くと、「んなー」とどこからか声が聞こえた。

「ルゥ！」

ルゥは戸棚の上に置いた長靴の中から顔を出した。

「なんでそんなところにいるんだ。
あぁ入ったはいいが出られなかったんだな。仕方のないやつだ」

抱き上げるとほこりまみれだった。
今日は一日部屋の中を探検して歩いていたらしい。
書類を机の上に放り出し、一緒に風呂に入ることにした。

自分もルゥもきれいに洗ってから湯船につかる。

「おい、こら爪を立てるな。あいたたたた！」

夕飯をやると、はぐはぐと一生懸命食べ、今日は寝台に滑り込んできた。
同じ石鹸の香りがする体はやわらかく、温かかった。

＊＊＊＊＊

カール、と言うらしい。
書類の後ろ書きがこの人のものならば、だけど。

「なぁぅ？」

カール？と呼びかけてみる。

「ん？なんだ？」

仕事を持ち帰ってきたらしく、机に向かっていた彼が目を細めて私を見る。

怖い。けど我慢。

「なーぅ？？」

カール？？

「遊びたいのか？もうすぐ終わるから待ってろ」

喉を撫でられてゴロゴロと鳴ってしまう。

そうじゃないんだけどなー。

思いが伝わらないもどかしさに、彼の前で転がってみた。

正確には、彼の前にある書類の上で。

「こら、邪魔するなよ。明日締め切りの月例報告書なんだ。今夜中に仕上げないとな」

そう言いつつも、彼は私のまんまるのお腹や喉元を優しく撫でてくれた。

昨日今日とお風呂に入れてくれたおかげで、私の毛は真っ白でつやつやだ。

気持ち悪かった目元もすっかりきれいになった。

ひっくり返って彼を見上げると、髭だか髪だかわからない毛が魅惑的に揺れていた。

猫の本能でつい手を伸ばす。

姿に影響されるのか、どうしても我慢できないのだ。

「あ、おい、だめだぞ。あっ、痛(い)てて！こら！」

あれ？うわ、どうしよう。
やっ、ごめん、きゃー！

ちょっとしたいたずら心だったのに、私の細い爪が毛にからまって、とれなくなってしまった。
もがけばもがくほどにからまり、体は宙に浮いてまるで彼の髭の飾(オプション)りのようになってしまった。

「ルゥ・・・。切るしかないな」

えっ、爪切るの？
痛くしないでね？
昔孤児院で拾った猫の爪を切ってやろうとして、切りすぎて血を出させてしまったことを思いだす。
彼は猫の扱いに慣れてるみたいだから、大丈夫だと思うけど。

内心冷や汗をかきつつ成り行きを見守っていたら、彼が机の引き出しから取り出したのは大きなハサミ。
そそそそんなので切られたら腕ごと切れちゃいます！！
もうだめ、と思って目をつぶる。

じょきん！

・・・あれ？
痛くない。
痛みはないけれど、体は自由になった。
そぉっと目を開けると、目の前にはやはり腕にからまる大量の毛。

でも私、机の上に着地してるよ？
一体どうしたことだろうと彼を見て納得。
彼が切ったのは私の爪でも腕でもなく、自分の髭（髪？）だった。

「大丈夫か？ほら、今とってやるから大人しくしていろよ。
もうこんないたずらするんじゃないぞ」

右半分の髭が短くなった彼は、そんなことは全く気にしていない様子で私にからまる自分の毛をとりのぞいていた。
その毛、何かの願掛けとかで伸ばしていたものだったらどうしよう。
たぶんただの無精だとは思うんだけど。
とりあえず反省の姿勢を見せようと、耳を垂れて「んなー・・・」と鳴いてみた。

彼はにこっと笑って私の頭をぽんぽんと撫でてくれた。
あ、今の顔、結構自然だった。
その夜はこれ以上彼の髪にからまらないように気を付けて寝た。
下弦の月が、窓の外できらめいていた。

5　髪を切ったら・・・

＊＊＊＊＊

「うわ、隊長、どうしたんすか、それ」

出勤した途端にギュンターが寄ってきた。
まぁ今日は俺も用があったから助かる。

「ちょっとな。この村に散髪屋はあるか？」

「んー、ヨゼフじいさんはこの間死んじまったからなぁ。
手先の器用な奴がいますから、呼んできましょう。
ついでに髪も切っちまいましょうぜ」

ギュンターが呼んできたのは裁縫屋の息子で、裁ちばさみと剃刀を器用に使って髭と髪を整えてくれた。

「隊長・・・・いくつなんすか」

「なにがだ」

久々につるりとなった顎を撫でる。
襟足もすっきりした。
長めに残してもらった前髪は、真ん中で分けて顔の両側に流す。

「年です。おいくつでしたっけ」

「３１だが、何か？」

「３１ぃ！？俺の２コ上！？」

「何をそんなに驚くんだ。履歴書は王都から届いていたはずだろう」

「いや、そうっすけど、きっと間違いだと思っ・・・いえ、なんでもありません。

うわ、隊長。よく見れば男前じゃないすか。

まいったなぁ。村の娘どもがほっときませんよ」

「女は当分いらん」

「うへ・・・なんて贅沢な・・・・」

この地に飛ばされたのも女がらみだった。

恋愛ごとはこりごりだった。

兵舎に行くと皆一様に不審げなまなざしを向けてきた。

「何を見ている！訓練はどうした！」

一喝すると「隊長！？」「えぇ！？」「詐欺だ！」「実は若かったのか！」となんともわかりやすい反応が返ってきた。

そうか、あの無精ひげと伸ばし放題の髪のせいで俺はずいぶん年上に見られていたらしい。

「つまらんことを言ってないで外に並べ！」

目を覆う前髪がなくなったせいだろうか。

世界が明るくなった気がした。

遠巻きにしていた隊の連中との距離も、心なしか近くなった気がした。

「ルゥのおかげだろうか」

「ん？何か言いましたか、隊長」

「いや、なんでもない。ギュンター、月例報告書ができてるから送っておいてくれ」

「はいはい。
隊長、あとは笑顔っすよ。
村のやつらは単純だから、その顔でにこりとでもすればすぐに仲良くなれますからね」

「おもしろくもないのに笑えるか」

「ま、そりゃそうですけどね」

兵舎を出て、庭に整列した警備隊員たちの前に立つ。
２０名ほどの隊員たちは、どうにも定まらない姿勢で突っ立っていた。

「気を付け！」

全員びくっと震えて不動の姿勢をとる。
その後、休め、右向け右、敬礼などの基本動作をさせる。
ここまでは赴任して３か月。なんとか見られるようにした。

「銃をおけ！」

わたわたわた。
銃を扱う段になって、途端にぎこちなくなる隊員たち。
「銃をとれ！」
おい、そこの右の。
先を自分に向けて、もし暴発でもしたらどうする気だ。
弾を抜かせておいてよかった。
「立て銃！　下げ銃！　担え銃！」
とにかく慣れだろうと、立て続けに指示を出す。
左右混乱した奴が隣の奴に銃をぶつけたり、銃同士がぶつかったりして、ゴツンだのガチャンだの騒々しいことこの上ない。
「隊長、無理っすよぉ」
「俺、鋤や鍬なら得意なんすけど」
「投げ縄ならできます！俺んちの牛が逃げたとき、見よう見まねでやってみたらうまく行ったんでさぁ」
「あぁ、あれすごかったよな！」
「もう少しで村の柵越えちまうってとこで、サジの奴が縄さ持ってきて・・・」
あぁ、頭が痛い。
こめかみを押さえ、溜息をつく。
「ははは、まぁ、隊長。俺らはこんなもんすよ。
そんな根つめてやらなくても大丈夫です」

隣に立つギュンターものんきなものだ。

「おおおおーーーい、大変だー！
ヤン坊のとこの牛が逃げ出したぞー。手を貸してくれー」

庭の反対側から村人の声がした。

「おぉ、俺の出番！」
「兵舎から縄とってくる！」
「網も持ってくだ。みんなで囲むべ」
「あっ、隊長。行ってもいいっすか！？」

「・・・・・行って来い」

いつもこんな調子で訓練が中断される。
牛か・・・まぁ大変だよな。逃げだしたら。
銃を放り出し喜々として駆け出す隊員たちの後ろをついていきながら、今日何度目かの溜息をつく。

はぁ・・・。
ルゥの白く柔らかい躰を思い浮かべ、これも任務だ、早く終わらせて家に帰ろうと気持ちを切り替えた。

＊＊＊＊＊

あっ！帰ってきた！
窓の下、木の向こうに、外套を目深にかぶった大きな人影が見えた。

昨日は失敗してしまったが、今日こそ玄関でお出迎えするのだ。
孤児院でも、院長先生が外出したときにはこうして帰りを待っていたことを思いだす。
彼が一人で住むこの家は、玄関を入ってすぐが居間で、あとは台所、水回り、寝室だけの小さな家だ。
大人数で暮らしていた孤児院からすると驚くほどの狭さだけど、この3日間で人一人暮らすには十分だとわかった。

がちゃり

鍵の開く音がする。
彼は私の見た目を気味悪がず、赤い瞳をきれいだと言ってくれた。
冷たい雨に打たれて死ぬしかないと思っていたところを助けてくれた。
食事とあたたかい寝床を与えてくれた。
野良でやっていこうと思ったけれど、一度こんなに心地よい空間を覚えてしまったら、もう外へは出たくない。
精一杯の愛想を振りまくべく、扉の前に座って私は長いしっぽを揺らした。

「ルゥ。待っていてくれたのか」

私を見た途端、彼が破顔する。
・・・彼？

「ふぎゃーーーーー！！！」

「あっ、おい！？ルゥ！？」

いやあぁぁ、誰これー！

反射的に戸棚によじのぼり、背中の毛を逆立てた。
長靴に隠れ、様子を伺う。

「おまえまで・・・・俺だよ、カールだよ」

カール？
カールとはたぶん彼の名だ。

「なーぅ？」

「んん？それ、カールって言ってくれてるのか？
そうだ、カールだよ。おまえを拾ったカールだよ」

見知らぬ人が私に手を伸ばす。
だって、だって、違うよ？
髭はきれいさっぱりなくなってるし、錆色の髪は短くなって前髪だけ顔の両側に垂らしていた。
すっと通った鼻筋といい、きりっと引き締まった口元といい、ちょっとかっこいいとか思ってしまう。
変わらないのは深い碧の瞳だけ。

「おいで」

呼ばれて、彼の大きな手におそるおそる近づいた。
人差し指で喉を撫でてくれる。
この手。
やっぱり彼だ。
あぁ、びっくりした。

「なーぅ」

「そうだ、カールだ。どうだ、似合うか」

「んなー」

「ははっ、そうか。驚かせて悪かったな。さぁ、夕飯（ゆうめし）にしよう」

6　変化（前書き）

ルゥ視点が続きます。

6　変化

カールに拾われて一週間が過ぎた。

「ただいま」

「んなー」

玄関でのお出迎えも習慣となりつつあった。
日中はぽかぽかの窓辺でまどろみ、夜はカールと一緒にお風呂に入ってご飯を食べる。
一緒のお風呂って、もっと恥らった方がいいのかもしれないけど、はじめにおじさんだと思ってしまったせいか、カールが私を猫と信じきっているせいか、あんまり意識したことはない。

「すぐ夕飯にするからな。今日は山羊(シェーブル)チーズをもらったが・・・猫(おまえ)にはやらないほうがいいのかな」

山羊(シェーブル)チーズ！
大好き！！
パンに塗ってオーブンで焼くととろりとやわらかくなっておいしい。

「んなっんなっ」

「おいおい、興奮するなよ。欲しいのか？　うーん、でも塩分がな

あ。

ちょっとならいいか」

「んにゃ～♪」

カールの足に頬をすりよせる。

片手で抱き上げられて、肩の定位置に納まると、カールの頬にちゅっとキスをした。

人間だったら絶対にできないけど、子猫ならば許されるでしょ？

山羊（シェーブル）チーズのためならば、いくらでも愛想をふりまくのだ。

とたんにでれっと相好を崩したカールが、鼻歌を歌いながら夕食の支度を始める。

毎日作らせちゃってごめんね。

人の姿なら私が作ってあげるのだけど。

ここのところカールは、毎日お土産を持ってきてくれる。

髪を切ってから、村人や隊の人たちと話をするようになってきたらしい。

私といるときのカールはすごくおしゃべりで、他の人とうまくいってないなんて不思議。

表情も、はじめ怖いと思ったのが嘘のように、やわらかく笑うようになった。

「おまえのおかげだ、ルゥ」

カールはよくそう言う。

私こそカールに拾ってもらえたから、今こうして生きているのだ。

感謝してもしきれない。

カールのために立派な猫になろう！

そう決心して、私は寝台にもぐりこんだ。

夜中。
なんだか体がむずむずして目が覚めた。
温かな寝床を出て床に飛び降り、うーん、と伸びをしてみる。
窓の外を見ると、すっかり細くなった月が中天にかかっている。

「・・・・っ」

月を瞳に映した瞬間。
自分の体が宙に溶け出すような、奇妙な感覚にとらわれた。
闇と己の境目がなくなる。
自分が何であったのか、わからなくなる。

カール・・・・・・！

寝台に眠る彼に手を伸ばす。
自分の手が視界に入って驚いた。

なんてこと！

そこにあったのは真っ白な毛におおわれた小さな脚ではなく、つるりとした人間の手だった。
慌てて台所に向かう。
それですら、素足がひたひたと猫にはありえない音を立てた。

もうわかっていたけれど、一縷の望みをかけて水瓶をのぞきこむ。

あぁ、やっぱり。
そこに映るのは、真っ白な髪に赤い瞳の少女。
親に捨てられ、誰にももらい手がつかなかった、気味の悪い子ども。

『成功するかしないかはあなた次第』
『この魔法はルチノーちゃんがもう猫を辞めたいと思った時か生活が安定したときには解けるようにしておきます』

エメさんの言葉がよみがえる。
私は猫を辞めたいと思ったのだろうか・・・人間ならばカールにごはんを作ってあげられると思った。
生活は安定したのだろうか・・・カールのおかげでこの一週間は何の不安もない日々だった。

・・・だから人に戻ってしまったのか。

猫だからカールは拾ってくれたのに。
猫だからカールの側にいられたのに。

こんな私を見たらカールはなんて言うだろう。
きっと気味悪がって追い出すに違いない。
騙されたといって罵倒するかもしれない。
私は猫でなければならない。
猫じゃなくなったらここにはいられない!!!

「・・・ルゥ?」

寝室からカールの呼ぶ声がした。
私がいないことに気付いたのだろう。

ギシッと寝台を降りる音がする。
どうしよう。
狭い台所である。人になってしまった私には隠れる場所がない。

「ルゥ」

近付いてくる足音。
嫌！だめ、来ないで！

がちゃり。

扉が開いた。

「なんだ、台所（こんなところ）にいたのか。
喉でも乾いたのか？」

水瓶の前。
体を丸めていた私は、いつのまにか猫に戻っていた。

「ルゥ？どうした？」

固まって動かない私を気遣って抱き上げるカール。
一体今のはなんだったのだろう。
大きな手のひらは、私をすっぽりと包んでくれた。
ゴロゴロゴロ。
現金なもので、それだけで私の喉はご機嫌に鳴ってしまう。

「ははっなんだよ。急にいなくなるから心配したぞ。
まだ夜明けまでには時間がある。もう一眠りしよう」

寝室に向かうカールの肩に乗って、私は決心した。
もう人には戻らない。
私は猫でなければならない。
猫でなければここにはいられないのだから。
私はルゥ。
白猫のルゥ。
人であったことなど忘れてしまえ。

7　モテキとリボン

＊＊＊＊＊

「あの、隊長さん、これよかったら・・・・」

兵舎での休憩時間。
若い娘が、赤いリボンで口を結んだ包みを差し出した。

「私が焼いたパンなんです。中に木の実が練り込んであります。お口にあうといいんですけど・・」

「あぁ、ありがとう」

受け取るときに、指先が触れた。
娘はかあぁっと頬を染めて、「いえぇ、あの、その、じゃぁっ」とかなんとかもごもごと言って壁の向こうに走り去った。
なんだ、俺は危険人物か。
そんな反応をするなら、差し入れなどしなければいいのに。

「あーぁ、やっぱりねぇ。隊長モテモテっすね」

「モテ・・・？」

露骨に逃げられて仏頂面をしていると、ギュンターが話しかけてきた。

「あれ、サジの妹っすよ。
うちの隊にいるでしょ。そばかすの浮いた細い奴。

妹はなかなかの器量よしだって言うんで狙ってる奴も多いのになぁ。

隊長相手じゃかないませんね」

「なんで俺が相手になるんだ」

「やだなぁ、隊長、もしかして恋愛ごとには鈍いんすか？」

得意とは言えない。

普通の女性と深い仲になったことはないから、恋愛なんてわからない。

相手にしていたのはもっぱら商売女だ。

「ここのところやけに皆いろいろくれると思ったら、そういうことか？」

「ですねぇ。髪切った途端これだもの、女っつぅのはなぁ」

香ばしい匂いを漂わせるパンは魅力的だが、そうとわかったら安易に受け取るわけにはいかない。

「これは昼飯の時でも隊の連中にわけてくれ」

「いいんすか？別にこれくらいもらっても平気だとは思いますよ」

「女は当分いらんと言っただろう。パン１つで隊員の恨みを買うのも嫌だしな・・・っとそうだ」

ギュンターに押し付けた包みから、リボンをしゅるりとほどき取った。

「俺はこれだけでいい」

「・・・隊長？」

「猫だよ。首輪がほしいと思っていたところだったんだ」

赤いリボンを見たときから、ルゥに似合いそうだと思った。
昨夜急にいなくなって心配したから、鈴をつけて首にかけてやるのもいいだろう。
鈴か。どこかにあっただろうか。
とりあえずはリボンだけでも良しとしよう。

「ただいま」

ルゥがきてからすっかり習慣になった帰宅のあいさつ。
玄関を開けると、期待通りちょこんと座って俺を待っていた。

「な～」

と鳴いてすり寄ってくる。
なんて愛らしいのだろう。

「ルゥ。今日のお土産はこれだ」

上着の隠しからリボンを取り出す。
ルゥはちょいちょいっと手を出したかと思うと、すぐに揺れる布先

に夢中になった。

「・・・だから、さ。からまるなよ」

数分後、リボンにぐるぐる巻きにされたルゥがいた。
笑いをかみ殺しながらほどいてやる。

「これはここ。こうするためにもらってきたんだ」

首かけ、後ろ側で結んでやった。
白い毛なみに赤いリボンが映える。

「思った通りだ、よく似合う」

なんだろう、と言うように小首をかしげるルゥ。
自分では見えないのだろう。
しかししばらくすると、前脚でリボンをひっかけてほどいてしまった。

「なんだ、せっかく結んでやったのに」

床に落ちていたリボンを拾って、また結んでやる。
ルゥがほどく。
俺はまた結ぶ。

それを何回か繰り返して、どうやらルゥはリボンを嫌がっていることに気付いた。

「これ、嫌なのか?」

目の前で見せると、

「うなー・・・・」

悲しげに鳴いた。

野良だから嫌なんだろうか。

首輪（リボン）をすると、俺の飼い猫になると思うから？

俺の・・・。

あぁ、そうだ。

俺がリボンをつけたかったのは、心配したからなどではない。

ルゥが俺のものだという、所有の印をつけたかったのだ。

でもルゥはそれを嫌がった。

つまり、俺を飼い主だなどと認めてはいないのだ。

「ルゥ・・・俺のこと、嫌いか？」

尋ねると、ルゥはふるふると首を横に振った。

まるで人の言葉がわかっているかのようだ。

「これ、つけるの嫌か？」

俺はよっぽど辛そうな顔をしていたに違いない。

ルゥが近づいてきて、頬を舐めた。

ざらりとした感触がくすぐったい。

玄関への出迎えといい、決して嫌われてはいないのだと思うけれど。

それでも、首輪（リボン）は嫌なんだよな・・・。

せっかくもらってきたリボンだが処分するしかないと思ったとき。

ルゥがしっぽを差し出してきた。

「ここに結べって？」

「なー」

尻尾の先に、赤いリボン。
結んでやると、ルゥは2、3度振って動作を確認したあと、尻尾を高く上げて居間を2周した。
胸をはり、ぴんと尻尾をあげて歩く。

「ははっ、そうしているとずいぶん上品に見えるな」

「んな！」

俺が笑ったことに腹を立てたかのように、たしたし！っと足を叩かれた。
こいつ、本当に言葉がわかってるんじゃないのか？
ゆらゆら揺れるルゥの尻尾の先で舞うリボン。
当初の予定とはちがったが、そこもなかなかいい。

「気に入ってくれたか？」

「な！」

ルゥがリボンをほどく様子がないのにほっとして、俺は夕飯の支度にとりかかった。

＊＊＊＊＊

カールがリボンをくれた。
深い赤色をしたリボンは光沢があって、これまで見たどんなリボンよりもきれいだった。
首に結ばれて、はじめはうれしかったけれど、はっと気づいた。
もしこれで人に戻ったらどうなるんだろう。

リボンがほどけるか切れるかすればいい。
でももしそのままだったら？
人に戻った途端、私は窒息死だ。
だから尻尾に結んでくれたときには、ほっとした。
尻尾が人型になったときにどこの部分になるのかはわからないけど、首がしまるよりはましだろう。
せっかくカールが私にと持ってきてくれたものだから、大事にしよう。

針のように細い月が、わずかに室内を照らしている。
体がむずむずしてくる。
いけない。
私は2度と人にはもどらないんだ。
ぎゅっと目をつぶり、強く思う。
生きるために。
カールの側にいるために、私は猫じゃなきゃいけないんだ。

8　夢

＊＊＊＊＊

不思議な夢を見た。
純白の少女が隣で眠っていた。
つややかな白い髪の端には赤いリボン。
なぜか驚くこともなく、彼女はルゥだと思った。
目を開けることがあれば、その瞳はきっと紅玉のように美しく輝いているに違いない。
だから、いつもルゥの背を撫でるように髪を一撫でして、そっと抱き寄せた。

「測量隊？」

「えぇ、この村にも回ってくるみたいっすよ。今日通知がきてました」

ギュンターに渡された書類には、目的やメンバーなどが書かれていた。

「地図作りか。何百年も前のあいまいなものしかないからな。滞在期間は一週間・・・兵舎に空きはあるのか？」

「5人すよね。家の近い奴は一時的に通ってもらいましょう」

「そうだな」

滞在中の身の回りの世話も頼む、とある。
食事の用意や洗濯など普段は自分たちでしていたが、村の女手を頼ることにする。
明後日には着くというので、早速午後から準備にとりかかった。
そして夕方。

「俺、隊長の人気を舐めてました。
ちょいと村の女に声かけたら、ほとんど立候補しましたよ。どうしましょう」

「・・・色恋沙汰にならない女性（ひと）にしてくれ」

「了解。明日面接しますから、立ち会ってくださいね」

「おまえだけじゃだめか」

すごく、すごく面倒そうだ。
俺の好みで選んだなどといわれたら困る。

「隊長見て赤面するようなのは失格っす。
座ってるだけでいいからいてください」

「・・・わかった」

面接の結果、２人の女性に手伝いを頼むことにした。
調理担当は、警備隊に孫がいるというヨシばあさん。
若い頃、街で料理屋をしていたらしい。
掃除・洗濯をしてくれるのは、スヴァルという背の高い、針金みたいに痩せた女性。
４０近いようだが独身とのこと。
子どもを産めない体質だが世話は好き、ということで村の子どもたちを日中預かって乳母のようなことをしている。
今はちょうど誰も預かっていないそうで、測量隊の手伝いを希望した。

早速、食材の調達や部屋の掃除をしてもらう。
手が足りないところは隊員も手伝う。
ヨシばあさんは恰幅の良いばあさんで、孫（ヨゼフＪｒ．だった。死んだと言う散髪屋の孫でもある。ということはヨシばあさんはその伴侶か）を中心にすぐに打ち解けた。
調理場に早く慣れるため、と作ってくれた夕飯もとてもおいしかった。
スヴァルは穏やかで控えめな女性だった。
控えめ・・・というか存在感そのものが薄く、気付くと背後に立っていたりする。
軍人にあるまじき醜態だが、気配を全く感じさせないので驚きだ。
仕事はゆっくりだが丁寧で、いつのまにか兵舎の中がきれいになっていた。

「女性がいると、隊が華やぐっすねぇ」

「そうだな。あわただしかったが、こういうのも悪くない」

「あれ・・・・隊長・・・」

「ん？」

「いえ、なんでもないっす」

にやっと笑うギュンター。
言いかけて途中でやめるなんて、気になる。
しかしどうせろくでもないことなんだろうと、忘れることにした。

「測量隊の到着は明日の午後の予定だったな。
俺はもう帰るが、後を頼んでいいか」

夕飯を兵舎で食べてしまったので、いつもより遅くなっている。
ルゥは腹を減らして待っているだろう。

「えぇ。お疲れ様でした」

見送るギュンターに片手をあげて挨拶をして、家路を急いだ。

＊＊＊＊＊

夢を見た。
私は孤児院の前の道で、小石を拾って絵を描いていた。

「これがまぁま、これがぱぁぱ」

実の両親の面影を覚えていたころだから、4、5歳かな。
丸を組み合わせただけの絵だけど、本人は大好きな両親のつもりだ。
そのころはまだ、いつか迎えに来てくれると信じていた。
母親はドレスを着て、父親はマントをつけている。
前日にでも読んでもらった絵本の影響か。

「あ、おひめさまにはティアラがなくちゃね」

仕上げに頭飾(ティアラ)りと王冠を描こうとしたところに、

「ルチノーじゃんか！なぁにしてんだよッ」

ザッと足が割り込んできた。
土埃が舞い、絵がかき消される。

「あ、ごめんなぁ。わざとじゃねぇんだ。あはははは！」

「アヒム・・・・」

同じ孤児院の、私の後からやってきた3つ年長になる男の子だった。
院長先生の前ではいい子だけど、陰で私をいじめていた。

「うっわ、気持ち悪(わり)ぃ。
赤目でにらむんじゃねぇよ。呪われるだろ」

「にらんでない。見てるだけ」

「同じことだよ！真っ白な髪といい、不吉な見た目のせいで捨てられたんだろ！」

ぐいっと髪をひっぱられた。

「やめて！捨てられたのはアヒムだって一緒でしょ！」

「うるせぇな！俺は預けられただけだよ！てめぇと一緒にすんじゃねぇ！！」

言い返したら酷くなるのはわかってたけど、生来おとなしいほうではない。

特に小さいころは何でもはっきり言っていた気がする。

向かっていっても、子どもの3歳差はとてつもなく大きくて、いつも傷だらけになるのは私だった。

「ふん！いちいち逆らうんじゃねぇよ。

おまえは俺におとなしく殴られてりゃいいんだよ。

おまえを殴るとなぁ、なんでかすっきりするんだ！

親に捨てられたおまえが俺の役に立ってるんだぜ！喜べ！」

アヒムは、おなかや背中、お尻など、服で隠れるところばかり狙って殴ったり蹴ったりした。

院長先生に心配をかけたくない私は、傷やあざを誰にも言わず、アヒムが孤児院を去るまでの2年間、ただ耐え続けた。

彼の親が迎えに来たのか、他の人に引き取られたのかは知らない。

あの頃はつらかったなぁ。

カールの家の窓辺で、まどろみから目覚めた。

あれ、今日はちょっと遅いんだな。

いつも夕暮れ時には帰ってくるのに、もう日は沈みきって暗くなっていた。
寝すぎたから、嫌な夢をみたのかな。
夢の残滓が体にまとわりついているような気がして、ぷるぷると身を振った。

あれは過去。
どんなにつらいことがあっても、私の親は迎えになんて来てくれないと思い知った日々だ。

歩く拍子に尻尾がゆれ、赤いリボンが目に入る。
大丈夫。今の私は幸せ。
カールがいるから。
赤目をこのリボンのようにきれいだと言ってくれて、白い毛並みを優しく撫でてくれる。
私の居場所はここなんだ。

「ただいま」

「んなー」

ようやく帰ってきた彼と、いつものやりとり。
カール、大好き。

9　舐めてみました

＊＊＊＊＊

家に帰ると、出迎えたルゥが俺の手を経て肩によじのぼってきた。

「すごいなぁ、自分で一気に登れるようになったのか。
少し大きくなったのか？」

ゴロゴロと喉を鳴らしながら、耳元に頭をすりつけてくる。
髭が頬にあたってくすぐったい。

「ははっ、どうしたんだ。今日はやけに甘えてくるじゃないか。
帰りが遅かったからかな。ごめんな」

ひとしきりルゥを撫でまわしてから、ヨシばあさんにもらった夕飯の残りを食卓（テーブル）に並べた。
鶏胸肉の香草焼きは、皮をとって細かく裂いてやる。
野菜の煮込み・・・は玉ねぎが入っているな。
豆だけ取り出して、指先でつぶしてルゥの口元に持って行った。
はぐっと豆を食べ、「んなー」と鳴いた。

おお、俺の手から食べている。

感激して次の豆を差し出した。
これも食べる。うれしい。

「うまいか。まだあるぞ」

次々と豆を与えるうち、俺の手は汁だらけになってしまった。
ルゥが、小さな舌で指の間や手の平の汁を丁寧に舐めとっていく。

そういえば、昨日は妙な夢を見たな。
隣に眠るルゥが少女になっていた。
よくは覚えていないが、１６・７歳といったところか。
子猫だと思っていたけれど、人間の年にすればそれくらいなのか。
あまり大きくならない種類なのかもしれない。

指を舐めるルゥの姿が、昨夜（ゆうべ）の少女と重なる。
人型でこんな風に舐められたら・・・？

「うわ！」

立ち上がった拍子に、椅子がガタンと大きな音を立て、倒れそうになった。
驚いたルゥが飛びのいて、机（テーブル）の端から不思議そうに俺を見る。

「あ、いや、すまん。ちょっと・・・」

口元を押さえ、しどろもどろになる。
頬が熱い。

「俺・・・何考えてるんだ・・・。欲求不満か？」

それとも最近秋波を送ってくる村の女性陣に影響されたか。
立ったついでに台所で手を洗う。
深呼吸をして戻ると、ルゥは鶏肉をほおばっていた。

気を取り直して話しかける。

「ヨシばあさんの料理はうまいだろう。俺のよりいいか？」

ルゥが喜ぶなら、毎日わけてくれるように頼んでみるか。
ルゥはちらりと俺を見たが、返事はせず残りの鶏肉にとりかかった。
なぜルゥが人型になるなんて夢を見たのかはわからないが、なれるものならなってみてほしい。
いや、不埒なことを考えてるわけではなくて、ルゥが何を考えているのか、話してみたいから、だ、ぞ。

自分で自分の考えに言い訳をしながら、豆のなくなった野菜煮込みを口に運んだ。

＊＊＊＊＊

昨日のカールは、ちょっと様子がおかしかった。
お夕飯のときは急に立ち上がって真っ赤になってたし、お風呂のときも私を洗っていたかと思うとぴたっと手が止まってしまった。
カールがいつまでも固まっているから、たしたし！と叩いてみたら、慌ててお湯をかけられて耳に入った。
仕返しにぷるぷると体を振って、しぶきを飛ばしてやった。

「わ！やめろ、ルゥ」

「んなーッ」

「俺が悪かった。そう怒るなよ」

苦笑しながらあやまって、ふかふかのタオルで拭いてくれた。
しょうがない、許してあげよう。
寝台では、カールの胸の上で丸くなった。

「俺も意識しすぎだよな。明日から客が来るんだから、しゃんとしないと・・・」

「んな？」

お客さん？

「兵舎に測量隊が滞在することになったんだ。
手伝いで女性も2人来るんだ。
今日の夕飯は調理担当のヨシばあさんが作ってくれたやつなんだ。うまかっただろ？」

ちょいちょいっと指で鼻先をくすぐられたので、あぐっと噛んでみる。
どおりでいつもと味付けが違ったわけだ。
香草が効いていて、おいしかった。
その味を思い出し、甘噛みしていたカールの指をぺろっと舐めた。

「俺の指の話じゃないぞ？そうだ、おまえが舐めるから変なことを考えたんだ。ったく・・・」

ぶつぶつと文句を言いながらも、少し満ちてきた月に照らされるカールの瞳は甘い。
私を見て細められる深い碧の瞳がきれいで、身を起こしてじぃっと覗き込んだ。

「どうした?」

彼の両目に私が映りこむ。
あらためて猫の自分を見て不思議な気分になり、小首をかしげた。
彼の瞳の中の白猫も、首をかしげている。
ひげをふるわせ、鼻をぴすぴすと鳴らしてみた。

「くくっ・・・何してるんだよ」

カールが笑うと体が揺れて、私はずり落ちそうになった。

「おっと」

大きな手に支えられ、そのまま抱きすくめられた。

「かわいいなぁ、ルゥは。あったかいし、いい匂いだ」

「んなー?」

カールも同じ匂いだよ??
上を向こうとしたら、顎で頭をぐりぐりされた。
痛いっ痛いよっ
「ふぎっ」っと変な声が出て、カールをひっかいてしまった。

「痛(い)ってぇ・・・」

鼻先に血がたらりとたれる。
ありゃ、ごめん。
耳もひげも垂らして、カールの血を舐めとった。

「ぅなー・・・」

「ははっ、猫にひっかかれるなんて久しぶりだな」

痛かったはずなのに、それすらうれしそうに笑うカールに、胸がきゅんと締め付けられた。

私、こんなに甘やかされちゃっていいのかな。

幸せなのが不安だなんて、知らなかったよ・・・。

9　舐めてみました（後書き）

閑話でカールの妄想ルートがあるんですけど、Ｒ１５でいけるんでしょうかね（笑）。
ためておいて、お月様のほうに投稿しようかなぁ・・・。

10　好物

＊＊＊＊＊

「おぉ！カール＝ヘルベルト＝ヴュストではないか！」

「ウーリー＝ヒューグラー・・・・。なぜ貴様がここにいる」

測量隊の中に、見たくもない顔が混ざっていた。
事前にもらった書類には入っていなかったはずだ。

「測量術をおこなえる魔術師が体調をくずしてな！
急きょ私が加わることになったのだ。
僕ほどの高位の魔術師が、測量ごときに関わるなどめったにないが、国の一大事業（プロジェクト）だからな。
頼みこまれて仕方なく参加してやったのだ」

「魔術師はみんな出払っていて、うちの師匠くらいしか暇な人いなかったんですよぅ。
カール様、ご迷惑をおかけします・・・・」

「シギも一緒か。苦労するな、おまえも」

ウーリー＝ヒューグラー。
俺が王都を追われるきっかけを作った魔術士（おとこ）だ。
優秀な魔術師を多く輩出する家柄に生まれ、エリートコースを当然のように歩んできた。
腰まである金髪に紫の瞳。ほとんど左右対称の整った顔立ち。

魔術士として最も適した容姿を持つ。
ただし性格に難あり。
生まれたときからちやほやされたためか、思い込みが激しく、自分の思い通りにならないと気が済まない。
傲岸不遜とは彼のためにある言葉といっていい。
態度に見合うだけの力があるのが口惜しい。

付き人のシギはといえば、代々ヒューグラー家に使えてきた血筋で、魔術は全く使えない。
そのかわり、魔術の媒介となる特殊技能があるという。
よほど大がかりな術を使うときでないとその技能は発揮されないらしく、普段はウーリーの身の回りの世話をしているそうだ。

「なぁにを2人でこそこそと話している！
さぁ、部屋に案内しないか。
僕は当然最上階だろうな。他人の階下（した）で寝る気はないぞ」

「兵舎は2階までしかないし、個室は全部2階だ。
どの部屋も同じつくりだから、文句は言うな・・・っと、シギの分は用意してなかったな」

「いいんですぅ。師匠と同じ部屋で寝起きしますから。
この人、一人じゃ何にもできません。
あ！部屋だけじゃなくてごはんとかも1人分増えるんですねっ
やっぱり事前にご連絡しておくべきでした。すみません、すみません・・・」

「おまえの分くらい大丈夫だ。気にするな」

へこへこと頭を下げるシギ。

その間にもウーリーはさっさと階段を見つけて、部屋へあがってしまった。

「シギ！　行くぞ。この僕が他の奴の後から行くなんてありえないからな」

「あ、師匠！　待ってくださいよぅ。結構荷物が重いんですってば。では、カール様、お世話になります」

師匠と弟子は、騒ぎながら2階へと消えていった。
溜息をつきながら見送ると、立派な口髭をたくわえた壮年の男が手を差し出してきた。

「カール殿、あいさつが遅れてすまん。
測量隊隊長、ゲオルグ＝コルベだ」

「おっと、失礼。
警備隊隊長、カール＝ヘルベルト＝ヴュストだ。
測量が順調（スムーズ）に進むよう出来る限りの支援（サポート）をする。
何かあったらいつでもいってくれ」

握手をし、簡単に自己紹介をする。
他の隊員（メンバー）も特に問題なくあいさつを済ませて部屋へ入った。

「いやぁ、変わった御仁っすねぇ」

「ギュンター・・・・。
ウーリーには気をつけろ。極力相手にするなよ。
何かあったら俺に言え」

「へい。隊長は大丈夫っすか？」

「一週間だろ。こらえてみせる。これ以上とばされるところもないだろうしな」

「ははっ。ま、隊長にとっては左遷先でも、俺らにとっては故郷（ふるさと）なんで。
測量がうまくいくように尽力しますよ」

「・・・すまん。言葉が過ぎたようだ」

「いいんすよ。田舎なのは事実っすから。
でもちょっとずつ愛着を持ってもらえると嬉しいです」

「あぁ」

愛着ならすでに十分持っている。
ルゥと出会えたこの土地を、忘れることはないだろう。

「隊長さん」

「うわっ」

背後から急に話しかけられ、驚いて振り向くとスヴァルがいた。
この俺に気配を悟らせないのがすごい。

「これどうぞ」

何かと思ってみれば、その手には絆創膏。

「鼻の頭、猫ですか？」

「うちにやんちゃな子猫がいてね。昨夜ひっかかれたんです」

もうかさぶたになっていたが、それゆえに気になっていじっていたらしい。

指先でさわると、ほんの少し血がついた。

「私も、猫、好きなんです。今度会わせてもらえませんか」

「えぇ。本当に子猫だから、もう少し大きくなったら兵舎に連れて来ます。

白猫で、すごくかわいいですよ」

ルゥの話をするとつい顔がにやけてしまう。

スヴァルの猫好きというのは本当らしく、自宅にもたくさん猫がいること、それぞれの猫の好物、愛らしい動作、猫同士の関係などを楽しそうに話す。

俺も辺境（ここ）にきて初めての猫話に、つい熱が入る。

「おぉっと、思わぬ伏兵登場・・・。隊長は年上好み？

過去を知ってそうな御仁といい、一波乱ありそうだね」

「ギュンター？　何か言ったか？」

「なんでもないっすー。ちと部屋の様子見てきますね」

「あぁ、頼む」

気付けば、兵舎の入口には、俺とスヴァル以外誰もいなかった。

うーん、ルゥのことならいくらでも語れるな。

「ルゥちゃんによろしくです。あとでヨシさんにだしを取った後の煮干しをもらっておきます」

「ありがとう。スヴァル家の猫たちも後で紹介してください」

「はい」

測量隊の歓迎会も兼ねて、その夜は兵舎の食堂で食事をとった。ルゥが待っていると思うと酒を飲む気にはなれず、適当な理由をつけて断った。

「カール＝ヘルベルト＝ヴュスト。君はそのうち僕を頼るようになる。
今のうちに恩を売っておいた方が得策だぞ」

そろそろ皆酒がまわりはじめた。
帰る頃合いかと思っていたら、酒瓶片手のウーリーが隣に腰かけた。

「たとえ何が起こっても貴様だけは頼るまい。
余計なことは考えず、きっちり測量（しごと）して早く帰れ」

「今の台詞忘れるなよ。
わずかだが、君からは魔術の匂いがする。
あとで泣きついても遅いからな」

「はっ。ウーリー＝ヒューグラーともあろうものが、つまらん脅し文句を使うようになったもんだ。
飲みすぎか？

シギ！ご主人様がお休みだ。部屋へ連れて行ってやれ」

「はい、ただいまぁ」

「こら、シギ。カールのいう事なんて聞く必要はないぞ。
僕は酔ってない。酔ってないったら・・・」

千鳥足で反論しても、説得力はない。
ウーリーはシギにずるずると引っ張られていった。

俺に魔術の匂いだと？
この3か月、魔術どころか呪符一つにも触れていない。
防具や武具も、ごく一般的な物を身に付けている。

「思い込みもたいがいにしろよな」

食堂のそこかしこで、好き勝手に話の輪ができている。
そろそろ退席しても影響はないだろう。

「隊長。ヨシばあさんから、これ預かりましたよ」

「煮干しか。すまんな」

ギュンターからほんのり温かい包みを受け取ると、心はすでにルゥの元へ行っていた。

＊＊＊＊＊

魚はあんまり好きじゃないんだよね・・・っていうか、はっきり言って嫌い。
せっかくのお土産だけど、食が進まない。

「食わないのか？　スヴァルの家の猫は大好物だそうだがなぁ」

スヴァル？　スヴァルって誰？
カールの話によくでてくるのは、ギュンターって人。
おいしいおかずを分けてくれるのはヨシばあさん。
あとはのんきな隊員さんたちの話をよくしている。

「おまえに会いたいって言ってたぞ。
今度俺と兵舎に行ってみるか？」

「なぅ！」

行く！　行きたい！！
昼間いつも一人で、カールと一緒に行けたらいいなと思っていたのだ。

「ははっ、よじ登るな。そうか、行きたいか。
測量隊が帰って落ち着いたら、とりあえず非番の日にでも遊びに行こう」

カールの休みは十日に一回。
いままでに2回ほど休みがあり、その度にたっぷり遊んでもらった。
一緒におでかけできるとなれば、もっとうれしい。

「そういえば、ウーリーがおかしなことを言っていたな。
俺に魔術の匂いがするとかなんとか。

今日は酔いつぶれていたからいいが、明日以降、兵舎で余計な話をしないでほしいもんだなぁ」

ぎくり。
何それ。そんなことを言った人がいるの？
私のせいなのかな。

「ここの任期は3年だ。ほとぼりが冷めれば、それより早く戻れる可能性もある。
その時は一緒に王都に行こうな。
珍しいものがたくさんあるぞ」

脇の下に手を入れて私を抱き上げたカールは、楽しそうに目を細めてそう言った。
カール。
何年も先の話をしてくれるの？
そんなに一緒にいてくれるつもりでいるんだね。

王都に行けば、エメさんに会えるかもしれない。
私がそばにいることで、カールに魔術の影響がないか聞けるかな。
絶対人に戻らない魔術をかけてもらえるかな。

よぉし、それまで立派な猫でいるぞ！
満月に近付いた月を背に、私は決意をこめて「なー！」と鳴いた。

「そうか、おまえも行きたいか。じゃぁもっと食って大きくなれ」

・・・煮干し。
魚は嫌いだってばぁ！

ぐいぐいと口元に押し付けられて、仕方なく食べた。
王都への道は遠いかもしれない・・・・・。

11　左遷のわけ

＊＊＊＊＊

「隊長！　隊長を巡って女性たちが刃傷沙汰おこしたから左遷されたって本当ですか！？」
「隊長！　貴族の令嬢をとっかえひっかえして恨まれたあげくに左遷されたって本当ですか！？」
「隊長！　王女様をもて遊んで捨てたから左遷されたって本当ですか！？」
「隊長！　王都中に隠し子がいて養育費で首が回らなくなって借金したあげくに左遷されたって本当ですか！？」

「おまえら・・・・兵舎５０周！！
　１時間以内に戻らなかったら１０周ずつ追加だ！！！」

出勤したとたん、隊員どもに囲まれた。
くそっ、ウーリーの奴、つぶれてなかったのか。

「えええええ！」
「横暴！」
「職権乱用！」
「せめて答えを！」

「今しゃべったやつ５周ずつ追加」

低い声で命じると、誰もが黙って走り出した。

「で、どれが本当なんすか？」

「ギュンター・・・おまえも走るか？」

「いえ、遠慮しときます」

ギュンターを隊員の見張りに残し、俺は足音も荒々しくウーリーの部屋へ向かった。

「貴様！　仕事もしないで余計なことばかり言いやがって！」

「早いな、カール＝ヘルベルト＝ヴュスト。
あいさつもなしになんだ、いきなり」

見ればウーリーは、兵舎には似合わない真っ白なテーブルクロスを机に敷いて、シギに給仕をさせて朝食をとっていた。

「貴様、馬鹿か・・・。
測量はどうした！　ゲオルグ殿はとっくの昔に出かけただろう！」

「僕の出番はまだなんだよ。
明日は満月。僕の力（まじゅつし）が最大になるときだ。
その時に一気にやったほうが、合理的ってもんだ。
あぁ、僕ってやっぱり天才！」

「この人、食事に2時間かかるんです。
隊のみなさんには呆れられて置いてかれました。
幸い、師匠の出番はほんとに後なんで」

優雅にナイフとフォークを扱うウーリー。
料理はヨシばあさんの作ったものだが、器まで取り替えているのでやけに高級そうに見える。

「・・・シギがそういうならそうなんだろう。
しかし隊の連中にあることないことベラベラしゃべるのとは話が別だ。
これ以上余計なことを言うようなら、測量が途中でも叩き出すぞ！」

「何が余計なことなんだ？
あぁ、さっきの騒ぎか。部屋（ここ）まで聞こえたぞ。
華の近衛騎士だった君に貴族の女性陣が夢中になってたのも、贈り物合戦で鉢合わせた侍女が取っ組み合いの喧嘩をしてけがをしたのも、護衛した隣国の王女が君に本気になって国に連れ帰ろうとしたけど、“国に忠誠を誓った身ですので”って断ったのも本当じゃないか。
借金？　どこだかの孤児院の負債を肩代わりしたんだっけな。
おかげで子どもたちは全員行き先が決まるまでいられたとか。
結局閉鎖されることにはなったけど、よかったじゃないか」

ご丁寧に説明するウーリーの後ろで、シギがぷるぷると震えている。

「そこまで知っていて、なぜ隊のやつらにいい加減なことを・・・！」

「隊長おおおぉぉぉぉ！！！！」

「うわっ」

ウーリーの襟首をつかんでなおも言いつのろうとしたところに、隊員たちがなだれこんできた。

「そういうことだったんですね！」
「いい男ってのは苦労するもんすね！」
「孤児院ってマジっすか！　俺、感動っす！」
「隊長！　一生ついていきます！！」

襟をつかんだまま、呆気にとられる。
ウーリーは食べかけの野菜をぱくりと口に含んで、素知らぬ顔で咀嚼を続けた。

くそっ。
こいつに関わると碌なことがない・・・・！

＊＊＊＊＊

明るい空に、白い月が浮いている。

出窓から庭を眺めていると、カールが撒いたパンくずに小鳥が集まってきた。
うずうずうず。
飛びかかりたい衝動に駆られる。
鳥め～。
私がここから出られないのを知っていて、悠々とごはんを食べてるんだなっ

かりかりと窓をひっかいても、開くわけがない。
人間なら、こんな鍵くらい簡単に開けられるのにな。
いや、そもそも人間だったら、鳥に飛びかかりたいなんて思わないか。

出窓の鍵は、ちょうちょみたいな形の金具を回して開けるタイプ。
ピンクの肉球がついた前脚では、到底開けることはできない。

ぱたん、ぱたん。

尻尾を揺らす。

暇だなー。
カール、今頃何してるのかな。

11　左遷のわけ（後書き）

カールはばたばたしてますが、ルゥはのんきなものです＾＾

１２　左遷のわけ２

＊＊＊＊＊

「おまえら、兵舎５０周はどうした」

「ただいま走っているところであります！」
「兵舎の外とは言われなかったので、兵舎の中を！」
「そしたらたまたま話し声が聞こえて」
「決して、答えが気になって追いかけてきたのではありません！」

「おま・・・なっ・・・」

敬礼をして背筋を正す面々。
赴任した当時は敬礼（それ）すらできなかった。
３か月かかって、ようやく形（さま）になってきたのだ。

「ふっ・・・どんな理屈だよ・・・」

ウーリーから手を離し、額に手の平を当てて宙を仰ぐ。
まったくもって馬鹿馬鹿しい。
兵舎の中を走る奴があるか。
“気になって追いかけてきたのではない”って、追いかけてきたと明言しているようなものだろう。

「ぷ・・・くく・・・はは っ、仕方のない奴らだ」

笑いがこみあげてくる。
肩の力が抜けた瞬間だった。
髪や髭を隠し、他人を拒絶してきた。
ルゥのおかげで、顔をさらすことはできたが、まだ壁があった。
それが今、取り払われた。

「た、隊長が笑った・・・」
「全開の笑顔・・確かに凶器だ」
「やべ、俺惚れる」

最後の奴の台詞には、周りの隊員もざっと引いた。
俺だってご免だ。

「そんなに仏頂面してたか？　・・・してたな。すまないな」

「いえいえ、この間からね、ちょこちょこ微笑んではいたんですよ。
気付いてましたか？」

隊員が避けた後方に、ギュンターがいた。
どうせこの男がこいつらを連れてきたのだろう。
今は補佐官とはいえ、元隊長だ。

「雨降って地固まるってやつかい？
よかったな、シギ」

「もももも申し訳ありませんんんんん！」

噂の出どころはこっちだったか。

「いいさ。まぁこうなったら自分からしゃべったほうがいい。

シギの言ったことはともかく、ウーリーの話はほぼ本当だ。
王女の誘いを断ったのがまずかったんだ」

しがない商家の三男坊だった。
体だけはでかく丈夫に生んでもらったから、手っ取り早く職につこうと軍に入った。
元々向いていたのか上司がよかったのか、たいした苦労もなく戦果をあげ、２０代後半で国王直属の隊に入った。
男ばかりの騎士団にいたころはよかったが、近衛騎士として目立ったのが悪かった。
友人もできたが、敵も多かった。そんなところに隣国の王女の護衛話が舞い込んだ。

「ウーリーさんとは何の関係が？」

「元はこいつの仕事だったんだ。
それを面倒くさいとかなんとかいってたまたま廊下で会った俺に押しつけやがって。
それまでほとんどこいつとは面識はなかったんだぞ」

「面倒くさがったんじゃない。
占いで、王女の国の方角が僕にとって凶と出たから避けたまで。
あの日僕と君が出会うもの占いでわかってた。
君にとっては幸福のカードが出てたんだが・・・おかしいな」

「幸福・・・？　もしかしてそれでやけに俺と王女をくっつけようとしてたのか？」

「そうだよ。一般的に見ても逆玉の輿じゃないか。
それをまぁすげなく断るもんだから、王女の自尊心（プライド）が許さなかっ

たんだろうねぇ」

食後のお茶をすするウーリー。
押しても引いても権力を使ってもダメとわかった王女は、最後は俺の部屋に忍んできた。
とんだ自尊心（プライド）だ。
きっちり断ったが、泣きながら部屋を出た王女の姿を、近衛団長に見られたのが運の尽きだった。
それまで同情的だった友人も、冷たい目で俺を見るようになり、謹慎処分の上、辺境への赴任通知がきた。

「俺は誓って一切王女には手を触れていない。
誰も信じてくれなかったがな。
あのとき、団長さえいなければまだ言い逃れできたものを。
なんであの日に限って宿舎にいたんだか・・・いや、王女があんな時間にこなければ・・」

「僕が占ったからだな」

「は？」

「王女に頼まれたんだ。カールと幸せになるにはどうすればいいかって。
王女と君とで占うとうまくいかなかったけど、君の幸せに絞って占ったら、あの日あの時刻に部屋を訪れればいいと出た。
王女はいそいそとでかけていったぞ」

「俺の幸せって・・おかしいだろう。
団長に見られて、シギが言ったように王女をもてあそんで捨てたって噂がたった。

査問会じゃ、王女や王女の侍女が嘘八百ならべたてやがった。
結局冤罪で辺境に飛ばされたんだぞ。
なんでそれが俺の幸せなんだよ」

「わからん。でも僕の占いは当たる！　絶対いいことがある！」

「ああ、そうかい。
同僚には嫉まれ、友人にはさげすまれ、国王様にまで見限られた
貴様の占いは大したもんだな！」

「・・・ブルクハルト王は見限ったわけじゃない。
王女の趣味は結構有名だったからな。
気に入った男を国に連れ帰っては、自分のハーレムを作ってたらしいぞ。
でも外交上の問題もある。あのまま王都にいたら、強制退役させられてたんじゃないか。
辺境への赴任は王の温情だな。きっと1年もしないうちに呼び戻されるだろう」

「・・・そうなのか？」

そんな話があるとは知らなかった。
王女のハーレム？
金髪紫瞳、容姿秀麗のウーリーなんて、出会ったその日のうちに拉致られそうだ。
占いというより、やはりごたごたに巻き込まれたくなくて俺に押し付けたんじゃないか。

「隊長、王都に戻るんすか」
「せっかく仲良くなれそうだったのに」

「俺の初恋がぁ」
「馬鹿、黙ってろよ」
「猫どうするんすか」
「隊長の親馬鹿ぶりを見るまでは帰しません！」

・・・なぜそれを知っている。スヴァルと話してたのを見られたか。

「僕が言うんだから間違いない。
なんならいつ戻れるか占おうか？」

「貴様の占いなど信じられるか。
帰還の命令はきていない。憶測で話をするな」

はじめは戻りたくて仕方なかった。
ルゥに出会い、隊員や村人とのかかわりが増えるにつれ、王都の華やかだが殺伐とした人間関係より辺境のほうが好きになっていた。

「任期はわからんが訓練の手を抜く気はない。
５０周と言ったら外周に決まっているだろう！
さっさと行け！」

話は終わりだと言わんばかりに一喝した。

「うへぇ、覚えてたんすか」
「酷いっす」
「隊長も一緒に走ってみたらいいじゃないすか！」

「言ったな。俺に負けた奴は５０周追加だ。
そら、ついてこい！！」

半分照れ隠しで、先頭をきって走った。
俺を抜いたのはギュンターだけだった。

走り終え、2人して木陰にばたりと倒れる。
後続の隊員はまだ来ない。

「はぁっ、はぁっ・・・・。おまえ、本当にただの牛飼いか？」

「ははっ・・・・はぁっ・・・。
隊長こそ、都会の気障な軍人さんかと思いきや・・・おっと」

「くくっ、それが本音か。
まぁこれで俺も晴れておまえらの仲間入りだな。
今まで以上にしごいてやるから、覚悟しろよ」

「お手柔らかにお願いしますよ。カール隊長」

差し出された右手を、しっかりと握った。

「・・・今度は力比べっすか？」

ぎりぎりと握りこめば、ギュンターも負けじと握り返してきた。

「握力にはちょっと自信があってな」

「痛たたたた！　降参っす！」

「これで1勝1敗だな」

「・・・隊長ってば、結構負けず嫌いっすね」

隊員たちがやってくるのと、ヨシばあさんが昼飯の支度ができたのを言いに来るのはほぼ同時だった。

「よぉし、追加５０周はメシの後でいいぞ。
寛大な隊長（おれ）に感謝しろよ！」

「鬼！」
「悪魔！」
「脇腹痛ぇ・・・。メシなんて食えないっすよ」

ぶつくさ言う隊員たち。
結局午後の訓練はなくなった。
昼飯中に村人が駆け込んできて、逃げ出した牛の捕物を頼まれたからだ。
まったく、これで何回目だよ。柵の強化をしなければな。

「というわけで、言ってからはかえってすっきりしたよ。
なんで隠してたのか・・・人間不信だったんだな、俺も」

「なーぅ・・・」

家路につき、ルゥ相手に麦酒（エール）を呑む。
月明りに照らされ、ルゥの毛は銀色に輝いて見えた。

「きれいだな。真っ白な毛も、赤い瞳も。

おまえがきてから、俺の世界は変わった。
おまえも、俺といてうれしいと思ってくれてたらいいな」

「なぅ！」

「ん？そうか？
ははっ。ルゥがしゃべれたらいいのにな。
おまえがどんなことを考えているのか知りたいよ。
夢でもいいから、出てきてくれないか？」

思い描いたのはあの少女。
一度きりしか会っていないが、妙に印象に残っている。

「んぁ・・・・」

ルゥの口が何か言いたそうに動いた。

「無理なこと言うなって？
年経た猫は人型になるというぞ。
でもなぁ。実家で２３年生きたという猫もとうとう人にはなれなかった。
しゃべったとはいうがな」

＊＊＊＊＊

気持ちよさそうにお酒を飲むカール。

王都もいろいろあるんだね。
王女様ってどんな人だったんだろう。美人かなぁ。
王都にいたころは、カールの周りにはきっときれいな人がたくさんいたんだろうな。
こんなに格好いいんだもん、みんな放っておくわけない。

「ルゥがしゃべれたらいいのにな。
おまえがどんなことを考えているのか知りたいよ」

えっ
私と話してみたいって本当？
人型になってほしいって本当？

でもきっと、本当に変化したら驚かれる。
驚くくらいならいいけど、気味悪がられたら？
カールに拒絶されたら、私はきっと生きていけない。

深夜。
窓の外に違和感を覚えて目が覚めた。

「この術の気配は・・・エメ女史か」

「フーーーーッ」

カーテンの隙間から顔だけだすと、空中に浮く金髪の男がいた。

「悪いものではないみたいだね。
詫びがわりに、祓ってやろうかと思ったんだけど。
カールの幸福は君か。
どんな事情があるか知らないが、バレたくなければ新月に気をつけろよ」

どういうこと？
問い返す前に、男は宙に掻き消えた。

１２　左遷のわけ２（後書き）

ぐだぐだと長くなって申し訳ありません。
何回か書き直したんですけど（ＴＴ）。
あきらめてＵＰ。

13　お茶

＊＊＊＊＊

次の日、出勤したら測量が終わっていた。
普通の魔術師なら3日3晩かかるところを、ウーリーは昨夜わずか1時間でやり遂げたらしい。

「満月だからね。僕の場合、新月だってその辺の魔術師じゃ足元にも及ばないけど」

偉そうにふんぞり返っていた。

測量隊が次の土地へ出発すると、いつもの日常が戻ってきた。
訓練と村の雑用の日々。
家に帰ってルゥと過ごすのが一番の楽しみだ。

「ん？」

洗濯をして、そのまま山積みにしていた服。
たたんで長持に入れようと思っていた・・・気がするけれど、片づけたんだったか。

「なーぅ」

後ろ脚で立ち上がったルゥが、俺の足にじゃれつく。
抱き上げると、口の端を舐められた。

「明後日の休みに兵舎に行くか」

「んな！」

「ははっ。うれしそうだな。うちに来て以来の遠出だものな」

肩に乗せると、頭によじのぼってきた。
重くはないが、ただでさえぶつかりそうな鴨居にルゥをこすりそうになる。
寝台に腰かけ、開いたのは基本教練の本。
ページをめくるたび、ルゥが前脚でちょっかいを出してくる。

「邪魔するなって。
隊員どもに教えるのに見返したら、結構忘れてることがあったんだ。
普通の隊と近衛では違うところもあるしな」

前脚をどけようとした手にさらにじゃれつかれた。
後ろ脚は俺の頭に置いたまま、体を伸ばして前脚で手にしがみつく。

「あぁ、また、噛むなよ、こら。
歯がかゆいのか？　もしかしてまだ乳歯？」

たしか生後5か月から8か月くらいで生え変わるはずだ。
頭の上から降ろし、ルゥの口を指で開けて歯の様子を見る。

「あー、乳歯かもなぁ。通りで痛いわけだ」

針のように尖った歯を触っていると、ぽろりと1本とれた。
お、貴重。とっておくか。

そんなこんなでルゥをかまっていたら、あっという間に夜が更けてしまった。

朝。
出がけに思い出して、ルゥの口の中を確認。
歯茎の腫れや出血がないか見る。

「ん、大丈夫だな」

よし、と仕上げに口づけてやった。
あれ、ルゥが固まっている。
そういえば、俺からキスをしてやったことはなかったか。
ルゥに舐められることはよくあるが。

「行ってくる」

「う、うなー・・・」

尻尾が逆立ってるのはなんでだ？
いつもルゥに振り回されてばかりだから、たまには動揺させるのもおもしろい。
毎朝の習慣にしよう。

「隊長、顔がにやけてますけど、どうしたんすか」

「・・・・なんでもない」

兵舎の隊長(おれ)用の部屋。
香草茶を運んできたギュンターに見られてしまった。
いかん。勤務中はルゥのことは忘れよう。
真面目な顔を心がけ、昨夜読み途中になってしまった教本を開く。

「隊員たちは、これは持っているのか？」

「あぁ、兵舎の談話室に1冊くらいあったかと思いますが、全員のはないっすねぇ。
字が読める奴ばかりじゃないし」

「なるほど。基礎がわかってないわけだ。
写本を作るのはどうだろう。字の練習にもなるだろう？」

「一人一冊はきついっす。これから収穫の繁忙期ですし。
各章ごとに写させて、とりあえず5冊くらい隊の備品にしますか」

「それでいい」

配分はギュンターにまかせた。
ウーリーの言葉をすべて信じるわけではないが、任期満了までいないかもしれないことを考えると、できるだけのものは残してやりたい。

「ん、これうまいな」

何気なく口に運んだ香草茶は、優しい花の香りがした。

「村人の差し入れっすよ。牛の捕物のお礼。村(うち)のひそかな名産だっ

たりします」

「へぇ、そうだったのか」

窓の外を見ると、木板と金槌を持った村人が隊員と話していた。
また何か頼まれたのか。

視界いっぱいに緑が広がり、遠くには青い山々が見える。
赴任当初は苛立ちを覚えたこの風景も、いつしか心落ち着くものになった。
明日はルゥをつれてきて、兵舎の中を案内してやろう。
勝手に歩き回らせるわけにはいかないから、どうしようか。
首輪は嫌がってたしなぁ。
ルゥは小さいから、俺の胸ポケットに入ってしまうかもしれないな。
そうだ、そうしよう。

「隊長、また顔が・・・」
「ほっとけ、どうせ家の猫のことでも考えてんだろ」
「あんな人だったとはなぁ」
「俺、修理の許可もらいにきたんだけど、話しかけていいかな」
「もうちょっと黙っとけ。おもしろいから観察してようぜ」

「・・・おまえら、戸口で何をしている」

「補佐官！」
「しぃー！」

「ん？　どうした？」

振り向けば、入口で押し合っている隊員とギュンター。

「あ、いえ、井戸の蓋が割れたから修理してくれって頼まれまして」
「結構古そうなんで、どうせなら新しく作っちまおうかと思うんですが」
「一人じゃ無理だから、何人かで行っていいっすか？」
「あぁ、行ってこい。
せっかくだから、他の井戸の蓋も確認してくるように。
誰か落ちたら危ないからな」
「はい！」
敬礼して、足取り軽く駆けていく隊員たち。
「急に隊員たちに甘くなったんじゃないっすか？」
「愛着を持てといったのはおまえじゃないか」
「おや・・・それはそれは」
食えない補佐官は、にやりと笑って細長い紙袋を俺の机の上に置いた。
「さっきのお茶の葉っすよ。ご自宅用にどうぞ」
「いいのか？」
「うまいって言ってくれたのが、俺もうれしかったんでね。あとこれも」

ギュンターが差し出した小袋には別の茶葉。

「スヴァルが隊長にどうぞって。
猫って寒くなると水を飲まなくなるんすか？
このお茶ならよく飲むそうですよ」

「へぇ。後で礼を言わねばな」

あまり気温の変化のない王都と違って、この土地は冬になると雪が積もるという。
あと2か月ほどで冬が来る。

「冬の間は兵舎に住みますか？
一人暮らしはいろいろ不便でしょう」

「うむ・・・考えておく」

明日ルゥを連れてきた様子次第だな。

１４　お出かけ

＊＊＊＊＊

カールとのお出かけを、前の晩から楽しみにしていた。

家から歩いて１５分ほどの兵舎は、石造りの２階建。
小高い丘の上にあった。
右が国境で左が村だと、カールが教えてくれた。
国境の方角には茶色い柵が点々と見えたけど、それ以外は見渡す限り緑が広がって、遠くの山々がとってもきれい。
馬屋には馬じゃなくて牛がいた。
武器庫にも、武器じゃなくて農機具とか大工道具とかが入っていた。

うーん、ここって警備隊の兵舎だよねぇ。
これでいいのかなぁ？

「まあぁ、かわいい！
　この子がルゥちゃんですね！！」

ひとしきり兵舎をまわったあと木陰で休んでいると、やってきたのは細い女の人。
院長先生よりは若いけど、それなりの年だと思う。

「聞いていたとおり、真っ白な毛。
　ふわっふわですね。瞳もなんてきれいなの」

「そうでしょう。毎日風呂に入れてますからね」

「毎日？　大丈夫ですか？
入れすぎはよくないって言いますけど・・・」

カールの服から顔を出す私に、その人が手を伸ばしてきた。
カールは、はじめ私を上着のポケットに入れようとしたんだけど、
さすがに入れなくて、ボタンを２つ外した襟元に落ち着いたのだ。
あったかいし、カールにくっつけるし、ここ最高！

でもこの人はキライ。
さっきからカールはデレデレと相好を崩して猫談義。
そういう顔は家の中だけにして！

しかもお風呂に入っちゃだめって何？
余計なお世話だよっ
お風呂が好きな猫だっているでしょう？
カールが入れてくれなくなったらどうしてくれるのっ

そんな思いがあって、シャー！っと牙を剥いた。

「あれ、どうしたんだ、ルゥ」

「私、嫌われちゃったみたいですね。
家の猫の匂いがするのかもしれません」

猫を飼っている女の人。
細くて影が薄い。
そっか、この人スヴァルさんだ。

煮干しをくれた人だよね。
魚嫌いの私になんてものを勧めてくれるの。
やっぱり嫌い。

ぷぃっと横を向くと、カールが頭を撫でた。

「仕方のないやつだ。確かにいままで他の猫に会ったことはないからな。
すみませんね、スヴァルさん」

「いいえ、いいんですよ。
うちの子の中にも焼きもち妬きがいるからわかります。
ルゥちゃんに触ったら、きっと家に帰ってから大騒ぎします」

「ははっ、焼きもちね。
そうなのか？　ルゥ」

「んな～」

別に他の猫の匂いがカールや私につくのが嫌なわけじゃなくて、スヴァルさんが嫌なんだけど。
焼きもち。
焼きもちか。そうかもしれない。
家に帰ってからはいつも2人きりだから、他の人と居るカールを見るのははじめて。
私だけのカールだと思っていたのが、そうじゃないってわかっちゃった。

「白猫は気難しい子が多いですしね。
でも会えてよかったです」

「あぁ、わざわざ来てくれてありがとうございました」

あの人、私に会いに来てくれたの？
ちょっと悪いことしたかな。
カール、怒る？？

不安になって見上げたら、スヴァルさんと話してたとき以上に顔をくしゃくしゃにしたカールがいた。
怒るどころか嬉しそうだった。

「そっかぁ、焼きもちか！　大丈夫！　俺は他の猫に浮気なんかしないからな」

猫だけじゃなくて、女の人もだめだよっ

つい、そう思ってしまった。
私、こんなに独占欲強かったっけ。
カールの側に置いてもらえればそれでいいと思ってたけど、どんどん贅沢になってるな。

「隊長・・・予想以上の親馬鹿(ねこ)っぷりっすね・・・」
「この間までの無口無表情の面影はこれっぽっちもないっす」
「他人(ひと)の趣味に口を出す気はありませんが、一線を越えたら左遷どころじゃすみませんぜ」

「おまえら、どこから聞いていた・・・」

あっ
この人たちがのんきな隊員さんたちね。

ひょろりとしたそばかすの人がサジさん。
くりくりの短い髪の毛が似合う、男の子って言ってもいいような人がヨゼフＪｒ．さん。
背の低い、がっしりした人は誰だろう。
ギュンターさん?は違うよねぇ。
あと誰がいたっけ。
ブルーノさん、カリストさん、ダニエルさん、ディルクさん・・・。
カールの話に出てきた名前を一生懸命思い出す。
あ、きっとフェリクスさんだ。
名前負けのごつい人がいるって言ってた。
思い出してすっきりしたところに、兵舎の2階の窓から声がかかった。

「隊長―！
　メシ食っていきますよねー？　ヨシばあさんの差し入れがありますよー！」

窓から顔を出したのは、くすんだ金髪の男の人。
あの人がギュンターさんだ。
近くで見れば、瞳は灰色（グレー）だろう。

お昼ご飯はヨシさんの差し入れね。
ヨシさんのごはん、おいしいんだよね♪

「どうする？　ルゥ」

「んなっんなっ」

もちろん食べます。

「へぇ。言葉わかるんすか」
「利口だなぁ。俺んちの猫なんて生意気なばっかりで全然可愛くないっすよ」
「隊長がメロメロになるのもわかりますね」

「メロメ・・・まぁ否定はしない・・・」

軽口をたたきあうカールと隊員さん。
ほんとに仲良しになったんだね。よかったね！

兵舎の食堂で。
隊員さんに囲まれて、おいしいごはんをお腹いっぱい食べた。
午後は、ギュンターさんが貸してくれた釣り道具をもって、湖にいった。
私も尻尾をたらしてみようかと思ったけど、大切なリボンが汚れるからやめた。
カールはじっと釣り糸を見つめている。

「なーぅ？」

どうしたの？

午前中はご機嫌だったのに、お昼くらいから機嫌が悪いような気がする。
スヴァルさんのことを気にしてるのかな。
その後は私も反省して、隊員さんたちには愛想をふりまくようにしてたんだけど。

釣り糸の先の浮きがぴくりと動いた。
カールが素早く引く。
餌だけとられてた。
湖の真ん中で、銀色の魚がはねた。
そう簡単に釣られないよ！
そう言ってるみたいだった。

「あぁ、もうやめだ、やめ！」

釣竿を投げ出したカールが、草の上にごろりと横になる。
カールってば、「ちっ」て舌打ちした。
そんなこと、したことないのに。

怒ってるのかなぁ。
苛々してるのかなぁ。

こういうとき、どうしたらいいかわからない。
私を殴ってみる？
そんなことでカールが元気になるわけない。
アヒムじゃないんだから。

私ができることで、カールが喜ぶこと。
ひらひらと舞う蝶をかまうふりをして、一生懸命考える。
あ！　そうだ！

身をひるがえしカールの上に飛び乗ると、私は彼にキスをした。

＊＊＊＊＊

気に入らない。
何が気に入らないって、ルゥの態度だ。

午前中はよかった。
スヴァルに焼きもちを妬いて毛を逆立てるルゥは、とてもかわいかった。
それだけ俺を好きってことだろう？

でもその後がいけない。
なぜフェリクスの手から肉を食べる？
ブルーノには果物をもらっていたし、サジの手の平からミルクを飲んでいた。
ヨゼフＪｒ．の頭の上に乗って、カリストが投げた豆を器用にはぐっと捕って拍手をもらってもいた。
俺とはそんなことしたことない。

ルゥが皆に好かれるのはいいことだと自分に言い聞かせても、徐々に不機嫌になるのを止められなかった。
ギュンターが釣竿を押し付けてくるのがもう少し遅かったら、俺はルゥをひっつかんで帰っていたかもしれない。

あいつら、俺のルゥにべたべたしやがって！
ルゥもルゥだ。
スヴァルの事は嫌がったのに、隊員には尻尾を振るってどういうことだ。
雌猫だからか？

雑念だらけの俺に魚が釣れるわけもなく、釣竿を放り出して寝ころんだ。
ルゥは俺の気なんぞ知らないで、蝶を追いかけまわしている。
兵舎になんて連れて行くんじゃなかった。
冬の間も兵舎には住まん。
どんなに深い雪が降ろうとも、ルゥと暮らすあの家から通う。

そう決めたら少し気が静まった。
おや？　ルゥはどこにいった？
さっきまでそこで遊んでいたと思ったが・・・。

見失ったのは一瞬。
胸の上に慣れた重さを感じたと思ったら、口づけられた。
花びらほどの、ささやかな感触だった。
驚いて見つめれば、お座りをして小首をかしげる。

「ルゥ～～～！！」

がばっと起き上がり、力一杯抱きしめた。

「ふぎっ」

「おまえぇぇぇ、やっぱりかわいい！　かわいいなッ
俺以外には絶対にするなよ！・・・あれ？　ルゥ？」

ぐったり。
失神してる？

「ルゥ！　しっかりしろ！　ルゥ！！」

ぺしぺしと顔を叩くこと3回。
目覚めたルゥに、がりっとひっかかれて俺の休日は終わった。

１４　お出かけ（後書き）

カール兄さんがどんどんあぶない人に・・・（笑）。

＊＊＊　カールの休日　＊＊＊（前書き）

本編の流れからはみだした閑話です。

＊＊＊　カールの休日　＊＊＊

今日は休みだ。
一日中ルゥと遊べる。

ルゥが来てからはじめての休み。
存外に楽しみにしていたらしい俺は、出勤日と同じかそれより早く目覚めてしまった。
ルゥはまだ俺の隣でくぅくぅと眠っている。
時折ひげがぴくっと動いたり、ピンク色の鼻がぴすぴすと動いたりするのは夢を見ているのか。
小さな前脚に指をかけて引っ張ると、ずるずると体が伸びた。
それでも起きない。

「ふっ・・・・熟睡しすぎだろう」

ころりとひっくり返すと、両脚を胸の前で曲げ、まんまるのおなかを晒した。
小さな舌が口から覗いている。
指先でつついてみると、はぐっと食いつかれた。

「ん？起きたのか？」

はぐはぐはぐ。
前脚で俺の指を抑え込んで食(は)む。

「痛い。痛い痛い痛い！
ルゥ！寝ぼけてるな！痛いぞ！！」

細く尖った歯が指先に食い込む。
振り落とそうと腕を上げたら、ルゥもついてきた。
猫の一本釣り・・・いや、そうじゃなくて！

「・・・・・・？」

俺が一人で騒いでいると、ぼんやりと目を開けたルゥがぽてっと落ちた。
何があったんだろう、とか。
いま食べてたおいしいものはどこにいったんだろう、とか。
そんなことを考えていそうな気がする。

「おはよう、ルゥ。
おまえが食ってたのはこれ。歯形がついてるじゃないか。痛かったぞ」

ルゥの目の前で手を振ると、ようやく焦点のあった瞳が見上げた・・・かと思ったが。

「んなあぁぁぁぅ」

あくび。
あくびか。

「おまえと遊んでいたら、寝台の上で日が暮れそうだな。
洗濯だけはしちまうか」

ルゥを肩に乗せ、シーツをはがす。
洗って外に干して、朝食を摂ったら掃除。

「こら、邪魔だ。箒にじゃれつくな！」

「んなっんなっ♪」

「ご機嫌だなぁ。おまえのせいでちっとも進まないんだぞ。家事を終わらせてから、思う存分遊ぼうと思ってるのに」

動かなくなった箒と俺を交互に見て、「んなっ」と鳴く。
長い尻尾で床をたんたんと叩く。

「なんだ、動かせっていうのか」

ザザーッと箒を右に大きく振れば、ルゥも右に駆けていく。
左に振れば、ひらりと体の向きを変えたルゥが飛びかかる。
右へ、左へ。また右へ。
赤い瞳が爛々と輝いている。

「ぷっ・・・くくっ・・・。何がおもしろいんだかなぁ」

箒の追いかけっこは、ルゥが窓辺に寄ってきた鳥に気を取られるまで続いた。

「ルゥ。おい、ルゥ？」

掃除を終え、昼飯を片手にルゥを呼ぶが姿が見えない。
さして広くもない家である。
そう隠れる場所もないと思うが・・・。

しまった！
玄関が細く開いているのに気付き、焦る。
朝洗濯物を干したときに、きちんと閉めなかったのか。

「ルゥ！　どこだ！！　ルゥ！」

「んなー」

名前を呼びながら玄関を飛び出すと、すぐ近くで声がした。
なんだ、脅かすなよ。
どうやって登ったのか、ルゥは出窓の上から俺を見下ろしていた。

「おいで、ルゥ」

手を伸ばすと、ぴょこんと飛び乗った。
外に出たついでにと、乾いた洗濯物を取り込む。
俺の肩を伝って降りたルゥは、蝶やバッタを追いかけている。

「俺が留守の間、家に閉じ込めておくのもかわいそうだよな・・・」

一匹の黄色い蝶が、ルゥの鼻先をかすめた。
ひらひらと舞い、飛んでいく。
ルゥは身をふせ、じりじりと後をついていく。

緑の中に、真っ白な尻尾が揺れる。
だんだん遠ざかる後姿に、このまま声をかけなかったらどうなるんだろうと思う。
蝶を追って、どこまでも行ってしまうのか。
俺はまた一人に戻るのか。

「・・・・・ルゥ！」

己の想像に耐えきれなくなって、短く名を呼んだ。
ぴくん！
草むらに小さな耳が見えたかと思うと、俺めがけて一目散に駆けてきた。
両手を広げれば、当然のように飛び込んでくる。

「んな～」

肩に乗り、耳元に体を摺り寄せてきた。

「・・・あまり遠くに行くな」

「なーぅ？」

カール。
そう言っていると思う。
俺が生まれる前母親が飼っていた猫は、「ごはん」としゃべったと言っていた。
「ママって呼んでくれたこともあるのよ」とも。
その時は鼻で笑っていたけれど・・・。

「んぁーぅぅ？？」

今度は「大丈夫？」かな。
なんて、そんなわけないか。
親馬鹿もたいがいにしないとな。

「ふっ・・・おまえがしゃべれたらいいのになぁ」
ぽんと頭を叩くと、ルゥは困ったように小首をかしげた。
「さ、午後は何をしようか。
家事は全部終わったから、たっぷり遊べるからな」

ルゥをかまったりかまわれたり?するうち、あっという間に一日が終わった。
湯船につかれば、満足の溜息。
シーツは日なたの匂いがして、心地よい眠りに誘われる。

「おやすみ・・・ルゥ・・・。
次の休みは、何をしよう、な・・・・・」

ルゥを撫でる指がだんだんゆっくりになる。
すぅっと意識が遠ざかり、眠りに落ちていく。

「おやすみ、カール」

あれ・・・おまえ、今しゃべった・・・?
目を開けたいけれど、眠く・・・て・・・・・。

窓から差し込む光に起こされる。
隣に眠るのは白猫のルゥで、「おはよう」と言えば「んなー」と鳴いた。
昨夜しゃべったと思ったのはまた夢か。

「さてと。また隊員どもを鍛える日々か。あいつら緊張感ってもんがないからなぁ。
じゃ、行ってくる」

「んなー」

繰り返される、いつもの日々。
一人と一匹。
かなうならば、いつまでもそばに。

＊＊＊　お風呂　＊＊＊（前書き）

9話あたりのお話です。
ほのぼの路線からそれていますので、ご注意を（笑）。

＊＊＊　お風呂　＊＊＊

夕飯の後、ルゥと風呂に入った。
手で湯をすくって体にかけてやると、白い毛がぺったりと体にはりついて、なんとも情けない姿になる。
俺は風呂に入るたび、この姿がおかしくて仕方ない。

石鹸を泡立てて、体を洗う。
頭の後ろを揉むように洗うと、気持ちよさそうに首を伸ばす。
背中、尻尾の先まで洗って、次は腹。
手の平の上でルゥをひっくり返し、喉から胸を撫でる。
ゴロゴロと喉を鳴らし、うっとりと目を閉じて俺に身をまかせるルゥ。

小さいなぁ。
かわいいなぁ。

３０すぎの男が、風呂で子猫を洗って脂下(やに)がる姿など、とてもじゃないが人には見せられない。
子猫じゃなければいいのか？
たとえば夢に出てきたような・・・。

銀とも見まごう、つややかな白髪(はくはつ)。
閉じられた瞳にかぶさる長い睫(まつげ)。
ほっそりした体を俺に寄せていた。
裸体だった彼女。
胸元にわずかばかりのふくらみを感じたような・・・。

たしたし！

ルゥに叩かれて我に返った。

俺！

ルゥを洗いながらなんてことを・・・・！

どれくらい妄想にふけっていたのか、ルゥの泡はすっかりなくなって、赤い瞳がにらんでいた。

手桶の湯を慌ててかけると耳に入ったらしく、「ふぎっ」と飛びのいてぷるぷると俺にしぶきを飛ばしてきた。

「わ！やめろ、ルゥ」

「んなーッ」

「俺が悪かった。そう怒るなよ」

いつもならこの後一緒に湯船につかるのだが、先にタオルでルゥを拭いてやって風呂場から出した。

ルゥが人になるなんて、俺どうかしてるよなぁ。

でも、元が猫なら体はやわらかいんだろうか。

首に指をはわせたら、喜ぶだろうか。

腕に抱いて、洗ってやったら・・・？

むくり、と俺の中心が反応した。

「・・・・俺、終わってるな・・・・・」

猫に欲情するなよ。

浴槽の端にがっくりとうなだれて、ひとしきり落ち込んだ後、開き直って自分でヌいた。

これは！　きっと、欲求不満だからだ。
辺境（ここ）に来てから3か月以上、女を抱いていない。
王都ならばいくらでも処理できたものが、ここではできない。
そのせいだ。

・・・・・・たぶん。

＊＊＊　お風呂　＊＊＊（後書き）

失礼しました・・・。

＊＊＊　あいさつ　＊＊＊（前書き）

１３話のあとです。
未来パラレルがラストにちょこっと入ります。ルゥ視点です。
早く人間になってくれないかなー（笑）。

＊＊＊　あいさつ　＊＊＊

歯が抜けた。
えー、人間のときはとっくに永久歯になっていたのに、猫になったらまた抜けるの？
不思議な感じ。

朝、カールを見送ろうと玄関についていくと、ひょいと抱き上げられて口を開けられた。
カールの太い指が、私の口腔を探る。
歯に異常がないか、見てくれているみたい。
間違って噛んじゃわないように気をつけなきゃ。

「ん、大丈夫だな」

そういったカールは、ちゅっと私にキスをしてきた。
わわわ、な、なんで！？
ほっぺじゃないよ。おでこでもないよ！
口と口だよ！？
私の動揺をよそに、

「行ってくる」

と手を振るカール。

「う、うなー・・・」

猫でよかった。
人間だったら、きっと今の私は真っ赤な顔をしている。
そのかわり、尻尾がばふばふに逆立ってた。

それからというもの。
カールは朝起きたときと出掛けるとき、帰ってきたときと寝る前にキスをしてくるようになった。
何回かされるうちに、これは“あいさつ”だってわかった。
孤児院で育った私は、こういうあいさつをしたことがなかった。
時々お迎えが来てくれた子が、本当のお母さんに抱きしめられて顔中にキスをされているのは見たことがある。
孤児院を巣立って家族を持った人が、自分の子にキスをしているのも見たことがある。

家族の親愛のキス。

カールは憧れでしかなかったそれを、私にくれたのだ。

「おやすみ、ルゥ」

カールの顔が近づいてくる。
あいさつだってわかってても、慣れるもんじゃない。
今日は勇気を出して、私からも口をくっつけてみた。
驚いたように開かれた碧の瞳が、すぐに細められ笑みの形になる。
端正な顔立ちが甘さを増す。

きゅんっと胸が鳴ったのは、きっと初めて自分からキスをしたせい。
あれぇ？　でもあいさつのキスって口と口でするんだっけ？？
したことがない私にはわからないけど・・・カールが嬉しそうだからいっか。
私、猫だしね。

いくら家族でも唇にはしないと知ったのは、ずいぶん経ってから。

「カール・・・・？」

「ん？　いや、猫だったからだ。
君だって、俺のことさんざん舐めてただろう？」

抱き寄せられると、私は大柄な彼の腕の中にすっぽりとおさまってしまう。
見上げれば、降りてくる唇。

「・・・ん・・・・」

触れるだけでは足りなくて、ちろりと舐めて先をねだる。

「くす・・・舐めるのが好きなのは元から？」

「や・・・馬鹿・・っ」

耳まで真っ赤に染まった肌を、隠してくれる毛はもうなくて。
うつむいて、厚い胸板で顔を隠そうとしたけれど、大きな手に妨げられて上向(うわむ)かされた。

「ん・・・んんっ」

待ち望んだ深い口づけは、熱く甘く、私を蕩(と)かす。

「これも、家族のキス・・・？」

「家族になって欲しい人へのキス、かな」

1　雪（前書き）

ちょっと話が進みます＾＾

1　雪

＊＊＊＊＊

カールに拾われて3か月が過ぎた。
猫の成長は早く、見た目はもう成猫と変わらない。
窓の外は大雪。
こんな中兵舎に通うなんて、大変だなぁ。

「はぁっ、はぁっ・・・・ただい、ま、ルゥ」

走ってきたのか、白い息を吐いてカールが帰ってきた。

「なぅ！」

手袋をしていても、カールの指先は真っ赤になって冷たかった。
おかえりのキスをしてから、指と同じく赤くなっている耳を温めてあげようと、肩にのって首に巻きつく。
人なら部屋を暖めておくとかごはんを作っておくとかできるんだけど、猫にはこれが精一杯。

「おまえも寒かっただろう」

そんなことないよ。
日なたはぽかぽかして温かいから、窓辺で一日中寝てたの。
今も毛布にくるまってたから、大丈夫だよ。
そう答えたいけど、実際に声になったのは「んにゃぅ、なぅ」だっ

た。
最近「なー」じゃなくて「にゃー」って言えるようになったのよ。

「やっぱり兵舎に引っ越したほうがよかったかなぁ」

暖炉に火を入れながら、カールがつぶやく。
カールの苦労を思うと、そのほうがいいと思うんだけど・・・。

この3か月で私が人間に戻ったのは4回。
どれも月が細く尖っているときか、闇夜だった。
あの金髪の魔術士が言ったことの意味がわかった。
月が欠け始めると体がむずむずして、特に新月の夜は変化しやすいのだ。
でも強く念じれば猫に戻れる。
幸い、カールが気付いた様子はない。
もし人の多い兵舎だったら、誰かにばれていたかも。

今月も新月が近い。
今夜当たり、危ない。

夜半。
眠ったカールの隣をそっと抜け出す。
椅子にかけられた外套に潜り込む。

きた。
体がむずむずして闇に溶け出す。

「ん・・・・くぅ・・・・・」

手足が伸び、毛がなくなる。

視界が高くなる代わりに、寒さを感じた。
ぶるりと震えて、カールの外套にくるまる。

「カールの匂い・・・・」

ひたひたと素足で歩く。
床がびっくりするほど冷たくて、指先が赤く染まった。
窓の外に目を向けると、地面に積もった雪が星のように輝いていた。

「きれい・・・」

どうせなら、昼間人型になれたらいいのにな。
お掃除くらいできるんじゃない？
この間、夜中に片づけをしてみたときは、予想外に音が響いてあきらめた。

また雪が降り始めた。
小さい頃、院長先生に読んでもらった『雪の女王』という話を思い出す。

人の美しい面は小さく、醜い面は大きく映すと言う悪魔の鏡。
その鏡のかけらが目と心臓につきささった男の子は、心が凍ってしまう。
男の子をさらった雪の女王は、『永遠（えいえん）』を見つけられたら悪い魔法が解けると話す。

「男の子を救ったのは、男の子のことが本当に大好きな幼馴染の女の子だったのよね・・・」

もし私がその鏡を覗いたら、どんな風に映るんだろう。

白い髪は逆立ち、真っ赤な瞳はぎらぎらと光るのだろうか。
いいえ、きっと自分のことばかり考えてカールに甘える心が、一番醜く映るんだ。

雪の結晶が窓にはりつく。
四角いもの、六角形のもの、矢のように尖ったものなど、一つとして同じものはない。

雪はどんどん降り積もり、世界を白く染めていく。
私は出窓に肘をついて、幻想的な景色をいつまでも眺めていた。

1　雪（後書き）

『雪の女王』・・・アンデルセン童話です。

2　危機一髪!?

＊＊＊＊＊

外套の折り方が違う。
昨夜は雪で濡れたから、袖口が上になるように掛けておいたはずだ。
それが今朝起きたら下になっている。
乾いてはいたから、はじめから下だったわけではない。
椅子も濡れていない。
些細な違和感だが、はじめてではなかった。

先月だったか、後で片づけるつもりだった洗濯物が、すでに片付いていたことがあった。
知らぬ間に侵入した者がいる?

「まさか、な」

いくら辺境でのんびりしているとはいえ、寝ている間に誰か来たら目が覚める。
ルゥだって騒ぐだろう。

「んにゃー」

「ん、行ってくる。
今日行けば、2週間程休みだ。新年だからな。

今日は仕事納めで遅くなるから、夕飯も置いていくぞ」
水とちぎったパン、塩抜きした肉を皿に入れて机の上に置いた。

「あれ、隊長。報告書が1枚抜けてますけど？」
月例報告書を確認していたギュンターに言われた。

「む・・・。家に置いてきたな」

「1枚なら書き直しちまいますか」

「いや、晴れてるし、取りに行ってくる」

「はい、お気をつけてー」

文を書くのは得意なほうではない。
書き直すくらいなら取りにいったほうがいい。
雪が溶け、ぬかるんだ道を歩く。
急に俺が帰ってきたら、ルゥはどんな反応をするだろう。
ちょっと楽しみだ。

家が見えてくる。
赴任したとき、兵舎に部屋を用意するといわれたが、他人と関わり合いたくなかった俺は、一軒家を希望した。
ちょうど空き家があったので、少し手入れをするだけで住めた。
今となっては、ルゥと2人で誰に気兼ねすることなく生活できてう

れしい。
雪道を兵舎まで通うのだって、ルゥを独り占めするためなのだから、
俺の親馬鹿ぶりも筋金入りだ。

鍵を開けて中に入ろうとして、違和感を覚える。
窓越しに、家の中に白いものが揺れているのが見えた。
ルゥにしては大きい。
泥棒？
夜間ではなく、昼間に侵入していたのか！？

「誰だ！」

剣の柄に手をかけ、いきおいよく玄関をあけて飛び込む。
応えはない。
慎重に足を運び、居間へ行く。
誰もいない。寝室か？

ばさり

音がした。

「動くな！！」

腰をかがめ一気に剣を抜き、切っ先を音の方向に向けた。

「・・・にゃぁん・・・」

床に落ちたシーツの下から顔をのぞかせたのは、ルゥだった。

「おまえだったのか。驚かすなよ」

窓から見えた白い影も、ルゥが室内で遊んでいたものだろう。

「これ、ふりまわしてたのか？　１人でつまらなかったんだろう」

「んなーぅ」

タオルを拾ってたたみなおす。
床にはたくさんのタオルやシーツが散らばっていた。
ルゥはごめんなさい、と言うように俺の足にすりよってきた。
抱き上げると、口の周りを小さな舌でぺろぺろと舐める。

「ははっ、いいさ。今夜もできるだけ早く帰ってくるからな。
あぁ、今は忘れ物を取りに来ただけなんだ。じゃぁな、また行ってくる」

ルゥに口づけて、家を後にした。
もちろん鍵をしっかりかけて。

ルゥのやつ、俺がいないときにあんな遊びをしてたんだな。
だからものの位置が変わることがあったんだろう。
洗濯ものは、自分で片付けたのを忘れてたんだな。

ルゥの知らない一面を見て、俺は鼻歌を歌いながら兵舎に戻った。
仕事納めはやはり忙しく、家に帰れたのは深夜だった。

＊＊＊＊＊＊

ああああ、驚いた！

自分の意志で、昼間に人型になれるか試してみたら、あっさりなれた。

裸のままでは寒かったので、シーツをかぶって部屋の掃除をしてみた。

そしたら、机の下に書類が一枚落ちているのに気付いた。

これ、昨日カールが書いてたやつだよね。

落ちてていいのかなぁ。

上質の羊皮紙（ヴェラム）に、几帳面な文字が並ぶ。

“字が読めれば職につながる”という考えだった院長先生のおかげで、私もある程度の字はわかる。

今年の警備隊の活動が書かれているようだった。

きっと忘れたんだなと思って机の上に置き、洗濯もしてみようかと思ってタオルをとったところだった。

ガチャッ

玄関で、鍵の開く音がした。

「誰だ！」

鋭い誰何（すいか）の声。

とっさにシーツにもぐり、猫に戻れと必死に念じた。

間に合って、よかった・・・・・。

なぜかご機嫌なカールを見送り、窓辺で丸くなる。
それからカールは夜中まで帰ってこなかったけど、私は人型になろうとはしなかった。
あんなに怖い目は、当分勘弁。

あ、また雪が降ってきた。
今年ももう終わりだなぁ。
来年も、ずっとカールといられますように。

3　休暇（前書き）

小話３つ。
すべてカール視点となります。

3　休暇

＊＊＊　年越し　＊＊＊

「新年おめでとう！」

とっておきの葡萄酒（ワイン）を出して、ルゥ相手に乾杯をする。

「おまえも飲むか？」

指先に葡萄酒をつけて、口の前に持って行ってみた。

くんくんと匂いを嗅いで、ぺろりと舐めた・・・かと思ったら、いかにもマズイ！と言う風に顔をしかめた。

「あっははは！　なんだ、その顔。酒はだめか。ちょっとくらいつきあえよ」

グラスを差し出すが、ぷいっと横を向かれてしまった。

「そっか。じゃぁこれもいらないか？」

グリュイエールチーズをすりおろして葡萄酒（ワイン）で煮溶かしたものに、パンをつける。

フォークで刺し、息を吹きかけて冷ましてからルゥの前に差し出せば、はふはふと大喜びで食べた。

「チーズ好きだよなぁ。もっと食うか？」

「んな！」

小鍋の中をほとんど空にするころには、ルゥはぐでんぐでんに酔っ払っていた。

元々やわらかい体が、もうぐにゃぐにゃだ。

「葡萄酒（ワイン）が効きすぎてたか。大丈夫か？」

「んな～。なーぅ・・・んにゃ・・・」

「ははっ、いっぱしに寝言か？」

机の上で伸びているルゥを寝台に運び、シーツを掛けてやる。

自分はもう少し飲むべく、居間に戻ろうとした。

「ん・・・・？」

シーツがやけに盛り上がった気がした。

瞬きして見直すと、元に戻っている。

ルゥが伸びでもしたのか。

「おやすみ、ルゥ。いい夢を」

シーツ越しに背中をぽんと叩いて、寝室の扉を閉めた。

＊＊＊　冬の一日　＊＊＊

新年を祝う村の祭りに招かれた。

「新年おめでとうございます」
「隊長！　お元気そうでなによりです」
「ご実家には帰らなかったんですか？」

隊員たちやその家族、警備隊の活動で知り合った村人たちと、楽しいひと時を過ごした。

「ただいま、ルゥ」

「んにゃ～」

温かな体を抱き寄せ、暖炉の前に座る。
あぐらをかいた膝の上にルゥをのせて、お土産を広げた。

「ヨシばあさんが腕をふるってたからな。どれもうまかったぞ」

祝いの席で出された料理のうち、猫（ルゥ）に食べられそうなものをもらってきた。
揚げたパンに砂糖をまぶしたものや、骨付きの鶏（チキン）。
ルゥの大好物の山羊チーズ（シェーブル）など。
自分もつまみながら、小さくちぎったものをルゥに食べさせる。

「甘いもの、結構好きなんだな。あ、こら、舐めるなよ。おっと」

口元についた砂糖を狙われて、顔中を舐められた。
逃げようとした拍子にバランスを崩し、後ろに倒れる。
そんな俺にはおかまいなしで、ルゥは倒れた俺に馬乗り（って猫でもいうのか？）になって舐め続けた。

「もう好きにしろ・・・」

パチパチと薪がはぜる音がする。
ルゥは満足したのか、俺の胸の上で丸くなっている。
ちょっとだけと勧められて飲んだ酒が効いたのか、眠くなってきた。
どうせ明日も休みだ。
ここで寝てしまったとて、誰に咎められるわけでもない。

「ふあぁ・・・」

なんともいえない幸せな気分で、俺は眠りに落ちた。

＊＊＊　熱　＊＊＊

「はぁっ・・・ふぅ・・・・」

熱を出した。

暖炉の前で転寝（うたたね）をしたのがいけなかったのか。

それとも昨日雪かきをして、びっしょり濡れたからか。
ルゥと風呂で遊びすぎて、湯冷めしたのかもしれない。
思い当たることはたくさんあるが、とにかく今は熱がある。

かりかりかり

扉をひっかく音がする。

「だめだ、ルゥ・・・。風邪、がうつったら・・・・大変だからな。
今日は居間で寝てくれ・・・・」

なんとか声を絞り出す。
喉が痛い。頭痛も酷い。
せっかくの休暇なのになぁ。
いや、休暇中でよかったか。隊のものに迷惑をかけたくないからな。

ぶるり。

寒気がする。
また熱が上がるのか・・・・・。

夜半。
額と首筋に、ひやりとした布が当てられた。
ほてった体に気持ちがいい。
白い手が頬を撫でる。

「お袋・・・？」

伸ばした手を優しく取って、寝具の中に入れられた。
首筋の布を取り替えて、額の布も裏返してくれる。
乾いた唇には、湿らせた布を当ててくれた。

「水・・・もっと・・・」

ねだると、水差しの水をそっと飲ませてくれた。
白い手が、汗ばんだ髪を撫でる。
頭なんて、久しぶりに撫でられた。
なんだか、すごく安心する。
瞼が重くなってきた。

すぅ・・・・・。

深い眠りが訪れ、俺は朝までぐっすりと寝た。

「・・・・ん・・・・」

次の朝目覚めると、体がすっかり軽くなっていた。
起き上がって、うーんと伸びをする。
昨夜、お袋の夢を見た気がする。
熱で気が弱くなっていたのか。
寝台の上を見ると、布や水差しなどは見当たらなかった。

「お、ルゥ、おはよう」

扉の隙間から、ルゥがタオルをくわえて歩いてきた。

「ちょうど体を拭きたかったんだ。ありがとう」

「なーぅ」

タオルを俺に渡すと、ルゥはすぐに寝室を出て行ってしまった。
風邪がうつるから近寄るな、という言いつけを守っているのか。
自分で言っておきながら、ちょっと寂しい。

早く治して遊んでやらないとな。
いや、遊んで欲しいのは俺か。ははっ。

4　空からきたもの

「隊長！　お久しぶりです！」

年明け。

兵舎の休みが終わり、総出で雪かきをしたり雪囲いをはずしたりする。

お昼には村人も手伝いにきてくれて、５０人くらいの人出になった。

「隊長？　誰かお探しですか？」

休みの間に届いた郵便物を抱えたギュンターが、俺宛のものを渡しながら聞いてきた。

「ん？　いや？」

「そうっすか？　さっきから若い娘ばかり目で追ってません？　そろそろ嫁さんが欲しくなりました？」

「馬鹿いうなよ」

言いながら、視界の隅を通った白い影が気になった。

なんだ、ヨシばあさんのエプロンか。

「若くなくてもいいんすね・・・ぐぇっ」

腹を一発殴っておいた。

なんだか気になるのだ。
白い、白いもの。
思い出せそうで、思い出せない。
知っていそうで、知っているわけではない。
なんなんだろう。

その幻想は、喉の奥にささった魚の骨のように、俺を苛んでいた。

＊＊＊＊＊

はぁ・・・。
カールの休暇、終わっちゃったな。

出窓に座って外を眺める。
2週間、ずっと一緒で楽しかった。
途中、カールが熱を出したときはびっくりしたけど。
元気になってよかった。

小春日和の今日は、ぽかぽかして温かい。
カールも今頃一生懸命兵舎を片づけてるのかな。
以前一度だけ連れて行ってもらった、兵舎の様子を思い出す。
みんなおもしろい人たちだったなぁ。

透き通った高い空を鳥が飛んでいる。
なんの鳥だろう。
カラスにしては大きいな。

鷹？
鷲？
ん？
えっ、えええぇぇ！？

「ようやく見つけた！　ルチノーちゃん！！！！！」

「ふにゃなぁぅ！？」

エ、エ、エ、エメさんだあぁっ

「なぜ貴様がここにいる」

「失敬だなぁ。僕はただの案内人だよ。こちらのエメ女史が希少な猫を探してるっていうんでね。教えてあげたんだ」

空からやってきたエメさんは、ウーリーさんという魔術士さんと一緒だった。
ウーリーさんに会ってからというもの、カールの機嫌が悪い。

「カールさん。いきなり来て本当に申し訳ないのですが、ルチ・・・ルゥちゃんをお借りできないでしょうか？」

「だめです」

「そこをなんとか」

「できません」

さっきからこのやりとりの繰り返しだ。
私を守ろうとしてくれるカールの気持ちはうれしいんだけど・・・。

昼間。
窓から飛び込んできたエメさんは、悪い知らせを運んできた。

「ルチノーちゃんのお義母さんがね、病気なのよ。あなたに会いたがってるわ」

院長先生が!?

「猫になったあなたを一番心配してるの。親戚の人が孤児院の周りをくまなく探してくれたけど見つからなくて、王都にいた私に連絡してきたのよ。
まさかこんな辺境にいるなんて・・・」

「なーぅ・・・」

「さ、私と一緒にいきましょう。魔術で飛んでいけば、明日には着くから」

「んなっんなっ」

だめ!　カールがいない間にいなくなったりしたら、心配かけちゃう!

「え?　だめなの?　・・・ってゆーかルチノーちゃんしゃべれな

いの？
　おかしいわね。術はほとんど解けかけてるのに・・・」
そうなの？
エメさんが、人差し指と中指をそろえて自分の額に当てた。
口の中で何かつぶやいていから、その指を私の額に当てる。
ぴりっ
静電気が起きたときのような衝撃が額に走る。
「これでどう？」
「ふにゃ・・・な・・・あ、あー・・・しゃべれる！」
「よかった。で、いますぐ行けない理由（わけ）は何？」

子どもに追われて辺境（ここ）まで来たこと。
死にそう担っていたところをカールに助けられたこと。
カールはすごく私をかわいがってくれてて（うぬぼれじゃないと思うの）、突然いなくなったらとても心配するだろうことを説明した。
「ふぅん。いい人に会えたのね」
「そう！　カールはとっても優しいの。それに強いし隊員さんにも人気あるし、格好いいからもてるし！
　すごぉく背が高くて力持ちで、ごはんも作ってくれるし一緒にお

風呂に入れてくれるし一緒に寝てくれるし・・・」

「くす・・・。ルチノーちゃんはカールさんが大好きなのね」

「大好・・・っ　そ、そうだよっ
拾ってくれた人だもの、す、好きよっ」

いつも思ってても、他の人に言うのってなんだか恥ずかしい。

「でもその人３０代でしょ？　３０でそれって・・・今猫だし、人に戻ってもルチノーちゃんは１６歳・・・」

「たぶん１７になったけど？」

「そういう問題じゃなくて・・・ふふっ、まぁいいか。愛があれば歳の差なんて！」

「エメさん？？？」

「とにかく、黙って出て行ったら、ルチノーちゃんを溺愛しているご主人様が、半狂乱になって探すってことね。
わかったわ。何か考えましょう」

「できあ・・・っ」

「また後で来るわ。じゃぁね！」

そして夜。

エメさんはウーリーさんと言う魔術師を連れて、家の扉を叩いたのだった。

5　迎え

＊＊＊＊＊

家に帰ってルゥと夕飯を食べていると、玄関を叩く音がした。

「カール＝ヘルベルト＝ヴュスト！　いい月の晩だな！」

ばたん。

扉を閉めた。

「こら！　開けろ！！　僕に会えて光栄だろう！」

ドンドンドン！

扉の外で騒いでいるが、無視。

「んにゃ～ぅ」

「いいんだ。あいつと関わると碌なことがないからな」

「なー・・・」

「カールさん、夜分すみません。エメ＝ヴァウラと申します。
そちらの猫ちゃんにお願いがあるんです。話をさせていただけませんか？」

「ルゥに？」

聞きなれぬ女性の声に、結局俺は客人を迎え入れた。

「ということで、魔術の依代にルゥちゃんをお貸しいただきたいのです」

「・・・なんでルゥなんですか？」

「魔術は美しいものを好みます。
その点ルゥちゃんはこの真っ白な毛並みといい、紅玉のような瞳といい理想的です！
決して危ないことはありませんから。お願いします」

ルゥを美しいといわれて悪い気はしない。
が、貸す気もない。

「だめです」

「そこをなんとか！」

「できません」

「なぜですか？」

「何事にも絶対ということはありません。ルゥをわざわざ危険な目にあわせるつもりはない」

「おいおい、カール＝ヘルベルト＝ヴュスト。
エメ女史は僕が認める数少ない魔術士の一人だ。王都でも彼女ほどの腕前の魔術士(もの)はなかなかいないぞ。
その彼女が大丈夫だというんだから、いいじゃないか」

「ウーリー＝ヒューグラー。貴様は黙ってろ。
そもそもおまえの知り合いだという点で印象は最悪だ」

「ウリ坊。あんたのせいなの・・・？」

「ウリ・・・？」

横目でにらむ女魔術士を前に、ウーリーは縮こまっている。

「女史、その呼び名、余所(よそ)ではやめてください・・・」

肩がふるえる。
ウリ坊？
傲岸不遜なこの男が、ウリ坊呼ばわり！？

「ぷっ・・・くくっ・・・・ふはっ・・・」

「あ！　こら、カール！　笑うんじゃない！！」

「だって、おまえ、ウリ坊って・・・くくっ」

「エメ女史は僕の幼少期の家庭教師だったんだっ　仕方ないだろっ」

「ははははは！」

「ウリ坊ったら、小さい頃から生意気でねぇ。ちょっと純度の高い炎を召喚して浴びせたら従順になったけど」

「ちょっとって、女史！　原始の炎ですよ！　触れたら一瞬で消し炭です！　あんなの今の僕でも呼び出せません」

「血統に頼りすぎてるからよ。修練なくして技の向上はないわ」

「僕だって・・・」

「なーぅ」

いつまでも言い合いを続けそうな師弟に、ルゥが割って入った。
そうだ、笑っている場合ではない。

「あなたが優れた魔術士なのはわかりました。
でもそれとこれとは別です。ルゥだって行きたくないはずだ」

「そうかしら。じゃぁルゥちゃんがよければいい？」

女魔術士の瞳がきらりと光った。

「それは・・・」

ルゥは当然嫌がるだろう。
俺の側から離れるはずがない。

「ルゥ？　行きたくないよな？」

「んにゃ～ぅ」

ルゥの耳がくたりと垂れる。

ルゥ？　まさか・・・。

「行きたいわよね」

「な！」

耳がぴんと立ち、ルゥは、彼女の足元にすり寄って行った

「ルゥ・・・・・」

「決まりね。大丈夫、一週間くらいでお返しするわ」

「ルゥ、なんで」

「早く行けば早く戻れるから。さっそく今出発します。
あぁ、ルゥちゃんのごはんとかは気にしないで。全部私が責任をもってみます」

呆然とする俺の前で、ルゥは女魔術師の腕に抱かれて行ってしまった。

俺を、振り返ることもしなかった。

＊＊＊＊＊

冷たい夜空を、魔術士（エメさん）に抱かれて飛ぶ。

「お別れを言わなくてよかったの？」

「いいの。行きたくなくなっちゃうから」

眼下にはすでに、生まれ育った街が広がっていた。

6　ルゥのいない日

＊＊＊＊＊

「隊長！　お茶！　お茶！　こぼれてますって」

「あ・・・すまん・・・・」

口に付ける前に傾けられたお茶は、そのまま机上（きじょう）にそそがれていた。
すっかり文字が滲んだ書類。書き直しだ。

「書類（これ）はもういいっすから、国境の見回りでも行ってきてください。
あ、シャツも後ろ前じゃないすか。着替えてから行ったほうがいいっすよ」

ギュンターが手際よくお茶を拭いてくれる。

「補佐官ってば、そんなにかいがいしいとは知らなかっただ」
「まるで世話女房っす」
「お2人はそういう仲だったんですね！　村の娘たちが悲しむっす」

背後で騒ぐ隊員たち。
いつもならそんな軽口は一喝していた。
でも今日は睨む気力さえない。

「あいつらには写本の作業を1時間増やしときますから。
顔洗って、見回りの後直帰でいいっすよ。家でゆっくり休んでください」

ん・・・と返事をして、ギュンターの言うとおり家に帰ることにした。

「補佐官、隊長どうしたんすか」
「まるで辺境に来た頃みたいに押し黙っちまって」
「あんな隊長、いじりがいがないっす」

「おまえら、写本2時間追加。一字でも間違えてみろ、明日の朝まで書かせるからな」

「ひでぇ！」
「横暴！」
「さっき1時間っていってたのに！！」

「ただいま・・・」

返事があるはずがないのに、つい習慣で言ってしまう。
ルゥがいない。
昨日は冷たい寝台がなじまなくて、一睡もできなかった。

ルゥ。
おまえの存在がこんなに大きくなっていたなんて。
棚から取り出した葡萄酒をグラスにそそぐ。
新年に飲んだときには、向かい側にルゥがいた。
舐めさせてみれば、顔をしかめてまずそうにしていた。

なぜおまえは行ってしまったのか。
俺より、エメとかいう魔術士のほうが良かったのか？
いままで2人でうまくやってると思ってた。
おまえはそうじゃなかったのか。

すぐに帰ってくる・・・はずだ。
でも別れ際、俺を一瞥すらしなかった。
俺よりエメの側のほうがよくなったら？
もう戻ってこないかもしれない。

床の上に、からっぽのルゥの皿が置いてある。
暖炉の前にはお気に入りのクッション。
新しくしたばかりの爪とぎ用の板は、まだ何の跡もついていなかった。

冷えてきた。
暖炉に火を入れないと。
夕飯、は、どうするか。
何も食う気がしないな。

ふと見ると、脱ぎもしなかった外套の肩に、ルゥの毛がついていた。
真っ白でふわふわの毛。
喉元を撫でると、ゴロゴロと鳴らして気持ちよさそうに目を細めた。

「ルゥ・・・」

たった一日しかたっていないのに、服についた毛すら懐かしく、俺は葡萄酒をあおり続けた。

＊＊＊＊＊

空を飛ぶこと一日。

孤児院のある街を過ぎ、夕方、王都に着いた。

「院長先生は王都にいるの？」

「えぇ。昨日は言わなかったけど、かなりお悪いの。親戚の人が高名な医者を探して王都まで連れて来たのよ」

そうだったのか。

院長先生はもうかなりのお年だった。

この冬の寒さも堪えたことだろう。

「猫のままじゃだめよね。私の家に寄って行きましょう。着替えも貸してあげるわ」

「ありがとう」

王都の一画。
住宅街から少し離れた場所に、エメさんの家はあった。
ここだけではなく、各地に家というか隠れ家のようなものがあるという。

「これ・・・着るの？」

エメさんに渡されたのは、淡い水色のドレス。
頭からかぶるだけの衣服しか着たことのない私には、触るだけでも怖いくらいだ。

「そうよ。コタルディっていう意匠（デザイン）でね、今王都で流行ってるのよ！」

手首から二の腕にかけては、ぴったりとした袖。
腰（ウェスト）は体に沿うように絞られていて、裾はふんわり広がっている。
問題は襟ぐり。

「こ、こんなに開いてていいの？」

「いいのよ～。鎖骨のラインを見せるのが、色っぽくていいんじゃない！
ほら人間に戻って！　自分でできるわよね？」

エメさんに追い立てられて、衝立（ついたて）の影に隠れて目をつぶり、人に戻るよう強く念じた。
月齢に関係なく、ある程度調整（コントロール）できるようになっていた。

「ルチノーちゃん、あなた・・・・。孤児院に来たのは何歳ですって？」

なんとか自力で着て、衝立から出た私を見たエメさんの第一声がこれだった。

何か変かな。

胸が見えそうなほど襟が開いていて、落ち着かない。

「たぶん2歳くらいだと思う」

「そう。お父さんやお母さんの名前は憶えてる？」

「ううん。自分の、ルチノーと言う呼び名しか覚えてなかった」

「ふうん・・・」

「あの、変ですか？」

着方を間違えたかと、裾や背中を確かめる。

「そんなことないわ！　カールが見たらびっくりするでしょうね！」

「似合わないから？」

「その逆よ！　とっても素敵！　お肌きれいねぇ。鎖骨もいい感じ！　胸もハリがあってうらやましいわぁ」

ぷにぷに。

いつのまにか結構育った胸を、エメさんがつつく。

「あの、ちょっ・・やめて・・・」

「いやぁん、かわいい！　飼い主に見せたら速攻襲われそうだわ」

「おそ・・・？」

「いえいえ、こっちのは・な・し」

こっちってどっちだろう。

「エメさんは着替えないの？」

「私は規則で万年魔術士服よ～」

「え、でもこの服は？」

「着られないけど好きなのっ　つい集めちゃうのっ　いっぱいあるから、王都にいる間毎日着せ替えしましょうね！」

「イエ、イイデス・・・・」

院長先生のいる治療院を訪ねる前、エメさんが両側の髪を編み込みにしてくれた。

「この赤いリボンは？」

「それはとらないで」

「くす、そういえば猫の尻尾についてたわね。
カールがくれたの？」

「うん」

なんだろう。
エメさんからカールの話をふられるたびに、頬が熱くなる。
こんなふうに他の人とカールの話をしたことがなかったからかな。

「よし、できたわ。今からいけば面会時間にぎりぎり間に合うから、急いでいきましょう」

「時間決まってたの？　じゃぁこんな凝った髪型しなくても・・・」

「つれないわねぇ。久しぶりに会うお義母さんに、きれいな格好をみてもらいましょうよ」

「うーん・・・。まぁいっか・・・」

7　院長先生

院長先生の部屋は、上等な個室だった。
親戚の人は、院長先生をとても大事にしてくれているらしい。

「ルチノー・・・。きれいになったねぇ」

久しぶりに会った院長先生は、涙を流して喜んでくれた。
エメさんに着飾ってもらってよかった。
すっかり痩せて細くなった腕が、病状を知らせる。
この間まで全身に痛みがあってつらかったけれど、いまは大分おさまったらしい。
夕食の介添えをして、これまでのことを話しているうちに、面会の終了時刻が迫ってきた。

「ルチノーや、これを・・・」

そろそろ帰ろうかというとき、院長先生が寝台の下からとりだしたのは、古びた羊皮紙。
質が悪くところどころ穴が開いていた。

「お義母さん・・・？」

「おまえが幼い頃繰り返し書いていた絵だよ。
一時期を境にぱったりと書かなくなってしまったけれど。おまえ

の両親を探す手掛かりになるかもしれない」

そこに描かれていたのは、冠（ティアラ）をかぶったお母さんとマントをしたお父さん。

後ろからエメさんも覗き込む。

「ルチノーちゃん、これは何？」

エメさんが指さしたのは、お母さんがかぶっている冠（ティアラ）にある飾り。

「“ナミダイシ”。何かのお話にでてきたのかな？？」

突然頭に浮かんだ単語。

この絵に色はついていないけど、たぶん深い青だ。

「・・・あなたのご両親、私知ってるかもしれないわ」

エメさんの突然の発言に、私も院長先生も驚いて声もでなかった。

＊＊＊＊＊

ルゥが魔術の実験だかに協力するために旅立って、３日がすぎた。

「隊長、仮眠室行って1時間ほど寝てきてください。

今日は村の子どもたちの護身術講座があるんですよ。

そんな面（つら）じゃ、とてもじゃないけど人前に出せないっす」

ギュンターの勧めに素直に従って、兵舎の仮眠室で休んだ。
人の気配があるほうが眠れるのは不思議だった。
そろそろ時間だろうと起き出すと、扉に紙がはさんであった。

“髭を剃ってからくること！”

鏡を見れば、なるほど、酷い人相だった。

「右手がこうだろ。左手がこうで・・・」
「あははっ　くすぐったい！」
「くすぐったくちゃだめなんだよ！　腕をつかまれたらこうやって・・・」
「やだ、サジ兄ちゃんの下手くそ！　すぐ逃げられるもんね！」
「あっ、言ったな！　待て！！」

スヴァルの家の庭で、数名の隊員と子どもたちが訓練をしている。
訓練というか、遊ばれているようだが。
のどかな辺境は、裏返せば国の目の届きにくい場所だ。
軍の守りなど期待できず、我々のような警備隊を頼ったり自警団を作ったりすることになる。
それでも、最後は自分の身は自分で守るのだ。
年に数回、このような訓練をしているらしい。

「隊長さん、よかったら中でお茶でもいかがですか」

場所を提供してくれたスヴァルが、ぼんやりと座り込んでいた俺に声をかけた。

おにごっこと化した訓練を見ていても仕方ないので、その言葉に甘えることにする。

「ルゥちゃん、家出しちゃったんですか？」

「いえ、知人に預けただけです」

隊員が何か言ったのか、スヴァルが気遣わしげに尋ねてきた。

「あ、そうなんですね。どれくらいの間？」

「一週間くらいでしょうか。先方の都合なのでわかりませんが・・・」

「そう・・・」

しばし無言でお茶をすすっていると、足に何か触れた。

「んにゃん」

猫だ。

「す、すみません。隣の部屋にみんな閉じ込めておいたはずなのに。こら、だめよ。みなさんお仕事中なんだから」

「いやいや、いいんです。ほら、もう遊んでるようなもんだ」

庭を見やれば、子どもたちにぶら下がられたり肩車をせがまれたりしている隊員たちがいた。

きゃっきゃとはしゃぐ声が聞こえる。

「そうですか」

「ええ。猫、たくさんいるんでしょう？　せっかくだから会いたいな」

ルゥのいない寂しさがまぎれるかもしれない。

「会ってくれます！？　ぜひ！」

ぱっと笑顔になったスヴァルが、隣の部屋の扉を開けた。

「！」

「んにゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

隣の部屋から飛び出してきたものがもたらしたのは、地響き。そして風圧。

それらがおさまって、驚いた。

見渡す限りの猫、猫、猫！

俺はスヴァルの猫好きをナメていた。

茶トラ、白黒、三毛に黒。

何十匹という猫が、部屋の中を埋め尽くした。

「はじめは道で拾った3匹だけだったんですけど、いつの間にか増えちゃって・・・」

膝の上だけでなく、腕や肩、頭の上にも猫を乗せたスヴァルは、とても幸せそうに笑っていた。

実家の猫好きの母も、これにはかなうまい。

そのうち、一匹の猫が俺に寄ってきた。
人懐っこい猫で、撫でてやるとゴロゴロと喉を鳴らしてもっととせがんできた。
一匹かまうと次々とよじ登ってきて、結局俺も猫だらけになってしまった。
ボールや猫じゃらしで遊んでやる。

「隊長～！　俺らに仕事させて何遊んでんすか！」
「子どもって容赦ねぇ！　見てくださいよ、この青アザ！」
「残留組になればよかったっす。疲れた・・・」

「まぁ、みなさん、ご苦労様でした。
お茶用意してありますから、どうぞ」

「「「ありがたくいただきます！」」」

隊員があがりこむと、猫たちは思い思いの場所に落ち着いたり、庭に遊びに出たりした。

「わ、猫ちゃん！」
「遊ぼ～！」

子どもたちが嬉しそうに手を伸ばす。

「隊長さん、お茶のおかわりいかがですか」

「あ、いただきます」

スヴァルがお茶を淹れてくれる。
外では子どもと猫が遊んでいる。

冬とはいえ、昼間はぽかぽかと温かい。

いいなぁ、こういうの。

俺ももう31。

家庭を持ってもいい年だ。

嫁さんとか子どもとか、どうなんだろうなぁ。

なんだかゆったりした気持ちになって、お茶を口に含んだ。

花の香りが、口から鼻に抜ける。

そういえば、村の特産だったか。

さっきも同じお茶をもらったはずなのに、全く味や匂いを感じなかった。

「ようやく以前の隊長さんらしいお顔になりましたね」

スヴァルに言われて、つるりと頬を撫でてみた。

「そうですか？」

「そうですよ。隊長ってば、この間からむっちゃ怖い顔してるんすから」

「ここに来たとき以来っすよねぇ。近寄りがたくってぇ」

「だてに顔がいいだけに、鬼気迫るものがあるっていうかなんていうか」

「おまえらな・・・」

「みなさん心配してるんですよ。

ルゥちゃんだって、帰ってきて隊長さんがそんなにやつれてたら

心配します。
　ちゃんと食べて、ちゃんと寝てくださいね」
隊員やスヴァルの忠告をきいて、その後3日間は規則正しい生活を心がけた。
もちろん、帰ってきたルゥに心配をかけないためだった。

8　帰宅

＊＊＊＊＊

院長先生に面会した次の日の朝。
エメさんの家で朝食を摂っていると、鳩が飛び込んできた。

「・・・・・！
ルチノーちゃん、お義母さんが亡くなったわ」

「え！？」

ど、どうして！？
昨日はやつれていたとはいえ元気そうだったのに。

「痛みを抑えるために、かなり強い薬を使っていたみたい。
今朝方、心臓発作だったって」

「そんな・・・」

「ルチノーちゃんを待っていたのかもしれないわね」

私のことをずっと心配してくれていた院長先生。
幼い頃描いた絵を、ずっと大事にとっておいてくれた。

「お義母さん・・・・・」

「葬儀は明後日だって。
荷物の整理とかもあるでしょうから、もう2～3日こっちにいて、全部済んだら辺境へ送るわ。
それでいい？」

「うん・・・ありがとう・・・」

院長先生の荷物は、ご自分のものは本当に少なくて、ほとんど孤児院で育った子どもたちの思い出の品だった。
まだ残っていた孤児院の建物での葬儀。
独立したり引き取られたりした子どもたちも大勢集まった。
たくさんの人に見送られ、院長先生は永い眠りについたのだった。

「ルチノーちゃんのご両親の件は、私なりに調べてみるわね。
ちょっと思い当たることはあるんだけど、まだ確証はないからはっきりしてから知らせるわ」

両親といっても、きっと私がこんな見た目だったから捨てた人たちだ。
今さら見つかっても困るような気がする。
エメさんがやけに乗り気だから言い出せないけど・・・私の親は院長先生だ。

「何から何まで、ありがとう、エメさん」

「いいのよ。乗りかかった船だわ。それに私、ルチノーちゃんのこと好きなの」

「・・・すき？」

人から気味悪がられるばかりだった私を、好きといってくれるの？
エメさんって変。

「恋する女の子はいつでもとびきりかわいいものよ。
自信をもって！　応援してるわ」

「こ・・・・ッ」

エメさんは、真っ赤になっておたおたする私を楽しそうに眺めてから、おでこをトンっと指ではじいた。
びりっと電流が流れたような感触がする。

「変化の術はもう解けてるけど、猫じゃなきゃいけないんでしょう？
自由に変身できるようにしたから。猫のままでもしゃべれるから、鳴き声は気を付けてね」

カールとの生活が安定したことで、私への術は解けていたらしい。
それをなんとか“猫じゃなきゃ”という思いで継続させていた。

「ルチノーちゃんは魔術の才能があるわよ。カールにフラれたら、私のところにいらっしゃい」

「エメさん、さっき応援してるって・・・」

「あはは！　そうだったわね。きっと今頃死にそうになって待ちわびてるわよ。さぁ帰りましょう」

猫になってエメさんに抱かれ、空を飛ぶ。
カールの家に着いたのは、日が暮れ始める少し前。
カールはまだ帰っていなかった。

「あ、私鍵もってないよ」

「まかせて頂戴」

エメさんが口の中で何かつぶやいたと思ったら、足元のつる草がしゅるりと伸びて、鍵穴に入っていった。
かちゃりと軽い音がする。

「エ、エメさん・・・？」

「ルチノーちゃんを寒空で待たせるほうが、ご主人様は怒るわよ。私はあんまり長居できないから、手紙を置いていくわね」

元からそのつもりだったのか、フードの下から手紙や荷物を取り出した。
どこに入っていたのかと思うほど大きなものだ。

「これはクッションね。人間に戻ったときに着られるように、中に服が入ってるわ。
こっちは護り石。ペアになってるのよ」

赤い石のついたペンダントを首にかけてくれた。

「これ、人間になったときに首を絞めちゃわない？」

「大丈夫。魔術がかかっているから持ち主に合わせて伸び縮みするの。

あ、もしかしてそれでリボンは尻尾にしてたの？」

「うん。カールは首につけてくれようとしたんだけど、窒息しそうだったから」

「あはは！　なるほどね。これは大丈夫よ。

こっちはカールの分。この石は引き合うようになっているのよ。

ルチノーちゃんとご主人様（カール）が、いつまでも一緒にいられますようにってお祈りしておいたからね」

「ありがとう、エメさん」

「うふ、いいのよ。カールによろしくね」

そういってエメさんは夕焼けの空を飛んで行った。

＊＊＊＊＊

あぁ、今日も疲れた。

周囲に助けられてなんとか業務を果たしているが、そろそろ限界だ。
もう一週間たつ。
ルゥはまだ帰ってこないのか。

「ただいま」

いないとわかっていても、声はかけてしまう。

「なーぅ」

「!?」

今、ルゥの声が聞こえた気がする。
俺、とうとう幻聴まで聞こえるようになっちまったのか?

「た、だいま・・・?」

「なーぅ!」

玄関の扉を開けた定位置に、ちょこんと彼女は座っていた。

「ルゥ!」

幻ではない。本物のルゥだ!

「んなっ」

飛びついてきた白い体を注意深く抱きしめ、頬ずりする。

「よく帰ってきてくれた・・・!」

「なーぅ」

にじむ涙を、ルゥが舐めとってくれた。

「おかえり、ルゥ」

真紅の瞳に俺が映る。

ルゥの瞳はなんてきれいなんだろう。

毛並みもいい。大事にしてくれていたようだ。

再会の喜びに浸っていると、胸元にきらりと光るペンダントに気付いた。

金の鎖に、ルゥの瞳の色に似た赤い石がついている。

「なんだこれは」

「んにゃ～」

ルゥに促され、居間の机の上を見ると手紙があった。

女魔術士からだ。

家には確かに鍵をかけてあったはず。

あの女、何を勝手なことをしてるんだ。

やはり魔術士は信用ならないと思いつつ、手紙を読んだ。

中には、ルゥのおかげでとても助かったこと、お礼にクッションと護り石を贈るとあった。

手紙のそばに、布の小さな袋がある。

開けてみると、中からルゥとおそろいのペンダントが出てきた。

「双子の護り石か」

元々は一つの石であったものを二つに分けたものを、双子石という。
お互い引き合う性質を持ち、魔術に用いられる。
それに護りの魔術をかけてくれたのだろう。
渡し方は気に入らないが、ルゥとおそろいなのは気に入った。

「おまえ、俺からのリボンは首にしなかったのに、なんでこれはしてるんだ？」

「んぁ・・・」

ばつが悪そうにするルゥ。
そんな顔すら愛しい。
たかが一週間だが、俺には長かった。
華奢なペンダントを手に取って、つけてみる。
長さが足りるのかと思ったが、これも魔術なのか、ぴったりと胸元におさまった。

「どうだ、似合うか？」

「んにゃ～」

あまり装飾品はつけないので少し恥ずかしい気もするが、服を着れば隠れる場所なのでよしとする。
一緒に風呂に入り、湯冷めしないうちに寝台にもぐりこんで、温かな体を抱き寄せた。

「おまえがいない間、寂しかった。もうどこへも行くなよ」

「なーぅ・・・」

一週間ぶりのぬくもりは、あっという間に俺を眠りの世界へいざなった。

9　見られちゃいました！？

＊＊＊＊＊

「おはよう、ルゥ」

目覚めると、カールの顔がすぐそばにあった。
ちゅっとキスをしてくれる。
蕩けそうな目で私を見てるけど・・・いつから見てたの？
まさか寝てないなんてないよね？

カールは私の首や背中を、飽きることなく撫でている。

「行きたくないな。今日は一日中ルゥといたい」

そんなこと、そんなこと言わないで。
うれし過ぎちゃうからっ

「んにゃ～」

お仕事が終わったら、また甘えさせてね。
私のせいで、カールの仕事に支障をきたすわけにはいかないよ。
動きたがらないカールを頭でぐいぐい押して、なんとか仕事に送り出した。

空になった酒瓶。出しっぱなしの食器。散らかった衣類。
明るくなってあらためて見ると、部屋の中はずいぶん荒れていた。
昨夜帰ってきたときのカールは無精ひげを生やしていたし、顔色も悪かった。
かなり心配をかけてしまったらしい。
カールのために何かできないかな。
そうだ、せめて片づけをしよう！
猫に出来る範囲で、でも面倒なので人になって部屋の片づけをすることにした。

＊＊＊＊＊

「ふんふんふ～ん♪」

「隊長、とうとうおかしくなっちまったか？」
「いや、よく見ろよ。あのハリ、あのツヤ」
「猫（ルゥ）が帰ってきたんだな」
「なんてわかりやすい」

うるさい。なんとでも言え。
今日の仕事はなんだ？
さっさと終わらせて早く帰ろう。

「・・・一日分の仕事を午前中で終わらせる気っすか？　そろそろ昼飯にしましょう」

インクの補充が間に合わないほどの勢いで仕事をしていた俺に、ギュンターが言った。

「そうか！　昼！」

「は？」

「一端、家に帰る。午後また来るから」

「あ、そうっすか・・・。お気をつけて」

そうだ、そうだった。
昼食をルゥと一緒にとって、また兵舎に戻ればいい。
何も夜まで我慢することないじゃないか。

足取り軽く、家への道を急ぐ。
俺の気分のように、空は快晴だ。
家が見えてきた。
窓に白い影。
ルゥが外を眺めているのか。

「おーい、ル・・・・」

呼びかけようとして、やめた。
窓辺にいるのはルゥ？
それにしてはやけに大きい。
前もこんなことがあった。
あのときはルゥがシーツで遊んでいたのだが。
今日もそうなのか？

一人でどんな遊びをしているのか。
興味をひかれ、気配を殺して近づいた。
壁伝いにそぉっと覗く。

「・・・・・？」

白いものは髪だった。
腰まで届く、まっすぐな長い髪。
毛先には赤いリボン。

まさか・・・・！

夢だと思っていた少女がそこにいた。
袖のない膝丈のワンピースを着て、部屋の掃除をしている。
まろやかな肩や、すらりと伸びた手足がまぶしい。

呆然と見つめていると、彼女が近寄ってきて窓を開けた。
俺はとっさに窓枠の下に身を隠した。

「ん～！　いいお天気！　カール、早く帰ってこないかなぁ」

鈴のなるような声とは、このような声をいうのだろうか。
耳に心地よく響き、自分の名を呼ばれると心臓が高鳴った。
窓の下、風に乗ってふわっと漂ってくる石鹸の香り。
俺と同じ、香り。

「あの・・・・！」

思わず声をかけそうになって、口元を押さえた。
そうだ、以前夢で見たときに思ったんだ。

彼女はルゥなんじゃないかって。
ルゥは人に化けられるが、それを隠している。
もし俺がここにいることがわかったら、今度こそ本当にルゥは出て行ってしまうかもしれない。
そんなこと、耐えられない。

ぱたんと窓が締まる音がする。
無意識に息を詰めていたようで、はぁっと吐き出すと全身の力が抜けた。
俺はしばらく窓枠の下にいたが、昼の休憩時間が終わるのでしぶしぶ兵舎に戻った。

午後はもちろん、仕事なんて手につかなかった。

１０　カールの葛藤（前書き）

小話風に３話。
皆様に引かれたらどうしよう・・・。

１０　カールの葛藤

＊＊＊　想い　＊＊＊

あれ以来、ルゥのことをさりげなく観察しているが、人型になる気配はない。
猫が人になるなんて、馬鹿馬鹿しい。
ルゥが帰ってきて浮かれた頭が見せた白昼夢だ。
そう思う反面、期待してしまう自分がいる。

どんなときになるのだろう。
自分の意志で変化できるのだろうか。
人になれる猫。
普通の猫ではない。
以前ウーリーが言っていた。俺から魔術の匂いがすると。
ルゥはどこかの魔術士から逃げ出した猫なのか。
ひょっとすると、あの女魔術士は何か知っていたのかもしれない。

「ルゥ、あの、な」

「んな？」

きょとんと俺を見つめる赤い瞳。
人になれるならなってくれないか？
そう言ったらルゥはどうするだろう。

「いや、なんでもない」

ごまかすように喉を撫でると、ゴロゴロと鳴らして喜んでいる。
人にならなくてもいい。おまえと話せたら、どんなに楽しいかと思うんだ。
逃げ出されるのが怖くて、結局何も言えなかった。

＊＊＊　シャツ　＊＊＊

その日。
早く帰れることがわかっていながら、ルゥには何も言わなかった。
まだ日が高いうちにこっそり帰ってきて、出窓の下に隠れる。
家の中を覗くと、人型になったルゥがいた。

「・・・・！」

この前は、どこから出したのか清楚なワンピースを着ていた。
でも今日は・・・それ、俺のシャツ！

小柄なルゥにはもちろん大きすぎる。
ボタンを数か所留めただけで、大きく開いた襟元から白いふくらみがのぞいている。
まくった袖からは細い腕。
裾からは太ももがちらちら見える。

ルゥにするように、すぐにでも抱きしめて撫でまわしたい衝動にか

られた。
元は猫とはいえ、あんな少女に手を出したら犯罪じゃないか・・・・！
いや、猫とわかってる時点で人としてどうなんだ！？
頭を抱え、自問自答する。
ようやく落ち着いたのは、日もとっぷりと暮れ、いつもより遅い時間になってからだった。

「た、ただいま・・・」

「なーぅ」

家に入ると、ルゥが当然のようにおかえりのキスをしてきた。
人型が脳裏をよぎり、妙にぎくしゃくしてしまう。

「んな？」

「いや、すまん、なんでもない」

ルゥを肩に乗せたまま椅子に腰かけようとして、椅子の背にかかったシャツに気付いた。
昨日俺がここにかけたシャツだ。
そして昼間、彼女（ルゥ）が着ていたのもきっとこれだ。

「うっ・・・・」

殴られたとき以外で鼻血なんて出したの、何年ぶりだ・・・っ
初心（うぶ）な少年（こども）のようになってしまった自分を情けなく思いつつ、胸の動悸はなかなかおさまりそうにない。

「んなっ、なーぅ？」

心配そうに俺を見るルゥ。

あぁ、そんな純粋な目で俺を見ないでくれっ

当分、ルゥの目をのぞきこむことはできそうになかった。

＊＊＊　猫茶　＊＊＊

ルゥは相変わらず俺の前で人型になることはない。

はじめはどうしてなってくれないんだと悩んだが、ルゥにはルゥの都合があるだろう。

一緒に居られるだけで幸せなのだから、これ以上は望まないことにした。

「サジの妹が焼き菓子を差し入れてくれたんだ。食うか？」

夕食前、スープが温まるまでの間に菓子を齧る。

淹れたお茶は、水で薄めてから皿に入れてやった。

「ふに？　ふにゃん」

「ん？　どうした？」

ルゥの様子がおかしい。

「うなぅ。　ふにに」

撫でてもいないのに、ゴロゴロと喉を鳴らして寝転がる。
この感じ・・・もしや。

ルゥに先にやって自分はまだ飲んでいなかったお茶を口に含むと、
いつも淹れているお茶の味ではなかった。
あわてて袋を確認する。
これは確か去年の冬にスヴァルがくれたお茶。
冬場、水を飲みたがらなくなったらあげてみてと、ギュンターに言(こと)づけたやつだった。

「ふにゃん、うにゃぁ」

お茶を舐めては、床に背中をこすりつけたり、ぐにゃぐにゃと体を揺らしたりしているルゥ。
完全に酔っ払っている。

「猫茶・・・またたび茶か！」

元々薄めていたので大した量ではないが、ルゥには効果てきめんだったようだ。

「おい、大丈夫か。ル・・・・・ゥ！？」

ルゥのそばにしゃがみこみ、様子を見ようとしたそのとき。
ルゥの輪郭がぼやけた。
空気に溶けるように、体が広がっていく。

「ん・・・あぁん・・・」

こ、これは！
だだだ、だめだ、だめだ、だめだ、だめだ！！！

寝室に駆け込み、毛布をつかむ。
ばさりと彼女にかけ、極力目をそらして抱き上げた。

「ん・・カール・・・・」

うわぁ、やめてくれ！
首に手をかけるな、顔をうずめるな！！

彼女を寝台に押し込むと、扉を閉め着衣のまま風呂に飛び込んだ。
まだ火を入れず水をためただけだった浴槽に、下半身を沈める。

「落ち着け！　落ち着け、俺！」

しびれるほどの冷たさの水が、じわじわと体の熱を奪う。
それとともに、頭も冷えた。

「ルゥは、やっぱり人型になれた・・・」

はじめて見た変化。
うれしさに顔がゆがむ。
でもあの姿は刺激的だった。
なんで裸なんだ。
猫だから当たり前か。

体、柔らかかったな・・・。

毛布越しの感触を、うっかり思い出す。
せっかく冷えた下半身に、また血が集まりだした。

「ううう・・・」

しばらく浴槽から出られそうになかった。

ようやく出られたのは、手足がすっかりしびれて真っ赤になったころ。
濡れた服を着替え、寝室の様子を伺うと、猫に戻ったルゥがすやすやと眠っていた。
あぁ、よかった。

「このお茶は封印だ」

戸棚の一番奥に、猫茶をしまった。
これはルゥに飲ませてはいけない。絶対に。

でももったいないよな、せっかくもらったのに。
いやいや、いかん。あんなルゥ、誰にも見せられない。
見せなきゃいいんじゃないか？　家の中なら、誰が見るわけもない。
違う、俺がだめなんだ。
この次、わかってて飲ませたら、理性が保(も)つ自信がないじゃないか。
だからだめだ。
これはルゥに飲ませてはいけない。
絶対に、きっと、たぶん・・・・・・だめなんだ。

戸棚の前で、俺はいつまでも葛藤するはめになった。

１０　カールの葛藤（後書き）

えーと、よろしければ、ご意見・ご感想くださいませ。
路線、いいですか？大丈夫ですか？（笑）

お月様の方に「白猫の恋わずらい～月光編～」として裏バージョンを投稿しました。

1　来客（前書き）

皆様のあたたかいお言葉に支えられて続いております＾＾
ありがとうございます！

1　来客

＊＊＊＊＊

カールの様子がおかしい。
目を合わせようとしないし、あいさつのキスもぎこちない。
そうかと思うと、ふと気づいた時にじっと見つめられていたりする。

「ルゥ、あの・・・」

「なぅ？」

「いや、いい」

なんてやりとりもしょっちゅうだ。
何が言いたいのかな。
どうしたのかな。

昨日はお風呂で湯船に落とされた。

「ふぎーーーーー！」

「あああ！　すまん！　大丈夫か！！」

端正な顔に、見事なひっかき傷ができてしまったのは仕方ないと思

う。
それでも、夜寝るときには優しく撫でてくれて、深い碧の瞳が幸せそうに細められるから、私はここにいていいんだと思える。

今日はカールが非番の日。
でもいつものお休みみたいにウキウキしないのは、薄皮を一枚はさんだような、微妙な空気を感じるから。
はぁ・・・・。
本当に、どうしたんだろう。

「ルゥ、昼飯は何がいい？」

「んな！」

カールが作ってくれるものならなんでも！

燻製肉を焼くいい匂いがただよってきたころ、コンコン、と玄関の扉を叩く音がした。

「隊長さん、こんにちは。ルゥちゃんが帰ってきたって聞いたんですけど」

「あぁ、スヴァル。これはどうも・・・」

以前、兵舎で会ったことのある女の人だった。
なんだか影の薄い細っこい人で、優しそうっていうよりトロそうな気がする。
年だって、たぶんカールよりずっと上だ。
ウーリーさんたちが兵舎にお泊りしていたときに手伝いに来てたっていうけど、その人がなんで家（うち）まで来るわけ？

「あら、お昼でしたか。ごめんなさい。これ、よかったらルゥちゃんに」

「すみません、ありがとうございます」

「いえ、隊長さんが元気になられてよかったです。またうちにも遊びに来てくださいね」

「ははっ、ご心配をおかけしまして・・・。えぇ、また」

ちょっと、ちょっと、どういうこと？
カールってばいつのまにその人のおうちに行ったの？
まさか私が院長先生に会いに行っている間に？

・・・院長先生。
院長先生のことを思い出すと気分が沈む。
もっと何かしてあげられたんじゃないかって。
猫になんかならないで、そばにいてあげたらよかったんじゃないかって。
でもそうしたらカールには出会えなかった。

「ルゥ、スヴァルが山羊乳（シェーブル）チーズをくれたぞ。おまえ好きだろう」

山羊乳（シェーブル）チーズ！
沈みかけた気持ちが、一気に浮上する。
そそそ、そんなので懐柔しようったって、だめなんだからねっ

「パンにのせて焼いてやるからな」

今日のお昼ご飯は、手作りパンの山羊乳(シェーブル)チーズのせと、燻製肉。
細かくちぎった野菜も添えてある。なんて豪華。
でもこのチーズ、あの女の人が持ってきたんだよね。
おうちに遊びに行ったって・・・カールってば、私がいない隙に何してるのよ！

あぁ、でもいい匂い。
チーズに罪はないんだよねぇ。
食べなきゃもったいないし。
でもあの人は気に入らないし・・・。

「食わないのか？」

「うなー・・・」

迷っていると、カールの口の端にチーズのかけらがついているのを発見した。
そうだ、味見をしてから決めよう。
食卓(テーブル)に飛び乗り、首を伸ばしてカールの口元をぺろりと舐めた。
うーん、やっぱりおいしい！
この塩気がたまらない。
カールは猫の私に気を使って、薄味のものを作ってくれるんだよね。
魔術で変化してるだけだから、本当は平気なんだけど。

「・・・くっ・・・・」

ん？　カール？
なんで口を押えてそっち向いちゃうの？
耳が赤いけど・・・大丈夫？

「そ、そんなに食いたかったのか？　俺の分もやるから、ほら食べろ」

いやぁん、大盛りっ　幸せー！

結局、誘惑に負けて食べてしまった。

食後の毛づくろいをしていると、また玄関の扉を叩く音。

「なんだ、今日は客が多いな」

席を立つカールにくっついて、玄関に向かう。

「はい、どちら様・・・」

「カール！」

「ミレイユ！？」

カールが扉を開けたとたん、赤毛の美女が飛び込んできた。

2　ミレイユ

＊＊＊＊＊

シャー！
ルゥが足元で毛を逆立てて威嚇している。

「大丈夫だ、妹だよ」

「ふに？」

俺にぶら下がるように抱きついてきたミレイユを、べりっとはがす。

「あら、かわいい猫。おいで～」

猫好き一家の一員であるミレイユは、しゃがみ込むとルゥに手を差し出して招こうとする。

「気をつけろよ。結構気が強いんだ」

「大丈夫、大丈夫。チッチッチッ、ほーら、お姉ちゃんだよ～」

鼻先で、人差し指と中指をちらちらっと動かす。
ルゥは興味を引かれたようで、徐々に近づいてふんふんと鼻を鳴らした。

「きれいな猫ねぇ。瞳が赤いのね」

「そうなんだ。ちょっと前に拾ってな」

ミレイユがちょいと顎をつつくと、びくっとしたルゥが反射的に爪を繰り出した。

おいおい、ひっかかれるぞ、と思ったが、妹（ミレイユ）のほうが一枚上手だったようで、ルゥの爪をひらりとよけると脇に手を入れて抱き上げてしまった。

「きゃぁん、ふっかふか！」

「ふぎーーー！」

暴れるルゥにおかまいなく抱きしめる。

しばらくじたばたしていたルゥだったが、あきらめたのかぐったりと身を任せた。

椅子を勧め、お茶を淹れて戻るころには、ミレイユの膝の上で丸くなって大人しく撫でられていた。

「さすがだな」

「だてに何十匹もお世話してないわ。早くに家を出た兄さんとは年季が違うのよ」

「そういうもんか？」

「そうそう。あら！　このお茶、いい香り！」

「だろう。ここの特産だそうだ」

「へぇ。うちの店でも置いてみようかしら」

ミレイユは幼馴染と結婚し、王都で小さな店を開いていた。
自慢の赤毛を上半分だけ結い上げて、残りは肩に垂らしている。
着ている服もなかなかに上等で、商売は順調のようだ。

「で、今日はどうした」

「あら、久しぶりに会った妹にずいぶんなご挨拶じゃない？
兄さんこそ、さっきの女の人はなぁに？　田舎に来て趣味が変わったの？」

ぴくぴくとルゥの耳が動いている。
ミレイユの撫で方が気に入らないのか。
抱き上げて俺の肩に乗せると、頬をすり寄せてきた。

「こいつに差し入れを持ってきてくれただけだ。世話好きなんだよ」

「ふぅん」

「なんだよ。おまえ、いつからいたんだ？」

「出てきたスヴァルさんに庭先で会ったのよ。立ち話をして別れたわ。あっちはまんざらでもないみたいだけど？」

「ははっ、馬鹿言うなよ。俺もここに来た頃はちょっとすさんでたからなぁ。心配してくれてるんだ」

「うん、まぁね。どんな暮らしをしてるのかと思ったけど、案外楽

しそうじゃない」

「ルゥのおかげだな」

肩におすわりをするルゥを撫でてやると、目を細めてゴロゴロと喉を鳴らした。

「ルゥちゃんっていうの？」

「あぁ。自分で名乗ったんだぜ？」

「あはは、まさかぁ！」

「本当（ほんと）だよなー？」

同意を求めるようにルゥを見つめると、「なーぅ！」と返事をした。
あまりのかわいさにキスをする。
最近、意識しすぎてついスキンシップを避けていたが、猫のときは猫だと思えばいいんだ！と開き直る。

「・・・らぶらぶね」

「いいだろう」

「はいはい。んん！？　おそろいのペンダントまでしてるの？」

おっと、しまった。
ミレイユの目ざとさを忘れていた。
今日は休みだから、開襟のシャツを着ている。

「知り合いがくれたんだ」

「えええ、ちょっと見せてよ！　はずさなくていいから」

引きちぎらんばかりの勢いに押され、首を差し出す。
多少引っ張られても苦しくないのは、魔術のおかげか。

「透明度の高い石ねぇ。相当高価よ？　貴族の指輪に収まってもおかしくないくらい」

「そうなのか？」

「うん。知り合いって誰？　まさか女の人じゃないでしょうね」

「女は女だが・・・」

ウーリーが連れてきた女魔術士を思い出す。
初めは若いのかと思ったが、時折見せる老成した表情といい、ウーリーの家庭教師をしていたという話といい、見た目通りの年ではないと思う。

「あああ、また！　また女性！　兄さん、なんで辺境にとばされたか忘れたの！？」

顔を両手ではさまれて、がくがくと揺さぶられる。

「おまっ、や、やめろ、わかってるって。そんなんじゃないから！」

「来た途端、家から女が出てくるし！　貢ぎ物のペンダントしてるし！

さぁ、あとは何!?　一緒に暮らしてる女でもいるの？　洗いざらい話しなさい！」

がくがくがく。

頭にしがみついたルゥも一緒に揺れている。

一緒に暮らしてる女って、ルゥか!?

人型になれます、なんて口が裂けても言えない。

「う、うるさい、話なんてないぞ。おまえこそ何しに来たんだ！」

「私のことはいいのよ！　ほら！　早く話しなさい、この馬鹿兄貴！」

「兄にむかって馬鹿とはなんだーっ」

3　知らせ

ミレイユの追及をなんとかごまかし、午後は兵舎を案内した。
性格に難はあるが見た目だけは良い妹に、隊員たちは色めきたった。

「隊長の妹！？」
「あの、俺ブルーノって言います。趣味は読書と釣り・・・」
「おまえ本なんて読まないだろ！　ダニエルっす。２１歳、夏生まれ」
「はい、はい、はーい！　妹さん、花は好きっすか？　この先に景色のいいところがあるんだけど」
「ミレイユを誘うなら、もれなく旦那もついてくるがいいか？」
「「「えええええ！！！！？？」」」
「あはは、楽しい人たちね。いい職場みたいでよかった」
「まあな。気のいいやつばかりだよ」

ミレイユが既婚者と知って、肩を落として業務に戻る隊員たち。
この頃からかわれることが多かったから、いい気味だ。

次の日の朝。

「さぁて、兄さんの様子もわかったし、そろそろ帰ろうかな」

昨夜遅くまで飲んでたくせに、ミレイユには二日酔いの気配はない。
寝台をとられ、固い床の上に寝た俺は体中が痛いというのに。

「おまえ、結局何しにきたんだよ」

王都からここまで、俺の顔を見るために来るには遠すぎる。
飲みながら聞き出そうとしたが、旦那ののろけ話しかでなかった。

「あ、そうだったわ。はい、これ」

わざとらしく忘れていたふりをして、手提げから取り出されたのは上質の羊皮紙。
巻き終わりは、ご丁寧に蝋(ろう)で封がされている。

「これは・・・帰還指示!?」

「国のお偉いさんが店に来て置いてったのよね。
兄さんの様子次第では渡すのやめようかと思ったけど、ずいぶん立ち直ったみたいだし。
団長さんも謝ってたわよ。部下を信じてやらなかったって」

「団長が・・・」

「騒動の元になった王女様は、国で反乱があったとかで失脚したらしいわ。
美男子のハーレムも解散。知らなかった?」

辺境(ここ)には最新の国政など入ってこない。
全く知らなかった。

「ま、よく考えて返事したら？　お詫びを兼ねてか、結構いい待遇だとは思うけどね」

羊皮紙には王命による帰還指示と、戻った場合の待遇が書かれていた。

ざっと目を通す。

身分や手当、住居など、破格の条件が書かれていた。

しかも帰還を望まないのであれば、辺境での勤務を続けてもいいとある。

帰還の最終期日は1か月後。

それまでにどうするか決めて返事をする。

「王都、か・・・」

ミレイユを見送って、机に向かう。

暗記するほど何度も読んだ指示書は、今はルゥの体の下に敷かれている。

「おまえな、なんでそういうところで丸まるんだ？

王の署名が入った書類だぞ。不敬罪で捕まっても知らんからな」

「うなー？」

「辺境じゃ、その取締りも警備隊の仕事か。

ルゥ＝ヘルベルト＝ヴュストくん。

貴下を、ブルクハルト国王の名誉と尊厳を害した罪で拘束する！」

がばっと覆いかぶさろうとしたのを、ひらりと避けられた。
赤い瞳がきらきらと光り、長い尻尾がゆらゆらと揺れている。
遊ぶ気だな？

「待て、こら！」

「ふにゃんっ」

家具の間を逃げ回るルゥを、どかどかと追いかける。
狭い室内では、小回りの利くルゥのほうが有利だ。

「それ！」

棚から棚へ飛び移ろうとしたところを捕まえた。

「やんっ」

え？

「な、なぅ！」

しばしルゥと見つめ合う。
今、しゃべらなかったか？

「ルゥ？」

「にゃー・・・」

目をそらすルゥ。耳も髭も垂れ下がっている。
こいつめ、しらを切るつもりだな。

「よぉし、くすぐりの刑だ！」

ルゥは撫でられるのは好きだが、おなかをつつかれるのはくすぐったがる。

「ふにっ、ふにゃんっ、うなーッ」

「もう書類に寝るなよ。書類の上を歩くのもだめだぞ」

「うにゃ、んなーぅ」

ルゥとひとしきり遊んだら、煮詰まっていた気分が浮上した。
最終期日まで1か月もあるんだ。
ゆっくり考えればいいじゃないか。

「じゃ、風呂入って寝るか」

「な！」

ミレイユにほめられた毛並みを丹念に洗う。

「うなー」

「気持ちがいいか？　よかったな」

王都に行ったら、こんな時間はとれないかもしれない。
ルゥとの生活を考えれば、辺境にいたほうがいい。
しかし王都には、知人も友人も、地位も名誉もある。

「どうしたもんかな」

つんとルゥの鼻先をつついたら、くしゃん！とくしゃみをした。

「大丈夫か？　俺につきあって床なんかで寝るから・・・。早く寝ような」

辺境か、王都か。

答えはまだ当分出そうになかった。

＊＊＊　閑話　ルゥの冒険　＊＊＊

あれ、窓が開いている。

出勤するカールを見送ったあと、いつものように窓辺で日向ぼっこをしようとしたら、窓が開いていた。
カールが閉め忘れたらしい。
人型になって閉めるのは簡単だけど、せっかくだからお散歩に行ってみようと思った。
この間まではカラスや犬に襲われたら大変だと思って出かけなかったけど、自由に変化できる今なら、ちょっとくらいの冒険はできそうだ。

出窓から飛び降り、庭を抜ける。
家の前の小道にでると、蛙が飛び跳ねて道を横断していた。
むずむずむず。
猫の本能がうずく。

「にゃ♪」

前脚でつついてみた。
蛙はぎょっとしたようにこちらを見て、ぴょこんぴょこんと速度を増して逃げはじめた。

「にゃっにゃっにゃっ」

追いかけてからかう。

蛙も一生懸命逃げているけど、猫にかなうはずはない。

ガサッ

余裕でかまっていたら、草むらに逃げ込まれた。
あれ、どこ行ったの？
人間ならたいしたことのない背丈の草も、今の私には見上げるほどの大きさ。
小さな蛙を探すのは大変そうだ。

ガサッガサガサッ

耳を澄ませていると、右の方から音がした。
そこか！

「ふにっ」

後ろ脚で跳びあがり、頭から草むらにつっこんだ。
指先にぐにゃりとした感触。
捕まえた！

「シャーーーーー！」

「ふぎゃーーーーっ」

蛙だと思ったのは蛇だった。
蛇、いやあぁぁぁぁ！

脱兎のごとく逃げ出す（猫だけど）。
はぁっはぁっ

ようやく落ち着いた時には、まったく知らない場所にいた。

まずい。

完全に迷った。

私の行動範囲ってば、カールの家の前と一回通ったきりの兵舎への道だけ。

カラスにつつかれる心配より、迷子の心配をすべきだった。

これぱっかりは、人型になってもどうにもならない。

それどころか、裸の女の子が「カールの家はどこですか」なんて聞いたら、どんな騒ぎになることか。

なんとか自力で帰らないと。

見覚えのある景色を探してとぼとぼと歩く。

『おい』

ん？

『おまえだよ、おまえ！　そこの白いの！』

声のした方をきょろきょろと探す。

どうやら声の主は木の上にいるようだ。

ガサっと音がしたかと思うと、くるりと一回転して、黒い影が降りてきた。

『見ない顔だな。おまえ、どこの飼い猫だ』

お月様みたいな金色の瞳をした黒猫が、話しかけてきた。

「ってゆーことで、カールの家、知らない？」

これ幸いと、道を訊くことにした。

『なんかいまいちわかんねぇな。なんで人間の言葉しゃべってんの？　猫語でしゃべれよ』

「私はこれしかしゃべれないの。あなたも飼い猫なら少しは理解できるんでしょう？」

『飼い猫？　飼い猫っつったか？　飼われてんじゃねぇよ。スヴァルは俺の恋人だ』

「はぁー？　あなた、あの気に入らない女の人のとこの猫なのぉ？　恋人って何よ。向こうは人間であなたは猫じゃない」

『なんだよ、細かいとこまではわかんねぇけど、今馬鹿にしただろ』

「わかんないならいいよ。とにかく、カールの家知らない？」

『カール？　カールなんて知らねぇな』

「あーっ、もう！」

イライラするっ

こんなのに頭下げて、道を訊かなくちゃならないなんて！

でも訊かなきゃ帰れない。
あの人はカールを何て呼んでた？

「隊長さん・・・そうだ、隊長さんだ。
カールは警備隊の隊長さんよ。隊長さんのおうち、知らない？」

『んだとぉ？　おまえ、あのアホ隊長んとこの猫か！』

「アホ隊長ですってぇぇぇ！？」

黒猫風情が、私のカールをアホ呼ばわりッ
許せない！！

「あんたんとこの飼い主のほうが、針金みたいな年増じゃないの！」

『なあぁんだとぉぉ！　今スヴァルの悪口言ったな！？　言っただろう！』

「ふん！　言葉はわかんなくても悪口はわかるのね。　カールはアホじゃないわ。訂正しなさい！」

『この間俺んちに来たときに、一日中ぼーっとして庭ながめてたぞ。
あんなんで隊長なんてよくできるよな！　ふぬけだから田舎にとばされたんだろ』

「ちょっと、あんたその話、詳しく教えなさい。あんたんちで一日中なんですって？
なんでカールがあんたんちに行くのよ」

『スヴァルは飼い主じゃないぞ。恋人だ』

「だーっ、もう、あんたがあの年増をどう思ってようがいいから！
カールは何しにいったの？　あんたんちで何したの？」

『スヴァルは誰にもやんないからな。ったくあのアホ隊長が来てから、なんだか浮かれてるんだ。
子どもと遊んでるのはいつものことだけど、兵舎にでかけることも増えてさ・・・』

「だからアホ隊長っていうんじゃないわよ！」

『おまえこそスヴァルを年増っていうな！』

「言葉わかってんじゃないの！　あんたわざと道教えないんじゃないでしょうねぇ？」

『はぁ？　猫語でしゃべってくんねぇとわかんねぇなぁ』

「キーーー！」

「ルゥ？　その傷はどうした」

あのあと、黒猫と大乱闘をして見事勝利。
道案内をさせて、なんとかカールより先に帰って来られた。
これは名誉の負傷だよ。ほめて、ほめて！

「背中に草の種もくっつけてるし。
ははっ　昼間何してたんだ？　楽しそうだな」

「んなぅ、なぅ！」

カールのために戦ったんだよ！
あいつったら、アホだのふぬけだの悪口ばっかり言うんだから！

「んん？　そうか。楽しかったか。風呂から出たら、薬塗ってやるからな」

ちょっとずれてるけど、頭をぽんと撫でてくれた。
うふん、カールの大きな手、好き。
結局スヴァルさんの家に何しにいったのかはわからなかったけど、別にたいした用事じゃなかったんだろう。たぶん。

「ふにっ、んにゃ・・」

「しみるだろう。あーぁ、せっかくのきれいな毛並みが・・・」

カールはできるだけ優しく洗ってくれたけど、石鹸が傷にしみた。
あの黒猫め。もっとひっかいてやればよかった。
孤児院育ちを舐めるなよ。
小さい頃はいじめられたこともあったけど、それなりに揉まれて育った私である。

「おまえがしゃべれたらいいのにな」

え？

「今日一日何があったのか、聞いてみたいな」

そうだね。私もカールに聞いてほしいな。
でも猫がしゃべったら変でしょう？

「しゃべる気になったら、いつでもしゃべってくれよ。俺は驚かないからな。というより喜ぶぞ」

「うなー・・・」

そうなの？
喜んでくれるの？

湯船からあがり、ふかふかのタオルでカールが体を拭いてくれる。
ぷるぷるっと体を振りたいけど、カールにかかるから我慢。

「いっそ人型になってくれても・・・」

「んな？」

え？何？
耳のとこ拭いてるときだったから、よく聞こえなかったよ。

「いや。あんまり怪我するなよ。まぁ今日は俺が窓を閉め忘れたからな。家の中にいる分には平気だろう」

毛が乾いたところで、カールが薬を塗ってくれた。
うわ、そんなところまで怪我してたんだ。

うん、もうちょっと自粛するよ。
私も大人気なかったな。
あの黒猫だって、飼い主のことが大好きなだけなんだから・・・・。

「ん？　寝たのか？」

カールの膝の上。
背中を撫でてくれる手が心地よくて、眠くなってきた。
寝たくない。
もっとカールの声を聞いていたいし、もっと撫でててほしい。

「疲れたんだな。おやすみ、ルゥ」

抱き上げて、キスしてくれる。
寝台に入ると、あっという間に眠ってしまった。

『なんであんたが夢に出てくるの！』

『うるせぇ、白猫めっ。今度は負けないぞ！』

夢の中でも戦って、起きたらカールが傷だらけだった。

「おはよう、ルゥ。君が強いのはわかったから、ほどほどにな？」

「なーぅ・・・」

ご、ごめんねっ

4　迷い

＊＊＊＊＊

「帰還指示、っすか」

「あぁ」

昼下がりの兵舎。

午前中いっぱい悩んで、ギュンターにだけは通知が来たことを知らせた。

細かい内容は控えたが、希望すればここに残ることも可能なこと、1か月以内に返事をしなければならないことを伝える。

「もちろん、戻るんすよね？」

「・・・迷っている」

「迷ってる？」

「なんだよ、おかしいか？」

「いえ・・・」

心なしか、ギュンターが嬉しそうにしている気がする。

「隊長は、冤罪さえ晴れれば、すぐに王都に戻りたいんだと思ってました」

「まぁな」

「猫（ルゥ）ですか？」

「それだけじゃないさ」

「ははっ、その迷いの一部に俺らの存在があると思いたいっすね。俺は隊長がどちらを選んでもいいように準備しておきますよ。それが補佐官の仕事っすから。
隊長は俺たちのことは気にせずに、一番いいほうを選んでくださいね」

「ありがとう。他の奴らにはまだ・・・」

「えぇ、言いません。思う存分迷ってください」

「なんだよ、それ」

他人を拒絶し、必要以上の会話をしようとしなかった俺に根気よく話しかけてくれたギュンター。
ルゥに出会って少しずつ変わってきた俺が、村になじめるように尽力してくれた。

「基本教練の写本はどうだ？」

「2冊はできました。残り3冊もあと少しっす」

「そうか」

「隊長のおかげで、俺らもずいぶんましになりました。本当に感謝しています」

「・・・なんだか追い出そうとしてないか」

「ははは！　そんなことないっすよ！」

「ったく・・・・・」

相変わらずの軽いノリだが、暗くならないのは助かる。
夕方まで通常の業務をこなし、ルゥの待つ家へと帰った。

「ただいま、ルゥ」

「・・・んな～ぅ・・・・・」

「ルゥ？　おい、ルゥ！」

5　熱

＊＊＊＊＊

風邪をひいた。

昨夜からちょっとおかしい感じはしてたんだ。
くしゃみが出るし、体がだるい。
朝カールを見送ってから、ぶるりと寒気が来て、夕方には熱が出ていた。
帰ってきたカールを出迎えたまでは覚えているけど、その後の記憶がない。

頭がガンガンと痛む。
息が熱い。
苦しい。

助けを求めるように手を伸ばすと、大きな手がそっと握ってくれた。
カールだ。
乾いた布で、額の汗をぬぐってくれる。
あぁ、これはきっと夢だ。
熱のせいで、夢を見てるんだ。
だって私の手は人間の手なのに、カールが平然と側にいる。
髪を撫でて、人ならば気味悪がるはずの目を、心配そうにじっと見つめてくる。

たぶん実際には猫の私を看病してくれてるんだな。

これは、本来の私を受け入れてほしいっていう、私の願望が見せた夢。

＊＊＊＊＊

ルゥが熱を出した。
出がけにだるそうにしているとは思ったが、兵舎から帰ってきてみればふらふらで、出迎えと同時にぱったりと倒れた。

「ルゥ？　おい、ルゥ！」

抱き上げて見れば、体が熱い。
昨日のくしゃみは風邪の前兆だったか。
寝台に運び、寝かせてやる。
猫ならば寝かせておけばそのうち治ると思うが、ルゥの場合はどうなんだろう。

夕食と風呂を済ませてルゥの様子を見に行くと、熱のせいなのか、人型になっていた。
はぁはぁと荒い息をしている。
上気した頬。額に浮かぶ玉の汗。
かなり苦しそうだ。

「うぅ・・・」

上掛けの下から白い手が伸ばされる。

そっと握ると、うっすら目を開けた。
赤い瞳が熱でうるんでいる。
額の汗を拭いて、頬にかかる髪を梳く。
ルゥは一瞬不思議そうな顔をしたが、にこっと微笑むとまた目を閉じて荒い息を繰り返した。

人型でいるならば、人間用の薬湯を飲ませてもいいだろうか。
握った腕を寝具の中に入れ、薬湯の用意をする。
少し苦味があるため、蜂蜜をまぜてやった。
吸いのみなどないから、普通の汁椀に入れてきたが、どうやって飲ませたものか。
苦しそうに眉根を寄せるルゥを抱き起こす。
上掛けがずれて肩があらわになるが、できるだけ見ないようにする。

「ルゥ、熱さましだ。飲めるか？」

口元で椀を傾ける。

「・・・んっ、ごほっ、ごほごほっ」

いくらも飲まないうちに吐き出してしまった。

「ルゥ。ちゃんと飲まないと治らない」

仕方なく。そう、仕方なくだ。
俺は薬湯を口に含んだ。
ルゥの顎をとり、上向かせる。
開いた唇に、己のそれを重ねた。
こくり。
細い喉が動く。

ちゃんと飲んだのを確認して、二口目。

「んっ・・・はぁ・・・・っ」

嚥下の合間に吐息が漏れる。
熱のせいで体が熱いのはわかっていても、口移しを繰り返すうち、
頭の芯がしびれてくる。

肩を抱き、最後の一口を飲ませる。
量が多かったのか、口の端からこぽりとこぼれた。

あふれた薬湯を舌で舐めとる。
甘いのは蜂蜜か、ルゥか。
確かめるように下唇をなぞった。

「ん・・・・」

「ルゥ・・・」

薄く開けられた口からのぞく小さな舌に誘われ、必要もないのに再
度唇を重ねた。
いつまでも触れていたい、やわらかな感触。

「カール・・・・？」

真紅の瞳が俺をとらえ、戸惑いに揺れる。
限界か。

「おやすみ、ルゥ。早く治せ」

「うん・・・」

寝台に横たえ、肩まで上掛けを掛けた。
髪を撫でて、こめかみにキスをする。
ルゥは安心したように目を閉じた。

寝室の扉を閉め、居間の椅子に腰かける。

「はぁ・・・・」

机に肘をつき、顔を両手で覆う。
脳裏に浮かぶのは、先ほどのルゥ。
汗ばんだ肌。
熱い吐息。
うるんだ瞳に赤く染まった頬。
唇はどこまでもやわらかく、舌を吸えば小さな声が漏れた。

彼女が猫でも人でもいい。
もう、離せない。

5　熱（後書き）

お約束ですが、入れたかったんです～。
カール兄さん、開き直ってロックオンです（笑）

6　春

＊＊＊＊＊

えーっと。
これはどういうことなんだろう。

「食べられるか？」

カールがミルクで煮たパンをスプーンですくってくれる。
あーんと口を開ければ、一口ずつ入れてくれた。

「うまいか？」

うん。お砂糖が入ってて、甘くておいしい。
それはいいんだけど。

「髪が邪魔そうだな。しばるか？」

ふるふる。
首を振ると、カールは苦笑して、頬にかかった髪を避けてくれた。
そう、私は今、人型（ルチノー）でいる。
カールのシャツを着て、枕を背もたれに寝台に身を起こしている。

人型の私の手を握ったカール。
あれは夢じゃなかったのか。

「熱は・・・だいぶ下がったな。一応薬湯も飲んでおけ」

カールが私の額に手を当てて熱を診る。
ほどよく冷めた薬湯は、ちょっと苦かったけど蜂蜜の味でなんとか飲めた。
これ、前にもどこかで飲んだことがあるような・・・？

「眠くなくても、横になってろよ。居間にいるから、何かあったら呼べ」

私の背中を支えて横たわらせてから、空になった食器を持ってカールが席を立つ。
こくりとうなずいたけど、カールがいなくなるのは寂しい。病気のときって心細くなる。

「くす、そんな顔するな。すぐ隣の部屋にいるんだから」

そういって、寝台にもぐる私に軽くキスをした。
人の姿でのキス。
かあぁっと頬が熱くなって、思わず上掛けを鼻の頭まで引き上げた。
。
カールはそんな私の頭をぽんぽんと撫でて、部屋から出て行った。

私がルゥってわかってるんだよね？
この姿でいいの？　気味悪くないの？

窓からは春の陽が差し込んでくる。
ぽかぽかとした日差しに誘われて、いつのまにかまた眠ってしまった。

＊＊＊＊＊

「補佐官、今日隊長休みなんすか？」

「あぁ。山羊乳（ミルク）の配達に行ったノイさんが言付（こと）かってきた。猫（ルゥ）が熱を出したんだと」

「猫の看病で休みっすか・・・」

「隊長らしいっすね」

「んだ・・・」

「赴任以来、全然有休とってなかったからな。たまにはいいんじゃないか」

「そうっすね」

＊＊＊＊＊

ふっ。

思わず笑みがこぼれた。

人型でいるのに俺が普通に接するから、ルゥは困っていた。

俺をちらちらと見ては、何か聞きたそうにするが、結局一言もしゃべらない。

あのかわいい声が聞きたいのに。

いや、かわいいのは声だけじゃないな。
スプーンを差し出したときに遠慮がちに口を開ける動作とか、キスをしたときに真っ赤になった顔とか。
むしゃぶりつきたくなる。

「いかん。病気が治ってからだ」

猫でも人でも離さないと決めた。
長く人の姿でいられるなら、王都のほうが暮らしやすいだろう。
あの容姿はこんな辺境では目立つ。
いろいろな人種がいる王都ならば、さほど気にされないのではないか。

食器を洗い、洗濯をする。
今日は休暇をとった。
また隊員たちにからかいのネタを提供してしまったが、先ほどの心細そうなルゥを思うと休んで正解だった。

寝室をのぞくと、ルゥは眠っていた。
昨夜とは違い、規則正しい寝息が聞こえる。
換気のために窓を開け、はみだした手を寝具に入れてやろうとしたら、きゅっと握られた。
それだけで、俺はその場から動けなくなる。

胸の動悸を感じながら、寝台の横に座り込む。
つないだままの手を寝具の中に入れ、もう片方の手でルゥの頭を撫でた。
口元が何か言うように動き、にっこり微笑んだ。
いい夢を見ているようだ。

日の光が温かく、さわやかな風が花の香りを運んでくる。
遠くで鳥の声が聞こえる他は、何の物音もしない。
まるでここだけ時間が止まってしまったかのようだ。
すやすやと眠るルゥ。
俺の、ルゥ。

まばたきをする一瞬すら惜しい気持ちで、俺はいつまでもルゥの寝顔を見ていた。

7　本当の私

＊＊＊＊＊

目が覚めたら、カールが寝台に寄りかかって眠っていた。
私の右手が、カールの大きな手に包まれている。
ずっとそばにいてくれたのかな。
ずっと、手をつないでてくれたのかな。

うれしくなって、左手もカールの手に重ねて頬を寄せる。
近くなった顔をじっと見つめた。
最初は怖かったんだよなぁ。
髪はぼさぼさだったし、ひげは伸ばし放題だったし。
ほとんど目しか見えなくて、でもその碧の瞳がとっても優しかったから拾われたことに感謝した。

髪を切ったら、こんなにかっこいいとは思わなかった。
男の人の容姿をどう言ったらいいのかよくわからないけど、いままで会った人とは違う。
背も高いし、きっちり鍛えてる体は、人になった私でさえ片手で持ちあげると思う。

「カール」

眠るカールに呼びかける。

カール、好き。
カールが、人の姿の私を受け入れてくれたらうれしいな。
もしだめだったら・・・一生猫の姿でいるから側に置いてって頼んでみようかな。

からめた指先に口づける。
そうだ、さっきキスされた。
猫じゃないのになぁ。いいのかなぁ。
もしかしてカールには猫に見えてるってことあるのかな。
うーん・・・。

熱は下がった。
猫の姿になって、カールが起きるのを待ってみよう。

「ん・・・ふあぁ・・・。寝てしまったか」

カールが大きく伸びをする。

「んなぅ」

床に座るカールの膝にすり寄ってみた。

「ルゥ？」

はい。猫ですが、何か。
あれ、なんか眉間にしわがよってるんだけど。

「そうか。そういうつもりか」

カール、怒ってる？

「俺はなかったことにする気はないぞ。こっちに来い」

抱き上げられて、枕元にたたんでおいたシャツをかけられた。

「人になれるんだろう？　もう俺をごまかすのはやめてくれ。人になって俺の名を呼んでくれ」

カール、やっぱりわかってたの。

でも“人になれる”って・・・もしかして、猫が本当の姿で、猫から人に変化できるって思ってる？

「ほら、早く」

カールが急かす。

猫が人になれるんでも、人が猫になれるんでもカールにとっては同じなのかな。

でもこれはいい機会だ。

人でもいい？って聞く好機（チャンス）。

だめなら、ずっと猫でいるからって頼むんだ。

カールの腕の中。

私は人に戻るよう意識を集中した。

＊＊＊＊＊

なんで猫なんだ。
ここまで来てごまかす気でいるのが許せない。
こっちは思い悩んだあげく、猫でもいいと思ったのに。

ルゥは、俺に抱かれシャツをかけられると、長い逡巡の後、決心したように目を閉じた。
輪郭がぼやける。
ルゥは、俺の膝の上で人に変化した。

「ルゥ・・・」

意識がはっきりした状態で、ようやく見せてくれた姿に感動する。
シャツのボタンをとめてから、ルゥは不安そうに見上げてきた。
見下ろす形になったため、おそろいのペンダントの先に見えてしまう谷間とか、裾から伸びた太ももとかは視界にいれないようにする。
そっちはあとで堪能しよう。今は大事なときなのだから。

「・・・・・」

「ルゥ、何か言って?」

「・・・・・」

「ルゥ」

「・・・・・にゃぁ」

は？
にゃぁ？
そりゃ、“何か”とは言ったけれども。

「ぷっ・・・・く・・・・はっ、ははは！」

それはないだろう！
俺は、真剣に君に向き合おうと思ったのに。

「やっ、なんで笑うの？　だって、だって、何を言えばいいの！？」

ぽかぽかぽか。
頬を染めたルゥが、俺の胸をたたく。

「あぁ、うん、悪かった。君の声が聞きたかったんだ。しゃべってくれてうれしいよ。」

「うれしい？」

「あぁ。俺の名を呼んでくれるともっとうれしい」

「名前？」

「うん」

「・・・カール」

「うん」

「カール」

「うん」

「カール」

「うん」

「もっと？」

「もっと」

「カール・・・・ん・・」

しまった。

口をふさいだら、声が聞けないじゃないか。

でもこのやわらかな感触も捨てがたい。

「カール・・・カール・・・・」

口づけの合間に、ルゥは律儀に名前を呼び続けてくれる。

「ルゥ・・・。君の本当の名前も教えて？」

「ん・・・・」

拾った当初、瞳の色からルビーと呼ぼうとしたら、抗った。

仕方なくルゥとしたが、たぶん似ているけれど違う名前がある。

「なんていうの？」

「・・・ルチノー・・・」

「ルチノー。きれいな名だ」

確か、どこかの言語で“光輝く”という意味を持つ。
窓から差し込む春の陽の下、白銀の髪に彩られた彼女はきらきらと輝いて見えた。

「ありがとう」

名前の意味を知ってか知らずか、微笑むルゥ。いや、ルチノー。
その微笑みにつられて、また口づけた。

「・・・なんでキスするの？」

「君が、好きだから」

するりと言葉が出た。

「好き？」

「あぁ」

「こんな見た目でもいいの？」

こんな？
人型のことだろうか。むしろ大歓迎だ。

「もちろん」

「本当に？」

「本当に」

ふぅっと彼女の身体から力が抜けた。
俺に寄りかかって、身を預けてくる。

「ルゥ、いや、ルチノー。泣いてるのか？」

わずかに肩が震えている。

「ルゥでいい。カールにはルゥって呼んでほしい。カールがつけてくれた名前だから」

「そうか？」

顔を上げたルゥの瞳は、涙でぬれていた。
きめ細かな肌を傷つけないように、そっと指でぬぐってやる。

「この姿を見られたら、カールに嫌われるって思ってた。猫じゃなきゃここに置いてもらえないって」

「なぜ？」

そんな風に思っていたのか。
ごまかそうとしていたわけではなかったのだ。

「だって、気持ち悪いでしょう？　髪はこんなだし、目も血みたいな色」

「気持ちが悪いなんてとんでもない。俺はいつも言ってるだろう？
真っ白な体も、真紅（ルビー）の瞳もきれいだと」

「でもそれは猫だから・・・」

「猫じゃなくても、ルゥはきれいだ。この髪も・・・」

長くまっすぐな髪を一房とって口づける。

「瞳も・・・ここも、ここも・・・」

まぶたに、そして頬に、つないだ指先に、次々と口づけていった。

「ん・・・くすくす・・・。カール、くすぐったいよ」

調子に乗って首筋に顔をうずめたら、身をよじって避けられた。
惜しい。

「私、ここにいていいの？」

「あぁ。俺の方からも頼む。ルゥ、ずっと俺のそばにいてくれ」

「・・・はい・・・・」

極上の笑顔とともに、首にまわされる細い腕。
そっと抱きしめて、想いが通じてから初めての口づけを交わした。

「ルゥ・・・」

「はい」

見つめれば、幸せそうに見つめ返してくるルゥ。
繰り返す口づけは、唇を合わせるだけのもの。

・・・舌を入れたら驚くだろうか。

昨夜は熱で朦朧としていたはずだから、きっと覚えていない。
どう多く見積もっても二十歳（ハタチ）には届かなそうなルゥ。
下手したら１５・６に見える。こういった経験はないだろう。
ルゥを抱き上げ、理性を総動員して寝台に寝かせた。

「カール？」

「熱が下がったばかりだからな。もう少し寝てろ」

「でも・・・」

ルゥが俺の服の裾をつかむ。
あああ、かわいい。
かわい過ぎるからやめてくれ。

「大丈夫。そばにいるから。いい子にしてたら後でごほうびをやろう」

「ごほうび？　何？」

手をひっこめながら、目を輝かせる。
幼な子のような反応に、心が温かくなる。

「何かはあとでのお楽しみだ。目を閉じて。眠れ」

「眠くない」

「眠ったほうが早く治るぞ」

「んんん。頭、撫でてくれる？」

ねだられた通りに撫でてやれば、満足そうに目を閉じた。
尻尾があれば、大きく左右に振っていたことだろう。
前脚を交互にふみふみしたかもしれない。
うーむ、猫の姿も好きだ。
結局ルゥならどちらでもいいんだな、俺は。

しばらく撫でていたら、すぅすぅと寝息をたて始めた。
熱のせいで体力が落ちていたのだろう。

さて、ごほうび。何がいいだろう。ルゥが喜びそうなもの。
眠るルゥを眺めながら、俺は幸せな悩みに浸った。

8　幸せの涙

＊＊＊＊＊

いい匂い。
くぅとお腹が鳴って目が覚めた。
枕元には湯気をたてるチーズリゾット。

「起きたか」

水差しを片手に、カールが扉を開ける。
その姿を見ただけで、じんわりと涙が浮かんだ。

「ルゥ！？　どこか痛むのか？」

水差しを置いて、慌てて近付いて来るカール。

「ううん、大丈夫。うれしくて・・・幸せで、涙がでちゃうの」

おでこに手を当てていたカールは、ほっと胸をなでおろした。

「驚かすなよ。
腹具合が悪いわけじゃなさそうだから、好きなもののほうがいいかと思ったが、食べられそうか？」

カールがリゾットのお皿とスプーンを手にする。
長細いお米（カルナローリ）が、チーズとからんでとってもおいしそう。

「うん、ありがとう」

体を起こしてお皿を受け取ろうとしたけど、持たせてくれなかった。

「口開けて」

「えっ、もう自分で食べられるよ」

「だめだ。ほら」

スプーンをぐいぐい押し当てられて、口を開けた。
朝ごはんのときは、なんで人の姿でいいんだろうって方に気がいってたから平気だったんだけど、なんだかすごく恥ずかしい。

「うまいか？」

「うん、すごくおいしい」

ゆっくり噛んで飲み込む。
やさしい塩加減とお米の甘みが、体に染みわたる。
カールは私の返事を聞くと、嬉しくて仕方ないという風に微笑んで、二口目を口元に運んできた。

どうしても、私に「あーん」とさせたいらしい。
まったくもう、甘いんだから。

人の姿になっても変わらない、ううん、それ以上の愛情を示してく

れるカールに、感謝の気持ちでいっぱいになる。
気味悪がられて捨てられると思ったのに、こんな私をまるごと受け入れてくれた。

「また泣いてる」

「だって・・・」

まだ半分以上残っているお皿を置いて、カールが目元に滲んだ涙を舐めた。

「やっ、何・・・」

「悲しいわけじゃないとわかっていても、君の涙を見るとせつなくなる」

深い碧の瞳が細められる。
カールに辛い思いをさせるのは嫌だったから、ぐっと力を入れて涙を我慢した。

「ふっ、そんなに無理しなくてもいい。泣くなとは言わないさ。
そのかわり、泣くときは俺のところで泣いてくれ。他のやつの前とか一人で泣くとかはするなよ」

んん？
私が泣いているのを見るのは嫌だけど、他の人の前や一人で泣くのはもっと嫌なの？
変なの。

両の目の涙を舐めとったカールは、そのままキスをしてきた。

朝からもう何回しただろう。
あいさつには十分だと思うんだけど。
そう言ったら、

「あー・・・あいさつ。あいさつね」

カールの目が泳いだ。

「違うの？」

「違わない。あいさつって何回してもいいだろう？　俺はルゥが好きだから、何回だってしたいんだ」

「えっ、そ、そう・・・」

好きと言われて胸が高鳴る。
勘違いしちゃだめ。
カールの好きは、猫が好きとかチーズが好きとかの好きなんだから。
この姿でもいいって言ってくれただけで、満足しなきゃ。
でもあいさつってわかってても、口にキスされると変な気分になる。

「残り、自分で食べるか？」

「うん」

ようやく渡されたお皿にほっとする。
カールの側にいたいけど、カールが側にいるとどきどきするの。

「顔が赤いな。また熱が出てきたか？」

大きな手が額に当てられる。
カールに触れられてると思うだけで、さらに頬が熱くなる。
私、どうしちゃったの？

「ちょっと待ってろ。薬湯を作ってくるからな」

真っ赤になった私を見て、カールは台所に行ってしまった。
ごめんね、具合が悪いわけじゃないんだけど・・・。

蜂蜜入りの薬湯を飲んで、午後もたっぷり寝たら元気になった。
今日ってもしかして、カールにお仕事休ませちゃった？
うわぁ、どうしよう。

「たまにはいいさ。1日や2日俺がいなくても、たいして困るわけじゃない。
いや、ずっといなくたって・・・」

そういえば、カールの妹さんが王都から手紙をもってきたんだった。
ミレイユさん。
元気な女の人だったなぁ。
カールの妹だけあって、すごく美人だった。
カールが辺境に異動してきたのってなんでなんだろう。
ミレイユさんは女性関係がなんとかって言ってた。
カール、モテそうだもんね・・・。

「一日よく寝たからな。ごほうびだぞ」

夕食のあと、カールが出してくれたのは”アイスクリーム”。
初めて食べた！　甘くて、冷たくて、なんておいしいの！

喜んで食べてたら、「味見してなかった」と言って唇を舐められた。
言えば一口くらいあげたのに。

「カールも食べる？」

「俺はルゥが食べ・・・いや、なんでもない」

おやすみのキスは、やけに長かった。
2人で寝ると狭いかなと思ったので、私は猫になって丸まった。
カールは人型で大丈夫と言ったけど、猫になった私を見て全身を撫でまわした。
やっぱり猫の方が好きなのかな。
猫の方が顔が赤くなってもわからないから、もうしばらく猫の姿でいようかな。

8　幸せの涙（後書き）

お月様の「白猫の恋わずらい～月光編～」に”アイスクリーム”投稿しました。

9　新婚さんいらっしゃい？

＊＊＊＊＊

朝起きたら、ルゥはすっかり元気になっていた。
よかった。
猫のルゥにおはようのキスをして、人型になってくれないかと頼む。
変化してから、もう一度おはようのキスをした。
頬を染める姿が愛おしい・・・が、素肌の感触に悩まされる。
いかん、朝から何を考えているんだ。

「君の服を用意しないとな」

「あー・・・実は、あるの」

ルゥに頼まれて、居間に置いてあったクッションを持ってくる。
ボタンで留められた口を開けると、中から女物の服がでてきた。

「エメさんがくれたの」

袖なしのワンピース。
以前見かけた服は、そんなところに入っていたのか。
あの女魔術士め。
もう一つのクッションも含め、数着あるらしい。
この村で女物の服を求めるのは難しそうだから（今度こそ何を言われるかわからない）、正直、助かった。
毎日俺のシャツを着られたら、貧血になりそうだ。

ルゥが身支度を整えている間に、朝食を作る。
食卓に向かい合って座り、同じものを食べる。
そんなささやかなことが嬉しい。

「あのね、カール。お夕飯、私が作ってもいい？」

それは、人型のルゥが、夕飯を作って俺の帰りを待っていてくれるということか。
嬉しい。嬉し過ぎる・・・！

「あの、あの、もしよければ、なんだけど。そんなにお料理に自信があるわけじゃないんだけど・・・」

喜びのあまり声もでない俺をどう思ったのか、だんだんとうつむいていくルゥ。

「いや、嬉しい。楽しみにしてる」

そういうと、ぱっと顔をあげて花のように微笑んだ。
“花のように”・・・。
くっ・・・俺にそんな表現ができるようになるとは・・・！

家の片づけもしてくれるというルゥに、家からは出ないこと、カーテンは閉め切っておくことを約束させる。

「あ・・・。こんな私、他の人に見られたら恥ずかしいもんね」

「そうじゃない。なんと言えばいいんだ？　見られたくないのはそうなんだが、理由が違う」

「髪や目の色が気持ち悪いからでしょう？　不吉な色だから・・・」

「君の髪も瞳もきれいだよ。そうじゃない。俺以外の、誰にも君を見せたくないんだ」

わかったのかどうか、ルゥはとりあえずこくんと頷いた。
彼女は人型の自分の容姿に、かなり劣等感があるらしい。
俺は、人目について余計な虫がつくほうを心配しているのだが。

いってらっしゃいのキスは、彼女は背伸びをしながらで、俺は身をかがめて。
どこからどうみても新婚の風景に、気恥ずかしくも嬉しくて仕方ない。
ルゥは俺とのキスをあいさつだと思っているようなので、そこは存分に利用させてもらう。
しかし、ということは俺が「好きだ」と言ったのは、どう思っているのだろう。
まさか猫が好きとか肉が好きとかと同じように考えているのではないだろうな・・・。

「隊長、ルゥちゃん元気になったんすね」

「あぁ。昨日は急に休んで迷惑をかけたな」

「いえいえ、大丈夫っすよ。柵の補強と井戸蓋の点検・補修の報告がこれです。
コレット爺さんの孫娘が結婚するんで、広場を使うって連絡がき

てます。
　会場の設営は有志でやるようですけど、できれば手伝ってほしいって」
「わかった。人選はまかせる。あとは？」
「そんなところっすかね。あ、ここに署名（サイン）ください」
ギュンターが差し出した書類にサインをする。
元々こいつが隊長だったのだから、俺などいなくても大丈夫だ。
やはりルゥを連れて王都に帰るか。
窓の外を見ると、隊員たちが行進の訓練をしていた。
「あれは？」
「やつらが自主的に始めたんすよ。基本教練の写本作りをしたでしょ？
　あれがよかったみたいで、一から順番にやってみようって。
　隊長に教わったこともたくさんあるから、結構できるのがうれしいみたいで、昨日からやってます」
「そうか」
てんでバラバラだった彼らだが、ずいぶん警備隊らしくなってきた。
「入隊希望もちらほらありますよ。この間までは義務で仕方なく入ってた感じですが。
　かっこいいって言われるようになったからでしょうね。夏の募集が楽しみです」

辺境の警備隊のほとんどは現地の徴兵だ。
ここでは、１８歳から４０歳までに3～5年間入隊する義務を課している。

「これもカール隊長のおかげっす」

「何を急におだててるんだ」

「ははっ、心はもう王都にあるような気がしたんで。最後に決めるのは隊長っすけど、俺らはずっと居てほしいんですからね」

「・・・ありがとう」

うっかり涙腺がゆるみそうになって、再び窓の外に視線を移した。

「足の上げ方が甘いな。顎が出てるから姿勢が悪いんだ」

「直接指導してやってください。喜びますよ」

その日一日訓練に費やし、くたびれて帰ったらルゥが出迎えてくれた。
家中（いえじゅう）にいい匂いが立ち込めている。

「おかえりなさい」

「ただいま」

キスをしてからぎゅっと抱きしめた。

腕の中にすっぽりとおさまってしまう、かわいいルゥ。

「お風呂も用意したの。先に入る？」

こ、これは、以前結婚した同僚が言っていた、「お風呂にする？ごはんにする？　それとも・・・」のことか！？

「カ、カール？　大丈夫！？」

しゃがみこんで急に鼻と口元を押さえた俺を心配するルゥ。

だだだ、大丈夫だ。ただの鼻血だから・・・。

「お風呂はあとのほうがいいねっ。ごはんの用意するから、座ってて」

焼きたての丸いパンと、細かく刻んだ野菜のスープ。

カリカリに焼いた燻製肉（ベーコン）に、ゆでたじゃがいもが添えてある。

「材料、適当に使っちゃったけど平気？」

「あぁ。足りないものがあったら言ってくれ。兵舎に行商人が来るんだ」

「乾燥させた香草（ハーブ）が何種類かあるといいな。今日はお庭にあったの使っちゃった。

あ、ちゃんと猫の姿でとりにいったよ！」

庭にそんなものが生えていたのか。前の住人が植えていたのだろうか。

どおりで香りが違う。

料理に自信はないと言っていたルゥの言葉は謙遜で、どこで覚えたのかヨシばあさんよりずっとうまかった。
食材は同じなのに、味付けが上品で、王都の料理屋で食べるようだ。

「わかった。このパンもうまいな。何か入ってる？」

「えっとね、刻んだバジルを練り込んでみたの。バターも多め。・・・贅沢だった？」

「いや、本当にうまいと思って。ルゥは料理が上手だな。これから毎日楽しみだよ」

「よかったぁ。ちょっとどきどきしてたの。カールの口に合わなかったらどうしようって」

俺がいない間に、俺の事を考えて料理をしてくれていた。
そのことがより一層、おいしく感じさせる。

「風呂、どうする？　一緒に入る？」

「え・・・っ　も、もちろん猫の姿でだよね？」

「俺はどっちでもいいぞ」

さっき寝室で鼻血を止めるついでにヌいておいたから、たぶん大丈夫。

「ね、猫でお願いします。カールに洗ってもらうのは好きなの。いい？」

上目使いで様子を伺ってこられて、今すぐにでも押し倒したくなる。
いかん。全然大丈夫じゃない。

「あぁ。じゃぁ食休みしたら一緒に入ろう」

「うん」

猫のルゥを、いままでよりさらに丁寧に洗ってやった。

「あぁん、カール、そこ気持ちいい」

「ここか？　こっちは？」

「そこも、もっと・・・」

猫でもしゃべれるとは驚きだ。
膝の上で洗ってやるのはいいのだが、足にはさんで隠した箇所が辛い。
よくすすいで、一緒に湯船につかる。
俺の肩につかまったルゥは、とろんとした目をして気持ちよさそうに尻尾を泳がせていた。

「眠そうだな。先にあがるか？」

「んなー・・・」

うーむ、鳴くのと話すのとはどう使い分けているのだろう。
どちらもかわいいからいいか。

ずるりと落ちそうになったルゥを、拭きあげて浴室の外に出してやる。
よろよろと暖炉の前まで行くと、ぽてっと横になったのが見えた。
春とはいえ朝晩は冷えるので、火を残しておいてよかった。
今日一日人の姿でがんばって、疲れたのかもしれない。
猫から人になるのは、体に負担がかかるのだろうか。

風呂から上がり、ルゥを寝室に運ぶ。
早く帰ってくるために持ち帰ることになった仕事を片づけていたら、結構遅い時間になってしまった。
ルゥとの時間を大切にしようと思うと、仕事との兼ね合いが難しいな。
こんな悩み、遊びで女と付き合っていた頃は思いもつかなかった。
他のやつらはどうしているんだろう。

明かりを消し、丸くなって眠るルゥの隣に滑り込む。

「おやすみ、ルゥ」

人型でキスができなかったのが残念だった。

10　告白

＊＊＊＊＊

私ったら、いつのまに寝てしまったんだろう。
気付けば朝で、カールの腕の中にいた。
今日は朝ごはんを作ろうと思っていたから、カールを起こさないようにそっと寝台から出る。
人に戻って着替えて、朝食の準備にとりかかった。

昨日作っておいたパン生地に、刻んだ燻製肉（ベーコン）を混ぜて焼く。
卵は、カールは半熟、私は固焼き。
昨夜のスープを温めて、お茶用のお湯を火にかけてカールを起こしにいった。

「おはよう、カール」

上掛けを頭までかぶって、丸くなっている。
膝を曲げないと寝台からはみだしてしまうので、いつもこの姿勢だ。

「カール、朝だよ」

比較的寝起きのいいカールが、今日は肩をゆすっても起きない。
昨夜遅かったのかな。

「カール？」

上掛けを、顔のところだけめくってみた。
やっぱりぐっすり眠っている。

「カール」

つんつん。頬をつついてみる。ちょっと髭が伸びている。

「カール、起きて」

つんつんつん。まだ起きない。
猫ならば前脚でたしたし！っと叩くところなんだけど、人の姿だから、指で鼻をつまんでみた。

「ん、んん・・」

あ、苦しそう。
孤児院で、小さい子がなかなか起きないときにやったんだよねぇ。
これでも起きないときは・・・あ、忘れてた。お湯！　火にかけてたんだ！

慌てて台所に戻ろうとしたとき、ぐいっと腕をひっぱられた。

「きゃぁ！」

そのまま寝具の中に引きずり込まれる。

「カール、だめっ、お湯が・・・んんっ」

唇をふさがれた。
さらに足や背中を撫でられる。

「ちょっ、カール・・・んっ・・・今、私、猫じゃな・・・」

腕をつっぱろうとするけど、カールの力にかなうはずもない。
息継ぎをするのが精一杯で、またキスをされる。

「あっ・・・ふぅっ・・・。え!?」

カール、やっ、そこ、胸・・・・!

「カール!!　起きて!!!!!!」

耳元で叫び、腕が緩んだ隙に台所に逃げた。
沸騰したお湯はもうなくなりかけていて、危うくお鍋をだめにするところだった。
水を足して沸かし直す。
お茶を淹れていると、寝室でごそごそと音がした。
ようやく起きたみたい。

びっくりした。あんなところまで触るなんて。
カール、寝ぼけすぎだよ、もうっ
猫ならば体中撫でられても平気なんだけど、人の姿では恥ずかしい。
思い出すだけで胸がどきどきして、カールに触れられたところがじんじんと熱い。
毎朝これじゃ、心臓が持たない。カールを起こすときは、気をつけなくちゃ。

「おはよう、ルゥ」

「お、おはよう」

起きてきたカールは、ビシっと隊服に着替えていて、先ほどまでの寝ぼけぶりは微塵も感じられない。
食卓に片手をかけて、かがみこんで私におはようのキスをする。

「うまそうだな。朝食、作ってくれたんだ」

「うん・・・・」

どうしよう。カールの顔がまともに見られない。
かあぁっと熱くなった頬を、両手で隠す。

「ルゥ？　どうした？」

「な、なんでもない。スープ、冷めちゃったかな。温める？」

「いや、もう行かないとならないから、冷めてるくらいでちょうどいい。
昨日遅かったから、寝すぎたな」

やっぱり昨夜遅かったんだ。仕事、あったのかな。

いってらっしゃいのキスをして、カールを見送る。
お夕飯はどうしようかな。
カールってお給料どれくらいもらってるんだろう。
猫と人の食費じゃ違うだろうから、ごはんのときは私は猫のほうがいいかな。
あんまりお金かけさせちゃ悪いし・・・。

夕食のとき、勇気を出して聞いてみたら、苦笑いされた。

「そんなに頼りないか？　左遷（とば）されたとはいえ、隊長職だぞ。たぶん同世代の倍はもらっている。ルゥがどれだけ食べたとしても、ありあまるさ」

そ、そうだったんだ。

孤児院育ちでいつも節約していた私には、倍といわれてもわからないけど、お金の心配はいらなかったみたい。

「貯金は、こっちに来てからの分しかないな。やけを起こして遣ってきてしまったから・・・。

それでも1年は遊んで暮らせるくらいはある。何か欲しいものはあるか？」

「ううん。今日香草は買ってきてくれたし、何もかも、私には十分すぎるくらい。

カールの側に置いてくれれば、他には何もいらないの」

「ルゥ・・・」

カールが手を伸ばして頭を撫でてくれる。

猫のように頬をすり寄せれば、顎をとられて口づけられた。

カールは何かというとキスをしてくるから、だんだん何のキスか考えるのをやめてしまった。

ただ、自然に、そうしたいときにすればいいのかなと思う。

お風呂からあがり、ちろちろと弱く焚かれた暖炉の前で、お茶を飲む。
カールは先ほどから、じっと何かを考え込んでいる。
どうしたんだろう。
空になったカップを片づけて暖炉の前に戻ると、カールの膝の上に横抱きに乗せられた。

「お、重くない？」

「ははっ、ルゥなんて鳥の羽根くらいの重さしか感じないさ」

「そうかな」

いくらなんでもそんなことないと思うんだけど。
でも、眉間にしわをよせていたカールが笑ってくれたことでほっとする。

「ルゥ、あのな・・・」

「うん？」

「俺と一緒に王都に行かないか」

「王都？」

「あぁ。ミレイユが指示書を持ってきただろう。ブルクハルト国王の親衛隊（ガーディアン）員として声が掛かった。
近衛騎士が、目立つ対外的な護衛を司るのに対して、親衛隊（ガーディアン）は普段は普通の騎士団として王城の警護や訓練をしているんだが、有事には国王の勅命を受けて独立した動きをするんだ。

よほど信頼のおける者でないと就けない仕事だから、とても名誉なんだ。
一度左遷された俺なんかがなれるもんじゃないんだけどな」

「なんだかすごいね。私なんかが一緒に行ってもいいの？」

「ルゥに、一緒にいてほしい。親衛隊（ガーディアン）員は王城の周りに家を一軒もらえる。
そこに一緒に住んでくれないか。俺の・・・妻として」

「えっ・・・・」

つ、妻!?
妻って、妻って、あの妻!?
えええええ!!!!??!?

11　月光

＊＊＊＊＊

突然の告白（プロポーズ）に、ルゥは驚いて固まってしまった。
そりゃそうだろう。
俺だって驚いている。
でもこの結論しかなかったんだ。

俺はルゥのことをほとんど知らない。
どうして人になれるのか。俺に出会う前はどんな生活をしていたのか。
あの料理の腕前を考えると、拾った時に子猫だったからといって、ずっと子猫だったわけではないのかもしれない。
俺の前にも誰かに飼われていて、そいつのために料理を作っていたのかもしれない。
今は俺の腕の中におさまっている白い肢体を、他にも知っている奴がいるのかもしれない。
それを思うと、胸が焼けつくような嫉妬にかられる。

それでも、猫だろうが人だろうが一緒にいたい気持ちに変わりはない。
昨日今日とルゥが待つ家に帰ってきて、この上ない幸福な気持ちに満たされた。
こんな幸せな気持ちは、いままで知らなかった。

もっと一緒にいたい。
ずっと一緒にいたい。
そのためにはどうすればいいか。

「ルゥ、おい、大丈夫か」

呆然とするルゥの顔の前で、ひらひらと手を振ってみる。
目線は動くのだが、視線が定まらない。

「人型になるのは大変なのか？　制限時間とかあるのか？」

とりあえず、気になっていたことを聞く。
ルゥはふるふると首を振る。そうか、制限時間はないのか。
辺境（ここ）で暮らすなら猫のほうがいいだろう。
しかしそれでは俺が満足できない。
人型のルゥの身体を知ってしまったから。
今朝も起こしに来てくれたのがうれしくて、ついいたずらしてしまった。
調子に乗って胸を触ったら、逃げられてしまったが。

頻繁に変化していたら、いくらのんきな村人や隊員でも、いつかはばれるだろう。
そのときルゥにつらい思いはさせたくない。
かといって、人として今からここで暮らすのは無理がある。
猫のルゥはみんなに会っているし、良くも悪くも世話好きの村人たちに囲まれたときに、あまり社交的には見えないルゥがごまかしきれるとは思えない。
やはり猫でも人でもあるとわかったときに、ルゥがとても気にしている“気味悪がられる”ことでもあったら、立ち直れないかもしれ

ない。

そう考えて、それなら王都に行ってしまおうと思った。
王都なら様々な人種がおり、様々な趣味嗜好の者がいる。
ずっと人でいられるなら、辺境で出会った女性として紹介すれば、
（多少俺の幼女趣味をからかわれるとしても、あぁ、自覚はあるさ。
だからなんだ？）わりと平気なんじゃないかと思う。

昨夜、眠るルゥを眺めながら、共に在る未来を考えたら王都に行くのが一番いいと思った。
まぁ、全部投げ打って誰もいない山奥で2人で暮らすということもできるが、俺だってルゥに珍しいものを見せてやったり、2人でうまいものを食ったり、たまにはルゥを着飾って誰かに自慢したりしたい。

騎士団の宿舎では無理だった。
近衛も、身辺の調査が厳しいので素性のわからないルゥを連れ歩くのは厳しい。
しかし国王が俺に送ってきた書類には親衛隊（ガーディアン）とある。
親衛隊員の資格は国王の信頼のみ。隊員本人の氏素性すら関係ない。
その信頼に応えられるだけの力量があればいいのだ。
今の自分にそれだけの力量があるのかはわからないが、ルゥのためなら何でもしてみせる。

まだ動揺しているルゥの髪を梳く。
指の間をさらりと流れ落ちる髪は、銀糸のように細く輝き美しい。
すべらかな二の腕を撫で、手を取って指に口づける。
人差し指を口に含んでちゅっと吸うと、ぴくりとルゥが反応した。

「あの、カール？」

「ん？」

「妻って、あの、奥さんだよね？」

「奥さんだな」

「私、を奥さんにするの？」

「そうだ」

「カールの奥さんが、私？」

「そう言っている」

「ええと、なんで？」

なんだか一生懸命考えているらしいルゥは、俺の手が太ももに伸びていることにも気づかないようだ。
うーむ、すばらしい撫で心地。

「ずっと一緒にいたいから。ルゥは違うのか？　さっきそばに置いてと言ってなかったか？」

「そ、そうだけど。私もずっとカールのそばにいたいけど・・・」

「だったら、結婚しよう。急だから指輪も何もなくて悪いが、王都に行ったら揃いのものを求めるから」

「け、結婚・・・」

「嫌なのか？」

「嫌じゃないけど、私、こんな見た目で・・・」

「またそれを言う。ルゥはきれいだ。他の誰に何を言われたのか知らないが、俺がそう言うんだからいいんだ」

「そ、そう？　でもカール、私のこと何も知らないでしょう・・・？」

う。それを言われると困る。
ワンピースの裾をたくし上げようとしていた手が止まる。

「これから知って行く。大切なのは、君と一緒にいたいって気持ちじゃないのか？」

「そうだけど・・・。あの、じゃぁ、私のこと、好・・き・・・なの、かな？」

なぜいまさらそれを聞く。
やっぱりルゥは俺の「好き」をきちんと理解していなかったな。

「好きだ。猫でも人でも、ルチノー、君を愛してる。ずっとそばにいてほしい」

「え、えええええ・・・・・」

「なんでそこで困るんだ？　嫌か？　だめか？」

「う、ううん・・・・・」

ぽろぽろぽろ。

とうとうルゥは泣き出してしまった。

この反応は予想外だった。

「ルゥ。俺の気持ちは迷惑だったか」

「め、めいわく・・」

「わかった。もういわない。王都の話も・・・忘れてくれ」

「あ、や、ちが・・・うぅ・・・」

次から次へと涙があふれてくる。

そんなに泣いたら、瞳が溶けてしまう。

眦（まなじり）に口づけて、涙をぬぐう。

振り払う気配はない。

「カール、カール、ごめんなさい。私も好き。カールが好き。場所なんて関係ない。人でも猫でもいいからそばに置いて。ずっとそばにいさせてください・・・・！」

「ルゥ・・・！」

だめかと思った。

全て俺の勘違いだったかと。

俺の「好き」とルゥの「好き」は違ったのかと。

俺の胸に、顔を押し付けて泣きじゃくるルゥを抱きしめる。

頭を撫で、背中を撫でて、落ち着くのを待つ。

「なんで泣くの？」

「わかんな・・・うっ、ひぃっく・・・止まらな・・・」

「俺の奥さんになってくれる？」

「なる。こんな私でいいならっ・・・」

「君がいい。あぁ、うれしいな。俺も泣けてきた」

2人で泣きながら、何度も口づけた。
嗚咽(おえつ)をもらすルゥは、自然と口が半開きになり、俺の舌をすんなりと受け入れた。

「ん、うぅ・・・んんん・・・っ」

「ルゥ・・・」

「ん・・はぁ・・・カール・・・」

涙で潤んだ瞳で俺を見上げてくる。
これは、いいか？　いいんだろうか。
ルゥを抱き上げて寝室に運ぶ。

霞みがかった春の月が、淡い光で室内を照らす。
寝台に横たわったルゥは、広がる白銀の髪に彩られ、どこか神秘的な美しさを帯びていた。
指をからめ、口づける。

こつん、と双子の護り石が触れ合った。

「触っても・・・？」

今朝方、寝ぼけたふりで触れた身体。
ルゥはこの先を知ってか知らずか、こくんと小さくうなずいた。

どこまでも優しく、ルゥを壊さないように触れる。
のびやかな腕。細い腰。
きめ細やかな白い肌が、月光をうけて輝く。

「ルゥ・・・・」

ささやけば、確かに俺を見つめて、応えてくれた。
肩に手をかけ、服を脱がす。
衣擦れの音が、やけに大きく響いた。

その夜―

俺とルゥは、ひとつになった。

11　月光（後書き）

詳細はお月様で（笑）。

12　後朝

翌朝。
人型のまま俺の腕の中で眠るルゥ。
あふれる喜びと愛しさで、何度もキスをする。

「んん・・・カール、おはよう」

「おはよう」

照れながらあいさつをする姿がかわいい。
あらためておはようのキスをして、2人でくすくすと笑い合っていると、おもむろにルゥが口を開いた。

「あのね、私、猫が人になれるんじゃないの。元々人で、エメさんに猫になれるようにしてもらったのよ？」

「えっ」

ね、猫が仮の姿だったのか！

「孤児院育ちだから、身よりもないの。私には本当にカールだけ・・・。
いい奥さんになれるようにがんばるね」

それこそ俺には好都合だった。

猫になった経緯は後で聞くとしても、ルゥに両親がいるとしたら、３０男に娘をとられるなんて一発殴られるくらいではすまないかもと思っていた。
“俺だけ”という言葉も嬉しくて仕方ない。

「俺も、いい旦那さんになれるよう努力するよ。これからもよろしくな、ルゥ」

「はい、よろしくお願いします」

はんなりと微笑むルゥは、昨日よりずっときれいになった気がする。
それが、俺のせいだと思うのは自惚れだろうか。

「・・・あの、カール、何か、当たるんだけど・・・」

「ルゥがかわいいから・・・。体、きつくないか？　大丈夫ならもう一回・・・」

「んんっ、だって、カール、お仕事・・・あっ」

兵舎には午後から行った。
休んでしまおうかとも思ったが、王都に戻ることにしたからには仕事は山ほどある。

「またルゥちゃん具合悪いんすか？」

「まぁな。この間ほどじゃないが・・・寝かせてきた」

「はいはい。午前中はいつも通りでしたよ。午後の予定は・・・・」

ギュンターの話を聞きながらも、つい頭は昨夜のルゥを思い浮かべてしまう。

「・・・です。聞いてました？」

「あ？　あぁ。２週間後にコル爺さんの結婚式だろ」

「“コレット爺さんの孫娘”の結婚式ですってば。爺さんが結婚するわけないでしょ。
まったくもう。そんなに猫（ルゥ）が心配なら、今日はもう帰ってもいいっすよ？」

「いや、そうもいかん。ギュンター、おまえには苦労をかけるが、王都に戻ることにした」

「・・・そうですか。いつ？」

「ここから王都までにかかる日数と、向こうでの準備を考えると・・・ちょうどその結婚式の後だな。
式が終わったら発つよ」

「わかりました。隊員たちには俺から言っておきます。
今月の報告書、まだ郵便屋が来てないんで出してなかったんすけど、一言添えますか？」

「そうだな。おまえが補佐官でよかった。
前隊長としての評判と補佐官としての仕事ぶりも追加しておく。
俺の後任はおまえだろうから」

「カール隊長に比べたら、俺なんてガキ大将程度（レベル）だったと思い知らされたんすけどね。
隊長が来てからいままでの流れを大事にしたいんで、後任に推してもらえると助かります。
あと2週間か・・・忙しくなりますね」

「あぁ、すまんな」

「いえいえ。ただし明るいうちに家に帰れるとは思わないでくださいよ」

「う・・・そうか・・・。今日も？」

愛を交わしたばかりの、愛しい愛しいルゥが待っているんだが。

「今日もだめっす。猫のために休むのも、当分だめです」

「うぅ・・・」

自分で決めたこととはいえ、帰れないのは辛い。
ルゥに会いたい。
早く帰って、やわらかな身体を抱きしめたい。

「とりあえず報告書の追記ですかね。引継ぎ書の作成もあります。
引継ぎ書は・・・まぁ、家でもできるかもしれませんが。ルゥちゃん、具合悪いんすよね」

「いいよ。兵舎（ここ）でやっていく。書き方教えてくれ」

「はい。さくさく終わらせて、早く帰れるようにがんばってください」

ギュンターが前回俺のために書いた引継ぎ書を参考にしながら、これまでのことをまとめていく。
1年に満たないといっても、それなりに書くことはあるもんだ。
特にこれからの課題については、ギュンターや隊員たちの役に立つよう細かく記していく。

「隊長、今日はそろそろいいんじゃないすか。
一日で仕上がるもんでもないでしょ」

夕方、ギュンターが明かりを持ってきた。
手元が見づらくなってきたと感じていたところだった。
気が利く男だ。

「隊の奴らには話しましたよ。結婚式の後、壮行会がしたいそうです。
許可をいただけますか？」

「許可ったって・・・。悪いな。頼む」

「彼らのお礼の気持ちですからね。盛大にやりますよ。覚悟しておいてください」

「ははっ、覚悟ってなんだよ」

「牛とか縄とか聞こえたから、騎牛（ロデオ）とか」

「見るだけか？　まさかやらされるんじゃ」

「どうでしょうね」

「お、おいおい」

盛り上げようという気持ちは嬉しいが、出立前にけがさせられたんじゃたまらないぞ。

ギュンターはにやにやと笑っている。

他人事（ひとごと）だと思って、こいつは・・・。

そんな話をしていたら、帰りがすっかり遅くなってしまった。

家路につくと、カーテンの隙間から温かな光がもれていた。

「ただいま、ルゥ」

「おかえりなさい」

今日も食欲をそそるいい匂いがする。

風呂ももう入れるようだ。

でも俺が欲しいのは・・・。

「んんっ・・・あ、ふ・・・・。

カール、これただいまのキスじゃないでしょっ」

べりっとはがされた。

下心を読まれたか。

「夕飯の後ならいいか？」

「え・・・」

途端に顔を赤らめるルゥ。

「それとも一緒に風呂に入ってくれるか？　もちろん人の姿（このまま）で」

「え、えええっ！？」

身を引こうとしたルゥを離さず、真っ赤になった耳を甘噛みする。

「じゃぁ夕飯のあと、一緒に風呂に入ろう。それまでおあずけな」

耳元でささやいてから、たっぷりと口づけた。

自分で立っていられなくなったルゥを抱えて、食卓についた。

12　後朝（後書き）

サブタイトル、”きぬぎぬ”です。
ルビがふれませんでした。

1　まどろみ

＊＊＊＊＊

それから一週間。
穏やかな日々が続いている。

「いってらっしゃい」

「あぁ。今日も遅くなる」

「はい」

引継ぎや訓練の仕上げをしているカールは、とっても忙しそう。
私はと言えば、家事と荷造りを頼まれた。
荷物と言ってもそんなにないんだけど、カールの役に立ちたいからがんばる。

一通り今日の分の用事をすませ、夕飯の下ごしらえをしてから、猫になった。
窓辺で丸まって、お昼寝の態勢だ。
春の日だまりはぽかぽかと温かく、すぐに眠りに誘われた。

『おいしかった！　これはあなたが作ったの？　上手ね！』

あ、これはエメさんに初めて会ったときの夢だ。

あの日エメさんに会わなかったら、今の私はなかったなぁ。

『あとはおまえだけだね・・・』

孤児院の閉鎖で、売れ残ってしまった私をずっと心配していた院長先生。
最期に安心させてあげられてよかった。

『うっわ、気持ち悪ぃ。赤目で睨むんじゃねぇよ。呪われるだろ』

アヒム・・・。
そういえば院長先生の葬儀で見かけた気がする。
会わなくてよかった。

夢はどんどん過去にさかのぼる。

『ルチノー』

『ルチノー。私の愛しい子』

思い起そうとしても、声も顔もすでに思い出すことはできない。
夢の中でだけ、おぼろげな影を結ぶ。

まぁま・・・ぱぁぱ・・・・。

＊＊＊＊＊

「隊長さん、王都に戻られるんだそうですね」

「スヴァル」

「これ、もしよかったら使ってください」

兵舎を訪れたスヴァルが持ってきたのは、猫用のバスケット。
中にやわらかそうなクッションが敷かれている。移動時にルゥが休めるようにと考えてくれたのだろう。

彼女が向けてくれる好意が、そういう種類のものかもしれないと、思わなかったわけではない。
もしルゥが普通の猫で、辺境(ここ)でずっと暮らしていくことになったら、彼女との未来もあったかもしれない。

「私からのものをルゥちゃんが使ってくれるかはわかりませんけど」

「いえいえ、前いただいたチーズも、喜んで食べてましたよ。いつも本当にありがとうございました」

そういえばルゥはスヴァルを嫌っていた。
あれは焼きもちだったのか？
だとしたら嬉しいじゃないか。今度聞いてみよう。

その後も、ヨシばあさんや村の女性陣がいろいろなものを持ってきてくれた。
どうやら結婚式の会場設営の打ち合わせにいった隊員の誰かが、俺のことを話したらしい。
嬉しいような申し訳ないような気分になる。

こんな風にしてもらうほどのことを、俺はこの村のためにしただろうか。
それをギュンターに言ったら、

「まったく隊長は真面目っすね。もらえるもんはもらっとけばいいじゃないすか」

と言われた。
それはそうなのだが・・・・。

赴任当初、この男の軽さ(ギュンター)に救われたのも確かなので、ひとまずその言に従うことにした。

「隊長が気持ちよく受け取ってくれることが、一番相手も喜びますよ。
あ、明日は休んでいいっすよ。もうだいたい目処がつきましたから」

「そうか。ありがとう」

明日は非番だったが、来る気でいた。
家のこともあるので助かる。

気持ちよく受け取ることが、相手を喜ばせる、か。
そういう考え方もあるのか。
都会の、見返りを期待した人間関係とは根本から違うのだ。
改めて村人や隊員、ギュンターの懐の深さを感じる。
以前の自分も含め、王都の者は田舎を馬鹿にする向きがあるが、大事なのは利便性や物資の豊かさではない。
心の豊かさのほうが何倍も大切だと知った。

何年後か・・・いつかまた戻って来られたらいいと思う。

2　デザート？

＊＊＊＊＊

こつん、と窓に何かが当たる音で目覚めた。
庭を見ると、スヴァルさん家（ち）の黒猫がいた。

「どうしたの、あんた」

窓を開けてひらりと外に出る。

『おまえ、引っ越すんだって？』

「まぁね。自称スヴァルの恋人のあんたとしては、恋敵（カール）がいなくなってうれしいんじゃない？」

『・・・・これやる』

ぽとりと水色の小袋が置かれた。
口を青いリボンで結んである。

『俺の宝物。元気でな』

「え・・・・」

引き留める間もなく、黒猫は身をひるがえして藪の中に消えていった。

残されたのは水色の小袋。
匂いを嗅いでみると、あの猫の匂いにまざってなんだかとってもいい匂いがした。

＊＊＊＊＊

「ただいま・・・っと、ルゥ、どうした?」
明かりはついている。
しかし、いつも出迎えてくれるルゥがいない。
「ルゥ?」
「・・・ール・・・」
家の奥から弱々しい声がした。
「ルゥ!?」
何事かと、慌てて声がした方へ向かう。
真っ暗な寝室に、ルゥはいた。
「カール・・・身体、熱い・・・なんか変・・・」
頬が紅潮し、寝台に寄りかかってぐったりとしている。

「どうした、具合が悪いのか!?」

「具合・・・？　悪くないよ・・・くすくすっ・・・」

「ル、ルゥ？」

よく見れば、ワンピースの肩がずりおち、白い肌が見えている。
髪は乱れ、目がとろんとしていた。

「おかえりぃ。カールが帰ってきて嬉しいな・・・くす・・カール、好き」

抱きついて、口づけてくる。
嬉しい・・・が、いくらなんでもおかしいだろう。

「ルゥ、本当にどうしたんだ。俺がいない間に何があった？」

「スヴァルさん家の黒猫がぁ、ふふっ、宝物くれたのよ」

「スヴァルの？　なんでスヴァルの猫が出てくるんだ？」

「これぇ、いい匂いなのぉ」

ルゥが手にした水色の袋から、つりがね型の実が転がり出た。
またたびの実だ。なるほど。

「人の姿でも影響があるのか？」

「えぇ？　なぁに？　あのね、猫になって寝てたらね、くれたの。
匂いを嗅いだらすごぉくいい気分になって・・・くす・・・く

すくす・・・。
　カール、これおもしろぉい。ふふ・・・」

隊服についている紐が揺れるのすら、可笑しいらしい。
どうやら昼間は猫でいたが、またたびに酔って人に戻ったようだ。
以前この状態になったときは、極力姿を見ないようにして耐えるしかなかった。
しかし今は違う。
頬を染めてしなだれかかってくるルゥは、まさに据え膳。

「ルゥ、夕飯は？」

「あ・・・作りかけぇ。下ごしらえはしてあるんだけど・・・くすくす・・・。
　お肉、焼くの・・・うふ・・」

よし、腹ごしらえをしたらデザートにルゥをいただこう。
そう思って身を起こそうとすると、ルゥに引き留められた。

「カール・・行っちゃいや・・・」

ぽろぽろぽろ。
今度は急に泣き出した。
笑い上戸かと思ったら、泣き上戸か！？
すすり泣くルゥの髪を撫でる。

「わかった。行かないから、泣くな」

「ん・・・カール、キスして？」

お望みのままに。
軽いキスは、次第に深くなり俺の中に火をともす。

「ルゥ・・・・。ルゥ？」

腕にかかる重さが増した。
たいして重いわけではないが、これは・・・ね、寝てる！？
俺の腕の中で満足そうに微笑むルゥは、すやすやと寝息をたてていた。

「それはないだろう・・・」

火照(ほて)ったこの身をどうしてくれる。
がっくりとうなだれて、しばらく動けなかった。
ルゥに起きる気配はない。
仕方なく寝台に寝かせ、ルゥが途中まで作っておいてくれた夕飯を仕上げて食べる。
うまい・・・が一人で食べるのはつまらないな。

3　異変

翌朝。
少し期待をしてルゥにまたたびの実を見せる。

「これ、黒猫ちゃんが宝物って言ってたの。なんでこんな実が宝物なのかな?」

手に乗せて、転がしたり匂いを嗅いだりしている。
たが、何の反応もない。
残念。非常に残念だ。

「カール、いつ帰ってきたの?　夕ごはん食べた?」

「あぁ。肉を焼けばよかったんだよな」

「そう。よくわかったね。私なんで寝ちゃったのかな・・・ごめんね」

昨夜のことは何も覚えてないらしい。

「ルゥ、今度猫になったら珍しいお茶を飲ませてやる」

「お茶?　猫じゃないとだめなの?」

「猫用だからな」

「ふぅん？　わかった。今からでもいいの？」

「今日は休みだが、片づけをしたいからな。夜かな」

「お休み！　嬉しい！　一緒にお片づけできるね。確かに猫じゃ役に立たないから、夜のお楽しみだねっ」

楽しみ。

どちらかというと俺にとっての、だが。

なぜ今ではいけないのかについては、あえて説明しないことにしよう。

「じゃ、朝ごはん作るね。スープ残ってる？」

「少しあるな」

「パスタは好き？」

「ルゥの作るものならなんでも」

椅子に腰かけ、台所に立つルゥを眺める。

長い髪を後ろで結わえ、鼻歌を歌いながら細長いトマトを刻んでいる。

朝日と、包丁の音と、ルゥ。

穏やかな時間が過ぎていく。

トマトを昨夜の残りのスープに加え、煮込む間に粉をこねはじめた。

薄く延ばして長方形に切っていく。

「それは何になるんだ？」

「ファンファッレよ。ちょうちょの形のパスタ、知らない？」

ルゥが指で中央をつまむと、見たことのあるパスタの形になった。

「あー、見たことも食べたこともある。ファンファッレというのか」

「うん。かわいいから好きなの」

ルゥの手の中で、次々と蝶が生まれていく。

その手際も見事で見ていて飽きないが、俺としては、つい項（うなじ）やら細い腰やらに目が行ってしまう。

「うまいもんだな。どこで覚えたんだ？」

ファンファッレを茹ではじめたルゥを、後ろからそっと抱く。

料理の邪魔をしないよう、撫でるのは我慢して手元をのぞきこんだ。

「私のいた孤児院は、通いの料理人さんがいたの。マリオさんっていうおじさんなんだけど、パスタ料理が得意で。

でも他のお料理も上手で、いろいろ教わったよ。

マリオさんが休みの日はみんなで交代でごはんを作ってたんだけど、私が作ることが多かったかな。お料理って楽しいよね！」

そうか、孤児院育ちと言っていたな。

ルゥの料理の腕は、仲間のためにふるわれていたわけだ。

「どのあたりの孤児院なんだ？　今もあるのか？」

「今は・・・」

楽しそうに作っていたルゥの手が止まった。
まずいことを聞いたのだろうか。

「茹であがったから、この話はまたあとにしよ？　パスタは茹でたてが一番だよ！」

ぱっと振り向いたルゥは、いつもの笑顔だった。
香草で香りをつけ、塩・胡椒で味を調えたトマトソースをかける。
もっちりとしたパスタの食感がよく合い、うまかった。
ルゥの出自はおいおい聞かせてもらおう。
俺のことだって、たいして話しているわけではないのだから。

「カール、この本も縛っちゃっていいの？」

「あぁ。この棚の本だけ避けておいてくれ。兵舎に持っていくから」

「はぁい」

1年に満たない期間でも、それなりに荷物は増えるものだ。
すぐに必要でないものは縛ったり箱に入れたりして、先に送ることにする。
家の中のことはルゥに任せて、俺は洗濯物を干す。
ガサガサッ
庭先の藪から黒猫が出てきた。

「ふにゃぁ」

「お、なんだ？　もしかしておまえが、ルゥが言ってたスヴァルの家の黒猫か？」

話しかけると、ぱたりとお愛想程度に尻尾を揺らした。

「宝物、ありがとな。喜んでたぞ」

黒猫は窓を気にしていたが、ぷるっと耳を一回振ったかと思うと、金色の目をすがめて帰って行った。

俺はあまり好かれていないようだ。

「おい、ルゥ。今、君の友達が来て・・・ルゥ？」

洗濯物を干し終え、家の中に声をかける。

応えはない。

おや？

積み上げた本の間に、白い尻尾が見える。

「ルゥ？　また、またたびの実をいじったんじゃないだろうな？」

近付くと、服の下に横たわり震えるルゥがいた。

「・・・ルゥ？」

俺の目の前で人の姿になる。

顔色は真っ青で、脂汗を浮かべていた。

そしてまた猫へ。

「だ、大丈夫か？」

「カール・・・変化が止まらない・・・あぅっ・・・・・」

輪郭がほどけ、手足が伸びる。
人になったところを抱き留めた。

「止まらない？　それはどうして・・・」

「わかんない。こんなこと初めてで・・・」

ふぅ、とルゥが息をついた。
額にかかった髪を撫でて避けてやる。

「あ、なんか安定した。驚かせてごめんなさい。私、どうしたんだろう」

「急に変化してしまったのか？」

「うん。猫になろうとしたわけじゃないよ。ただ本の整理をしてただけなんだけど」

ルゥを立ち上がらせて手を離す。

「あっ・・・」

また猫になってしまった。
へたり込むのを慌てて支えて抱き上げる。

「なんなんだ？」

「なんだろう。カールから離れた途端、急に・・・あれ？」

ルゥの視線の先。
女魔術士がくれたペンダントが、淡い光を放っていた。
俺のも服の中から取り出して見ると、同じように赤く光っていた。

「何が起こってる・・・？」

「エメさんならわかるかも。あぁ、でも私エメさんの住所も知らないわ。どうしよう」

ルゥの耳がしゅんと垂れる。

「エメか。どうやって連絡をとればいいんだろう。ウーリーならわかるかもしれないな」

2人で思案していると、ドンドンドン！と玄関を叩く音がした。
こんなときに・・・誰だ。

ルゥを肩に乗せ、扉を開ける。

「はい？」

「カール！　私よ！　ルゥちゃんは大丈夫！？」

なんという頃合（タイミング）。
紫の法衣をまとった女魔術士が、そこにいた。

4　エメ

＊＊＊＊＊

「エメさん、すごい。なんで・・・」

「一週間前くらいから、妙な気配を感じてたの。
気になって気配を追ってきたら、あなたに贈った護り石が反応してるのがわかったわ。
自分でかけた術だからね、異変があればわかるのよ」

それで飛んで来てくれたのか。

「ルゥちゃん・・・いえ、ルチノーちゃんと呼んでもよさそうね？
あなた今何歳だっけ？」

カールに触っていれば変化を自分で調整できるので、一度寝室で人に戻ってからエメさんと話すことにした。
机をはさんで、向かい合って座るエメさんと私たち。
私たちっていうのはカールと私で・・・私はカールの膝の上にいる。
だって、触ってないと猫になったり人になったりしちゃうし、椅子は2つしかないし、だから仕方なくなんだけどものすごく恥ずかしい。

エメさんったら、にやにやしないでっ。

カール、足撫でちゃだめ！

「１７・・・だと思う」

「根拠は？」

「根拠？　拾われた時に年をきかれて、こうやったって言うから・・・たぶん２歳だろうって」

人差し指と中指で「２」を作る。

「なるほどね。小さいころなら薬指がうまく立てられなかったってこともあるか」

「エメさん？」

「あなた、たぶん１８歳だわ。１８といえば一般的にも成人の儀をするけど、ルチノーちゃんの場合もっと特殊な事情があるの。魔術にとって１８は特別な数字。眠っていた力が目覚めるのよ」

「眠っていた力・・・。前、私に魔術の才能があるって言ってたけど、それに関係があるの？」

「才能どころの話じゃないわ。ルチノーちゃん、あなたはね、今は失き湖上の魔術王国、ヴィルヘルミーナのお姫様なのよ」

「ヴィルヘルミーナ？」

「３０年前、城ごと湖に沈んだというあのヴィルヘルミーナか？」

私は全然知らなかったけど、カールは知ってるみたい。

そんな国があったの？　で、私がそこのお姫様？？

「そう。前ルチノーちゃんが描いた絵を見せてもらったでしょう。

あの衣装や冠の石に見覚えがあったの。

ヴィルヘルミーナは多くの魔術士を輩出し、かの国にしかない秘術もたくさんあったから、魔術士なら一度は勉強に訪れてたのよ。

私も昔行ったことがあるわ。たぶんあなたのお母さんにも会ってる」

「お母さんに・・・。あれ？　でもカールが３０年前に沈んだって。

エメさん、いつお母さんに会ったの？」

「あら、うふふ」

「見た目通りの歳じゃないとは思っていたが、その口ぶりじゃ１００やそこらは越えてそうだな」

「失礼ね。女性の歳を勘ぐるもんじゃないわよ」

１００？　１００って１００歳？

私が目をぱちくりさせていると、カールが頭を撫でて説明してくれた。

「ウーリーの家庭教師をしていたと言っていただろう？

あいつのうちは魔術の名門だから、並みの魔術士には頼まない。

それに同じくらいの歳で家庭教師をするわけはないよな。あいつが幼いころすでにそれなりの歳で、かなりの力があったってわけだ。

魔術の中には、身体を若く見せたり実際に若返らせたりするものがあると聞く。
こいつは若返ってるほうだな、きっと」

「何よ、なんだか言葉にトゲがあるんじゃない？」

「胡散臭い術は嫌いでね。魔術は便利だが、人を惑わすことも多い。年をごまかせるほどの魔術士を、おいそれと信用はできないな」

「ふん。そこそこ評価されてるととろうじゃないの。
でもあんまり私の機嫌を損ねないほうがいいわよ。ルチノーちゃんの状態を把握してるのは私だけなんだからね」

「・・・くっ・・・それは・・・」

「本当なら１８になったときに、解放された力に喰われていてもおかしくなかったわ。
私のかけた猫化の術が、魔術の暴走を止めてたのね。結果としてはよかったわ」

「ルゥ、いつ誕生日だったんだ？」

「え・・・。わからない。覚えてないの。冬に捨てられてたから、冬生まれってことにしてたけど」

「そうね。正確な日にちはわからないけど、最近だとは思うわ。
ただ・・・一週間くらい前って何かあった？　力を解放する何か。
猫化の術とその護り石のおかげで、１８になったからってそんなに急激に力があふれるはずはないの」

私を解放する何か。
一週間くらい前って・・・あの、その、もしかして？

カールと2人、顔を見合わせる。
お互い思い浮かべたことは同じだったみたいで、赤くなって目をそらしてしまった。

「あー・・・そういうこと？
カール、あなたねぇ、少しは自制しなさいよ。何歳(いくつ)離れてると思ってるの？」

「年の話はしないんじゃなかったか」

「それとこれとは別でしょ。ルチノーちゃんに無理させてないでしょうね」

「させてない。大事にしてる」

「本当～？　年だけじゃなくて体格だってずいぶん違うんだからね」

「体位は配慮してる」

「当たり前でしょ。何やろうとしてんのよ、この変態」

「好きな相手と愛し合って何が悪い」

「うっわ、開き直らないで！　あああ、私のルチノーちゃんがあぁぁ」

「おまえのじゃない。俺のだ」

「出会ったのは私の方が先よ！　まさかこんなに早いとは！　応援なんてしないで唾(つば)つけとくんだった！！」

「ちょっ、あの、2人とも、やめて・・・」

エメさんに、その、“初めて”を告白した恥ずかしさから立ち直る途中に、カールに「好きな相手」云々と言われてまた動揺していたけど、このままじゃいつまでも言い合いが続きそうで口をはさむ。ただの喧嘩ならまだしも、私のことを言われていて居心地が悪い。

「ルチノーちゃん、この男が嫌になったらいつでも私のところにいらっしゃい」

「そんなことにはならないから安心しろ。な、ルゥ」

「う、うん」

「あぁら、女同士にしかわからないことだってあるじゃないの。またうちに来たいわよね？　ルチノーちゃん」

「うん。エメさんのおうちは楽しかった」

「そうでしょー？　ほらみなさい」

「ルゥ、俺よりこの女の方がいいのか？」

「え、そういうわけじゃないけど」

着せ替えとか一緒にお料理とかは楽しかった。

エメさんって優しいし、お姉さんみたいで頼りになる。

「遠慮しないで。いつでも遊びにきてね」

「はい」

「ルゥ・・・」

あれ、カールががっくりとうなだれてしまった。

「あの、遊びには行くけど、帰るのはカールのところだよ？　私の居場所はカールのいるところだから」

「ん・・・。そうか。そうだな」

「うん」

「こらこら。そこ、見つめ合わない。あぁ、もう何の話をしにきたんだっけ？

あなたたちねぇ、もうちょっと緊張感ってものを・・・」

「おまえが話を逸らしたんだろ」

「そうだったかしら。んじゃ戻そうじゃないの。

だからね、ルチノーちゃんは魔術王国のお姫様なの。

ちょっと！　私の目の前でおさわりは禁止ね。その手はなんでずっと太もも撫でてんのよ」

「いいから続けろ」

「はぁ、ほんとムカつく。ルチノーちゃん、なんでこんな顔はいいけど性格悪そうなのがいいわけぇ？
んで、ヴィルヘルミーナは女王制だったんだけど、ルチノーちゃんは最後の女王の娘である可能性が高いわ。
詳しいことはまだ調べ中だけど・・・。
何にせよ、眠る力はとんでもないものがあるわ。
できれば側について使い方を教えてあげたいんだけど、私もいろいろ忙しい身だしね。どうしようかしら」

「エメさんは今も王都にいるの？
私もカールの仕事の都合で、一週間後には王都に引っ越す予定だったんだけど」

「え！　本当？　それは好都合。リックにも話を通しておくわ」

「リック？」

「リクハルド＝ヴィリオ＝ブルクハルト。あなたのとこの王様でしょ？」

「おま・・・国王をリック呼ばわりするな。何者だよ」

「そうあからさまに不審がるもんじゃないわよ。人よりちょっと長生きしてるだけ」

やっぱり長生きしてるんだ。
本当は何歳なんだろう。
一通り話を終え、エメさんは私に猫化の術を掛け直してくれた。

「とりあえず王都に着くまでは猫でいて頂戴。

よほどのことがないと人には戻れなくしておいたから」

私の本来の姿をとると、力があふれやすくなるらしい。
エメさんの魔術の影響下にいることで、力を安定させるんだって。
カールに触れていると落ち着いたのは、エメさんの術がかかったおそろいの護り石のおかげだったみたい。

「この姿じゃお手伝いできないね。ごめんね」

「いいさ。スヴァルがくれたバスケットもあるし、かえって移動は楽かもしれん」

エメさんが帰った後、カールは片づけを続けていた。
見ていることしかできないのが心苦しい。
あぁ、ごはんも作れないんだ。
私が作ったものをおいしそうに食べるカールを見るのが、すごく楽しみだったのに。

「手伝いよりもな」

カールが喉を撫でてくれる。
大きな手が心地よくて、喉がゴロゴロと鳴る。

「一週間、人の姿のルゥに会えないほうが辛いな」

そう言って口づけてくれた。

私も、カール。

あなたを抱きしめられないのが寂しい。

5　出立

＊＊＊＊＊

コメット爺さんの孫娘の結婚式は、無事行われた。
その後の兵舎での壮行会のほうが、よっぽど大変だった。
詳しくは述べないが、負傷者続出、備品の破損も著しく、明日からどうするんだろうとすでにいない身ながら気をもんだ。
しかし酒のせいもあってか、みんな終始笑いっぱなしで、俺も人生で一番腹の底から笑ったんじゃないかと思う一時（ひととき）だった。

「俺もねぇ、一度隊長とサシで酒を呑んでみたかったんすよ」

ようやく会が落ち着いた頃、麦酒（エール）の入ったコップを持ち、目元を染めたギュンターと何度目かの乾杯をした。

「言ってくれればいつでも呑んだのに」

「本当ですかぁ？　赴任当初なんて暗くって、一言もしゃべらない日だってあったじゃないすか。
明るくなったなぁと思ったら猫に夢中で、定時で帰るし。
誘う隙なんてなかったっすよ」

そうか。それはすまなかった。
確かに測量隊の歓迎会くらいでしか、隊の連中と酒を酌み交わした

ことはなかった。

「後任の件はありがとうございました。カール隊長ほどにはとてもじゃないけどできませんが、精一杯務めますので」

「何をいう。ギュンターがいたからなんとかやってこられたんだ。感謝している」

「ははっ、照れるっすね。王都でもお元気で」

「あぁ、ありがとう」

「たぁいちょー！　のんでますかあぁぁぁぁ」
「きょうは、あさまでかえしませんよおおお」
「ほらほら、もっとのんでえぇぇ」

「朝までって・・・。朝、出立するんだが・・・」

「あいつらもうすぐつぶれますから。見送りには蹴っ飛ばしてでも連れ出すんでご安心を」

「どうせ二日酔いだろう。寝かせてやれ」

「そうはいきません。全員きっちりそろえますからね。お楽しみに」

お楽しみに？
その言葉の意味を知ったのは、翌朝、見送りにきた隊員たちが見事な行進を見せたときだった。

基本教練に従っての一糸乱れぬ行進、行進間動作、執銃時の動作、礼式、どれをとっても完璧だった。
訓練で俺が教えたときよりも、格段にうまくなっている。
隠れて練習したのか。

「カール隊長のますますのご活躍を祈って！　捧げ、銃！」

「みんな・・・ありがとう。
諸君に会えてよかった！　ここでのことは絶対に忘れない！」

答礼をしながら、胸に熱いものがこみあげてきた。

「隊長！　お元気で！」
「お元気で！」
「また遊びに来てください」

涙をこらえ、見送りに手を振って、俺は数か月を過ごした辺境を後にした。

「よぉ、カール！　今日も愛妻弁当か？　うらやましい限りだな！
今度自慢の奥さんを連れて来いよ」

「だから、うちのは体が弱くて外に出られないって言ってるだろう」

「本当は俺らに見せたくないだけじゃないかぁ？」

「モテるくせに一人に執着しなかった、カール＝ヘルベルト＝ヴュストが結婚とはな！
おまえを落とした女ってのを、一目見て見たいぜ」

「いいから、早く飯食いにいってこい。どの店もすぐに混んで食えなくなるぞ」

「はいはい。“三匹の子猫亭”のおかみが、おまえに会いたがってたぜ。今度呑みにいこうや」

「わかった。特に予定はないから、みんなの都合のいい日を教えてくれ」

「あいよ」

手を振って、にぎやかな同僚たちが昼飯に出るのを見送る。
辺境の兵舎では当番制で昼飯を作っていたが、親衛隊（ここ）では親衛隊舎のある城内から城下町へ食べに行くのだ。
王都に来て一か月。
親衛隊（ガーディアン）の中には旧知のものもおり、さほど苦労することなく溶け込むことができた。

「奥さんはそんなに体が弱いのかい？」

同じく弁当組の、ヘルマン副隊長が話しかけてきた。
年の頃は４０代後半。薄くなってきた髪を撫で上げ、丸眼鏡をかけている。
神経質そうな見た目通り、細かいことに気がつく性質（たち）で、名実ともに隊の参謀役だ。

「そうですね。弱いというか、日光に当たると肌が真っ赤に腫れ上がったり、熱を出したりするんです。
家の中にいる分には全くの健康体なんですがね。外に出ることができません」

「へぇ。それは大変だな」

これは王都に来た当初、俺とエメで考えた作り話だ。
エメは王都に家もあるが、国のおかかえ魔術士としてブルクハルト城に滞在していた。
ルゥはエメの元に力の使い方を覚えるために通うことになったが、できるようになるまでずっと猫の姿でいるのは不便だろうと、エメが家の中と俺のそばでだけ人に戻れるように術を調整してくれた。
家全体に術をかけることで結界とし、ルゥの力の暴走を封じ込める。
また、俺の持つ双子の護り石のペンダントにも封じの術をかけて、短時間なら俺のそばにいれば外でも人になれるようにした。
そのおかげで、国王への謁見や俺の実家へのあいさつもできた。
とはいえ、ほとんど人前に出られないことにかわりはないので、体が弱いということにしたのだ。

「ん？　なんだ？」

ヘルマン副隊長が、窓の外に視線を向ける。
開け放った窓から、ひらりと白い影が入り込んできた。

「ルゥ」

「んなーぅ」

ルゥが窓から俺の肩に飛び移り、頬をすり寄せてくる。

実は、猫の姿でなら何度も親衛隊舎に来ているルゥである。

「それがリクハルド様に下賜された猫かい？　よく懐いているな」

「えぇ。猫、大丈夫ですか？」

「あぁ。飼ったことはないが、嫌いではない。全身真っ白なのか。美しいな」

ルゥが猫の姿でエメの元へ通っても不自然でないように、国王にいただいた猫ということにした。

俺のなのに・・・くやしい。

俺とおそろいの双子の護り石は、ペンダントからチョーカーに形を変え、ルゥの首におさまっている。

これが通行証がわりとなり、今のルゥは城内なら自由に出入りすることができた。

昼休みの間、隊舎で過ごし、ルゥはまた窓から出て行った。

「散歩か？　あまり遠くへ行くなよ」

エメのところへ行くとわかっていても、ヘルマン副隊長の手前、そう声をかける。

「んな！」

長い尻尾が城の方向へ消えていく。

城内なら危険はないとは思うが・・・心配だ。

6　お引越し

＊＊＊＊＊

お昼休みのカールにあいさつをして、エメさんのところに向かいながら、王都に来てからのことを思い返す。
もう一か月かぁ。
あっという間だなぁ。

王都に来たことがあるといっても、城下町にあるエメさんの家や院長先生がいた治療院に行ったことがあるだけで、お城を見るのは初めてだった。
その大きさと迫力に圧倒される。
私はよく知らなかったんだけど、王都は、お城の広い敷地内には騎士団の隊舎や宿舎があって、さらにその外側に城下町が広がっていた。
お城と城下町の間には高い塀があって、いつも門番がいる。
城下町はお城の周りと、お城から隣国に伸びる街道沿いに栄えていってるみたいで、その街道の一本は私のいた孤児院のある町へもつながっているそうだ。

カールと私の新しいおうちは、そんなブルクハルト城の敷地の一画にあった。

「こ、こんな立派なおうちに住んでいいの？」

レンガ造りの2階建て。
庭はなくて、家の前がすぐ道だけど、玄関横にちょっと寄せ植えを置けそうな場所がある。
カールの肩に乗って家に入る。荷物は先に届いていた。

「あぁ。使用人も1人置いていいことになっているが、いないほうがいいから断った。
だいたいの家事は俺もできるしな」

「私のせいで・・・ごめんね」

「いや、俺がルゥと2人きりがいいだけだ」

猫の私にキスをして、ぎゅっと抱きしめてくれた。
せめて人の姿になれれば、カールの役に立てるのに。
荷ほどきをするカールの横でただ見ているのも心苦しく、家の中を探検することにした。

辺境の家とは違い、しっかりした造りで部屋数も多い。
1階には、小さいけど居間とは別に応接室があって、そのほかに食堂と台所、お風呂などの水回りがある。
玄関ホールにある白い手すりのついた階段を上がると、2階に寝室と書斎、お客さん用?の部屋が2つもあった。
それぞれに家具が備え付けてあり、すぐに使えるようになっている。

あ!　出窓!

2階の一部屋に、辺境の家と同じような出窓があるのを見つけた。
うれしくなって、ぴょんと飛び乗る。
家の前の道を、人が行き交うのを見下ろすことができた。

この眺め、新鮮！

「何かおもしろいものでもあったか？」

尻尾をぱたりぱたりと振りながら眼下を見下ろしていると、カールが2階にきて覗き込んできた。
腕を私の両側について、同じように外を眺める。

「ん？　あれはエメじゃないか？」

カールの視線を追うと、城から下ってくる道に、確かに見知った人影があった。

「久しぶり！　ルチノーちゃん！！」

玄関を開けた途端、エメさんが抱きついてきた。

「たった一週間しか経ってないじゃないか」

「うるさいわね。会いたかったんだからいいじゃないの・・・ってあなたと言い合ってる場合じゃないわ。
ごめんね、ルチノーちゃん。
引っ越しのお手伝いをしたいところなんだけど、ちょっと時間がなくて。
手短に、術の掛け直しと打ち合わせだけしていくわ」

そういうと、エメさんは私を降ろして人に戻してくれた。
すかさずカールが、上着を脱いで肩に掛けてくれる。

「ルゥ・・・・！」

「あなた、“たった一週間”って言わなかった？」

人になった私の髪を撫で、いまにも口づけせんばかりのカールを見て、エメさんは呆れ顔だ。

うん、私もそう思う。

「“会いたかったんだからいい”だろう」

「～～～！　人の口真似するんじゃないわよッ」

「あー・・・エメさん、時間ないんでしょう？　カールも、やめて？」

上目づかいにお願いすれば、カールは破顔して、首筋に顔をうずめてぎゅうぎゅうと抱きしめてきた。

あぁん、逆効果だった・・・。

「はあぁ。もういいわ。いくつか術をかけてから後で説明するわね。あと、今後のことね」

エメさんは何やら口の中で呟きながら家の中を周り、最後に私のおでこをトンとつついた。

ぴりっと軽い衝撃が全身を走る。

「これで家の中でなら自由に変化できるわ。ペンダントもちょっと貸してね」

カールと私のペンダントを受け取ると、カールの護り石には術をかけ、私のものは貴石がたくさん埋め込まれた金のチョーカーに付け替えられた。

「エ、エメさん、これは・・・」

ものすごく高価なものじゃないの？

「1つ1つの石に術がかけてあるわ。ルチノーちゃんの力の制御を助けてくれるの。引っ越し祝いよ」

にこっと笑って、首にはめてくれた。

しっとりとした重さがあって、まるで生まれたときからつけているみたいに私の首になじんだ。

「美しい・・・が、俺のルゥに勝手に首輪をつけられたようで気に入らないな」

「ああ、はいはい。そうでしょうね。ついでにもっと気に入らない提案をさせてもらうわ」

エメさんの提案っていうのは、お城でエメさんに魔術を習うことと、そのために王様の猫になることだった。

カールは渋い顔をして聞いている。

「私も週末は城下町にある家に帰ってるけど、一週間ごとより3日おきくらいのほうが術のなじみがいいのよね。

午後は比較的時間があるから、城で勉強会をしましょう。

私といるときは人の姿でいられるけど、移動は猫のままだから・・・。

リックの猫ってことにすれば、城の中を歩き回れるでしょう？」

「ルゥは城に住むのか？」

「ここから通ってくれればいいわ。猫が気ままに出歩くのはよくあることだし。

でもいちいちカールが送り迎えするわけには・・・ってそんな顔しないの。あなたも仕事があるんだから無理でしょ！

猫のままで行き来するには、リックの猫のほうが都合がいいのよ」

私はなるほどなぁと聞いていたけど、カールは納得がいかなかったみたいで、結局一端王様の猫になるけどそのあとカールが譲り受けるってことになった。

それならカールのところにずっといても平気だし、城を歩いているのも自然だ。

とはいえ、私を物のように扱うことにカールは最後まで難色を示した。

「お話の上だけだし、気にしないで、カール」

「しかし・・・」

「大丈夫よ。エメさんもカールも、私なんかのことをこんなに一生懸命考えてくれてありがとう」

「いいのよ。乗りかかった船ってやつだわ。

それにヴィルヘルミーナの女王にはお世話になったの。ルチノーちゃんを助けることは、私の恩返しだと思ってるわ」

「その話だけど・・・私、いまだに信じられなくて・・・」

孤児院に捨てられてた私が、どこかの国のお姫様？
そんな話、にわかには信じられない。
孤児院に居た頃、仲間と似たような話をしたことはあった。
本当は大金持ちの両親がいて、いつか迎えに来てくれるとか、実はどこかの国のお姫様や王子様で、ある日家来が迎えに来てくれるとか。
それが現実のことになるなんて。

「そうね。証拠といえば年と絵と涙石を知っていたこと、あと眠っていた力くらいだけど・・・私はルチノーちゃんがヴィルヘルミーナのお姫様だって確信してるわ」

「それはなぜだ？」

「だって、そっくりなんだもん」

「え？」

「ルチノーちゃん、私が会ったヴィルヘルミーナの女王にそっくり。髪を金にして、瞳を青にすれば、そのまんま若き日の女王だわ」

ヴィルヘルミーナの女王・・・それはつまり、エメさんの話によれば私のお母さん。
私、そっくりなの？

「初めて会ったときは気付かなかったのよねぇ。
くやしいけど、カールに会って成長して・・・本当にきれいになったわ。
私の家でドレスを着たことがあったでしょう？　そのとき思った

のよね。あれ？どこかで会ったことあるって」

カールがちらりと私を見る。
ドレス姿を見たいとか思ってる顔だよね。
最近、カールが考えてることがわかるんだ・・・。

「ま、もう３０年も前の話だし、いまさら誰かがルチノーちゃんを探し出そうってこともないと思うわ。
もし何かあるならとっくに迎えが来てるわよ。
信じても信じなくてもいいけど、魔術の勉強は必要だから、お城にいらっしゃい」

「うん、わかった。本当にありがとう、エメさん」

「いいのよう。かわいいルチノーちゃんに会えるだけで私も楽しいわ。
城なんてねぇ、立派な分、肩が凝って仕方ないのよ。午後のお茶をしに来るくらいのつもりで気軽に来てね。
あぁ、着飾ったルチノーちゃんとお茶！　たくさんドレス用意しておかなくちゃ！」

「着飾った？」

「エメさん、ドレス集めが趣味なの。前おうちに行ったときにいろいろ着せてくれたの」

「ほお」

あぁ、カールも対抗する気だ。
余計なお金、使わないでいいからねっ

「でも魔術の勉強って、エメさんさっき・・・」

「もちろんするわよ。でも私の癒しにもなってね！」

「癒し・・・。私で役に立つなら嬉しいけど」

「立つ、立つ！　じゃ、待ってるから！」

王様に会う日取りとか、猫と人との使い分けとか細かいことを打ち合わせして、エメさんは帰って行った。

このとき、私は体が弱くて外になかなか出られないってことになった。

2人ともうまいこと考えるなぁ。

「なんだか急にいろいろあって、気持ちの整理がつかないよ」

「焦ることないさ。荷物の片づけと一緒で、少しずつ取り組んで行けばそのうちあるべきところに落ち着く」

「あ、片づけ。そうだった、お手伝いするね！」

猫じゃ無理だけど、この姿なら手伝える。

もうすぐ夕刻。

急がなくっちゃ。

「片づけよりも・・・」

腰を引き寄せられた。降りてくる唇。

「ルゥが欲しい」

「・・・んっ・・・。だ、だめだよ。このままじゃごはんも作れないでしょう？」

家具はそろっていても、お鍋とか包丁とかはしまったままだ。
食材もない。

「飯は買ってくればいい。辺境と違って、遅くまでやってる店がいくらでもあるからな」

「そ、そうなの？　あっ、でも・・あんっ・・・んん・・・・！」

結局その日のお夕飯は抜きで、朝まで離してもらえなかった。
一週間ぶりだからって・・・“たった一週間”って自分で言ったんじゃないの！

明け方、カールの腕の中でまどろみながら、夢をみた。
懐かしい、幼い頃の夢。
今日は、暗褐色（セピア）だった夢に色がついていた。

『ルチノー。私の愛しい子』

私を抱くその人は――エメさんに聞いたせいだとは思うけど――金の髪に青紫の瞳をしていた。

＊＊＊　記念小話　首輪（チョーカー）　＊＊＊（前書き）

すごい！！
１０月９日１１時現在、２００８件です。
皆様ありがとうございます！！
御礼小話です。お約束ですがｗなネタです。

＊＊＊　記念小話　首輪（チョーカー）　＊＊＊

カールが私の首輪（チョーカー）を気にしている。

「これ、はずれるのか？」

「どうだろうね。私の力の制御を助けてくれるって言ってたから、はずさないほうがいいんじゃないかな」

せっかく落ち着いたのに、また猫になったり人になったりしたら困る。

「家の中なら大丈夫じゃないか？　ちょっとはずしてみるか」

「そうかなぁ」

自分でははずせそうにないので、カールが私の後ろに回って留め金に手をかけた。

ぱちんと音がして、首輪（チョーカー）がはずれた。

「どうだ？」

「うーん、大丈・・・・夫・・・・あぅっ」

ぐるっと胃の中をかきまわされるような感覚がした。

身体が熱いのに、冷や汗が出てくる。

「カール・・・！　だめっ、首輪（チョーカー）つけてっ」

ぱちんとはめられると、すっと気分が落ち着いた。
よかった。姿も人のままだった。

「もうっ、カール、やっぱりはずすのはだめね」

「・・・ああ・・・！」

「？　カール？」

呼吸を整えて後ろを振り向くと、鼻を押さえてうずくまるカールがいた。
ぽたぽたと床に鮮血が垂れている。

「・・・また？　今度はどうして・・」

鼻血を拭いたカールは、黙って鏡を差し出してきた。

「なあに？　・・・・・・・きゃ！」

な、な、な、なにこれ！

「耳だな」

「いやあああ！」

鏡の中の私には、白い猫耳がついていた。
もしかして・・・こっちも？
カールも同じことを考えたらしく、私よりも先に服の裾に手を伸ばしていた。

「あんっ、そこつかんじゃだめっ」

尻尾の根元をきゅっとつかまれて、腰が砕けた。

「どこから生えてるんだ？」

「やだっ、見ないで！　んっ、あんっ」

カールの膝の上で、あっという間に裸にされる。

おしりをつるんとむかれて、そこについた尻尾の根元から先までしゅるんと撫でられた。

ぞくりと背筋が震える。

「うん、いい。すごくいい。しばらくこのままでいてくれ」

さらにカールは、フリフリのレースがついたエプロンを取り出した。

いつのまにこんなもの！

「服、返して」

「これで」

「服着てからでしょ？」

「着たら尻尾が見えないじゃないか」

「・・・エプロンだけ？」

「だけ」

期待に満ちた目で見つめられて断りきれず、お昼ごはんを作る間だけ我慢することにした。
裸にエプロンって・・・いろいろなところがすぅすぅして落ち着かないんだけど！

「いい眺めだなぁ。その耳とか尻尾とかは出し入れできるのか？」

台所に持ってきた椅子に反対向きに座って、背もたれに肘をつきながらカールは私がごはんを作るのを見ている。

「出し入れ？」

あ、そうか。
変化の要領で、仕舞えばよかったんだ。
ん、と念じたら、ぴょこんと引っ込んで元通りになった。

「あああ」

「なんだ、はじめからこうすればよかったんだわ」

「なんてことを！」

「こんな耳や尻尾をつけてたら、生活できないじゃない」

「うぅ・・・じゃぁ耳はなくてもいいか」

「え、何？　やんっ、どこ触って・・・」

「見てたら我慢できなくなった。隙間から見えるここがたまらない」

「あっ、あぁんっ、あぁ・・・！」

耳や尻尾なんて、関係なかったみたい。
お昼ごはんの前に、私がおいしくいただかれてしまった。

「仕舞えるってことはだな」

「出さないよ」

「・・・まだ何も言ってないが」

「出しません」

自分で出す気がなくても、首輪（チョーカー）をはずされたら出ちゃうかもしれない。
留め金に鍵が必要だ。

今度エメさんに会ったときに頼もう、と誓ったルゥだった。

＊＊＊　記念小話　首輪（チョーカー）　＊＊＊（後書き）

Ｒ１５ってどこまでですか？（笑）
猫耳・しっぽ＆裸エプロン。
カール、やりたい放題ですｗｗｗ

7　ご両親に、ご挨拶　1（前書き）

ルゥ視点が続きます。

7　ご両親に、ご挨拶　1

王都に着いた翌日。
初出勤は明日だというので、今日のうちにカールの実家にあいさつに行くことになった。
城下町の一画に、わりと大きなお店を営んでいるらしい。
一緒にあいさつってことは、あれだよね、お嫁さんとしてってことだよね？

カールが用意してくれた服を着て、馬車に乗りこむ。
おうちにはお父さんとお母さん、お店を継いでる一番上のお兄さんとその奥さんがいるんだって。
二番目のお兄さんは町から町へ行商をしてて、妹のミレイユさんは城下町の別の地区で旦那さんとお店をやっているらしい。

「商人一家なんだが、俺だけ毛色が違ってな。両親には散々心配をかけてるのさ」

口の端を自嘲気味にあげて笑うカール。
そんなことを言いながらも、久しぶりに実家に帰るから嬉しそう。
きっと愛されて育ったんだろうな。
馬車の中で、そんなご家族の話を聞いていたら、急にカールが神妙な顔をした。

「いまさらだが・・・俺でいいか？」

「え？」

「話した通り、多少大店とはいえ俺は所詮商家の三男坊だ。
騎士だ親衛隊だといっても、一代かぎりだしな。一国の姫君をもらうような身分じゃない」

カールが言っているのは、私が今は失きヴィルヘルミーナのお姫様じゃないかって話。
そんな、本当かどうかわからない話なんて、関係ないのに。

「私は私。カールに拾われた、ただのルゥだよ。
カールこそ、こんな面倒ばかり抱えた、気味の悪い不吉な私でいいの？
ご両親だって、なんて思うか・・・」

自分で言って、急に不安になった。
そうだ、このごろカールやエメさんとばかり会っていたから忘れていたけれど、私の見た目は人々に気味悪がられる。
白い髪と赤い瞳のせいで、いままで何度忌避され差別されてきたか。
カールのご家族は、私を受け入れてくれるだろうか？

「君のことを面倒だなんて思ったことはない。髪の色も瞳の色もきれいだ。
うちの親は、商人としていろいろな人と会っているだけあって、人を見た目で判断するようなことはしないさ。
もししたら、絶縁してでもルゥを守る」

「カール・・・。ありがとう。
でもね、気持ちは嬉しいけど、ご両親は大切にして。
私はお母さんの顔もおぼろげにしか思い出せないから・・・」

「あ、すまない。そんなつもりで言ったのではないんだが」

「うん、わかってる。先に弱音を吐いたのは私だもんね。
もしカールのご両親が私を受け入れてくれなくても、気持ちが伝わるまでがんばるわ」

「無理はするなよ。俺も一緒だから」

「うん。頼りにしてる」

そうこうしているうちに、馬車は町の中心部にほど近い、一軒の大きな商店の前に着いた。

「いらっしゃいませぇ！・・・ってカール！？」

店先で出迎えてくれたのは、カールによく似た男の人。
この人がお兄さんかな。

「おっまえ、いつ帰ってきたんだ!?　おぉい、お袋！　カールだ！　カールが帰ってきたぞ！」

「カレヴィ、そんなに大きな声を出さなくても聞こえてるわよ。あら・・・」

店の奥から、小柄な女性が現れた。
カールの後ろから顔を出した私を見て、カールと同じ碧の瞳が真ん丸に見開く。

「カール、こんな若いお嬢さんを一体どうやって騙したの？」

8　ご両親に、ご挨拶　2

「で、式はいつなんだ」

「いや、彼女は身寄りがないし俺も辺境から戻ったばかりだから、式はしないつもりなんだ」

お店はお兄さん夫婦にまかせて、店と続きになっている自宅の応接室に通された。
カールと並んでソファに座り、向かい側にカールのお父さんとお母さんが座る。
カールが言うとおり、ご両親は私を特別視することなく、温かく接してくれた。

「ねぇ、ルチノーさん。本当にいいの？
　一回りも年が離れてて、親の私が言うのもなんだけど我が儘だし自分勝手だし、結婚相手としてはどうかと思うわよ」

「お袋、それはないんじゃないか」

「あら、本当のことじゃない」

カールのお母さんは、ふんわりとした雰囲気だけれど、わりとはっきり物を言う女性(ひと)みたい。
お父さんはと言えば、背が高くって、微笑んだ顔がカールとそっくり。
白髪交じりの錆色の髪が、カールもこうなるのかなって思わせる。

「そうだなぁ。こいつにはいつも苦労というか驚かされたよ。
せっかく商人の学校に行かせたのに、突然騎士になるなんていって家を出るわ、気付いたらある日いきなり近衛として王様の行列に混ざってるわ、あげくどっかの国の王女に手をだしたとかで左遷だろ？」

「ちょっと、あなた。ルチノーさんの前で言っちゃだめでしょ！」

「おぉっと、すまんな。まぁ誤解だったってことで戻ってこられたんだからいいよな」

「は、はい。大丈夫です」

全然大丈夫じゃない。
あとでカールに聞かなくちゃ。
隣に座るカールをちらっと見ると、ばつが悪そうに目をそらした。

「で、極めつけはこんなにかわいいお嬢さんを連れてくるんだもんな！」

「そうよねぇ。でも結婚式は本当にいいの？　女の子なら一度は憧れるものじゃない。
親代わりなら孤児院の先生とかいらっしゃるでしょう？」

「院長先生はこの間亡くなられて・・・」

「あら！　もしかして聖アドリアナ孤児院！？」

「え？　あ、はい、そうです。ご存じなんですか？」

「ほら、カール、あなたが寄付をした・・・。
確か家一軒くらい軽く建つ金額をぽんとあげちゃったのよね。あのときも驚かされたわぁ。
あそこの院長先生、亡くなったのよね。近所の奥さんが治療院のお手伝いに行っててねぇ。
カールにも知らせようかと思ったんだけど、急だったから。
そう、あなたあの孤児院の娘さんなの。それが出会いってわけね。それなら納得だわ。こんな息子だけどよろしくね」

そう言ってカールのお母さんは、私の手を強く握った。
初めて聞いた話に驚いたけど、とりあえず認めてくれたようなので握手を返す。
カールも片眉をあげてお母さんの話を聞いていた。
たぶん知らなかったんだ。

その後、今王都で流行っているというお菓子をご馳走になった。
夕飯も食べて行ってというお誘いは丁重にお断りして（私の変化が限界だった）、家に帰った。

「あの！」「あのな！」

家に着いた途端、2人同時に口を開いた。
カールに先を譲る。

「親父が言ってた王女の件は完全に誤解なんだ。

向こうが勝手に熱を上げてただけだ。ウーリーに聞けば分かる」

あっそう。
ずいぶんモテてたんだね。
あーあ、これからカールの女性関係では苦労しそうだなぁ。
昔の女性(ひと)とかに会ったら、どうしたらいいんだろう。

「ルゥが聞きたかったのはこのことじゃないのか？」

私の反応がいまいちだったのを感じたようで、カールが不安げに聞いてきた。

「それもあるけど・・・お礼がいいたかったの」

「礼？」

「寄付のこと。院長先生は、すごく資金繰りで苦労してたから・・・。
時期的にも一番大変だったときだわ。それがなかったらみんな路頭に迷ってたかも」

「あ、いや・・・。
その、王女の件でな。左遷されて辺境に行くことになったから、自棄(やけ)になって有り金全部寄付したんだ。
・・・そうか、ルゥのところだったのか」

それから私は、孤児院でのこと、エメさんとの出会い、カールに会うまでのことを話した。
前に聞かれたときは院長先生のことを話すのがまだ辛くて、うまく話せなかったことも謝った。

「アドリアナ院長はいい方だったんだな」

「うん。最後まで私のことを心配してた。カールにも会ってほしかったな」

カールを院長先生に会わせてあげたなら、きっともっと安心してくれただろう。

いまはただ、安らかに眠っていることを祈る。

「俺は・・・すまんが適当に選んだ寄付先だった。たまたま知り合いに紹介されて。

こんな偶然もあるんだな」

「そうだね。偶然でも・・・すごく感謝してる。ありがとう、カール」

広い胸に、そっと身を寄せた。

カールも私の背中に腕をまわし、髪を優しく撫でてくれる。

「墓はどこにあるんだ?」

「院長先生の親戚が管理する墓地にあるわ。王都の西のはずれだったと思う」

「そうか。今度あいさつに行かなきゃな」

「うん・・・」

カールのご両親も素敵な方たちだった。

式はしないけど、身内だけで食事会をしようということになった。
私に家族ができる。
カールが、家族をくれた。

碧の瞳が私を見つめる。
どちらともなく唇を寄せ、深く、口づけた。

院長先生、私、幸せです―

＊＊＊閑話　ブルクハルト城（エメ視点）　＊＊＊

ふんふんふ～ん♪
もうすぐルチノーちゃんが王都に来る。
嬉しいわ！　何をして遊ぼうかしら。

「ご機嫌だな」

城の中庭を自分の部屋へ向かって歩いていると、前方から毛皮で縁取りされた真っ赤なマントを羽織った男が声をかけてきた。
この城の中でそんな派手な格好をしている男は、一人しかいない。

「リック」

リクハルド＝ヴィリオ＝ブルクハルト。
ブルクハルト国の国王だ。
癖のある栗色の髪に、濃い灰色（グレー）の瞳。
なかなかの偉丈夫で、３８歳にして未だ正妃はもたないが、３人の側室の間に５人の子どもがいる。

「またそんな地味な法衣を着て。私の贈ったドレスはどうしたんだ？」

「だから、私は魔術士だからこれしか着られないっていったじゃない」

「そうだったか？　ドレスは好きだろう？」

「集めるのは好きだけど、自分では着ないのよ」

「そうか。残念だ。一度でいいからおまえが着たところを見せてほしいな」

「はいはい。こんなおばあちゃんを口説いてないで、早く正妃を見つけなさい」

「私の正妃はおまえがいいと、幼少のころから言っているはずだが」

そう言いながら、私の結い上げた髪をはらりとほどき、一房とって口づける。

ウーリーの家庭教師をしていた折に、リックにも出会っていた。

「一国の王が何を言ってるんだか。私の本当の姿を見たら、そんなこと言えないわよ」

「本当の姿も何も、おまえは魔術で若返っているんだろう？　変化しているわけではない。

この艶やかな黒髪も、つぶらな黒い瞳も、白くふっくらとした頬も私は大好きだ」

「あなた、とことん目が腐ってるのねぇ。普通魔術で何百年も生きてる人間を見たら、気味悪がって近づかないか、その力を利用しようとするもんなのにね」

「こんなかわいらしいおまえを気味悪がるなんて無理だ。

出会ったころは姉のようだったが、今は私よりずっと年下に見え

る。
私の庇護下に置きたいとは思っても、利用しようなんて気はおきないな」

「あー、はいはい。この国の大臣たちもかわいそうに。王様がこんなんじゃ、正妃を迎える日は遠いわね」

「大臣たちは別に反対していないぞ。
東の国では漆黒の大魔導士、我が国では月光の魔術士と呼ばれる異界渡りのエメラルダを手中に収められるとあっては、かえって応援しているくらいだな」

「……その大仰な二つ名、やめてくれない？」

「おまえが望むならやめよう。エメ、他に望むことはないか？
おまえの望みなら、なんでも叶えたいんだ」

甘く囁きながら、じっと見つめてくる。
うーん、たいていの女性はこの手で落ちるんだろうな。
私には効かないけど。
そっちは利用する気はなくても、私は最大限に利用させてもらう。

「望みはなんでも？」

「あぁ、なんでも」

これは都合がいい。
ルチノーちゃんのことを話しておかなければと思っていたのだ。
事情をかいつまんで説明する。

「急におかかえ魔術士の話を受けてもいいと言い出して、こそこそ調べていたのはそれか。
彼のヴィルヘルミーナの忘れ形見だって？
国が滅亡してからも、女王は側近と共に逃げ延びて、別の地で再興を目指していたという。
結局叶わなかったらしいが……。その娘が我が国にいるのか？」

「そう。私が知ってる女王はまだ位を継いだばかりで、ちょうど今のルチノーちゃんくらいだったわ。
父親が誰かはわからないけど、側近の一人か女王を保護した国の偉い人かもね。
どっちにしろ持ってる力はとんでもないものがあるから、私が導いてあげたいのよ」

「ふぅん。そんなに力があるなら、その娘も城に迎えたいな」

さっきまで私を口説いてたくせに、舌の根も乾かないうちにそれか。
とことん女好きね。

「あー、それはだめ。もう相手がいるのよ」

「相手？」

「カール＝ヘルベルト＝ヴュスト。あなたの親衛隊員でしょ」

「おお、カール！　あいつか。あいつには悪いことをしたなぁ。
隣国の王女がしつこくてな。
つい“君好みのいい男がいる”なんて言って、あいつに押し付けてしまった」

「はあ？　呆れた。そうだったの？」

「あぁ。だからな、王女が失脚したときいて、親衛隊員として呼び戻したんだ。
そうか。カールの相手か。では仕方ないな。でもあれほどの男が惚れ込むんだ。いい女なんだろう」

「守ってあげたくなるタイプね」

「なるほど。エメと一緒だな」

「だから目が腐ってるって……」

私が選んだドレスを着て、カールと連れ立って城を訪れたルチノーちゃんは、文句なくかわいかった。
新品の親衛隊服を着込んだカールも、お姫様を守る騎士（ナイト）役にぴったりだ。
まったく、顔だけはいいんだから。

「カール。よくぞ戻ってくれた」

「過分なお計らい、感謝の仕様もございません。妻と共に、誠心誠意お仕えする所存です」

「まぁそう固くなるな。私とおまえの仲じゃないか。
友情の証に、私がかわいがっている白猫を贈ろう。大事にしてくれ」

「はっ」

その仲って同じ王女に振り回された仲じゃないの？という突っ込みは心の中にしまっておく。

リックは打ち合わせ通りに、猫のルチノーちゃんを下賜する台詞を述べた。

側仕えがうやうやしく猫用バスケットを渡す。

実際は、重しが入っているだけの空のバスケットだ。

これで猫のルチノーちゃんは、城内通過自由（フリーパス）だ。

カールとルチノーちゃんの謁見を見届けて、城内の自室に戻る。

来週からルチノーちゃんが来る。

まずは成人の儀をしないと。私だけでは荷が重いかもしれない。

あの2人を呼ぶか……。

コンコン

扉がノックされた。

返事を待たずに開かれる。

「リック。何の用？」

「おまえの話に乗ってやったんだ。褒美くらいよこせ」

濃い灰色（グレー）の瞳が近付いて来る。

「……んっ……」

顎をとられ、唇を奪われた。

ねじこまれる舌。

歯列を割って、口腔を好き放題嬲(なぶ)られた。

「〜〜〜、長い！！！」

「ちっ、つれないな」

ぐいっと突き放して睨んだが、リックに悪びれるそぶりはない。

「幸せそうな2人だったな。どうだ、おまえもそろそろ伴侶が欲しくなっただろう」

「いまさらよけいな足枷はいらないわ」

「ふん。いつか振り返らせてみせる。エメ、私ほどの男はいないぞ」

「はいはい。さぁ、仕事に戻りなさい」

ひらひらと手を振って、リックに背を向ける。
もう何年も繰り返されたやり取り。
自分になびかない女が面白いんだろう。
いつになったら飽きるんだか。

いつもならそれで去っていくリックだったが、今日はしばらくたっても扉を開閉する音が聞こえない。
どうしたのかと振り向こうとした瞬間、後ろから抱きしめられた。

「私はあきらめない。エメラルダ、きっとおまえを手に入れる」

耳元でささやかれて、不覚にもぞくりと腰が震えた。
キッと睨むと、私の動揺を察してか、にやりと笑うリックがいた。

「じゃぁな。私の白猫によろしく」

「……カールの前で言うんじゃないわよ。切り殺されるわ」

「ははっ、そのときは反逆罪で死刑だ。あぁ、うらやましい。女の為に死ぬのもいいな」

「女好きもそこまでいくと立派だわ。側室どころじゃなくてハーレムでも作ってみなさいよ」

「そのときはおまえも入ってくれるか？」

「入るわけないでしょ！　いいから仕事しろッ」

手近な本を投げつける。
ばん！と扉に当たって落ちた。
いつのまに移動したのか、リックはとうに扉の外だった。
廊下から、去っていく笑い声が聞こえた。

「ったく、冗談もいい加減にしてよね」

一時を共にした相手がいなかったわけじゃない。
でも長い長い生は、いつしかそういった感情を私の中から失わせてしまった。

「いけない。ルチノーちゃんの成人の儀の準備をしようとしていたんだっけ。
まったく、リックのせいで……。まずは手紙を書かなくちゃね」

あの子の力は半端じゃない。
普通の魔術陣では抑えきれないかもしれない。
協力者が必要だ。

ルチノー。
失われた魔術王国の、最後の女王。
彼女はこの先、どんな変貌をとげるのだろう。

「あぁ、おもしろい。これだから長生きはやめられないのよね」

羽ペンにインクをつける。

拝啓、親愛なるレオナルド―

東の国の魔術士に助力を仰ぐべく、私は手紙を書きはじめた。

＊＊＊閑話　ブルクハルト城（エメ視点）　＊＊＊（後書き）

エメさんの異名の由来とか、ルゥのお母さんの話とか、いつか書けたらいいなぁと思います＾＾

9　お散歩（前書き）

現在のルゥ視点です。
時系列がわかりにくくてすみません＾＾；

9　お散歩

＊＊＊＊＊

とっとっと
草をかきわけ、お城の裏口へ向かう。

「あ！　ルゥだ！」

「にー」

下働きのおばさんの子どもに見つかってしまった。
乱暴に頭を撫でられる。
うぅ、子どもは嫌ぁ。
昔、猫になったばかりの頃、さんざん追いかけまわされた忌まわしい記憶がある。

「これ、チャム！　王様の猫にけがでもさせたらどうするんだい！　遊んでないで、この芋を厨房に運んでおくれ」

「はーい」

ようやく離れてくれた。
あぁ、よかった。

とっとっと
だんだん道が整ってくる。
きゃいきゃいと明るい話し声が聞こえてきた。

「あ！　ルゥちゃん」

私に気付いたのは、お洗濯を担当する女の人たち。
濡れた手をエプロンの裾で拭いて、優しく喉を撫でてくれた。

「ふふ、かわいい」
「今はカール様の猫なのよね。あの方が猫を抱いている姿なんて、想像できないわ」
「そうよね。近衛の頃も、いつも厳しいお顔をなさって職務に励んでらしたわ」
「隣国の王女と噂になったときも、まさかって思ったもの」
「あ、でも結構女性関係はいろいろ噂があったのよ」
「ええ？　そうなの？」
「ほら、町で有名な高級娼館があるでしょ。あそこのブランディーヌっていう看板娘がご贔屓だったとか」
「貴族の若いご令嬢たちが熱をあげて、贈り物合戦してたとか」
「あら、ご令嬢の侍女たちじゃなかった？　カール様をめぐって取っ組み合いの喧嘩をしたんでしょ？」
「あはは、本当？　見てみたかったわ。いつも取り澄ましたあの侍女たちが？」
「そうそう。でもわかるわぁ。カール様、格好いいもの」
「うーん、私は断然ユハ様派だなぁ」
「親衛隊の？　じゃぁ私はマルリ様」
「ヴァイノ様のほうが素敵よ」
「えぇ？　私は……」

女の子たちのおしゃべりは尽きることがない。
けど、カール……。
モテるだろうとは思ってたけど、ひどくない？
会話に出てきたいくつかの名前を頭に叩き込んで、私はぷんぷんしながら裏口をくぐった。

「お、来たな」

ずいぶん通い慣れてきた道を通って着いたのは、エメさんの部屋じゃなくて執務室。
木目が美しい大きな机の向こうに、この国の王様が座ってる。

「んなーぅ」

王様の足元にすり寄る。
剣だこのあるごつごつした手が、私を抱き上げた。

「愛い奴よ。いまからでもカールはやめて、私の元へ来ないか？」

「うにっ」

たしたし！
厚い胸板を叩く。

「ははっ、わかった、わかった。そなたは貴重な協力者だ。
嫌われたくはないからな。さぁ、エメの部屋へ行こう」

王様に抱かれて、私はエメさんの部屋へ向かった。

10　勉強会

「こんにちは、エメさん」

「いらっしゃい、ルチノーちゃん。待ってたわ」

エメさんがにこやかに出迎えてくれる。
王様の腕から飛び降りると、いつものように衝立（ついたて）の後ろに隠れて、
エメさんが用意してくれた服に着替えることにした。
聞くともなしに、王様とエメさんの会話が聞こえてくる。

「私のことは？」

「別に待ってないわ。早く仕事に戻りなさい。全く毎回毎回・・・
どれだけ暇なのよ」

「暇なわけではない。おまえに会いに来てるんだ」

「あー、はいはい。ルチノーちゃん、どう？　着方わかる？」

「うん、なんとか」

着替えた姿をお披露目した私を、エメさんも王様もとっても褒めてくれた。

「よく似合うわ！　あぁんっ、かわいい！」

「うむ。エメ、この間贈った服はどうした？　あれもいいだろう」

「ルチノーちゃんには大人っぽいんじゃない？」

「おまえが着るんだ。二人で並べば、なお眼福だな」

「だから私は着ないって」

勉強会の間、王様はずっとエメさんの部屋にいる。
私を連れてきてくれるだけのはずだったのに、おかしいなぁ。
はじめは部屋の前までだったんだけど、だんだん滞在時間が伸びてるんだ。

今日は保冷石の作り方。
失敗ばかりの私だから、エメさんを待たせる時間が多くって、その間、王様がおしゃべりをしてる。
エメさんは二言目には仕事をしろって言うわりに、追い出すわけでもない。
不思議な関係の二人だ。

「できた！　どう？　エメさん」

机に向かって没頭していた私がぱっと振り向くと、エメさんに抱きつこうとする王様を、エメさんが全力で押し返してるところだった。
えーっと・・・私、どうしたら・・・。

「ルチノーちゃん！　今後、こいつを連れてくるの禁止！」

「はい・・・」

やっぱり嫌がってたのかな。

「照れるなよ、エメ」

「照れてなーーーーい！！」

また押し合う二人。

保冷石、もう一個作ってみようかな。

帰ったらカールに見せよう。

褒めてくれるかな。

背後でじたばたする音を聞きながら、私は石に意識を集中した。

＊＊＊＊＊

訓練を終え、家路につく。

やわらかな明かりが灯っている。

「ただいま」

「おかえりなさい」

出迎えたルゥを抱き寄せて、キスをする。

毎日繰り返していることでも、その都度胸がじんわりと温かくなる。

今日の夕飯は、パン生地に炒めたひき肉をはさんで揚げたものとサラダ、とうもろこしのスープだ。

弁当もそうだが、ルゥは本当に料理がうまい。

「どうだった、今日の勉強会は」

「楽しかったよ！　これ見て！　私が作ったの」

「保冷石か。すごいじゃないか」

「ふふ。石に力を籠める練習をすることで、力の制御ができるようになるんだって」

初めはなかなかうまくいかなくて、石ごと凍ってしまったとか、半端な冷たさのものしかできなかったとか、身振り手振りを加えながら一生懸命話すルゥ。

彼女の声を聞いているだけで、俺は幸せな気分になる。

「それで王様がね・・・」

う、また出た。

城に通うようになって、頻繁に国王の話が出る。

一体何をやってるんだ、あの方は。

俺が仕事をしている間、共にエメの部屋にいるらしい王に嫉妬を覚える。

俺だって、ルゥが勉強しているところを見たい！

失敗して照れている顔や、大きな氷ができてしまってびっくりしている顔が見たい！

「ところでカールは？　今日はどうだったの？」

国王相手にもやもやしていると、ルゥに問いかけられ、はっと我に

返った。

「ん？　まぁいつも通りさ。城内の見回りをして訓練をして・・・」

夕食をとりながら、日中離れていた間のことを話す。
たわいもないひとときが、何よりも大切に思える。

「明日は休みだから、どこか出かけるか」

「わぁ、嬉しい！　私、まだ猫でしか出られないけど、いい？」

「俺はどっちのルゥも好きだよ」

「ん、ありがと」

ぽっと頬を染める。
ぽんぽんと頭を撫でると、嬉しそうに微笑んだ。
王都に来てから、実家へのあいさつやら国王への謁見やら家の片づけやらでばたばたしていて、まだ観光らしい観光をしていなかった。

「何か見たいものはあるか？」

「うーん、全然わからないから・・・カールに任せる」

「そうか」

ルゥの喜びそうなところはどこだろう。
景色のいいところ、珍しい食べ物。
雑貨屋も女性は好きか。
いくつか思い浮かんだ場所を元に明日の行き先を考えていると、食

器を洗い終えたルゥが、つん、と俺の袖を引いた。

「お風呂・・・用意できてるけど、一緒に入る？」

ル、ルゥから誘ってくれるとは！

毎日なんだかんだ言って一緒に入っているが、いつも俺から声をかけていた。

赤く染まった小さな耳が可愛らしい。

「んっ・・・こら」

思わず耳朶を甘噛みして、睨まれた。

そんな表情すら俺を煽る。

「明日は休みだから・・・朝までたっぷり時間があるな」

「そ、そういう意味じゃないよっ　お風呂に入ろうって言っただけ！」

「ん？　そういう意味ってどういう意味だ？」

「な・・・っ　カールの意地悪っ」

口をとがらせて、横を向いてしまった。

あまりからかうと臍を曲げてしまうので、この辺にしておく。

「ははっ、冗談だ。そういう意味があっても大歓迎だが、今はゆっくり風呂に浸かろう」

「うん・・・。あのね、今日は私がカールの髪を洗ってみたいんだ

けど、いいかな」

「嬉しいな。背中も流してくれる？」

「うん。洗いっこしよう」

「あぁ」

その後どうなったかって？　それはもちろん・・・。

「あんっ、カール・・・！」

「なんだ？」

「・・・っ、こんなにしたら、明日お出かけできないっ」

「明日っていうか、もう今日だな。大丈夫、ルゥは俺の肩に乗っていればいいさ」

「～～～！！！！」

涙目で睨んでも逆効果だって、教えたほうがいいのか？

楽しみが一つ減ってしまうから、あえて教えないことにしよう。

結局、王都観光は午後からになった。
ルゥの機嫌を直すのが、ものすごく大変だった・・・。

＊＊＊閑話　協力者　＊＊＊

エメさんとの勉強会初日。
私はお城の中で迷子になっていた。
それを助けてくれたのが、この王様だった。

あの日、私は本当に困っていた。

猫と人とじゃ視界が違うのはわかっていたはずなのに、一度案内してもらったくらいで大丈夫だと思うなんて、甘かった。
廊下ですれ違うお城の人たちは、「ほら、あれが王様の猫よ」「まぁ、きれいね」なんて言うばかりで、エメさんの部屋は教えてくれない。
ぐるぐると歩き回った末にたどり着いた中庭で、私は途方に暮れていた。
ちょうどいい大きさの石を見つけ、一休みすることにする。

それにしてもこの中庭、いい日当たりだなぁ。
もう寝ちゃおっかな。
猫になると、どうしても猫の習性につられちゃうのよね。
眠ーい。

ぽかぽかと温かい日差しに眠気を誘われて、石の上で丸くなろうとしたそのとき―

「おや、そなたは」

声をかけてきた人がいた。

「ほぉ、これが猫の姿か。本物そっくりだな。どれ、鳴いてみろ」

抱き上げて、顔を近づけてくる。

きゃあぁ、王様だ。

「ん？　鳴かんのか？」

「ん、んなーぅ」

「おお、かわいい声だな。もっと鳴け」

「なーぅ」

「おもしろいな。しゃべれはしないのか？」

「しゃべれます」

「わぁ！」

しゃべれといわれたからしゃべってみれば、びっくりした拍子に投げ出された。

くるりと一回転して着地する。

「驚かすなよ」

「す、すみません」

なんだかこの王様、くるくると表情が変わっておもしろい。

この間カールと一緒にお会いしたときは、初めて入ったお城の雰囲

気に圧倒されてたせいか、怖いって印象しかなかった。
でも今、一対一で話してみると、とっても気さくでいい人に思える。

「きれいなだけの人形みたいな姫君かと思ったら、存外おもしろいな」

王様も、似たような印象を持ったようだ。
人形っていうのはどうかと思うけど。

「これからエメのところへ行くのか？」

「はい」

「一緒に勉強か。羨(うらや)ましいな」

そうなの？
王様も魔術を習いたいのかしら。

「エメには以前から求愛しているのだが、謙遜したり照れたりして、さっぱり受け入れてくれんのだ。
最近ようやく城に住んでくれるようにはなったが、共に過ごす時間がなかなかなくてな」

私の不思議そうな顔を察して、王様はそう言った。

「えーと、それはつまり・・・？」

「私はエメが好きなんだ。正妃にしたいとずっと言っている。この頃じゃ言いすぎてあいさつのようになっている」

えええ、そうだったんだ！
エメさんたら、何も言わないから知らなかった。

「エメのところに行くなら、私が連れて行ってやろう。彼女に会う口実になる」

「あ、ありがとうございます。実は道に迷っているところでした」

「ははっ、そうだったのか。呑気そうに見えたが、声をかけてよかった」

「あれは・・・このお庭があまりに気持ちよくて、つい眠気が・・・」

「そうか。庭師をほめておこう。
で、エメの部屋まで私がエスコートしてもよろしいかな、姫君？」

「私の方からお願いします。でもその“姫君”っていうのは・・・」

私なんかにはふさわしくない呼び名だ。
ものすごく抵抗がある。

「姫君であろう？　滅亡したとはいえ一国の姫だ。礼節は守る」

「えっと、あの、慣れてないので・・・。私、猫ですし、誰かに聞かれたら変です。
こうしてしゃべってるのも、本当はよくないと思います」

「ふむ、そうか。では姫でよかろう。
飼い猫を可愛がって“姫”と呼ぶ輩はいるからな」

「それもあんまり・・・」

「ぬぅ。贅沢なやつよ。何と呼んでほしいのだ？」

「ルゥでいいです。私はただのルゥですから」

「ふぅ。エメの話だと“ただの”ルゥではなさそうだがな。まぁ、いい。ではルゥと呼ぶが、代わりに一つ頼まれてくれ」

「はい？」

私が王様の頼みなんて聞けるかしら。

「これから勉強会の日には、先に私の執務室（へや）に寄ってほしい。そして一緒にエメの部屋へ行こう。」

「それくらいなら」

私にもできる。

「そうか！　うむ、これは心強い味方を手に入れた。私とエメの恋路のため、協力を頼むな」

ええ！　そういうことになっちゃうの？

あああ、まぁいいか。

相手は王様だもんね。エメさんだってきっとまんざらでもないんだろう。

エメさんが私とカールのことを応援してくれたみたいに、私もエメさんのためにがんばろう！

にこにこ顔の王様に抱かれ、まずは執務室の場所を教わった。
そしてエメさんの部屋へ。

コンコン

王様が扉をノックする。

「はーい、ルチノーちゃん？　遅かったわね・・・ってなんでリックと一緒なのよ」

「迷子になっちゃったの」

「私が助けたんだ。そこで意気投合してな。これからは毎回私が連れてきてやろう」

「はぁ？　あなた仕事しなさいってば。さぁ、ルチノーちゃん、いらっしゃい。待ってたわ」

あれれ。
エメさんのためにがんばろうって思ったのは間違いだったのかな。
王様を好きなようには見えないけど。

王様は私を床に降ろすとき、耳元でささやいた。

「照れてるんだ。本当は私に会えてうれしいのさ」

「う、あ、はい」

そうかなぁ。
王様が言うんだからそうなのかな。

「では、またな」

「はい、ありがとうございました」

「ルチノーちゃん、気を付けてね。リックはほんと女好きだから。安易に近付いちゃだめよ」

うーん、これはやきもち??

よくわかんないな。

王様を振り返ると、バチンとウィンクされた。

私、安易な約束をしてしまったかも。

ちょっと後悔した、お勉強会初日だった。

＊＊＊閑話　協力者　＊＊＊（後書き）

どうも、うまくエピソードが入らず、閑話で挿入・・・。
あとで編集し直すかもしれません。

＊＊＊閑話　成人の儀　＊＊＊

その日、王様に連れられてやってきたエメさんの部屋には、先客があった。

「東の国の魔導士、レオナルドとリントレットよ。むこうでは魔術士のことを魔導士っていうの」

月光を集めたかのような銀色の髪に、理知的な紫の瞳の男性。
傍らには黒髪黒目の女の人。
銀と黒の2人の魔術士は、冴え冴えとした月夜を思い起させた。
衝立(ついたて)の後ろで、人に戻ってエメさんが用意してくれた服に着替えてからあいさつをする。

「はじめまして、ルチノーです」

「はじめまして。君が彼(か)のヴィルヘルミーナの姫君ですか。確かに女王の面影がある」

「ご存じなんですか！？」

「肖像画だけですけどね。魔導士なら誰でも一度は行ってみたいと思う国でした。
私もあと10年早く生まれていれば、訪れることができたのに・・・」

１０年？
レオナルドさんはどうみても２０代半ばにしか見えない。
この人も魔術で若返っている人なのか。
ということは、こちらの１０代後半に見えるリントレットさんも、
見た目通りの年じゃないのかもしれない。

「今日はまず初めに、ルチノーちゃんの成人の儀をしちゃおうと思うの」

「成人の儀って、あの、神殿でお祈りするやつ？」

「えぇ。あれは別に神殿じゃなくてもいいのよ。
要は力ある存在に、“大人になりました、これからもよろしくお願いします”って報告すればいいんだから。
魔術は契約だから、そういうのを怠ると運が落ちたり健康を害したりするのよね」

「へぇ」

「ルチノーちゃんの場合、１８を過ぎても何の報告もしなかったから、内なる力が暴走しかけてる。
誕生日を知らないから仕方なかったんだけどね。
これを済ませないと、魔術の勉強どころじゃないわ」

「そうなんだ。ここでできるの？」

「えぇ。床にあるのは儀式用の魔術陣よ。神殿の床にも同じものが刻んであるわ。
さらに外側に、ルチノーちゃんの力が解放されたとき用の魔術陣

が描いてあるわ。
　あなたの力は大きすぎるから、普通の魔術陣で抑えきれるかわからないの。
　リントレットは魔術を中和する能力があるから、もしあなたが暴走したときには止めてもらえると思って呼んだの」

「あああの、リントレットです。私なんかがお役に立てるかわかりませんが、精一杯がんばります！」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

リントレットさんは、とても腰の低い人だった。
てっきりレオナルドさんの方が力が上で、リントレットさんはお付きの人か見習いかと思ったんだけど、違ったみたい。

「レオナルドは私の補佐ね。ルチノーちゃん、陣の真ん中に立って」

言われた通りに、部屋の中央に描かれた不思議な文様の中央に立つ。

「あ、その首輪（チョーカー）ははずしてちょうだい。陣の中にいれば大丈夫だから」

エメさんに言われて、自分ではずそうともたもたしていると、リントレットさんがぱちんと取ってくれた。

「そうだ、エメさん。今度この留め金の鍵を作ってくれる？」

「いいけど、何？　普通に生活してはずれちゃった？」

「普通に、は、大丈夫なんだけど・・・」

「ふうん？　いいわよ。今度来る時までに用意しておくわ」

「ありがとう」

首輪（チョーカー）をそのままリントレットさんに預けて、文様の中央に戻る。
エメさんとレオナルドさんが私の前後に立ち、両手を広げて口の中で何かを唱え始めた。

「あ・・・・あぁ・・・っ」

胃の中を何かが駆け巡るような感覚。
身体が熱くなって、でも冷や汗が出てくる。
足元から風が噴き出てきて、私の髪をあおる。
いや、足元じゃない。
私の内側（なか）からだ。

「くっ・・・エメ師、これはキツイですね」

「えぇ。あなたに匹敵する力でしょう。いままで何の訓練もしてこなかったから、余計だわ」

身の内を荒れ狂う嵐に耐える。
ピシッと床に亀裂が入った。
陣の文様が途切れる。

「まずい、リントレット！」

「はい、ご主人様！」

駆け寄ったリントレットさんが、私の体を支えた。
リントレットさんが私に触った瞬間、すっと力が抜けるような感覚があって、楽になった。
これが中和の能力・・・？

エメさんの詠唱が終わる。
いつのまにか嵐はおさまり、わずかに手の震えが残っているだけだった。

「これで終わりよ。あとは力の制御を覚えて行けばいいわ」

「はい・・・。ありがとう、エメさん、リントレットさん、レオナルドさん」

「ふふ、いいのよ」

「大丈夫ですか？　すごい力でしたね。お役に立ててよかったです」

「・・・」

リントレットさんに手を借りて立ち上がる。
あれ？　レオナルドさん、何か怒ってない？　私、何かしたかしら。

「君、さっき私のことを何と呼びました？」

ひゅっと冷たい風が吹いた気がした。
風は、私ではなくリントレットさんに向いていた。

「え。レ、レオナルド様？」

「違いますね」

じりっとレオナルドさんがリントレットさんににじり寄る。
どどど、どうしたんだろう。

「あの二人のことは気にしないでいいわ。いつものことなの。
身体のことだけどね、今夜あたり熱が出るかもしれないから、カールに言っておいてね」

「あ、わかった。本当にありがとう、エメさん」

エメさんが言った通り、家に着いた途端に高熱が出て、寝台から起き上がれなくなった。
仕事から帰ったカールが、心配そうに覗き込んでくる。

「何か食べられるものはあるか？　冷たいものならいいかな」

「大丈夫・・・。魔力酔い？とか言ってた。レオナルドさんもよくなるんだって」

「へぇ。力があるのも、大変なものなんだな」

額の汗をカールが拭いてくれる。
なんだか懐かしい感じ。
そういえば、前も熱を出して看病してもらったことがあったな。

少し眠って目が覚めたら、カールがアイスクリームを作ってくれてた。

私と同じことを思い出してたみたい。

「おいしい・・・！」

「よかった」

「お仕事で疲れてるのに、ごめんね」

「ルゥが喜んでくれるのなら、俺は何でもするよ」

極上の笑顔で頬を撫でられて、熱のせいじゃなくて顔が熱くなった。

そういうこと、平気で言うんだから、もうっ

あぁ、でもこうやって甘やかされるのって気持ちいいな。

カールには悪いけど、ちょっと得した気分。

熱が下がるまで、もう少し甘えさせて、ね。

＊＊＊閑話　成人の儀　＊＊＊（後書き）

レオナルドとリントレットについての詳細は活動報告にてｗ

11　飲み会

＊＊＊＊＊

「今日は同僚と飲み会なんだ。遅くなるから先に寝てて」

「わかった。いってらっしゃい」

いつものようにキスをしてカールを見送る・・・んだけど・・・。

「んっ・・・んん・・・」

侵入してきた舌が、尖らせた先で上あごをくすぐり、私を吸う。
長い指がうなじを撫でて、がくっと膝から力が抜けるまで離してもらえなかった。

「あ・・・はぁっ・・・カール・・・」

「しまった・・・。夜遅くまで会えない分、補充しようと思ったら、やりすぎたな。
　出かけたくなくなってしまった」

ぎゅうっと抱きしめられる。
私もカールの背中に手を回して、きゅっとくっついた。

「できるだけ、早く帰ってくる。戸締りはしっかりしておいて」

「うん」

今度こそ軽いキスをして、カールは出かけて行った。

そんなに遅くまでいないんじゃ、今日は何をしようかな。
そうだ、明日のエメさんとの勉強会に、お菓子を持って行こう。
なにができるかと、家にある食材を確かめる。
小麦粉、お砂糖、卵・・・あ、林檎。
林檎のパイがいいかな。シナモンがないか。

「ヴュストさーん、おはようございまーす！」

「はーい」

ちょうどいいところに、行商の人が来てくれた。
ショールを目深に被り、玄関に向かう。
辺境にいたころは、村の人にもらったり兵舎に来た行商の人からカールに買ってきてもらったりしてたけど、王都では戸別にお店の人が来てくれるから便利だ。
一日置きくらいにご用聞きに来てくれて、その場で買うこともできるし、後で配達してもらうこともできる。
うちに来てくれるのは、いつもにこにこして人のよさそうなおじさん。
時々恰幅のいいおばさんが一緒に来ることもある。

「今日のおすすめはこれとこれだよ」

「じゃぁ、こっちをください。あとシナモンはありますか？」

おじさんが勧めてくれた葉物野菜を手に取る。

「あー、今はないけど、午後もう一回このへん回るから、その時届

けるよ」

「ありがとうございます」

「こっちこそ毎度どうも。あ、奥さん。この間、城に納品に行ったときにね、旦那さん見かけたよ。いい男だねぇ」

「わわわ。ありがとうございます」

カールがほめられたことも嬉しいけど、“奥さん”っていう呼び方に照れちゃう。

“ヴュストさん”って呼ばれるのにも、まだ慣れない。

「ははっ　赤くなっちゃって、かわいいね。うちのも若いころはかわいかったんだけどなぁ」

「あのふくよかな方が奥さんですか？」

「ふくよかっつーか、太ってんだよ。ははは　今のは内緒な」

おじさんは人差し指を口元にあてて、ついでに玉ねぎを2こ、袋に入れてくれた。

おまけというより口止め料かな。ちょっと得した気分。

「じゃぁ、また午後来るから」

「はい。よろしくお願いします」

シナモンは午後か。

お菓子作りはあとにして、お洗濯をしてしまおう。

＊＊＊＊＊

「カールの復帰に」
「我らが親衛隊（ガーディアン）に」
「ブルクハルト王家に」
「「「「乾杯！」」」」」

小気味良い音をたてて、麦酒（エール）がなみなみと注がれたグラスがぶつかりあう。
城下町にある『三匹の子猫亭』には、俺を入れて5人の親衛隊（ガーディアン）員が集まっていた。

多少お調子者だが、情報収集に長けるマルリ。
騎馬戦と長槍（パイク）が得意なヴァイノ。
がっしりとした体格の、戦斧（ハルバート）使いのオロフ。
片手剣（フランベルジェ）を扱わせたら、右に出る者はいないユハ。
ちなみに俺は、両手持ちの長剣が得物である。
皆、年が近く、よくつるんでいる仲間たちだ。

「しっかしなぁ。カールが結婚とは！　しなさそうな奴に限って早いんだな！」

一杯目を一気に空けたマルリが、俺の背中をばんっと叩く。

「ごほごほっ　ここにいる奴は、誰もしてないのか？」

近衛のときも一緒だったユハとマルリのことはよく知っているが、他は親衛隊に入ってからのつきあいなので、私生活までは知らなかった。

「いんや、オロフんとこは、この間娘が生まれたよな」
「あぁ。リナというんだ。かわいいぞ。目に入れても痛くないとは、こういうことを言うんだな」
「おまえの娘なのにかわいいのか？」

ヴァイノが茶々を入れる。

「悪かったな。嫁（うちの）に似たんだよ」
「そりゃよかった」
「でも耳の形は俺にそっくりなんだぞ。手なんかこんなにちっちゃくてなぁ」
「こいつ、娘自慢始まると長いんだよ。ヴァイノは婚約者がいるんだよな。俺は何の予定もナシ」
「ユハは？」
「俺もないな。女は面倒でいかん」
「っかー！　よく言うよ。城の侍女の間で、カールかユハかで派閥が出来てたんだぜ。
　ここにきて、カールの結婚でおまえの一人勝ちじゃないか。よりどりみどりさ」
「マルリだって、城の女たちとしょっちゅうしゃべってるじゃないか」

ユハがグラスを傾けながら、つまらなそうに言う。
奴のグラスは、いつのまにか麦酒から白い液体に変わっていた。
甘味（かんみ）好きのユハが好んで飲む、パナマという酒だ。

「あれは情報収集。女の噂話って馬鹿になんないのよ？」
「長いばかりで中身のない話だろ。うんざりする」
「わかってないなぁ。女の噂話はすごいんだぞ。隣の晩飯から、上司の下着の色までわかる」
「それ知ってどうなるんだよ」

オロフの相手をしていたヴァイノが会話に入ってくる。
この手の話には、つっこみたくなる性分らしい。

「ま、どうにもならんわな。例えだよ、例え」
「例えが悪すぎるだろ」
「んなこと言ったってしょうがないだろ。毎日毎日機密事項ばかりしゃべってるわけじゃないんだから」
「やっぱりくだらんな」
「ユハ～」

ばっさり切ったユハの肩に、マルリがすがりつく。
ヴァイノは肩をすくめている。
オロフはといえば、大柄な体相応に、がつがつと食事を口に運んでいた。
口いっぱいに頬張った肉を麦酒で流し込んで、ちらっと俺を見る。

「で、おまえの嫁ってどんなんよ」
「あっ、そうそう。俺も聞きたかった」
「カールの噂は、隊が違っても結構聞こえてたぞ。相当遊んでたって」
「それは誤解だ。なぁ、ユハ」
「誤解かどうか・・・。女が切れたことがないのは確かだな」
「おいおい、ちょっと待て」

「そうだよな～。うちの嫁も、一時期騒いでた。だから俺もおまえの浮名はかなり知ってるぞ」
「そのカールが落ちるんだからな。美人か？　美人なのか？」
「美人というか・・・かわいいかな」
「うぉぉ、惚気（のろけ）んじゃねぇよ！　まぁ、飲め。で、どうかわいいんだ」
「おまえが聞くから答えたんだろ。どうって・・・顔とか仕草とか」
「普通すぎる。もっと具体的に言え」

ヴァイノ。つっこみ属性な奴め。

「リナはなぁ。笑ってもあくびをしてもかわいいぞ！」

「おまえの娘の話はもういい。んで耳が似てて手が小さいんだろ。足も小さいんだよな」
「そうそう。なのに爪がしっかりあって・・・」
「だからいいって。カールの嫁の話だろ。年は？　背格好は？」
「と、年？　年は・・・」
「なんでユハを見るんだよ。カール、おまえってば昔から困るとユハを頼るよなぁ」
「う。背はな、小さい方だろうな。小柄っていうのか。腰も折れそうに細いし」
「で、胸がでかいのが好みなんだよな」
「案外俗っぽいな」
「リナは絶対嫁にやらん」
「オロフ、話聞けよ。自分でふっといてなんだ」
「話が進まない。カール、で、年はいくつなんだ？」

ユハに冷静に問われる。
これは逃げられないか。

「・・・8」
「28？」
「3つ下か。どこで出会ったんだ？　赴任先の辺境か？」
「いや」
「王都か？　戻ってきてから？　行く前から付き合ってたのか？」
「いや、出会ったのは辺境だが、年が違う。・・・18だ」
「えぇ！？」
「じゅうはち！？」
「18！？」
「おっまえ・・・犯罪だ！」

テーブルの下でどかどかっと足を蹴られた。
一発多かったぞ。誰か二回蹴りやがったな。

「そりゃかわいいわな～」
「毎日そそくさと帰るわけだよ」
「意外だったな」
「あ～、もう、飲め飲め！」

麦酒（エール）は蒸留酒に変わり、どんどんグラスに注がれる。
空の瓶が増え、酔いがまわる。
早く帰るとルゥに言ったが・・・どうも無理そうだ。

ユハに担がれて家に帰ったのは、日付をとうに過ぎてから。
寝てていいと言ったのに、ルゥは起きて待っていた。
どさりと居間のソファに倒れ込む。
ルゥの顔を見て安心したからか、家について気が抜けたのか、急に

眠気が襲ってきた。
いけない。このまま寝たら、おやすみのキスができな・・・・・い・・・。

「くすっ　おやすみなさい、カール」

翌朝、ちゃんとキスしたよ、とルゥが教えてくれた。
覚えてない。残念だ。

12　訪問者

＊＊＊＊＊

焼きたての林檎のパイをほおばる。
うん、おいしい！
生地はさくさく、中の煮込んだ林檎はじゅわっと甘くて、我ながらよくできた。
でもね、気付いちゃったの。
これ、猫じゃ持っていけないじゃない・・・。
カールは、あんまり甘いもの食べないし、どうしよう。

どん！　と玄関の扉に何かがぶつかる音がして、目が覚めた。
いけない。ソファで転寝（うたたね）してた。
がちゃがちゃと鍵を開ける音。
カールが帰ってきたんだ。

「おかえりなさい、カー・・・あ、こ、こんばんは」

「どうも、夜分遅くにすみません。少し飲ませすぎてしまったようで・・・」

帰ってきたカールは、同僚らしい男性に支えられてぐったりしていた。

さきほどまで私が横になっていたソファに運んでもらう。

「ん・・・ルゥ・・・ただいま」

「おかえりなさい。こんなに飲んで・・・大丈夫?」

「だ・・・か、ら・・・キ・・・」

赤い顔をしたカールは、何か口の中で言っていたけれど、聞き取れないままに寝息を立て始めた。

決してお酒が弱い方ではないはずだ。こんなになるまで飲むのは珍しい。よほど楽しかったのだろう。

お礼を言うために、送ってきてくれた男性に向き直る。

短めの黒髪。切れ長のこげ茶の瞳は、ちょっと冷たい印象を与える。

引き締まった体は、さすが親衛隊の人で、カールより少し低いけどかなり背が高かった。

男性は、ユハ＝アウノ＝テラストと名乗った。

13　林檎パイ（前書き）

ユハ視点です。

13　林檎パイ

＊＊＊＊＊

カールの家の玄関を開けると、中から甘いいい匂いがした。
俺は甘いものが好きだ。
男のくせにと言われるが、非番の日には、城下町の菓子店で新作菓子を買い求めるのが一番の楽しみだ。
漂ってくるのは、林檎とバターの香り。
カールの奥方が、菓子でも焼いたのか。なんの菓子だろう。
鼻を利かせていると、奥から人影が現れた。

「おかえりなさい、カー・・・あ、こ、こんばんは。
はじめまして、ルチノーと言います。いつも夫がお世話になります。
送ってくださったんですね。すみません。ありがとうございました」

居間に案内され、カールをソファに寝かせる。
深々と頭を下げた彼女は、印象的な強い瞳をしていた。
なるほど、これはカールが隠したがるわけだ。
様々な人種が集まる王都でも珍しい、銀とも見まごう白髪（はくはつ）と、紅玉（ルビー）のような瞳。
透き通るような白い肌は、生まれてこの方、日の光を浴びたことがないかのようだ。
・・・体が弱いと言っていたから、本当に外に出たことが少ないのかもしれない。

「どうも、夜分遅くにすみません。少し飲ませすぎてしまったようで・・・。
　ブルクハルト国親衛隊、ユハ＝アウノ＝テラストです。噂の奥方に会えて光栄です」

「噂の？」

小首をかしげて、きょとんと俺を見る。
そういえば１８と言っていたな。小柄なせいか、もう少し下にも見える。幼さの残る動作がかわいらしい。

「えぇ。俺たちがいくら連れて来いっていっても一向に連れて来ないから、どんな女性なんだろうと噂になってたんですよ。こんなかわいらしい方だったとは。カールが見せたがらないのも納得です」

「そんな・・・」

女性と話すのは苦手が俺だが、酒のせいかすらすらと言葉がでる。
カールの奥方は、白い頬を染めてはにかんだ。
これで本当に人妻だろうか。カールの奴、実はあまりの歳の差に、まだ手を出していないのではないか？
それほどに彼女は初々しい。

ところが、その時俺は、気付かなくていいものに気付いてしまった。
ショールで隠された胸元に覗く、赤い跡。
カールに愛された証だった。どんなに清純そうに見えても、彼女も所詮（しょせん）女か。
まぁ、当然だよな。結婚しているのだから。
そうは思ったが、不意に黒い感情が芽生えた。

「奴はモテるせいか一人に執着しなかったもんでね。女といえば、遊びの相手。
いつでもとっかえひっかえで、まさか結婚するとは・・・あ、失礼」

俺の言葉で、彼女の表情が曇る。
何を言っているんだ俺は。飲みの席の、男同士の会話じゃないんだぞ。

「少し・・・聞いてはいますけど・・・。
今は違いますよね・・・？」

胸の前で合された両手が、わずかに震えている。
必死の瞳が、俺をじっと見つめてきた。
罪悪感が胸をえぐる。

「ももも、もちろんです。今俺が言ったのは、同僚のマルリってのがいるんですが、こいつがすごくおしゃべりで、あることないこと言いふらしてるんですよ。そんな奴の根も葉もない噂話です。
カールがあまりに可愛らしい奥方をもらったものだから、つい羨ましくなって口が滑りました。
俺は近衛騎士時代からずっとカールと一緒に勤めてますが、こいつの女関係の話なんてほとんどでまかせです。あの容姿ですから、女性に人気があるのは当然ですけど、生真面目なこいつはちっとも相手にしなくって。
だからそんなカールが結婚したって聞いて、みんな驚いたんですよ。今日の飲み会もそうですが、隊でも毎日惚気話を聞かされててね。若くてかわいらしい奥方だっていうから、一度お会いしてみたかったんです」

俺は冷や汗をかきながら、必死に言い訳をした。
いまだかつて、女性相手にこんなに饒舌になったことはない。

「まぁ、そうだったんですか。あ、私ったらお茶もお出しせずにすみません。もしよかったら、パイもあるんですけど、いかがですか。こんな時間に食べるのはいけないかしら」

ぱっと笑顔になった彼女が椅子を勧める。
玄関で感じた匂いは、パイだったのか。

「いえ、いただきます。甘いものには目がないんです。実は、お邪魔したときから家中に漂う甘い香りが気になってました」

「くすくす。そうだったんですか。昼間林檎のパイを焼いたものですから。お口に合うといいんですけど」

そう言って彼女は、きれいな焼き色のついたパイと、花の香りのお茶を出してくれた。

「あ、うまい。ほどよい甘さで、林檎の食感もしっかりあって、うまいです」

「ありがとうございます」

向かいに座る彼女も、同じお茶を飲んでいる。
椅子が2つしかないところを見ると、今俺が座っている席に、カールがいつも腰かけているのだろう。
そして、こんなふうに彼女の手料理を食べている—

「菓子作りはどこかで勉強を？」

「そんな、とんでもない。ただの趣味です。知り合いに作り方を聞いたり、自分の好みで分量を調整したりするだけです」

「へえ。いや、ほんと、うまいですよ。
んん、あそこの味に似ています。城下町にあるアドルフ菓子店。人気の老舗なんですよ。
同じ系列の店の知り合いでもいらっしゃるんですか？」

「ええ？　そんなんじゃないです。そんなに似てますか？」

「そうですね。味付けのバランスといい、生地の感じといい、そっくりです。砂糖だけじゃなくて少し蜂蜜を入れてますか？」

「入れてます。あと干し葡萄」

「ああ、なるほど。この甘さは干し葡萄か。アドルフもそうなのかな」

中身の林檎を取り出して、小さくちぎって口に運ぶ。
舌に乗せて味わうと、深みのある甘さが感じられた。

「ユハさん、お詳しいんですね」

「あ・・・すみません。つい夢中になって」

初対面の女性の前で、何をやっているんだ、俺は。
思いがけず好みの味に出会って、家で新作菓子の分析をするように味わってしまった。

「ううん、嬉しいです。カールもおいしいって言って食べてはくれるけど、そんなに甘いものが好きなわけじゃないから。
　このパイ、自分ではうまくできたと思ってるんですけど、ちょっと作りすぎちゃって、どうしようかと思ってたんです。おいしそうに食べてもらえてよかった」

「そうなんですか？　たくさんあるなら、いただいてもいいですか？」

「もちろんです。ご家族はいらっしゃいますか？　お一人？　じゃぁ切ったものを箱に入れますね」

台所に立った彼女は、ほどなくして箱にいれたパイと茶葉を持って戻ってきた。

「このお茶は前の赴任先の特産品なんです。香りはいいけど味はあっさりしてるので、お菓子に合うかと思って。
　よろしかったらご一緒にどうぞ」

「ありがとうございます。お茶もおいしかったです」

そういえば辺境で出会ったと言っていたか。
カールめ、左遷先でこんな出会いがあるとは、運のいい奴。

「ユハさん？」

「あ！　いえ、うちで大事にいただきます」

差し出された箱を、受け取る途中だった。

小首をかしげた彼女が、俺を見ている。
癖なのだろうか。さらりとゆれる髪に目を奪われる。

「くすくす。本当に甘いものがお好きなんですね」

口元に手を当て、おかしそうに笑う。
もっと笑ってほしい、その笑顔をずっと見ていたいと思う。
こんな感情、どんな女性にも抱いたことはなかった。
なんてことだ。カールの奥方だぞ。人妻だ。

動揺しつつ帰りの支度をしていると、彼女がカールに声をかけにいった。

「カール、寝室で寝よう？　ここじゃ風邪をひくわ」

「ん・・・」

酔い潰れたカールに、起きる気配はない。

「よければ、俺が運びます。おいしいお菓子のお礼に」

遠慮する彼女を手で制し、もらった菓子の箱を置いて、半ば強引にカールを担ぎ上げた。
俺の心中を知らない同僚は、呑気に寝息を立てていた。
二階だという寝室に足を運ぶ。大きな寝台が目に入る。
ここで二人は毎日眠っているのだ。
くそっ
降ろし方が多少乱暴になったのは仕方あるまい。

「では、帰ります。ご馳走さまでした」

「いえ、ありがとうございました。ぜひまた遊びに来てください」

「・・・いいんですか？」

「え？　えぇ、もちろん。さっきも言いましたけど、カールはお菓子あんまり食べないから、ユハさんがおいしそうに食べてくれて嬉しかったです。そうだ。また何か作ったら、彼に持って行ってもらいますね」

「職場に持ってきたら、味のわからない輩に食い尽くされます。そんなもったいないことしたくないな。食べに来ます。いつでも呼んでください」

「やだ、ユハさんったら」

ころころと笑う彼女。
伸ばしかけた手を押さえるのに苦労した。

「あいつ、どうせ二日酔いだと思うので、明日は午後からでいいって言っておいてください。
上司には俺から話しておきます」

「わかりました。何から何まで、ありがとうございます。おやすみなさい、お気をつけて」

「はい、失礼します」

ぱたんと閉じられる扉。
内側から鍵がかけられる音が、寝静まった通りに響く。
ほどなくして家の明かりが消えるのを、俺は路地に立って見つめていた。

宿舎に帰り、自分の部屋の寝台に横になる。
独り身の俺は、一軒家は面倒で、近衛時代からの宿舎にずっと住んでいる。
机の上には、彼女にもらったパイの箱。

頭の上で手を組んで、ルチノー、と口の中で呟いてみた。
それだけで、心にじんわりと温かなものがこみあげてきた。
まいったな。これは本物だ。
女なんて面倒だと、これまで言い寄ってきた奴らは相手にもしなかったのに。
よりによって、親友ともいえる同僚の妻に一目惚れするとは。
若すぎる嫁だと、マルリたちと共にカールをからかっていたが、人のことなど言えないではないか。

また遊びに来てください、と彼女は言っていた。
社交辞令だろうが、誘われたのは事実だから、これを口実にまた行ってみよう。
カールは嫌がるだろうな。
普段彼女を独り占めしているんだから、たまのお茶くらい許してもらおう。

さて、他にどんな手を使えば彼女に会えるだろう。
食材を持って行って、菓子を作ってくれというのはどうか。

図々しいだろうか。
アドルフ菓子店の菓子を持っていくのもいいかもしれない。
あのパイは、本当にそっくりだった。
独学でプロの味を出せるというのはすごい。
あとは・・・。

彼女を想うほどに目が冴えてくる。
空が白み始めても、一向に眠気は訪れなかった。

14　二日酔い

＊＊＊＊＊＊

「うぅ・・・」

頭が痛い。気持ちが悪い。完全に二日酔いだ。

「おはよう、カール」

ルゥが、檸檬（れもん）をしぼった冷たい水を持ってきてくれた。
一気に飲み干して、二杯目を頼む。
すっきりした喉越しが、頭の靄（もや）を晴らしていく。

「俺、昨日どうやって帰ってきた？」

「ユハさんが送ってきてくれたのよ。午前中は休みって言っておくから、午後からゆっくり来いだって」

「そうか。あー、飲んだ。もう当分酒はいらないな」

「くすくす・・。あのね、午後からって聞いて思いついたんだけど、出勤するとき、猫の私とこれをお城に運んでくれない？
昨日作ったのはいいんだけど、運べないことに気付いたの」

ルゥが手に持っていたのは、パイの皿。
丸まる一個、乗っている。他にもまだ家用にカットしたものがあるという。
今日は勉強会の日だったか。エメに差し入れするんだろう。

「わかった。じゃ、それまでもう一眠りするから、お昼に起こしてくれ」

「ん。水差し、置いておくね」

「ありがとう」

ぱたん、と寝室の扉が閉まる。
ユハが送ってくれたのか。ルゥに会ったかな。
マルリじゃなくてよかった。職場で何を言いふらされるか、わかったもんじゃない。

ぱたぱたと、階下でルゥが歩く音がする。
時折、かたんと何かを動かすような音。掃除でもしているのか。
頭痛はおさまったが、胃のあたりがむかむかする。
最後に飲んだ、おかみお手製の果実酒が悪かったな。
やたらめったら度数が高くて、そのくせ変に甘ったるかった。

出勤は午後からか。助かる。
ルゥの付き添いもあるから、少し早めに家を出よう。
勉強の様子も少し見られるといいが、見せてくれるだろうか。
ふあぁ、と欠伸(あくび)が出る。
水音が聞こえてきた。今度は洗濯かな。
ルゥがくるくると働いている様子が目に浮かび、知らず口の端があがる。

窓の格子からは日の光が差し込み、水差しに反射してきらめいている。
ゆったりとした気分で、寝具に体をもぐりこませた。
目を閉じると、軽く体が揺れている感覚がある。まだ酒が残っているのか。
昼までに抜かないとな。
ルゥの気配を感じながら、俺は眠りについた。

「んな」

ちょっと待ってて、というように首を振って、ルゥは執務室の扉の下にある猫窓から中に入って行った。
こ、こんなものが取付けられていたのか。
中で物音がして、すぐにルゥを抱いた国王が出てきた。
妙に抱き慣れているじゃないか。

「くくっ、そう怖い顔をするな。菓子があるんだって？　エメの部屋で相伴にあずかろう」

ゆったりと歩く王の後ろをついていく。
広い肩越しに、ルゥが俺を覗いてきた。
いい。俺を見なくていいから、それ以上王にくっつくな！

すぐにでも奪い返したい衝動を、ぐっとこらえる。
エメの部屋までだ。エメの部屋までの我慢・・・。
とても長く感じた道のりは、実際には大した距離ではなかっただろう。

エメの部屋の扉にも、猫窓がついていた。
これなら、王と一緒に来る必要はなかったんじゃないか？

「ルチノーちゃんったら、またリックと来たの？　もう連れてこないでって言ったじゃない」

「今日は差し入れがあるというからな、一緒に食べにきたんだ」

「仕方ないわね・・・あら、カール。久しぶり」

「・・・どうも」

また、だと？
エメは嫌がっているのに、ルゥが王を誘っているのか。
やけに頻繁に国王の話題が出るとは思っていたが、ルゥ、まさか・・・。
胸を焼く想いは、衝立（ついたて）の奥から現れたルゥを見て、一瞬で霧散した。

「まぁ！　今日もとってもかわいいわ！」

「緑も似合うな」

並んでうなずき合うエメと王は、娘の晴れ姿に目を細める親のようだ。
そんな二人ににっこりと微笑みつつ、ルゥはまっすぐ俺の前に歩いてきた。

「あの、カール、どうかな」

胸元が大きく開いた意匠（デザイン）。

白い肩も、半分ほど出ている。
やわらかそうな深い緑の布地には、たくさんの襞（ひだ）がついていて、ルゥの体の線（ライン）に沿って流れ落ちている。
幅広の金のベルトが、腰の細さを強調していた。

「カール？　あの・・・変、かな」

呆然と見つめていると、ルゥが不安そうに問い直してきた。

「あ、いや、驚いたんだ。とても似合うしすごくきれいだ」

どう表現したものか、うまい言葉は見つからなかったが、とにかく美しかった。
家では「高いものはいらないから」と、ごく一般的な服を着ているルゥだったが、着飾るとこんなにも変わるのか。

「そうよねぇ。もう毎回これが楽しみで！」

「髪もなんとかしたいな。侍女に頼めるといいが、そうもいかんしな」

「・・・編むくらいならできます。妹にやらされていたので」

「本当？」

ルゥが意外そうな顔で俺を見てくる。
そういえば、猫のときにブラッシングはしてやっても、人の姿で髪をいじったことはなかった。
今日から風呂上りに梳いてやろう。

エメに櫛と紐を借りる。
あまり時間もないので、左右の髪を編み込んで後ろで一つに結んだ。
残った髪は、自然に降ろす。
細い首や滑らかな肩に触れないようにするのが大変だった。
二人きりであったなら、すぐにでもむしゃぶりつきたかった。

「うまいもんだな」

「ほんとね。相当やらされてたのね」

「カール、ありがとう」

振り返って微笑むルゥ。
抱きしめたくなるのを、拳を握ることで堪えた。

「う〜ん、おいしい！　お料理もそうだけど、お菓子作りも上手なのね！」

四人でテーブルを囲み、ルゥの作った林檎のパイを食べる。
お茶はどうするのかと思ったら、魔術で湯を沸かし、ルゥが淹れた。
そんなこともできるのか。

「はじめはいきなり沸騰しちゃったり、逆にぬるかったり、一気に蒸発しちゃったりしたの」

「液体は制御が難しいのよね」

「今日は一回でできたな。たいしたもんだ」

「そうだわ。せっかくお料理が得意なんだから、魔術だけで何か一から作ってみましょう。
ちまちま術だけ練習するより、必要なことから覚えるほうが効率がいいのよ」

「なるほどな。私は肉料理が食べたい」

「あなたの好みは聞いてないわ。でも焼くだけってとこから始めたらいいかもね」

お茶を飲みながら、かわされる会話をただ聞いている。
エメはともかく、王よ、なぜそんなになじんでいるのだ。
普通国王というのは、もっと忙しい身なのでは？
このなじみ具合といい、ルゥの受け入れ具合といい、たぶん毎回参加している。
家で話には聞いていたとはいえ、今日初めて顔を出した俺は、疎外感を覚えて居心地が悪い。
忘れていた苛立ちが、胸を襲う。

「では、俺は仕事に戻ります」

耐えきれなくなって、席を立った。

「はーい。ルチノーちゃんはお預かりするわね」

「近いうちに式典があるから、よく訓練しておけと隊長に伝えてくれ。
あいつのことだ、忘れているかもしれん」

「御意」

「カール、送ってくれてありがとう」

立ち上がって見送るルゥに目でうなずいて、エメの部屋をあとにした。

＊＊＊＊＊

ぱたん、と扉が閉まる。

カール、何か怒ってた・・・？

「若いっていいわぁ」

「冷静沈着、戦場にあってはどんな敵にもひるまない両手剣使いのカールが、ルゥには振り回されているようだな」

エメさんと王様は、全部わかったような顔をしてうなずき合っている。

やっぱり何かあったのか。

この服のせい？　胸元が開きすぎてたのかな。でも似合うって言ってくれたし。

髪を結ってくれたときも、にこにこしてた。

カールにあんな特技があるとは知らなかった。

パイが口に合わなかったのかな。甘さは控えめにしたつもりだったんだけど。

疑問を口にした私に、二人は苦笑して違う、と首を振った。

「焼きもちよ、焼きもち」

「自分の知らない面を見せられるとな、男ってのは案外衝撃(ショック)を受けるもんだ。
すべて知っていたつもりの相手ならなおさらだな」

「2～3日、お夕飯にカールの好物でも作ってあげれば、すぐに機嫌が直るわよ」

「いや、それよりも夜、奉仕(サービス)してやったほうが即効性があるぞ」

「あなた、なんてこと言って・・・」

「即効性があるほうがいいです。王様、どうすればいいんですか？」

「ルチノーちゃん！」

「だって、カールが怒ったことなんていままでなくて・・・」

「怒ってるんじゃないわよ。焼きもちだって。あぁ、もう、泣かないの！」

「よし、私が手取り足取り教えてやろう」

「リック！」

「なんならエメと一緒に実演してやってもいいぞ。さぁ、エメ。遠慮なく咥(くわ)えてみろ」

「あああああなた、何教えようとしてるのよーーーー！」

15　仲直り

＊＊＊＊＊

「よぉ、カール。具合はどうだ」

親衛隊舎に着くと、ヴァイノとオロフが声をかけてきた。

「あぁ、大丈夫だ」

「それにしちゃ顔色が悪いぞ。休んでもよかったんじゃないのか」

「いや・・・」

気遣う二人に手を振って、隊長室に向かう。

二日酔いは、午前中たっぷり寝たことで解消されている。

顔色が悪いとすれば、原因は先ほどまでのお茶会だ。

途中でマルリにも会った。

「カール！　大丈夫かい？」

「あぁ。世話かけたな」

「いや、楽しかった。また行こう」

「あぁ」

「本当に大丈夫か？　午後は適当に流して早く帰れよ」

「そこまで柔じゃないさ。ありがとな」

そうこうするうちに、隊長室の前についた。
軽く扉をたたいて声をかける。

「カールです。入ります」

「おぉ」

入室許可の返事を受け、中に入る。
雑然とした室内。
中央の机にどっかりと両足を乗せて、大柄な男が巻き煙草をくゆらせていた。
くすんだ金髪、色素の薄い瞳。頬には大きな傷がある。
親衛隊隊長、コスティ＝トピ＝スティネンだ。
国王より５つ年上の４３歳で、兄弟のように仲がいい。

「遅くなってすみませんでした」

「いんや、ユハから聞いている。歓迎会もしてなかったからな。たまにはいいさ。
　おかみの果実酒を飲んだんだって？」

「えぇ。あれが効きました。隊長もお飲みになられたことがあるんですか？」

「飲むわけないだろう。ありゃ蒸留酒をさらに蒸留して、度数を無

理矢理あげた酒で造った果実酒(やっ)だ。
こんな煙草を近づければ、容易に発火する」

起き上がった隊長は、煙草の先を短刀で切って火を消す。

「はぁ！？　そんな代物だったんですか？」

「そうさ。要はおかみのいたずら用だな。ここ一年くらいハマってな。知らない奴が被害にあっている」

「どおりで俺以外飲まなかったわけだ・・・」

「ははっ、見事にはめられたな。ま、やつらなりの歓迎だろ」

「そうですね。やけに心配すると思ったら、そんな裏があったとは」

「くくっ。午後の仕事はやつらにやらせてもいいぞ」

「そうします。あ、リクハルド様から“式典用の訓練をしておけ”との伝言を承りました」

「ぬ・・・。そんなのもあったか。わかった」

「何かありましたっけ？」

「どこだかのお偉いさんが来るから、歓迎式典をやるって書類が来てた。
こんなことより武術大会でもやりたいところだな。ここのところ平和で腕がなまって仕方ない」

「隊長に手合せ願えるなら、いつでも挑戦したいです」

「おぉ、そうか。隊内でやるか。副隊長（ヘルマン）に企画させよう」

「楽しみにしています」

隊長室を辞して、一汗（ひとあせ）かくかと訓練場に足を向けると、ユハがいた。訓練用の剣で、型の練習をしていたようだ。

「ユハ。昨日はすまなかったな」

「カール。大丈夫か」

「ったく、そろいもそろって同じことを聞くな。心配するくらいならおかみを止めてくれよ」

「果実酒のこと、聞いたのか。俺らも全員やられてる。あの破壊力はすさまじいな」

「まったくだ」

「でも午後から起きられるだけすごいぞ。マルリは3日寝込んだからな」

「すでに兵器だな。敵陣に差し入れれば、戦わずして勝てるんじゃないか」

「ははっ、それはいい」

話ながらも素振りをしているユハ。
振り下ろした切っ先を、わずかにひねっている。
ユハの武器である片手剣（フランベルジェ）は、刀身が波打つ独特の形状をしている。
剣を交えれば揺らいだ先で軽く受け流し、切りつけた先では肉に食い込んで深い傷を負わせる。
俺の力任せの長剣と違い、恐ろしい武器だ。

「嫁さん、かわいいな」

素振りを続けながら、ユハがぼそっとつぶやいた。
ん？　こいつが女性をほめるなんて、珍しいな。

「会ったのか」

「おまえを寝室まで運んだのは誰だと思ってるんだ。重くて大変だったんだぞ」

「それは・・・すまない」

「ははっ。まぁおまえが隠したがるのがわかったよ。
彼女のことは他の奴には言ってない。あんまり見せたくないんだろ」

「あぁ」

「代わりといっちゃなんだが、これを渡してくれないか」

訓練用の剣を置いて、ユハが荷物から取り出したのは細長い瓶。
中に黒い棒が数本入っている。

「これは？」

「菓子の香りづけに使うんだ。植物をさやごと発酵させたもので、中の粒を少量まぜると甘い香りがつく。奥方なら知っていると思う」

「へぇ」

ユハが甘味好きなのは知っていたが、材料にまで詳しいのか。

「昨夜、奥方に菓子をご馳走になってな。うまかったぞ」

「そうか。よかった」

菓子とはあのパイのことか。

エメの部屋で一緒に食べたが、味なんてわからなかった。

せっかくルゥが作ったのに・・・悪いことをしたな。

「どうだ？　軽く合わせないか」

ユハが備品の剣を一本放ってきた。

「望むところだ」

ユハと汗を流したらすっきりした。

茶会での自分の態度を振り返る。つまらない嫉妬で、ルゥの勉強の邪魔をしてしまった。

あんなに見てみたいと思っていたのに、何をしているのだか。

家に帰ったらあやまろう。何か土産も買っていこうか。

ユハのように菓子の材料はわからないから・・・花がいいか。

ルゥの好きな花がわからず、あれもこれもと求めるうちに大きくなってしまった花束を抱えて家路につく。

「おかえりなさい、カール・・・わ！　すごい」

出迎えたルゥは、花束を見た途端笑顔になった。
よかった。

「昼間、俺、態度悪かっただろう。すまなかったな」

「私こそ、何かしてしまったみたいで・・・。ごめんなさい、何が悪かったさえわからないの。
カール、もう怒ってない？」

不安そうな瞳が見上げてくる。
こんな顔をさせるつもりはなかったのに・・・自分の態度を改めて猛省した。

「怒ってないよ。元々怒ってなんかないんだ」

「そうなの？　エメさんもそんなこと言ってたけど、でも機嫌悪かったでしょう？」

「まぁ、それはな、俺の器が小さいせいだ。もっと大きな男になっ

て、君の全てを包めるようになりたい」

「・・・いまでもカールは大きいよ」

ルゥが体を寄せてくる。

しまった、花束が邪魔でうまく抱きしめられない。

「背の高さじゃないぞ」

「わかってる。今日のカールを見て、私がどれだけ甘えてたかわかったの。

私、一度もカールに怒られたことなかった。カールは、私が何をしても嫌な顔一つしたことなかった。

本当はいろいろ思ってたよね」

「ルゥに怒るようなことはないだけだ。我慢してたわけじゃない」

「本当？　私、何が怖いって、カールに嫌われるのが一番怖いの。嫌なことがあったら、我慢しないで言ってね。すぐに直すから」

あまりにけなげな言い様に、花束と共に抱き上げた。

膝に乗せて、ソファに座る。

ルゥには似合わない眉間のしわを、指の腹でぐりぐりほぐすと、少し笑顔になった。

「んもう、痛いよ」

尖らせた口がかわいい。

思わずキスをする。そういえばただいまのキスをしていなかった。

「ん・・・ねぇ、本当にないの？　私の嫌なところ」

「ないな。ルゥは全部かわいい。全部好きだ」

「嬉しいけど、全くないってことはないんじゃない？」

納得しない様子のルゥに、仕方なく情けない心情を白状する。

「そうだな・・・嫌なところはないが、聞きたいことならある」

「やっぱりあるのね？　何？」

「勉強会に、なんでリクハルド様を誘うんだ？」

「王様？」

「あぁ。俺がなんで機嫌が悪くなったかわからないって言ってたな。国王のせいなんだ。ルゥとエメと三人で仲よさそうにしてたから、俺の場所をとられたような気がして、子どもみたいに拗ねて、焼きもちを妬いたんだよ」

「拗ね・・・って本当？」

「あぁ。俺だってルゥが魔術の勉強をしているところが見たい。仕事がなければ、毎回ついていきたい。ドレスもよく似合っていた。あの二人には見せて俺には見せてくれないなんて酷いな」

「酷いって言われても、ドレスはエメさんのだよ？」

「俺が買ってやるっていっても断るだろう？」

「だってもったいないし・・・」

「もったいなくない。今度仕立て屋を呼んでもいいか？」

「着ていくところがないし・・・」

「どこかに行く必要はない。俺だけに見せてくれればいい」

「無駄じゃない？」

「無駄じゃない。着せて、脱がす」

「・・・何それ」

「いや、こっちの話だ」

「そういえば王様もよくエメさんにドレスを贈ってるけど、何か意味があるの？」

「国王が？」

「うん。王様はエメさんが好きなんだって。協力してほしいって頼まれたから、いつも誘ってるのよ」

「エメのことを？」

「そう」

なんだ、そうだったのか！

てっきり、ルゥのことを狙っているのかと思っていた。
我が国ではないが、他国では気に入った臣下の妻を、王が召し上げることもあると聞く。
国王にルゥを差し出すように言われたら、臣下の俺は非常に難しい立場になる。
もちろん大人しく差し出すわけはないが、職を失い、国を出ることを覚悟しなければならないだろう。
それが・・・なんだ、エメか。
好きなようにしてくれ。

一気に機嫌がよくなった俺を、ルゥが不思議そうな顔で見ている。
そうだ、ユハが何かくれたな。
同僚とはいえ男からのものなので、わざと忘れていた俺である。
今なら渡してやってもいいか。
膝からルゥを降ろして、鞄に入れた瓶を取り出した。

「ユハがくれた。菓子の礼だそうだ」

「バニラビーンズ！　すごい！　貴重品なのよ、これ」

「へぇ」

花束をやったときと同じくらい喜ぶルゥ。
なんだかくやしい。やはり渡さなければよかったか？
ルゥが瓶の栓を抜くと、甘い香りが漂った。

「何を作ろうかしら。プティング？　焼き菓子？　カールの作ってくれるアイスクリームに入れてもいいかも。
ユハさん、さすがね。どこで手に入れたのかな。
何か作ったら食べに来るっていってたけど、呼びつけちゃ悪いわ

よね。
隊舎に持って行ってもらえばいっか。ユハさんは何が好きかな。」

「そう、ユハ、ユハと言うんじゃない」

「？　なんで？」

「俺は器が小さいって言っただろ。君の口から他の男の名前が出るだけで、我慢ならないんだ」

「くす・・・カールったら・・・」

ユハからの贈り物を机の上に置いて、ルゥがゆっくりと近付いて来る。
白い指が、俺の唇を撫でる。
誘われるままに身をかがめて、赤い唇を吸った。

「ん・・・」

漏れた吐息に理性が飛んだ。
昼間から、触れたくて仕方なかった肌を求めて乱暴に服を脱がす。

「あん、だめ、破れちゃう」

「ドレスも服も、いくらでも買ってやる。」

「エメさんにまで焼きもち？」

「呆れるか？」

「ううん、嬉しい・・・！」

首に抱きついてきたルゥを抱えて寝室に運ぶ。
階段を上がりながらキスを交わし、寝台に落ち着いたころにはルゥの瞳は蕩けきっていた。

「カール・・・好き・・・」

「あぁ。俺も。愛してるよ、ルゥ」

それから朝まで、俺は白く柔らかな体に溺れた。

15　仲直り（後書き）

月光編、あります。

16　筋トレ

「よぉ、カール。具合はどうだ」

今日もヴァイノが声をかけてきた。

「あぁ、大丈夫だ」

「今日は本当みたいだな。嬉しそうな顔しやがって。何かいいことでもあったか？」

「ははっ、ちょっとな」

昨日学んだことがある。

ルゥを甘やかすばかりでなく、俺が彼女に甘えてもいいのだということだ。

ルゥは俺に嫌われるのが怖いと言っていたが、俺の方がずっとそれを恐れていた。

でもルゥは、俺の情けない部分や弱い部分を見せても、きっと笑って受け止めてくれる。

小さくか弱く思えるルゥだが、芯は彼女のほうがずっと強いのかもしれない。

「カール。奥方はあれ、わかったか？」

ヴァイノが去った後、ユハがこっそり尋ねてきた。

「あぁ。喜んでた。今日何か作ると言っていたから、明日持ってくる」

「持ってこなくていい。食べに行かせてくれ」

「みんなの分を作るとはりきってた。大量に作るみたいだから、家では食いきれん。持ってくるよ」

「そうか・・・。次回はぜひ食べに行くと伝えてくれ」

「わかった」

「他に欲しい材料があったら、菓子職人に伝手があるからいつでも言ってくれよ。すぐに届ける」

「あぁ、まぁ、そうだな。伝えておく」

なんだろう。やけに家に来たがるな。
硬派なユハに限って、という思いはあるが、もしや国王よりもこいつのほうが要注意か？
まったくもって油断ならない。
俺の心の平穏のために、ルゥにはこれ以上、絶対誰も会わせないようにしよう。

次の日、ルゥが持たせてくれたのは、バニラビーンズをふんだんに使った、カスタードクリームが入った丸パン。
隊長以下３０名ほどいる隊員たちにはとても好評で、また会わせろ

攻撃にあってしまった。

「このしっとりしたパン生地になめらかなクリーム・・・。すばらしい・・・！」

ユハは、甘味好きどころか甘味狂（マニア）だった。

パンとクリームを分解して、少しずつ口に運んでは「卵黄が」とか「牛乳か、山羊乳か」とかつぶやいている。

ルゥに横恋慕かと思ったのは、杞憂だったか。

「おまえ、それだけ甘いもの好きなら、女たちといくらでも会話できるじゃないか。

女性は詳しいぜぇ？」

マルリが呆れたように言う。

「必要な情報を得るまでに時間がかかりすぎる。それなら自分で店に足を運んだほうがいい」

「あっそ。どんだけ女嫌いだよ」

「嫌いなわけではない。面倒なだけだ」

「はいはい。菓子作りのうまい、大人しい嫁さんが見つかるといいな」

「そうだな・・・」

ちらりとユハが俺を見る。

ん？　なんだ？

「余ったパン、もらって帰ってもいいか？」

「あぁ。もちろん」

そういうことか。残った数個を、ユハは嬉しそうに鞄に詰めた。
よほど甘いものが好きなんだな、うん。

「今度武術大会やるって？」

茶器を適当に水で洗いながら、マルリが言う。
昨日隊長が言っていたばかりなのに、さすが情報が早い。

「隊内でってやつか。カールの長剣とオロフの戦斧の力比べが楽しみだな」

ヴァイノはまるで他人事のようだ。

「おまえはやらないのか？」

「槍じゃなぁ。接近戦は不利だよな」

「それ言ったら、俺、短剣じゃないの」

身軽さを売りにしているマルリは、短剣の二刀使いだ。

「だからね、全員訓練用の剣でやろうと思っているよ」

「「「副隊長」」」

「カール、差し入れご馳走様。隣の部屋でいただいたよ。皆そろっているようだね、ちょうどいい。隊内の武術大会の要項を作ったんだ。目を通しておいてくれ」

「一か月後、模擬刀、時間制限ありですか」

要項を受け取ったヴァイノが読み上げる。

「得物ごとに対戦相手を決めることも考えたんだけどね。一位を決めるのが目的じゃなくて、あくまでも隊内の意識高揚が目的だから。期日は式典の後にした。傷だらけで行進はしたくないだろう」

「そうですねぇ」

「賞品は？　何かあるんですか？」

他の隊員から声があがる。

「考え中だ。何か要望があったら言ってくれ」

「金！」
「休暇！」
「女！」

好き勝手な声が飛ぶ。

「金と休暇はわかるが、女ってどうする気だか」

呆れてつぶやくと、

「じゃ、俺が勝ったら奥さん連れてきて見せて」

マルリがにやっと笑って言った。

「では、俺が勝ったらお茶に招待してもらおう」

なんだ、ユハ。おまえまで。

「俺が勝ったら夕飯をご馳走になるか」

「俺は・・・別にいいけど、また差し入れしてほしいな」

「ヴァイノ、オロフ。ったく暇な奴らだな。俺が勝ったらどうする気だ」

「俺ら四人全員に勝つのは無理だと思うぜぇ？
もし勝ったら旅行でも豪華料亭の食事でもなんでも奢ってやる！」

「トーナメントじゃなくて総当たりする気か？　いいだろう。
一対四の賭けってのもずるい気がするが、負けるつもりはない。
覚悟しろよ」

「おう！　よぉっし、俄然やる気が出てきたぜ！」

マルリが握り拳を作って叫ぶ。

「いい掛け声だね。ちなみに最下位だけは決まってるよ。コスティ隊長の故郷で一週間の合宿だ。小麦の収穫体験付き」

「ひでぇ！」

「それが目的か！」
「合宿なんていって、体（てい）のいい労働力じゃねぇか」
「ははっ、負けなきゃいいんだよ。負けなきゃね」

＊＊＊＊＊

カールが鍛錬（トレーニング）をしている。
家の中でできることなので、筋力作りが中心みたい。
一週間で、二の腕はぐっと太くなって、胸板も厚みを増した。

「すごいね、固い」

仰向けになっておもりを持ち上げている腕をさわると、かちかちに固くなっていた。
人の腕とは思えないくらい。
私なんてぷにぷになのに。

「ぜっ、た、い、に、はぁっ、負けられないからな」

どすっと降ろされたおもりは、動かそうとしてもびくともしなかった。
こんなの持ち上げてたのかぁ。

「負けたら何かあるの？」

「あー・・・最下位は強化合宿だが、実は・・・」

同僚の人たちと賭けをして、私がその対象になっていることを知った。

「勝手に、すまん。でも、絶対に負けないから」

「う、うん。あんまり大勢の人に会うのはちょっと・・・」

「俺も会わせたくないから、こうしてがんばっている」

「そうだよね。奥さんが私みたいなのじゃ、カール、恥ずかしいもんね」

「違う。・・・はぁぁ。ルゥは自覚がないからなぁ」

「自覚？　私の髪や目が嫌がられるのは十分わかってるわ」

「そうじゃない。あぁ、ここのところ俺、こんなことばかりだな・・・」

「？？？」

「とにかく、勝つから。で、うまいもの奢らせよう」

「うん？　応援するね」

よくわからないけど、カールががんばるっていうのなら応援したい。

私にできることってなんだろう。

カールに聞いたら、「いてくれるだけでいい」って言われた。

それじゃ困るんだけど・・・。

「じゃぁ、うまい飯。ルゥの作るものはなんでもうまいが、鶏肉中心にしてくれると嬉しい」

お肉はお肉でも、鶏肉が一番鍛錬にいいんだって。

よぉし！　私も今日から武術大会まで、カールのためにがんばろうっと。

17　マッサージ

＊＊＊＊

「おや、今日のお昼は鶏づくしかい？」

昼休み。
俺の弁当をのぞきこんだヘルマン副隊長が、片眉を上げて言った。

「えぇ。体作りのために鶏肉がいいと言ったら、はりきってくれまして」

昨夜の夕飯は鶏肉の焼物（ソテー）だった。
今朝は蒸し鶏のサンドイッチ。
弁当には、鶏胸肉の燻製肉（ベーコン）巻きに手羽先の蜂蜜焼、蒸し鶏の和え物が入っていた。
チーズをはさんだパンに、“がんばってね”と手紙まで添えてある。

「ははっ、なるほどね。素直でかわいらしい奥さんだな」

「いやぁ、まぁ、そうです」

頭を掻いて照れる。
正直、ルゥがこんなに凝り性だとは思わなかった。
嬉しいけれど、あまり極端に走らないように言っておかなければ。
食後のデザートまで、鶏肉で作りそうな勢いだ。

「君のために何かしたいんだね。他にも頼んでみたらどうだい？」

「他にも・・・というとなんでしょう」

「ふむ。家でも鍛錬（トレーニング）してるなら、記録をとってもらうとか、終わってからマッサージをしてもらうとか」

マッサージ！　それはいい。

「わかりました。言ってみます」

「ふふ、いいねぇ、新婚は。僕も若いころは・・・」

その日の昼食は、ヘルマン副隊長の惚気（おもいで）話をずっと聞いていた。

「マッサージ？　肩もみなら院長先生のをしたことあるけど、マッサージはどうやったらいいのかわからないわ」

家に帰ると、早速ルゥに頼んでみた。

「じゃぁ、試しに俺がルゥにするから、同じようにやってみてくれ」

「うん」

ソファに腰かけたルゥの手を取って、手の平を揉む。

「あ～、気持ちいい！」

嬉しそうに微笑むのに気を良くして、手首から二の腕まで力の強弱をつけながら揉んで行った。

一番太いところでも楽々と指で一周できてしまう腕を、壊さないように気を配る。

「んっ、やんっ、カール、くすぐったいよ」

力が弱すぎたのか、腕の内側を揉むと、首をすくめて身をよじった。

おっと、この反応は違うことを想像させるな。

腕のマッサージを終え、ルゥの足元に跪く。

足の裏を押すと、

「いったあぁぁぁぁぁあい！！！」

とのけぞった。

「あっ、やっ、何、そこ、痛いっ！　痛い痛い痛い痛い！　カールッ　やめてっ」

じたばたと暴れるのが面白くて、ぐりぐりと足裏を押した。

「あぁんっ、痛いっ、やっ、あああんっ」

ぐったりと背もたれに寄りかかる。

全身の力が抜けてしまったようだ。やりすぎたか。

「ルゥ？」

「・・・・・」

「ルゥ？　おい」

「・・・・はぁっ・・・カールぅ」

涙目で身を起こすと、「痛かったぁ」と言って、俺の首に抱きついて頬をすり寄せた。
よしよし、と頭を撫でてやる。

「でも、足がすっきりしただろう」

「ほんとだ。今はもう揉まれても痛くない」

足裏の同じところを押しても、平気そうな顔をしている。

「背中と腰、脚もな。横になって」

ソファに寝そべらせて、丁寧に揉んでいった。

「あっ、あぁんっ、そこっ、いいっ。気持ちいい！」

「あぁあん、もっと！　もっとしてっ」

ううむ、そんな声をあげられると・・・。

「んんっ、カール？　そ、そこも揉むの？　あっ、はぁんっ、あぁっ、やっ、だめっ、違う・・・あぁっ」

結局、マッサージをしてもらうどころか、鍛錬すらできなかった。

「あれ？　今日は弁当じゃないのかい？」

ユハたちと昼飯を食べに行ってくるというと、ヘルマン副隊長が意外そうな顔をした。

「えぇ、ちょっと・・・。今朝、彼女が起きられなくて」

「ふふ、いいねぇ、新婚は。僕も若いころは・・・」

これが始まると長いんだ。

「おい、カール！　行くぞ！」

「あぁ、今行く！　では、少し出てきます」

マルリ、いいところで声をかけてくれた。
戸口にいつもの面子（メンツ）が揃っていた。

「ん？　そうか。たまには外の食事もいいね。いってらっしゃい」

俺がいないと、副隊長は一人で昼飯かと思ったが、いままでずっと一人だったので気にするなと言われた。
副隊長の奥さんも、もう何年も毎日弁当を作っているのか。

どんな奥さんなのだろう。
昨日から惚気話を聞かされているせいか、一度見てみたくなる。
隊の奴らがルゥを見たいという気持ちが、少しわかった。

「何食う？　“三匹の子猫亭”のおかみ特製ランチ？」

「またきつい酒が入ってるんじゃないだろうな」

「ははっ、まさか。5食限定で、食べれば午後の仕事はバリバリ、夜も精力絶倫って話だよ」

「ただし、臭いがきつい」

「にんにくたっぷり」

「それ、だめだろう」

城の警護もしている俺たちが、異臭を放っているのでは叱られる。

「みんなで食えば怖くないさ。嫁さんも喜ぶだろ？」

「マルリ・・・。そんなこと言って、おまえは独り身でどうする気だよ」

「う、うるさいな。なんとかするさ。なぁユハ？」

「なぜ俺に訊く」

「だって、ヴァイノは相手がいるし、オロフもカールも妻帯者じゃないか」

「ぬ・・・。夜も、とはそういうことか」

「あったり前だろう！　カールんとこは新婚だから、何食おうが関係ないかもしれないけどな」

「案外今朝起きられなくて弁当なしってのも、昨夜無理させたんじゃないか？」

「さぁ？」

とぼけると、どかどかっと腹だの背中だのを殴られた。

うっ、ユハ、ちょっと本気入ってなかったか？

残念なことに、おかみ特製ランチは売り切れていた。

そんなに人気があるのか。

食えないとなると、俄然興味がわく。

「にんにく尽くしか。今度ルゥに頼んでみよう」

「うっわ、やらしい！」

「休み前にしとけよ」

「うちももう一人くらいできてもいいかも・・・」

「奥方の料理の腕をそんなことに使ってはもったいない。やめろ。絶対にやめろ」

にぎやかに昼食の時間は過ぎていく。

副隊長の言うとおりだ。たまにはこういうのもいいな。

家に帰ってから、ルゥににんにく料理が食べたいと言ってみた。

「いいけど・・・臭いが残るから、休みの日の前がいいんじゃない？」

それこそ、俺が望むところだ。

「あぁ。ルゥも一緒に食べるだろ？」

「うん。にんにく、好きだよ」

そうか、そうか。それはよかった。

どちらかというと、ルゥにたくさん食べさせよう。

「今日はお弁当作れなくてごめんね」

「いや、俺が悪かったから」

「ん、もう、ほんとだよ。朝までっていうのはなしね」

「うぅむ、約束はできない」

「もうっ」

頬をふくらませて、怒ったふりをする。

目が笑っているから、本気じゃないのがわかる。

「朝までじゃなければいいのか？」

腰に手を回そうとしたら、ついっと逃げられた。

「今日はだめ。鍛錬（トレーニング）するんでしょう？　私のために勝ってくれるっていったじゃない」

そうだった。

ルゥを目の前にすると、つい彼女のことばかり考えてしまうな。

「腹筋やるから、数えてくれるか」

「うん！」

にんにく尽くしは週末の楽しみにとっておこう。

「１２１、１２２・・・。カール、真面目にやってね？　今別のこと考えてたでしょう」

「う・・・。はいはい」

これはなかなか厳しい。

それから毎日、ルゥの監督の元、俺は鍛錬に励むことになった。

＊＊＊　閑話　お菓子　＊＊＊

ある日、ユハさんがかわいい貝殻の形をした型をくれた。
わざわざうちまで届けてくれたので、そのまま焼き菓子を作ることにする。

「おはよう、ルゥ・・・ってなんでユハがいるんだ？」

2階から降りてきたカールが、居間でお茶をする私とユハさんに気付いて目を丸くする。
カールは、昨夜は副隊長さんと飲みにいっていた。
帰りもずいぶん遅かったし、今日は非番だから起こさなかったのだ。

「ユハさんがお菓子の型をくれたの。今一回目を焼いているところ。朝ごはんはどうする？」

「あー、軽くでいいかな」

「はい」

サラダとスープ、薄く切ったパンを並べる。
その間に、焼き釜からいい匂いがしてきた。
いつもは練習を兼ねて魔術で焼くんだけど、今日はユハさんがいるからレンガの釜で焼いている。

「ルチノーさん。俺がやります」

厚手の手袋をして、焼き上がったお菓子を取り出そうとしたら、ユハさんに止められた。

「火傷をしてはたいへんですから」

そう言って、てきぱきと釜からお菓子を出してくれた。

私は横に立って、籠に受け取る。

一つ型から抜いてみると、きれいな貝殻模様がついていた。

実はユハさん、薪を組んだり材料を混ぜたりするところからずっと手伝ってくれていた。

一回目のお菓子を全部型から出して、二回目の種を流し入れる。

焼き釜に並べてから、出来上がったお菓子を一つとって半分に割った。

ふわっと湯気が出て、卵とバターのいい匂いがする。

「はい、お味見」

ちょっと大きい方を、ユハさんに差し出す。

「い、いいんですか!?」

「一緒に作ったんだもの。一緒に味見しましょう」

「はい！」

両手を出して、私が渡すのを待つユハさん。

切れ長のこげ茶の瞳を、嬉しそうに細めている。

そんなユハさんを見て、孤児院で面倒を見ていた小さい子たちを思い出した。

あの子たちも、私がお菓子を作っているとお手伝いをしたがったっけ。
たいていは、こういう味見とかのおこぼれを期待してだったけど。

「うん、うまいです！」

「よかった」

「もう一つ食ってもいいですか？」

「えぇ、どうぞ。お茶のおかわり淹れますね」

貝殻の形をしたお菓子は、甘さもちょうどよく、外はカリカリ中はしっとりしておいしくできた。
ユハさんは、食後のお茶を飲んでいるカールの向かい側に座り、ご機嫌で2個目をほおばった。

「ルチノーさん、今日のご予定は？」

「特にないけど・・・カールは？」

「別に」

ユハさんがいるせいか、カールの返事がそっけない。
それともお酒が残ってるのかな。

「大丈夫？　頭でも痛い？」

「いや、大丈夫だ。」

私の方を見て、にこっとする。
具合が悪いのではなくてよかったけど、いつもの笑顔とは違うような？

「よかったら、前に話した菓子店に行きませんか」

私とカールとの微妙な空気に気付くことなく、ユハさんが言った。
前に話したっていうと、私のお菓子と味が似ているっていうお菓子屋さんか。
城下町にあるのよね。
猫じゃ・・・行けないよね。
カールも一緒なら家を出ても人の姿でいられるけど、あんまり人前には出たくないな。

「ルゥは長時間外を歩けない。店に行くのは無理だ」

答えあぐねていると、私の気持ちを察してか、カールが助け舟を出してくれた。
病弱で日に当たれないということになっているから、不自然ではない。

「そんなに遠くないぞ？」

「無理だ。どうしてもと言うのなら俺が行く」

「おまえと行って何が楽しいんだよ・・・」

「何？」

「いや、菓子に興味のないおまえと行ってもな。じゃぁ今度買って

きますよ」

「すみません・・・」

「いえいえ。あ、またいい匂いがしてきましたね」

二回目の分が焼けてきたみたい。

「たくさんできたから、ユハさんも持って行ってくださいね」

「ありがとうございます」

お菓子を食べながら親衛隊の近況などを話して、お昼前にユハさんは帰って行った。

大変だったのはその後。

ユハさんがいなくなった途端、カールにぎゅうぎゅうと抱きしめられた。

そして、他の男に笑いかけるなとか、手料理を他の男に食わせるなとか、俺以外の奴と半分こするなとか、とにかくいろいろ言われた。

挙句の果てに、

「朝一番に君に会ったのが、俺じゃないのが嫌だ」

だって。

ユハさんのことも子どもみたいって思ったけど、身近にもっと我が儘な子どもがいたみたい。

手を伸ばして、よしよし、とカールの頭を撫でる。

「もうユハが来ても家にあげなくていい」

目をそらして、カールが言う。

「そうはいかないわ。カールのお仕事関係の人だもの。いいお付き合いをしておいたほうがいいでしょう？」

「俺は休日はルゥと二人きりでいたい。菓子店だって、絶対ユハと一緒になんて行かせない」

私の胸に顔をうずめて、またぎゅうぎゅうと抱きしめてくる。

んん、さっき助けてくれたと思ったのは、カールの都合だったわけ？

ああん、もう。どうしたらいいの？

ああ言えばこう言うという感じで、何を言っても聞いてくれない。

焼きもちは嬉しいけど、早く機嫌を直してもらわなきゃ。

えぇと、確かこの間エメさんが・・・。

ぽんぽんと背中を撫でて、できるだけ優しい声を心がける。

「じゃぁ、カールが連れて行ってって？」

「ん？　どこへ？」

「お菓子やさん」

「行きたいのか？」

腕の力が緩んだ。

そっとカールの胸を押して顔をあげる。私を見つめる碧の瞳と目が合った。

「うん、行きたい。話を聞いたときから気になってたの。

カール、忙しそうだから悪いかと思って言えなかったんだけど、

連れて行ってくれたら嬉しいな」

「そうか。途中まで猫の姿で行って、どこかで着替えようか」

「うん！」

カールの実家に行ったときとは違って、お菓子屋さんに馬車で乗り付けるのははばかられる。

かといってこの辺りを歩き回るのは、病弱で人前に出られないと言っている手前、都合が悪い。

カールの肩に乗って城下町に出てから、人の姿になるのが一番いい。

「ありがとう、カール。嬉しい」

首を伸ばして口の端にキスをすると、ようやく自然に微笑んでくれた。

「そんなに行きたかったなら、早く言ってくれればよかったのに」

にっこり笑ったカールは、仕方ないな、と言うように私の頭を撫でた。

エメさん、おねだり作戦教えてくれてありがとう！

「すぐ行くか？」

「んと、お洗濯してからでいい？」

「あぁ」

その後、家事をする私の後ろをカールはついて回った。

ついてくるだけで手伝わない。それどころか、ときどきいたずらをする。

「あんっ、お尻さわらないで」

「つい、かわいくて」

「そんなこと言ってもだめなものはだめ」

「じゃ、こっちならいい？」

「あぁんっ、もっとだめ！」

そんなこんなで、結局家を出たのは午後遅い時間になってからだった。

せっかく行くのに、お菓子が売り切れてたらどうするの？　もうっ。

＊＊＊＊＊

朝から馬鹿なことを口走ったと、思い返すほどに赤面する。

いくらルゥでも呆れただろう。

それもこれもユハのせいだ！

今日で確信した。あいつはルゥに惚れている。

堅物のユハのことだからまさかと思ったが、菓子にかこつけてルゥ

に近付こうとしているに違いない。
まったく油断のならないことだ。明日会ったらきちんと釘を刺しておかねば。

ユハが言っていた菓子店は、俺が知らなかっただけで、城下町では有名だった。
道行く人に尋ねると、すぐに見つかった。
つばの広い帽子を目深にかぶったルゥと共に店に入る。
この帽子は、知り合いに会ったときのためと、ルゥが人目を気にしているためだ。

「いらっしゃいませ！」

菓子店の店主にしてはやけに体格のいい主人が、陽気に迎えてくれる。
ちょうど人が切れたところなのか、店内には俺たちしかいなかった。

「わぁ、きれいなお菓子がいっぱい！」

夕方にもかかわらず、店先にはたくさんの品物が並んでいた。
この時間からでも売れるということだろうか。

「あーん、あれも、これもおいしそう！　ねぇ、カール、どれがいい？」

「ルゥが食べたいのでいい。どうせなら欲しいもの全部買っていったらどうだ？」

「そんなに食べきれないよ。ユハさんにおすすめを聞いておけばよかったな」

「ユハより店主に訊けばいいじゃないか。なぁ、今日のおすすめはなんだい？」

「うちは全部おすすめですよ、なんてね。
最近の売れ筋は野菜を練り込んだものですね。あまり甘くないので、男性にも好評です」

「なるほど。おい、ルゥ。野菜のだって・・・」

呼びかけようと振り向くと、ルゥはどんどん店の奥に入って行き、色とりどりの菓子に目を輝かせていた。

「あ、ん。これ、邪魔」

品物に影をつくる帽子を、わずらわしそうに持ち上げている。

「帽子、とればいいんじゃないか。誰もいないし」

「そうね」

店内を見回したルゥは、えぃと思い切った様子で帽子をとった。

「・・・・！」

店主が息を呑んだ。
口元が動いたが、なんと言ったかはわからない。

「髪の色のことなら言ってくれるなよ。彼女はとても気にしている」

そっと店主に言った。

「あ、いえいえ、あまりにきれいなお方だったので。失礼しました」

お世辞だろうが、悪い気はしない。

そうだろう。

この間ようやく仕立てさせてくれたドレスを着て、うっすら化粧をしたルゥはとても美しかった。

道の真ん中で抱き上げて、俺の妻だと自慢したいくらいだ。

「奥様ですか？」

「あぁ」

「あの、騎士様が、年上ですよね？」

「当たり前だろう。彼女の方が上に見えるのか？」

「いえいえいえいえ。お名前をお伺いしても？」

「カール＝ヘルベルト＝ヴュストだ」

「奥様のお名前は？」

「なぜ？」

店の主人までルゥに懸想をするのか。

おちおち買い物もできないじゃないか。

「初めてお越しいただいたんですよね、これからもご贔屓にしてい

ただきたいので、お名前入りのお菓子をおまけしますよ」

にっこり笑った店主に他意はなさそうだった。

ずいぶん親切なものだな。

老舗でもこういう営業努力を怠らない。人気の秘密がわかった気がした。

数種類の菓子を買い求めて、家路につく。

「ほんと、おいしい！　私が作りたい味そのままだわ！」

全部の菓子を一口ずつ食べて、うーんと唸っている。

店主がくれたおまけは、ビスケットに名前を書いたものだった。

「色をつけたお砂糖で書いてあるのね。かわいい」

菓子よりも君の笑顔のほうがかわいい、などと思う。

甘い菓子に毒されたか。

「カール、お砂糖ついてるよ」

俺の頬に伸ばされた手をとった。

手首の内側に口づける。

「んん、くすぐったい」

そのまま人差し指を食(は)んで舐める。

「甘い」

「お砂糖だからね」

「そうじゃなくて、ルゥが甘い」

「くすくす、そんなわけないよ」

「そうか？　じゃぁ確かめよう」

「えっ、あんっ、もう、いつもそうやって・・・」

「嫌か？」

「・・・・嫌なわけないじゃない」

嬉しいことを言ってくれる。

それから俺は、期待に添うべく、甘い体をおいしくいただいた。

妾妃の独白～Ａの場合～（前書き）

閑話は三部作（妾妃３人の話）＋αになります。
まず一人目。長いですヨ。

妾妃の独白～Ａの場合～

あたしは別に、妾妃になるつもりなんてなかった。
ただあの男（ひと）と恋をしただけだった。

ブルクハルト王国の城下町のはずれに、“馬屋番”という居酒屋（パブ）がある。
その名の通り、元は馬を預かったり馬の貸し出しをしたりするところだった。
町の発展と共に手狭になり、前の持ち主が移転の為売りに出したのを、あたしの養父母が買い取って、居酒屋（パブ）をはじめて今に至る。
街道沿いにある店は、旅人を主な客としており、２階には簡単な宿泊施設もあった。
もちろん馬屋もまだある。

あたしの名前はアンジェリカ。
赤ん坊のときに両親と死に別れ、今の家に引き取られた。
子どもができなかった養父母は、引き取ったあたしを大事に育ててくれた。
小さいころから店の手伝いをし、５年前義母（はは）が亡くなってからもずっと、看板娘として働いている。
２０歳になっても家を出ないのは、年老いた義父（ちち）を一人で置いていくのが心配だからだ。
早ければ１６、遅くても１８か９には結婚する女性が多い中、あたしは嫁（い）き遅れの部類に入る。
童顔のせいで若く見られるから、誰も口やかましくはいわないけど。

「いらっしゃい！」

王都を見に来た旅人や商人、流れの剣士などでにぎわう夕方の店内に、新たな客が入ってきた。

癖のある栗色の髪に、濃い灰色（グレー）の瞳。

腰に立派な長剣を穿いている。

鍛え上げられた体の割には、あまり日焼けしていない男だった。剣士というより騎士という風情である。

「酒。あと何かつまみを」

カウンターに手をかけて、男が言う。

一人の客が多いので、椅子は用意しておらず、立って肘をつくのにちょうどいい高さのテーブルをいくつか置いてあった。

「お待ち遠さま。お客さん、王都見物？」

麦酒（エール）とチーズ、燻製肉をあぶったものを男の前に置く。

差しさわりのない話題を振って、話したがりの客か独りにしてほしい客か見極める。

「そんなところだ。何かおもしろい噂でもあるか？」

どうやら話したがりのほうらしい。

「そうねぇ。前王が病気で亡くなったじゃない？　で、息子が即位したんだけど、今度の王様は男色だって話よ。

２５にもなって浮いた話一つなくて、訓練場通い。気に入った騎士を集めて親衛隊とかいうのを作ってるらしいわ」

今朝井戸端で近所の奥さんに聞いた話をする。
上品にチーズをつまんでいた男が、ごほっとむせた。
慌てて麦酒で流し込む。

「・・・単に地盤固めをしているだけではないのか」

「そうかもね。でもいいのよ。男色かもっていうほうがおもしろいでしょ」

「そんなものか」

「そんなもんよ」

力強くうなずくあたしを、珍妙な顔で見つめる。
ちょっと整った顔立ちが歪んで、親近感がわいた。

「それにさ、今度の王様は若くて格好いいっていうから、お姫様たちがほっとかないんじゃない？
男が好きっていっとけば、当分自由の身でいられるかもよ」

「くっ・・・なるほど、そうだな」

口の端を上げて、苦笑する。
女性に不自由していなそうな男だから、男色なんて想像もつかないのかもしれない。

「おまえは？　国王を見たことはあるか？」

「ないわ。即位記念のパレードはあったけど、そんなときこそ稼ぎ

時だもの。見に行けるわけないじゃない」

「見てみたいとは思わないか？」

「別に」

「なぜ？」

「王の顔がどうだって、あたしからすれば関係ないもの。政治をちゃんとやってくれるかが一番よね」

腰に手を当てて言い切れば、

「く・・・くくくっ。その通りだ。いいことを言う」

と先ほどとは違い、楽しそうに笑った。

ほとんど義父（ちち）の受け売りなんだけどね。

「美しい髪だな」

笑いをおさめた男が、あたしの髪を一筋すくって言った。

自慢の黒髪をほめられて、くすぐったい気分になる。

「おかわりは？　食事もあるわよ」

麦酒もつまみもたいして減っていないのはわかっていたけど、照れ隠しに聞いた。

「麦酒だけ。食事はいい」

「はい。じゃ、ゆっくりしてってね」

「あぁ」

接客に戻ろうとしたところを、厨房に立つ義父(ちち)に「おーい」と呼ばれた。
他の客に運ぶ料理がたまっている。いけない、ついしゃべりすぎた。
急いで運ぼうとしたら、呼び止められた。

「女。名前は？」

おや、愛想をふりまきすぎたかしら。
旅の楽しみとして、一夜の関係を求めてくる客は多い。この男もそうか。
あたしはそんなに安くないわよ。

「人に名前を訊くときは、自分から先に名乗れって言われたことなぁい？」

「ぬ・・・。リックだ」

「リックね。あたしの名前が知りたかったら、一か月は通いなさいな」

「何？　約束が違うではないか」

「約束なんてしてないわ。先に名乗れって言っただけよ」

「むぅ・・・。わかった。一か月だな」

できもしないくせに。
軟派な誘いはいつもこの方法で断ってきた。

「くすっ。毎日とは言わないわ。3日おきでいいからね」

リックと名乗った男に言い置いて、今度こそ料理を運びに厨房に足を向ける。
しびれを切らした義父が、皿を持って動き出していた。

「ごめんなさい。急いで運ぶわ。あと、今のお客さん麦酒追加」

「はいよ」

お盆に麦酒をもう一つ乗せた義父(ちち)が、リックの元へ向かうのが見えた。

それからきっちり週二回、リックは顔を出すようになった。

「あんた・・・暇なの？」

「ここの料理が気に入ったんだ。いつものな」

「気に入ったって、つまみくらいしか頼まないじゃない」

麦酒2杯とその日のおすすめを一品。
彼が頼むのはいつも同じだ。

今日は鶏肉を一度揚げて、甘辛いたれをからめたものを出した。

「うまい。温かい料理はいいな」

「？　何当たり前のこと言ってるの」

相変わらず上品に食べる男だ。
王都見物と言っていたが、普通はそう何日もいるものでもない。
身なりはきちんとしているし、支払いも毎回している。何か仕事をしているのか。

「じゃぁな。また来る」

リックは、そう長居をすることもなく帰って行った。
初日以来、名を聞かれることもなければ、髪に触れてくることもない。
ただ、来て、食べて、話して帰る。
最近では義父と仲良くなり、よく二人で話し込んでいる。
あたしと話すより義父と話すほうが多いくらいだ。
・・・だから何だというわけではないけれど。

リックがうちの店に通うようになって、しばらく経った。
もうすぐ一か月じゃないかしら。
彼はあたしとの約束を守るために来ているのだろうか。
それとも義父の料理を食べるため？
この頃、彼の来ない日が長く感じるようになった。

「ちょっと今からおつかいを頼まれてくれないかい」

ある日の午後、義父に言われた。

城下町の反対側にある義父の妹の店まで、その店にしかない香辛料を買いに行ってほしいとのこと。

今から出かけたのでは、帰りは遅くなる。

「今日は店に出なくていい。夜道はあぶないから、泊めてもらっておいで。」

「急に泊めてなんて悪いわ。明日の朝一番じゃだめなの？」

「明日のお昼に使いたいんだ。特別注文でね。前切らしてしまったのを忘れていた。

すまないが、行ってくれ」

そこまで言われては仕方ない。しぶしぶと出掛けた。

今日はリックが来る日なのに。

未だ独身の義理の叔母は、久しぶりに訪れた私を快く迎えてくれた。

泊ることも承知していたみたいで、部屋が準備されていた。

義父が知らせておいてくれたのだろうか。

日が暮れて星がまたたき始めると、あたしは落ち着かない気分になってきた。

叔母と夕食の準備をしながらも、店が気になって仕方ない。
リックはもう来たかしら。
あたしがいないと知って、どんな顔をするだろう。義父がいれば別にいいのかもしれないけど。

「おばさん、やっぱり帰ります」

「えぇ？　今からかい？　危ないよ」

「馬車を拾うから平気」

引き留める叔母を振り切って、町馬車を拾って家に向かう。
店が近づくにつれて、妙な胸騒ぎがしてきた。
そういえば、いままで義父がこんな無茶なおつかいを頼んできたことはない。
香辛料だって、いつも十分すぎるほどに備蓄があって、切らしたことはない。

あの角を曲がれば店が見える―
そう思ったけれど、思った場所に明かりはなかった。
え？　真っ暗？　義父はどうしたんだろう。店を開けなかったのか。
やっぱり何かあった？
馬車を降りて、店の扉に手をかける。
鍵がかかっているかと思ったら、あっさり開いた。

「おとうさん？」

店内に声をかける。
返事はなく、中はしんと静まりかえっていた。

「おとうさん？　いないの？」

様子がおかしい。
こんなことはこれまでなかった。
あたしがおつかいに行っている間に、義父はどこに行ってしまったのか。

「おとうさ・・・ひっ」

「しっ！　静かに」

明かりを点けようとしたところを、後ろから口を塞がれた。
この声・・・リック！？

「んん、んんん！」

「大人しくしろ」

羽交い絞めにされて、厨房へ連れ込まれた。
この男、まさか強盗！？
いままで通っていたのは、うちの造りを観察するためだったのか。
でもそれほどの財産なんてない。
一体何が目的なの？　おとうさんはどこ！？

リックが、厨房の奥にある酒蔵の扉を背中で押して開ける。
ずるずると最奥まで引きずられて、ようやく口を塞いでいた手が離れた。

「あんた何よ！　おとうさんは・・・むぐっ」

「静かにしろと言っただろう。仕方のない奴だな」

大きな手に、再び口を塞がれてしまった。

「ネストはおまえを使いに出したと言っていたが、もう戻ってきたのか」

「んんん！」

「一番悪いときに帰ってきたな」

「んんんんん！」

悪いって、どういうこと？

問おうにも口は塞がれているし、後ろから羽交い絞めにされているので顔を見ることすらできない。

半ば恐慌状態に陥って、とにかく体をよじってリックの腕から抜け出そうとした。

けれど鍛え上げられた筋肉は伊達ではなく、いくらあたしががんばってもびくともしなかった。

「おまえな・・・これでも締めすぎて苦しめないよう手加減をしているんだぞ」

ばたつかせる足を押さえようとしてか、リックの手があたしの内股に触れた。

びくっと体が震える。

「大人しく、しろ」

片手が内股を撫で上げる。さっきまで必死に暴れていたのに、それだけであたしは急に動けなくなってしまった。
ふわっと男の匂いがして、首筋に温かいものが触れた。
ちゅっと水音がする。
リックの唇と舌が、あたしの首筋をなぞっていた。

「んんっ」

や、やめて。
こんなところで、そんな触れ方をしないで！

「いかん。止まらなくなりそうだ。せっかく一か月我慢したのにな」

強い願いが通じたのか、リックがすっとあたしから離れた。
全身の力が抜けてしまったあたしは、酒蔵の床にがっくりと膝をつく。
口を塞いでいた手が、あたしの唇を優しく撫でた。

「今夜を乗り切ったら・・・」

「王」

リックが何か言おうとしたところで、扉の外から声がかかった。
おとうさんの声！　無事だったのね！

「来たか。ここから出るなよ」

厳しい表情で言い置いて、リックは出て行った。
扉の隙間から見えた背中は、確かにおとうさんのものだったと思う。
でも、あんな真っ黒な服持っていただろうか。

あたしがここにいるのに、一言もないなんてことがあるだろうか・・・。

一人酒蔵に残される。

しばらくして、はっと正気に返って扉を開けようとしたけれど、外からつっかえ棒でもされたのか、押しても引いても開かなかった。

ほどなくして、ガタン！と大きな音がした。

それが合図だったかのように、扉一枚はさんだ向こう側から、怒号が響き渡った。

複数の人間が争う音。食器が割れ、剣を打ち合う甲高い音もする。

何！？

一体何が起こっているの！？

酒蔵から出ようにも、扉は依然として開けることができない。

おとうさん、無事でいて・・・！

あたしはただ酒蔵で両手を合わせ、祈るしかなかった。

しばらくして、音が止んだ。

扉が開き、祈りの形で固まっていたあたしの上に影が落ちる。

「怖い思いをさせてすまなかった」

顔を上げると、手を差し出すリックがいた。

高そうな服はすすけてところどころ破れ、額には血が滲んでいる。

この手をとっていいのか悩んでいると、苦笑したリックが言った。

「今夜賊が侵入するという情報があったんだ。おまえの義父（ちち）と迎え

撃つ計画だった。ただ、危ないから娘は遠ざけたいと言ってな。それをまぁ、ちょうど店の周りを賊に囲まれたところで帰ってくるとは」

「賊？　おとうさんは」

「無事だよ。心配かけて悪かったね」

「おとうさん！」

いつも通りの優しい笑顔の義父（ちち）に飛びついて、お互いの無事を喜び合った。

あたしの後ろには、行きどころを失った手の平を複雑な顔で見つめるリックがいた。

事情を聞くのは後回しにして、とにかく明かりをつけてみて、驚いた。

何がどこにあったのか、元の姿さえ思い出せないほどに荒れた店内。

侵入した賊は十余名にのぼり、店の中央に縄で縛りあげられていた。

黒装束に身を包み、覆面をしているので容姿はわからない。

リックが連絡したのか、ほどなくして警備隊がやってきて、連行していった。

「あの大人数をおとうさんとリックで捕まえたの？」

ひとまず座れるところを確保して、詳しい話を聞くことにした。

「ほとんどはリクハ・・・リックさんだよ。おとうさんは後ろで応

援してただけさ」

「何を言う。一人目はネストの投げた皿が後頭部に当たって倒れたんだぞ」

「えー！　おとうさんすごい！」

「いや、ははは、まぐれだよ。夢中になって投げてたらたまたま当たったんだ」

そんな話をしながら、遅い夕食を三人でとった。
あたしは叔母さんの家で少し食べていたけれど、おとうさんとリックは店内に身を潜めていたため、何も食べていないという。
いつも調理は義父の担当だが、今日は私が腕を振るった。
リックはよく飲み、よく食べ、よく笑った。
こんなにゆっくり彼と過ごすのは初めてで・・・もっとずっといて欲しいと思った。

三人で麦酒の樽を一つ空けるころ。義父は疲れたと言って、先に休んでしまった。
蝋燭の明かりの元、二人で残った麦酒をゆっくりと飲む。

「そろそろ日付が変わったころだろう。
今日が約束の一か月目だ。おまえの名前を教えてもらおうか」

「おとうさんに聞かなかったの？」

「それでは約束を破ることになるではないか。おまえから聞かねば意味がない」

「ふっ・・・。あなたには負けたわ。アンジェリカよ」

「アンジェリカか。いい名だ」

リックの手があたしの手と重なる。
どちらともなく、顔を寄せた。
ついばむような口づけは、すぐに深く互いを求め合うものになった。

その晩、彼は、名前だけでなくあたしの全てを手に入れた。

「処女だったのか」

「・・・悪い？　酒場の女なんて、どうせ遊んでると思ってたんでしょう」

あたしの部屋にしている二階の一室の、狭い寝台で抱き合う。
事中も事後も、リックは優しかった。

「いや。おまえのような美しい女なら、とうに誰かのものだろうと思っただけだ」

「うまいこというわね。そういう誘いがなかったわけじゃないけど、あたし、気が強いからね。大抵の男はひるんじゃうのよ」

「私にとっては、幸いだったな」

「くす・・・そう?」

リックがあたしの髪を撫でる。
彼がきれいだと言ってくれた髪。毎日手入れを続けていてよかった。

その日から、リックはぱったり姿を見せなくなった。
はじめは単に忙しいのかと思った。
捕まえた賊の事後処理でもあるのかと。
でも、一週間、二週間と経つうちに、あぁ、なんだ、あたしを落とすのだけが目的だったんだと思うようになった。
店の危機を助けてくれたのだって、そのためなんだろう。
彼は他の男とは違うと思っていたけど、そんなもんか。

居酒屋(パブ)“馬屋番”には、今日もたくさんの旅人が訪れる。
二か月間、扉が開く度に期待して、その度に裏切られ続けたあたしは待つのをやめた。

「大丈夫かい!?　アンジェリカ」

開店前の掃除を終え、汚れた水の入った桶(バケット)を持ち上げようとしてひっくり返した。
店の入り口を少し濡らしただけで、ほとんどの水が路上に流れ出たのは幸いだ。

すぐに片づけることなく、口元に手を当ててきつく目を閉じたままのあたしを見て、義父が心配そうに尋ねてきた。

「大丈夫、立ちくらみがしただけ。ごめんね、すぐ片づけるわ」

「いいさ、そこはおとうさんが片づけておくよ。ちょっと上で休んできなさい。
おまえ、朝の昼もろくに食べなかっただろう。これでもつまんでおいで」

「ん・・・。ありがとう」

渡されたのは、パンとチーズ。
正直、食欲はなかった。食べ物の臭いを嗅いだだけで吐き気がする。
それでも、義父の手前、皿を持って二階に上がろうとした。
階段に足をかけたそのとき、キィと音がして店の扉が開いた。

「すみませんね、まだ開店前・・・・」

「リック！」

「アンジェリカ。元気だったか？」

現れたのは、リックだった。この調子の悪いときに！　今頃顔を出してどういうつもり！？

「どうした」

階段に足をかけたまま睨みつけるあたしを見て、リックが不審げに近付いて来る。

義父はそんなあたしを心配そうに見ながらも、店の前を片づけるべく、桶を持って外に出て行った。

「何の用？」

「ずっと来られなくて悪かった。仕事が忙しかったんだ」

両手を広げ、あたしを包み込む。
懐かしい匂いに、一瞬ほだされそうになった。
いけない。都合のいい女になる気はない。

「男はいつもそういうのよ」

「いつも？　私が来られない間に、他の男と関係したのか？」

「そんなわけ・・・！　いいえ、あなたに関係ないでしょ！」

「ないわけないだろう。私はおまえのことを」

「やめて！　二か月も放っておいて、今さら何を言っても知らないわ。
ただでさえ調子が悪くて、気持ち悪くて食事もとれないし、一日中だるいし眠いし」

「アンジェリカ、もしかして、おまえ・・・」

はっとしたリックが、あたしを包む腕をゆるめて、腹部に目をやった。
え？
あ、もしかしてって、もしかして・・・？

「月のものは来ているのか？　私以外の男とは関係してない？」

「う、うるさいわね！　あなたに関係ないって言ったでしょ！　もう帰って！！」

リックの手を振り払って階段を駆け上がり、自室にこもった。

走るなとか転ぶなとかいう声が聞こえた。

「アンジェリカ！　アンジェリカ！　来ておくれ！！」

次の日。

養父（ちち）に起こされて店先に出ると、王家の紋章が描かれた立派な馬車が待っていた。

「アンジェリカ様、お迎えにあがりました。どうぞお乗りください」

白髪に丸眼鏡をかけたその人は、ブルクハルト国王の侍従長だと名乗った。

細長い顔には深い皺。

背筋をぴんと伸ばして、あたしを温かな目で見つめている。

「お迎えってどういう・・・」

「詳しくは城でご説明いたします。どうぞ」

こんな目立つ馬車を店に横付けされていてはたまらない。

人目を気にして、とにかく促されるままに乗りこんだ。

もしや騙されているのかとも思ったけれど、馬車は城下町を抜け、すんなり城へ入って行った。

わけもわからず連れてこられた王城。
揃いの制服を身に付けた騎士や、きれいなドレスを着た人々が行きかい、普段着のあたしは一人浮いている。
侍従長だというおじさんの後をとにかくついていくけれど、ふかふかの絨毯は歩き慣れなくて何度も転びそうになった。
あたしの靴なんて、帰るころには深い絨毯の毛に磨かれてぴかぴかになってるんじゃないかと思う。

立派なお城の中でも、特に大きくて豪華な両開きの扉の前に案内される。
うやうやしく開かれた先には、真っ赤な絨毯が、まっすぐ奥まで伸びていた。
頭を下げ、礼の形をとっているため見えないが、たぶんこの絨毯の先には玉座がある。
中に入るよう勧められ、目線を落として侍従長さんについていく。
侍従長さんが止まったところであたしも止まり、膝をついた。

「アンジェリカ」

玉座から声がかかった。
なんであたしの名前を知ってるの？
あたし、王様に名前を覚えられるようなこと、した？

「アンジェリカ、顔を上げてくれ」

そんなこと言われたって、この状況、どうしたら・・・ん？　この声、聞き覚えがあるような。

もしかして、と思った。
いや、まさか、と思った。
でも・・・・・。

「リック？」

恐る恐る顔を上げると、リックと名乗ったあの男が、そこにいた。

あれから１０年。
１０歳と７歳になった子どもは、お城で王子様・お姫様と呼ばれている。

「アンジェリカ。これ運んでおくれ」

「はーい」

ただの居酒屋の店主だと思っていた義父（ちち）は、代々ブルクハルト王国に使える密偵だった。
街道沿いに店をかまえることで、各地の情報を集めてリックに報告していたらしい。
リックが初めてうちの店に来たときは、隠居を考えていた義父（ちち）を説得しにきたということだった。
即位したての彼にとって、信頼できる部下は少なかったから、義父（ちち）にはどうしても続けてほしかったんだって。
義父（ちち）はあたしとの静かな生活のために一度は断ったけど、義父（ちち）のもたらした情報が元で失脚した偉い人だかからの刺客が来て（あの賊

のことね）、静かな生活なんて夢だったとあきらめたみたい。
どうせ狙われるなら、王様に恩を売っといたほうがいいだろうし、娘がどうも王様のことを気にしているみたいだから続けようと思ったと言われた。おとうさん、気付いてたのね。

リックには、お城で会ったあと、彼の私室に案内されて話をした。素性を黙っていて悪かったこと、子どもができたのだからとプロポーズもされた。
あの、一国の王様が、居酒屋の娘に告白していいわけ？

「そこは、ネストから聞いた方がいいだろう」

リックがぱちんと指を鳴らすと、静かに扉が開いて、義父（ちち）が入ってきた。

「え、おとうさんも来てたの？」

「あのあともう一台馬車が来てね」

そして義父（ちち）が実は・・・と切り出した。
あたし、義父（ちち）が関わった前王がらみの収賄事件？かなんかの関係者の娘だったらしくて、本当の両親は巻き込まれて殺されてしまったけれど、当時赤子だったあたしだけ、義父（ちち）がなんとか助けだしてくれたそうだ。
その事件がなければ、それなりの地位の貴族の娘として、今頃王様（リック）の花嫁候補の一人になってたんだって。
あたしが望むなら正妃になれるよう手続きをするとリックが言ってくれたけど、いまさらこの立派な分堅苦しそうなお城で生きていくなんてしたくない。
でもリックのことは好き。

「では側室ということになってしまうが・・・いいのか？」

「仕方ないわね」

これから正妃や他の側室を迎えるリックは見たくないから、基本的に店にいると言ったらリックは渋々了承してくれた。
生まれた子どもは城で預かることになるが、いつでも会いに来てくれとも言われた。
王様の子どもっていうだけで狙われるんじゃ、これも仕方ないわよね。
あの夜みたいに襲われたら、守りきる自信はないもの。

１０年たった今でも、定期的にリックは通ってくる。
たまに一か月とか二か月とか顔を見ないこともあるけど、そういうときはお城で行事があったり、どこかのお偉いさんが滞在してたりするときだから、国民であるあたしにも話は入ってくる。

「いらっしゃいませ！」

「いつもの」

久しぶりにリックが顔を出した。

「たまにはもう少しいろいろ頼んでくれない？」

「あんまり食うと夕飯が入らん。残すと侍医が心配したり料理長がクビになったりするんでな」

なるほど、そんな理由（わけ）があったのか。
王様ってたいへんなんだね。

この１０年で、リックはあたしの他に２人の妾妃を迎えた。
男色疑惑が払拭されたせいで、縁談が殺到して大変だったらしい。
その対策と、他にも事情があったみたいだけど、詳しくは知らない。
事情っていうより、実はただの女好きじゃないの？って気もしている。
あたしを抱いたときもかなり慣れていたし、今はなんだか憧れの女性を手に入れるために奔走しているらしいって噂を聞いた。
恐るべし、隣の奥さん情報。

そのわりに、リックが王様本人ってことも、あたしが側室の一人ってのもばれてないのよね。
近すぎると気付かないものなのかな。
出産前後はお城にいたけど、怪我をした叔母さんの介護に行ったことになってたから、そのおかげかも。
叔母さんといえば、彼女も義父（ちち）の妹じゃなくて密偵の一人だった。
庶民には知らされないことって結構あるのね。

子どもたちには、結構会いに行っている。
あたしにもちゃんと懐いてくれていて、お忍びで店の手伝いをすることもある。
意外だったのは、あたしの後に側室になった子と仲良くなったこと。
絶対会いたくないと思っていたのに、ある日偶然会ったら意気投合した。
リックそっちのけでお茶をしながらおしゃべりに興じるあたしたち

を、彼はいつも複雑そうな顔をして見ている

「ブランシュの経過はどう？」

「あぁ。八か月になった。ずいぶん腹が前に出ているから、王子ではないかと言っている」

ブランシュというのが、二番目の側室の名前だ。
あたしと違ってちゃんとした貴族のご令嬢だけど、飾らない性格で馬が合う。
現在第二子を妊娠中。

「しかし、もう少し妬いてくれてもいいんじゃないか？」

「何言ってるの。妾妃同士が仲良しなんて、喜ぶべきことよ」

「そうだがなぁ」

麦酒を一口飲んで、苦そうに顔をしかめる。
そんなリックに寄り添って、ついっと顎を撫でた。

「上、寄ってく？」

「いいのか？」

「今日お客さん少ないし、たぶん大丈夫」

途端に嬉しそうな顔になる。
お城で会う、豪華なマントをつけたリックより、素の表情の彼が好きだ。

義父に断ってから二階に上がり、十年前から変わらない狭い寝台に並んで腰掛ける。

「ん・・・」

唇が重なった瞬間、しびれるような感覚がして、すぐに全身が蕩けてしまった。
広い背中に手をまわしてしがみつく。
リックはいつもそうするように、あたしの髪を撫でてゆっくり覆いかぶさってきた。
あたしだけの男になってほしいと思ったこともあるけれど、きっとこの人はあたしだけでは抱えきれない。
でも今このとき。
この店にいる間だけは、あたしだけのものなんだ。

「リック・・・あっ・・・あぁ・・・」

あたしは別に、妾妃になるつもりなんてなかった。
ただこの男が好きなだけ―

妄妃の独白～Ａの場合～（後書き）

隣の奥さんも密偵です。
街道沿いのお店はほとんどリックの息がかかっていて、アンジェリカさんのこともひっそり守ってます。
・・・なんてことはアンジェリカは知らないので、本文に入れられないのでした～。

＊＊＊＊＊

隣の奥さん：「あたしはあんたの味方だからね！　女魔術士なんかに負けるんじゃないよ！」
アンジェリカ：「女魔術士？？　そんなのと関わり合ったことないけど・・・」
隣の奥さん：「あんたの方が若いから大丈夫！　子ども生んだもん勝ちだから！」
アンジェリカ：「こここ、子どもって何？」（えっ、子どものこと、まさか知ってる？）
隣の奥さん：「あ、いやいや。ほらもう何年も通ってくる偉丈夫の騎士様がいるじゃないか。彼とはどうなってるんだい」
アンジェリカ：「彼は義父（ちち）の料理が目当てできてるんですよ」
隣の奥さん：「そぅおぉ？？？　昨夜もお楽しみだったって話じゃない？」
アンジェリカ：「え？　えええええ？　あはっ、あはははは」（ななんで知ってるの、この人、もー！）

妾妃の独白～Bの場合～

「ごめんなさいね、ブランシュ。私たちにもっと甲斐性があれば・・」

「いいんです。お母様。せっかくの機会（チャンス）、有意義に使ってまいりますわ」

うちは、名こそあれ、お金はちっともない貧乏貴族。
17の私を筆頭に、下にはまだ5人も弟妹（きょうだい）がいます。
なんでお金がないのにこんなに子沢山なのかって？
冬の寒い日には、薪代を節約するために、夜早めに寝台に入って、お互いを温めあいますわよね。
夫婦ならば当然、その、くっつけばそうなりますわ。
その結果、全部で6人の姉弟妹（きょうだい）となったのです。
今年の冬も寒いらしいですから、もしかしたらもう一人くらい増えるかもしれません。

このたび、国王陛下の花嫁さがしの舞踏会があるということで、国中の年頃の娘がいる貴族に通知が来ました。
私のところにも、封蝋がされた立派な招待状が来ました。
こんなに蝋を使ってもったいない、うちなら3回分だわ！　と思ったのは貧乏根性というものでしょうか。

初めは渋っていた両親ですが、参加するだけで支度金がもらえるというくだりになって、俄然乗り気になりました。
せっかくだから支度金（おかね）をもらって王都見物をして、あわよくば城仕えのどこかのご子息をひっかけて、いえ、見初められでもしたら上

々ということになりました。

ただ問題は、私が女性としての魅力に欠けるということですわね。食費を切り詰めているためか、一向に膨らむ様子のない胸。やせっぽちの体。

白というより青白い肌は、もっぱら家の中で読書をしたり弟妹（きょうだい）の世話をしたりして過ごしているせい。

唯一の自慢は、直毛の豊かな黒髪。

庭で育てている花の根から抽出した香油を使って、毎日お手入れをしています。

我が国にはいろいろな髪色の人がいますが、真っ黒というのはどちらかといえば珍しいのです。

私の家族も、みんな栗色やこげ茶など濃い色はしていますが、黒ではありません。

しかも私は瞳も黒なので、母は神秘的で美しいと言ってくれます。

誰か黒髪がお好みの殿方がいるといいのだけれど・・・。

通知が来てから一か月後、私はお城に向けて出発しました。

支度金のほとんどは食費と屋敷の修繕費に当ててしまったため、私は色あせたドレスを着て迎えの馬車に乗り込みました。

片道一週間、お城での滞在期間は三日。帰りがまた一週間。その間の経費は全部お城持ち。

私の食費が浮くだけでも、うちの家族にはありがたいことですわよね。

「ふぅ・・・」

舞踏会初日にして、本日３９回目の溜息です。
溜息をつくと幸せが逃げますよ、と言う母の言葉を思い出します。
でもお母様。この状況では溜息をつくくらいしかすることがありません。
私、お城の舞踏会というのを甘く見てましたわ。

広間を埋め尽くす、きらびやかなご令嬢たち。
その数は１８７名にのぼり、玉座にお座りになるリクハルド陛下の前で最後の方が紹介を終えるころには、日が暮れていました。
その間の陛下は、時折わずらわしそうに髪をかきあげる他は、肘掛けに頬杖をついて退屈そうにしてらっしゃいました。
ようやく舞踏会の時間になると、陛下の周りには自分を売り込もうとする人々であふれ返りました。
私は、そんな人々に気圧(けお)されて、大人しく壁の花となることにいたしました。
そして今に至ります。

「ふぅ・・・」

４０回目の溜息をついたところで、近くにたむろするご令嬢たちの噂話が聞こえてきました。

「陛下が花嫁探しに熱心じゃないっていうのは、本当らしいですわね」
「即位して四年・・・。そろそろ正妃をお迎えになるべきなのに、ちっともその気配がないからって、大臣たちに無理矢理この舞踏会を開かされたそうですわ」
「お子様はいらっしゃるけど、妾腹の子じゃねぇ」

「アンジェリカ様でしたっけ？　公の場には出ていらっしゃいませんものね。やっぱり卑しい出自では陛下の横に並ぶにはふさわしくありませんわ」
「陛下もそんな女一人にかまわずに、とっとと正妃なりもっと身分の高い側室なりをお迎えになればよろしいのにね」
「妾妃様、よほど閨事がお上手なのかしら」
「やだ、あなたったら、くすくす・・・」

ご令嬢たちの噂話はまだまだ続きそうです。
げんなりした私は、お城の中を散策することにしました。

「まぁ、きれい」

紺色の制服を着た、癖のある栗色の髪をした兵士の方に案内されて、中庭に出ました。
手入れの行き届いた色とりどりの花が、淡い蝋燭の光に照らし出されています。
みんな舞踏会に行っているのでしょう。
中庭には私以外の人影はなく、さきほどの兵士の方も、案内を終えるとどこかへ行ってしまいました。
一人自由になった私は、小薔薇の道を抜け、少し開けた場所にある石造りの椅子に腰を下ろしました。

「いい香り・・・。幻想的で、夢のよう・・・」

この中庭を見られただけでも、王都に来たかいがありました。
家に帰ったら、弟たちに話してあげましょう。
目を閉じて、うっとりと花の香りを嗅いでいると、裾をつんと引か

れました。

「ボドワン、いい気分なんだから、邪魔をしないで」

つい口にしたのは、一番下の弟の名前。

あら、ここはお城でしたわ、と我に返ってみれば、小さな男の子が私の裾をつかんでいました。

目が合うと、幼い瞳が悲しそうに歪みました。

「おかぁしゃん、ちがう・・・」

くせのある濃い茶色の髪に、淡褐色（ヘーゼル）の瞳。

裾をつかむ手はぷにぷにとふくらんでいて、仕立てのよさそうな服を着ています。

年の頃は、二歳（ふたつ）か三歳（みっつ）でしょうか。

「お母様とはぐれてしまったの？」

城勤めの方のお子さんかしら。

「ううん、おかぁしゃん、とおいところにいるの。りゅか、あえないの」

遠いところ・・・。亡くなってしまったのね。かわいそうに。

「お・・かぁしゃん、あいたいよぅ。う・・えぐっ・・」

大きな瞳に涙がたまり、とうとう男の子は泣き出してしまいました。

よしよし、と頭を撫でますが、泣き止む気配はありません。

私の裾をぎゅうっとつかむ小さな手が痛々しいです。

「リュカっていうの？　ねぇ、泣かないで」

「あうぅ・・・おかぁしゃん・・おかぁしゃん・・・」

頬を濡らす涙をハンカチで拭いて、膝の上に抱き上げました。
体を前後に揺らしながら、背中をぽんぽんと叩いてなだめます。

「リュカ、いい子ね。泣かないで。あなたが泣いていると、お母様が悲しむわ」

私がそう言うと、リュカは自分の親指をしゃぶりながら、顔をあげました。

「う・・・うぇ・・おかぁしゃん、かなしい？」

「そうよ。泣いちゃだめ。遠いところにいるお母様は、リュカにいつも笑っていてほしいのよ」

「しょうなの？　おねぇしゃん、おかぁしゃんのこと、しってるの？」

「知らないけど、わかるのよ。私も弟や妹がたくさんいるけど、私の為にあの子たちが泣いていたら、とっても悲しい気持ちになるわ。どんなに辛いときでも、あの子たちの笑顔を見ると幸せな気持ちになるのよ」

そう、だから私はお城にきたのですもの。
王様は無理でも、いい男(ひと)を見つけて帰らなくては。
あぁ、さっきの兵士さんのお名前を訊けばよかったかしら。

「おねぇしゃん、いいによい・・・。おかぁしゃんとおんなし、によい、する」

いつの間にか泣き止んだリュカは、私の胸に顔をうずめて、半分目を閉じていました。
泣き疲れて、眠くなってきたのでしょう。
ちゅくちゅくと指を吸うしぐさが、この子の寂しさをあらわしています。
口元から指をはずし、ハンカチで唾液を拭いて、そっと握りこんであげました。
小さな手が私の手を握り返してきます。

なんて可愛らしいのかしら。
弟や妹の小さい頃を思い出しますわね・・・。

どれくらいの間、リュカを膝の上に乗せていたでしょうか。
廊下を大勢の人がぞろぞろと歩いてきました。
あら、舞踏会が終わってしまったのかしら。
私ったら、結局初めのごあいさつしか、陛下にお会いしなかったわ。
いくらなんでもまずいわよねぇ。
まずいと言えば、この子、どうしましょう。

「お困りですか」

すっかり寝入っているリュカを途方にくれて見つめていると、頭上から声が降ってきました。
見上げると、丸眼鏡をかけた白髪の男性が、微笑みを浮かべて立っていました。

「この城の侍従長を務めております、シルヴァン＝デュレーと申します。ブランシュ様でいらっしゃいますね」

「え、あ、はい。なぜ、私の名前を・・・」

「ご招待した方のお名前とお顔はすべて覚えております。広間にお姿が見えないので、心配をしておりました」

「まぁ、申し訳ありません。ちょっと退屈・・・じゃない、外の空気が吸いたくて中庭（こちら）に来たら、あまりのすばらしさに見入ってしまいましたの」

「ありがとうございます。ところで、膝の上のお子様はどうされましたか？」

あくまでも笑みを絶やすことなく、侍従長さんはリュカのことを尋ねてきました。

「私がここに腰かけていたら、裾を引っ張ってきたんです。話しかけたら、お母様に会いたいと泣き出してしまって。なだめているうちに眠ってしまいました。

できればおうちの方のところへ連れて行ってあげたいのですが、どこのお子さんかわからなくて、困っておりましたの」

「そうでしたか。では私が責任をもって、おうちの方のところへお連れします。ブランシュ様も今日はお疲れになったでしょう。どうぞお部屋でお休みください」

ぐっすりと眠っているリュカは、侍従長さんに抱かれても起きませんでした。

お城に来て二日目。
今日も夕方から舞踏会が開かれます。たぶん今日は夜中まで続くでしょう。
他のご令嬢たちは、夜に向けて各自部屋で休んでいるようですが、私は出会いを求めて城内を散策することにしました。

「あら、昨日の・・・」

とりあえず、知っている中庭に向かうと、廊下で昨日の兵士さんに会いました。

「昨夜はたいへんだったようだな」

柱に寄りかかって腕を組む兵士さんは、なんだかとても偉そうです。
お城勤めの方というのは、皆こうなのでしょうか。

「たいへん?」

「リュ・・・いや、子どもが泣いていただろう」

あら、兵士さん、私を案内したあと消えたと思っていたのですが、どこかで見ていたのでしょうか?
私の不審げなまなざしに気付き、兵士さんは口の端をあげて苦笑しました。

「いや、私はこの辺りの警備担当だからな。この柱の影にいたんだ。気付かなかったか？」

「まぁ、そうでしたの。気付きませんでしたわ。すみません、案内なんてしていただいてしまって、お仕事の邪魔になりませんでしたか」

「いや、舞踏会開催中は、お客人の案内も仕事の内だそうだから。今日もどこかへ出かけるのか？　行きたいところはあるか？」

「そうですね・・・。あの、では、殿方がたくさんいらっしゃるところってあるかしら」

「んん？」

兵士さんは、濃い灰色（グレー）の瞳をすがめて、私を見つめています。やだ、私ったら、これではまるで痴女ですわ。

「お、弟が騎士になりたいと言ってまして。騎士様のお仕事を見てきてって頼まれましたの。皆さんが訓練なさっているようなところって、見せていただけるかしら」

「なるほど。そういうことなら案内しよう」

にっこり微笑んだお顔は、やけに威厳があるように見えました。もしかして、兵士さんの中でも偉い方なのでしょうか。先に立って歩き出した兵士さんの背中を見ながら、この方ともう少しお話ししてみたいな、と思いました。

「こっちが隊舎で、こっちが訓練場。紺色の制服が親衛隊で、真紅が近衛。黒の制服の騎士団は第一師団から第六師団まであって、肩章の数で分けている」

案内されたのは城の一画。

表の豪華さとは違い、こちらは実用第一の造りになっていました。

「こちらにはどういう方がお勤めなんですか？」

「貴族の子弟もいるし、一般の志願者もいるな。今日は皆警備で出払っているか・・・。

非番の奴なら訓練場にいるかもしれん。行くか？」

「えぇ、お願いします」

訓練場では、何人かの騎士の方が汗を流してらっしゃいました。

どなたも立派なお体をしていらっしゃいます。

うーん、ここからどうすればお知り合いになれるのかしら。

殿方を引っかけた経験などない私は、とても困りました。

「馬場もあるのだが・・・ここからでは見えないな。上に行くか」

うなる私をどうとらえたのか、兵士さんはさらに案内を続けてくれました。

どこに行っても、兵士さんの顔を見ると、みなさん道を開けてくれます。

やっぱりこの方、偉い方なのですね。

息を切らしながら見張り台のような塔に上がると、城の周りを一望できました。

「あそこに見えるのが馬場だ。栗毛の馬が走っているのが見えるか？　あれが親衛隊長の馬で、隣の白いたてがみの馬が国王の馬だ。どちらも立派な馬だろう」

兵士さんが指さす方向には、柵で囲われた広い場所があり、その中を二頭の馬が楽しそうに駆けていました。
それを眺める兵士さんも、目を輝かせて嬉しそうにしています。
きっと馬がお好きなのでしょう。
しばらく馬を眺めていましたが、兵士さんがさらに遠くを指さしました。

「ずっと先・・・あの山の向こうまでが我が国の領土だ。城下町から続く街道は、山を越えて隣の国まで続いている。先王の代はあそこまでしか伸ばすことができなかった。私の代ではさらにその先、海辺の国まで道を通したい」

「くす・・・まるでご自分が国王であるかのような言い方ですわね」

「ぬ・・・」

「あ、すみません。この国の兵士さんなのですもの、当たり前ですわね」

「そ、そうだな。あぁ、もうこんな時間か。ついしゃべりすぎた。大丈夫か？　おまえ、主人に怒られるようなことはないか」

あ、私、どなたかの侍女だと思われてたんですね。どおりで気安く

お話ししてくださるわけです。
そういえばみなさんお付きの人を連れていましたわ。単身やってくる貴族の娘なんていないのでしょう。

「大丈夫です。午後のお茶には十分間に合いますし」

お茶を淹れてくれるのは、私の世話係りになっているお城の侍女さんですが。
その侍女さんにしても、一度に何人か担当しているらしく、めったに部屋に来ることはありません。

「そうか。寛容な主人でよかったな。しかしそろそろ戻ったほうがいいだろう。私も持ち場に戻る」

「はい。ありがとうございました」

中庭まで送ってくれてから、片手をあげて背を向ける兵士さんに、私は勇気を出して呼びかけました。

「あの、お名前をお伺いしてもよろしいですか」

「リ・・・コスティだ」

「コスティさん？　私はブランシュといいます。お城への滞在は明日までですが、よろしくお願いします」

「あぁ。明日も散歩か？」

「たぶん」

「では、また明日ここで会おう」

「はい。ありがとうございます！」

お名前をお聞きできただけでなく、明日のお約束までできるなんて！
足取りも軽く自室に向かう途中、裾につんと覚えのある感触がありました。

「おねぇしゃん」

「あら」

リュカでした。

「今日もお城に来たの？　一人？」

「ん、おねぇしゃん、あしょぼ」

「いいわよ」

そう返事をすると、不安そうだったリュカの顔が、ぱっと明るくなりました。
手をつないで私の部屋まで行き、歌を歌ったり手遊びをしたりしていると、昨日も会った侍従長さんがお迎えにきました。

「やっぱりここでしたか。ブランシュ様、ご迷惑をおかけしました」

「いえ、私の方こそお断りもせず・・・」

気付けば日が傾きかけていました。リュカのおうちの方が心配して

いるかもしれません。

「おねぇしゃん、あしたもあしょんでくれる？」

また不安そうな顔になったリュカは、私の服をぎゅうっとつかんで、離そうとしません。

「そうね、リュカのおうちの人がいいって言ったら、今日くらいの時間でしたらいいわ」

「ほんと！？」

「えぇ」

「わぁい！　おねぇしゃん、やくそくだよ」

「はい、約束ですね」

リュカを安心させるように微笑んで、私は当然のように小指を差し出しました。

「？」

「知りません？　約束をするときは、小指を合わせるのですわ。ほら、こうやって」

不思議そうな顔をしているリュカの手をとって、小さな指を私の指にからめました。

「指切りげんまん。嘘ついたら針千本のーます」

「え！　はり？　のむの！？」

「ふふ、そうですわ。ちゃんとおうちの人に言ってこないと、針を飲ませますよ」

「いやぁッ　ゆう！　ちゃんとゆうよ！」

「はい。私もリュカを待っていますからね。約束は守ってくださいね」

「うん！」

笑顔になったリュカは、素直に侍従長さんの手をとりました。

「うまいものですね」

「弟妹（きょうだい）が多いものですから。リュカのおうちの方はこのお城にお勤めなんですか？」

「えぇ、そんなところです。ありがとうございました」

にっこり微笑んで、侍従長さんは私の部屋を後にしました。

舞踏会では、大きな円になって、全員が陛下と踊りました。
かくいう私も、一瞬だけお手に触れました。
手袋に包まれた陛下の手は、大きくて温かくて・・・弟たちにまた一つ土産話ができましたわ。

真夜中を過ぎ、ようやく舞踏会が終わりました。
噂話や自慢話に余念がないご令嬢たちは、少しまばらにはなりましたが、まだまだ広間に残っています。
明日のお約束ではあるけれど・・・コスティさんはいつもの場所にいらっしゃるかしら。
淡い期待をしつつ、廊下を進みます。
どうせ部屋に戻るには中庭のそばを通るので、おやすみなさいとごあいさつできたらいいのだけれど。
確かここ・・・と思った場所に、人影がありました。

「コスティさ・・・」

声をかけようとして、その影が一つでないことに気付きました。
柱を背にして立つ彼の胸にしなだれかかる、金の髪・・・。
どこかのご令嬢でしょうか。私は、とっさに別の柱の陰に隠れました。
あ・・・なんで私隠れてしまったのかしら。
そのまま知らんふりをして通り過ぎてしまえばよかったのに。
そして明日の朝、何食わぬ顔でご案内を頼んで・・・・。

ぽろぽろぽろ

なぜでしょう。
涙が出てきました。
コスティさんが約束をしていたのは私だけではなかったのでしょうか。
私とは明日の朝で、今の時間はあの女性と待ち合わせだったのでしょうか。
きっとそうですよね。

案内をするのが私だけとは限りませんもの。
“案内も仕事のうち”って言っていたではありませんか。
仕事・・・そうです、仕事です。
私ったら、二度お会いして、お名前とお約束をいただいただけで、いつのまにか自分が彼の特別であるように思っていたのですわ。

しばらくの間、柱の陰にうずくまり涙を拭いていると、当のご本人に見つかってしまいました。

「泣いているのか？　主人に叱られたか？」

「そ、そんなんじゃありません。コスティさんこそ、さっきのご婦人はいいのですか」

「さっきの？　あぁ、酔っ払いか。知らん」

知らんって・・・。酔っ払い？　お約束していた方ではないの？

「そんなに赤い目をしていたら、部屋には戻れないだろう。中庭でも歩くか？」

「・・・もしよければ、本庭の方を見せていただけると嬉しいです。中庭がこんなに素晴らしいのですもの、本庭はどれほどなのか、見てみたいですわ」

ここにいたら、またさっきの女性が戻ってくるかもしれません。
コスティさんは、私の願いをすぐにかなえてくださいました。
本当は、コスティさんと一緒ならどこでもよかったのですけれど。

「まぁ・・・！　素敵！」

ところどころに焚かれたかがり火に、花々が浮かび上がります。
ミニ薔薇を中心とした中庭と違い、本庭は大輪の薔薇が咲き乱れていました。色合いも、赤や橙色（オレンジ）などはっきりしたものが多いようです。

「くくっ・・・現金なものだな。まぁ涙が止まってよかった」

「す、すみません・・・」

彼の笑顔に、頬が染まります。
こ、これではお庭を見るどころではありませんんわ・・・。

「きゃ！」

頬に両手を当てて、ぼぉっと歩いていると、何かにつまずきました。
とっさにコスティさんが支えてくれます。

「ご、ごめんなさい」

「いや・・・」

息がかかるほどの距離にコスティさんのお顔があります。
胸が、どきどきと高鳴りました。
このままくっついていたら心臓が壊れてしまいます。
慌てて離れようとしましたが、コスティさんの手が私の腰から離れません。

「あ、あの・・・？」

「・・・」

コスティさんの手が、私の顎に添えられます。
灰色（グレー）の瞳が閉じられます。
あ・・・これって・・・・。

「だ、だめ・・・」

ふいっと顔をそむけて避けました。

「なぜ？」

コスティさんが耳元でささやきます。
ぞくりと背筋が震えました。腰に回された手が、やけに熱く感じます。
なぜ？　なぜですって？　あぁ、こんなことが私に起きていいのでしょうか。

「だって・・あの、こんなところで・・・」

「こんなところ？　みな、している」

え。
そういえば私、さっき何につまずいたのかしら。
足元を見ると、薔薇の影から伸びる足がありました。

「あぁん、何？　痛いわね・・・」

どこかで見覚えのある女性が、体を起こしました。
髪は乱れ、ドレスの胸元が大きくはだけています。

「愛しい人、まだもう少し・・」

「あん・・・」

その女性(ひと)は、奥から伸びた腕に抱かれてまた見えなくなりました。

「第五師団のウィレクか。うまくやったようだな。
舞踏会の後、気に入った相手としけこむのはよくあることだ。
花嫁探しの舞踏会でまでとは思うが、まぁ好きにすればいい」

私を腕に抱きこんだコスティさんが、ふんっと鼻で笑うように言い捨てます。
そうして見渡してみれば、そこかしこからひそひそと声が聞こえたり足が覗いていたりします。

「そ、そそそ、そんなことが・・」

「庭に、というからおまえも誘ってくれたのかと思ったのだが?」

「ち、違っ・・・私、そんなつもりじゃ・・・」

そんなつもりじゃないと、言い切れるでしょうか。
だって、私は出会いを求めてお城に来たのです。今のご令嬢や先ほどコスティさんにしなだれかかっていた金髪の女性と、何が違うというのでしょうか。
あぁ、それなのに。
今の私は、もしそんな下心が知れたら、コスティさんに嫌われてし

まうかもしれないと恐怖しています。

「ご、ごめんなさい・・・！」

気付いたときには、どん！　と彼を突き飛ばしていました。
こんな汚い私、彼に触れる資格はありません。
薔薇のとげが裾を裂くのもかまわずに、夢中で部屋へ駆け戻りました。

「シルヴァン・・・。そこにいるか」

「はい」

「一人、選ばねばならんのだったな」

「はい」

「侍女でもいいのか？」

「侍女、といいますと？」

「今の娘だ」

「陛下、ブランシュ様は侍女ではありませんよ。ブランシュ＝ペレジー＝デボラ。先々代の御代（みよ）に武勲を立てたデボラ家のご息女です」

「何」

「リュカ様が今最も懐いている女性ですよ。
くすくす・・・親子というものは、好みも似るのですかね」

「ぬ・・・」

お城に来て一週間。
とっくに舞踏会は終わり、城中を飾っていた美しいご令嬢たちの姿は、すっかり見なくなりました。
なぜか私は帰宅の許可が出ません。
お世話をしてくれる侍女は何人かいるのですが、その人たちに聞いても「わかりかねます」「私たちは身の回りのお世話をするよう、仰せつかっているだけです」などと言うばかりでらちがあきません。
どどどういうことでしょう。
私、何か粗相をしたのでしょうか。
いまさら滞在費を払えとか言われても払えませんけど。

コスティさんにも、あの日以来お会いしていません。
恥ずかしくて、会えるはずもありません。
毎日特にすることもなく、部屋まで遊びにくるようになったリュカと遊んでいると、夕方侍従長さんが迎えに来ました。
昨日ははぐらかされてしまいましたが、今日こそはと勢い込んで切り出します。

「あの、私、いつになったら家に帰れるのでしょうか」

「それは・・・」

入室した途端迫られた侍従長さんは、はりついた笑顔のまま、後ろを振り向きました。

「帰れん。というより、帰さん」

「コスティさん・・・！」

侍従長さんの後ろには、毛皮で縁取りをされた真っ赤なマントを羽織ったコスティさんがいました。

「おとうしゃん！」

リュカが、私の膝からぴょんと飛び降りて、コスティさんに抱きつきました。

「お、お父さん??」

「リュカは私の息子だ。近いうちに、おまえの息子にもなるな」

「え?」

「陛下、私からお話いたしますから、少し黙っていてください」

「ぬ・・・」

侍従長さんの話によると、私がいままで王様だと思っていた方は偽物で、目の前にいるこの方が本物の王様、リクハルド陛下でした。
そしてリュカは陛下のご子息、つまり王子様だったのです。

「ではコスティさんというのは・・・・」

「コスティ＝トピ＝スティネン親衛隊長。陛下の身代わりをしてくださっていた方のお名前です」

なんとお二人は入れ替わっていたのです。
絵でしかそのお姿を拝見したことのなかった私は、鬘（かつら）をかぶり、王様の衣装を身に付けた親衛隊長さんを王様と思って疑いもしませんでした。
亡くなられたと思っていたリュカのお母様も、ご健在でした。
舞踏会で噂に聞いたアンジェリカ様が、リュカの御母堂でした。

「そうだったのですか・・・。では私は不敬罪で裁かれるために残されたのですね」

コスティさん・・いえ、陛下を突き飛ばしたり、リュカに気安く触れたりしていたのですから。

「いえいえ、とんでもないことでございます。ブランシュ様におかれましては、陛下のご正妃になっていただきたいと思いまして」

「・・・・・・え？」

「リュカ様も懐いていらっしゃいますし、陛下もあなた様をぜひにとお望みです。
我がブルクハルト国の王妃として、お輿入れいただけませんか」

えええええ!?

「無理！　無理無理無理、無理です！！！」

「無理といっても、もうおまえの実家に結納金を払ってしまった」

え。コスティさん・・・いえ、陛下、今なんと?

「おまえの私物も届いている」

いつのまに。
実家からお城までは片道一週間かかるはずなのですが。

「もちろんおまえの両親は大喜びだ」

あああああ、そうですよね。そうでしょうとも。
これで弟たちにお腹いっぱいごはんを食べさせられる・・・とは思いますが、私が正妃!?
涙目になる私に助け船を出してくださったのは、どんなときも微笑みを絶やさない侍従長さんでした。

「と、急に言われてもお困りになりますよね。
ひとまずリュカ様のお世話係として、城に滞在なさるのはいかがでしょう。お金も、その支度金と思ってくださってかまいません」

そ、それならできそうです。

「ひとまず、というのはどれくらい・・・」

「そうですね。半年でいかがですか。実はアンジェリカ様は今身重（みおも）でして、リュカ様のお世話が十分にできません。乳母もいるのですが、最近嫌がってしまって・・・」

「こら、勝手に話を進めるな。半年経ってブランシュが出て行ってしまったらどうする気だ」

「そこは陛下の腕の見せ所でございます。半年かけて落とせないならおあきらめくださいませ」

「おまえ・・・！」

「あの、でも、妾妃様がご懐妊の折にさらに私なんか・・・大丈夫なんですか？」

そもそもなぜそんな時期に花嫁選びの舞踏会なのでしょう。

「懐妊したからさ。一人くらいならともかく二人目もとなると、大臣たちもアンジェリカばかり寵愛するなとうるさくてな。下手したら母子ともに命を狙われかねん。
正妃が見つからんまでも、舞踏会でも開いておけば目隠しになるかと思った」

「いかがですか。陛下のことは気にしないでいいですよ。リュカ様のお世話をしていただければ十分です。
ご希望であればお給金もお支払いたしましょう」

「えっ」

にいぃっこり。

侍従長さんの笑みに、しまった！　と思った時にはもう遅かったのです。

「では、決まりですね」

「おまえ・・・。私よりも給金か。覚悟しろよ」

そうして私はお城に住むことになりました。
それからのリクハルド陛下の猛烈なお誘いは、とても恥ずかしくて人様には言えません。
他に男性を知らない私がそう長く抗えるはずもなく・・・。

寝台が、二人分の重さを受けてギシリと鳴りました。

「あの、陛下」

「リクハルドだ」

「リ・・・クハルド様」

名前を呼ぶと、嬉しそうに笑いました。
なぜ気付かなかったのか不思議なくらいに、その笑顔はリュカとそっくりでした。

「今さらですが・・・なぜ私なんかを？」

「おまえがリュカと遊ぶ姿を見て。あと私の話を楽しそうに聞いていた」

「そ、そんなことですか？　他には？」

「他？　見た目も好みだぞ。特にこの髪がいい」

そう言ってリクハルド様は私の髪に口づけました。

「あの、でも」

「もういいだろう。少し黙っていろ」

髪をたどり、あのとき触れられなかった唇が、私の唇に重なりました。

これは夢じゃないかしら。

目覚めたら、あの招待状が来た日に戻っていたりして・・・。

えっ

あっ

やっ

夢、じゃ、ないかも。

だめっ、見ないでっ

私、胸、小さくてっ　えっ大きくしてやる？　そんなっ

あ、ちょっと、待ってください。あ、あぁっ・・・。

あ、痛っ、あああああ。

「あ、蹴った」

私のお腹に手を当てていたアンジェリカさんが、嬉しそうに言いました。
側室の一人となった後、アンジェリカさんに初めてお会いしたときには本当に緊張しました。
私の何を気に入ってくださったのか、とても仲良くしてくださいます。

「もうすぐね」

「そうですわね」

「きっとブランシュに似てかわいい子が生まれるよ」

「ふふ、アンジェリカ様のようなしっかりした子になるといいですわ」

「それって気が強いってことじゃないの」

「いいじゃないですか」

「まぁねぇ。男の子ならね」

「そなたたち、私のことを忘れてないか」

お茶をしながら笑いあう私たちを、向かいの席に座ったリクハルド様が腕組みをして睨んでいます。

「まるでアンジェリカが夫のような口ぶりではないか」

「いいじゃないの。ねぇ、胸、一人目のときより大きくなったんじゃない？」

そう言って、アンジェリカ様が私の胸を下からすくうように持ち上げます。

「くすくす。くすぐったいですわ」

「今からよく揉んでおいた方がいいのよ。お乳の出がよくなるわ」

「だからって、やぁん、くすぐったいですってば」

脇の下から胸の横をマッサージしてくださいます。

「やめてくれ・・・目の毒だ」

「妬いてるの？」

「むしろおまえに妬いてほしいな。あぁ、そうだ、忘れるところだった。シャンタルからの祝いの品を預かってきた」

「まぁ！」

リクハルド様が大きなリボンのついた包みを取り出しました。
シャンタル様は、私の後に入られた妾妃様です。
ちょっと特殊な事情がおありの方らしく、一度もそのお姿を見たことはありません。
包みを開けてみると、真っ赤に染まった人の手のようなものが出てきました。

「ひっ・・・！」

「ぬ・・・」

こ、こここれは、魔女（サバト）の手と呼ばれる魔術道具では！？

「あはははは！　シャンタルらしいわ！」

青ざめる私を横目に、アンジェリカ様は大爆笑です。

「そそそうなのですか？」

嫌がらせじゃなくて！？

「うん、あの子、変わってるからね」

さすが、アンジェリカ様。シャンタル様とも仲良しなのですね。

「すまないな、腹の子は平気か？」

「あ、私と一緒にびっくりはしたみたいですけれど、今は大丈夫です」

「よかった・・・。次からは中身を確かめてから渡すことにする」

「くす。そうしてくださると助かります」

庭の花々は、今日も美しく咲き乱れています。
リクハルド様が、私の髪をそっと撫でてくれました。
アンジェリカ様も、微笑んでお腹をまた撫でてくださいました。

お二人の大きな愛に包まれて、ブルクハルト城は今日も平和です―

妾妃の独白～Bの場合～（後書き）

弱音は活動報告で吐きますか・・・。

＊＊＊＊＊

◆番外◆主従のつぶやき

リック　：「なんで私の選んだ女は、正妃にというと嫌がるのだ」
シルヴァン：「王妃様ともなれば、いろいろ大変ですからね」
リック　：「だからって、側室でいいというのは理解しがたい」
シルヴァン：「そこまでの魅力が陛下にないのではないですか」
リック　：「・・・おまえ、それでも私の侍従長か」
シルヴァン：「おしめまでお取替えあそばしたお方に凄まれても、ちっとも怖くありませんねぇ」
リック　：「～～～！！！！！」

妾妃の独白～Cの場合～

ブルクハルトの国王には、二人の側室がいる。
一人目はアンジェリカ。
居酒屋の娘で、黒髪・淡褐色（ヘーゼル）の瞳、小柄で童顔、２８歳。
二人目はブランシュ。
地方貴族の娘。黒髪・黒目で小柄、童顔、２２歳。
つまり、国王の好みは黒髪で小柄で童顔であるということが言えるだろう。

「シャンタル。国王の懐に入り込み、必ずその首をとってこい」

「お任せください、尊師」

若干１８の私に白羽の矢が当たったのは、私の容姿が国王の好みにぴったり合ったからだ。
暗殺者の母を持ち、当然私も組織の一員として幼い頃から修練を重ねてきた。
しかし、ここのところめっきり戦が減って、周囲に認めてもらえるほどの実績を積むことができなかった。
こんな好機（チャンス）、めったにない。
戦の裏にその影ありと言われた暗殺者集団、“フィダーイー”の一人として、この役目、果たして見せる。

「尊師、成功のあかつきには・・・」

「ふふ、いいだろう。おまえの望む褒美をやる」

「はい！」

長い指が私の髪を撫でる。
それだけで私の頬は染まり、体が震えた。
国王の首は私が必ずとる。そして、敬愛する尊師に認めてもらうのだ。

見習いの侍女として城に潜入して3か月。
国王リクハルドは、訓練場にいるか側室といちゃいちゃしているか女の尻をおいかけているかのどれかで、とても仕事をしているようにはみえない。
これなら毒を盛るか事故を装うかすれば、簡単に殺せると思ったけれど、そこはさすが一国の王、優秀な側近たちがおり、なかなか隙がなかった。
やはり向こうから近付いて来るように仕向けなければならないか。

国王好みの容姿を生かし、寝所に呼ばれるような状況になればしめたものだ。
しかし新米の侍女に国王の側に行く用事など割り当てられるはずもなく、じりじりと時間だけが過ぎていた。
そんなある日、年が近く親しくなった侍女が、休憩時間に話しかけてきた。

「ねぇ、聞いた？　シャンタル。明日ね、陛下が御猟場に行かれるんですって。

今来ているお客様が、狩りがお好きだからって、かなり大規模な鹿狩りが行われるらしいわよ」

「へぇ。大規模ってどれくらい？」

「百五十名くらい参加するらしいわ。でね、私達も行けるのよ！」

「え、そうなの？」

「うん。外でお茶を出したりみなさんのお世話をしたりするんですって。騎士様とお知り合いになる好機（チャンス）よ！　がんばろうね！」

玉の輿を目指しているという彼女は、鼻息も荒く握り拳を作っている。

好機（チャンス）。そうだ、ようやく好機（チャンス）が訪れた。

国王（リクハルド）を暗殺するための―

国王はたてがみだけ真っ白な芦毛の馬に乗っていた。ペルシュロンという品種の馬で、速さよりも力を重視した馬だ。

客人に先を譲り、ゆっくりと進む国王は、鹿よりもそれを追う騎士たちの動きを見ているように感じる。

低木の茂みに隠れて様子をうかがっていると、遠くから犬の鳴き声が聞こえてきた。

御猟場を管理する一族が使う狩猟犬だ。

犬に追い立てられた鹿の群れが、王たちの一団の前に飛び出してきた。

「来たぞ！」
「そっちだ！」
「追え！！」

王の前でいいところを見せようとする家臣たちが、我先に得物へと駆けていく。
後ろからゆっくり進む国王は、一人出遅れる形となった。
家臣たちと距離ができたところで、鹿笛でおびき寄せ、捕獲しておいた一頭を国王（リクハルド）の前に放つ。
たいしてやる気のなさそうなリクハルドだったが、さすがに目の前に飛び出されては追わないわけにもいかなかったのだろう、馬首を巡らし鹿を追い出した。
それが家臣たちとは逆方向とも気付かずに。

私の笛に操られた鹿は、国王（リクハルド）を森の奥深くへと誘う。

ザッ

鹿が茂みに飛び込んだ。

「待て！」

国王（リクハルド）が、茂みに向かって、つがえた矢を放った。
いまだ！

「きゃぁ！」

「何!?」

鹿と入れ替わって、足を押さえながら王の足元に転がりでた。

「なんだ、おまえは」

「ももも、申し訳ありません。この先でご休憩の準備をしていたのですが、水を汲んで来いと言われて迷ってしまって・・・」

抱えた水袋を見せる。

侍女服は城で与えられたものだし、御猟場にそうそう無関係なものが入れるはずもない。

国王はすぐに私のことを信じたようだ。

「・・・けがをしているな。私の矢が当たったのか?」

国王(リクハルド)が馬から降りてくる。

あえて隠そうとした足を、乱暴にとられた。

「手当の必要があるな。この近くに狩場を管理する者の小屋があったはずだ。来い」

国王(リクハルド)の腕に抱えられて、馬に乗る。

折よく雷が鳴り始めた。

ぽつぽつと振りだした雨は、あっという間に激しい雷雨となった。

管理小屋に着くころには、人馬共にずぶぬれになっていた。

小屋に着くと、国王はまず傷の手当てをしてくれた。

「見た目ほど深くはなさそうだな。すまなかった」

「いえ・・・私がうろうろしていたのが悪かったんです。陛下手ずから・・・申し訳ありません」

ふくらはぎに自分でつけた傷は、範囲こそ広いがすぐ治るだろう。
床に座り、わざと裾を多めにたくしあげる。
手巾(ハンカチ)を包帯代わりに巻く国王は、ちらっと伸びた足に視線を送った。

「・・・冷えてきたな」

小屋の中央にある炉に、リクハルドが薪を組んで火を起こす。
国王のわりにまめな男だ。
私も鍋を見つけてお茶の準備をした。
リクハルドにお茶を渡し、自分も口をつける。

「ふぅ、温まるな。・・・どうした?」

国王がお茶を飲み干したのを見届けてから、体を抱えて震えて見せた。

「寒くて・・・」

「傷のせいか? 服も濡れたままだな。そのままでは風邪をひく。服を脱いで乾かすか」

言われるまま、恥らいながら服を脱ぐ。
国王(リクハルド)も上着を脱いで、梁につるしていた。

「こっちへ来い」

「はい・・・」

肌着一枚になって体を寄せると、リクハルドは当然のように腰に腕をまわしてきた。

「ん・・・」

唇を吸われる。噂通り、手が早い。

「へ、陛下・・・？」

「おまえのような侍女がいたとは知らなかったな。いつ入った？」

「3か月前からお勤めさせていただいています」

「ほお。雇用の時期とは違うようだが」

「マイアさんが体調を崩して、その代わりです。遠い親戚になります」

「そうだったのか」

話しながらもリクハルドの手は私の髪を撫で、首筋に降りる。

「あ・・・」

「細い首だな。少し力を入れたら簡単にへし折れそうだ」

「お、おやめください。そんな恐ろしいこと・・・」

「くっ・・・冗談だ」

冗談だと？　ふざけるな。ばれたかと思ったじゃないか。
首からすっと手が離れた。その代りに、唇が鎖骨をなぞる。

「あ・・陛下・・・」

「温めてやろう」

「んっ・・・」

「女。名をなんという」

「シ、シャンタルです」

「戦女神（シャンタル）か。いい名だな」

あおむけられ、押し倒された。
いつのまにか床には王のマントが引かれており、冷たくはない。
あ、ど、どうしよう。
この先は、まだ経験がない。
いつか尊師と・・・と思ってとっておいたのに。
お茶にまぜた眠り薬はまだ効いてこないのか。
いっそ眠る前に殺（や）ってしまうか？

「う・・・くっ・・・なんだ、急に眠気が・・・」

あと一歩というところで、国王（リクハルド）がこめかみに手をあてて頭を振る。

徐々に私に触れる手の力が弱まり、がっくりと落ちた。

「ようやく効いてきたか」

まったく、ハラハラさせる。

私の上で脱力した国王の体を押しのけて、手荷物に隠しておいた仕事着を着込んだ。真っ黒な装束は、返り血を浴びても目立たない。

生乾きの侍女服はしまって、小屋の中に残る自分の痕跡を消した。

国王を殺したら、そのまま逃げる算段だ。

服の隠しから、細い針を取り出す。

これを脳天に刺せば、死因を特定されることなく殺すことができる。

この首もらった・・・！

勢いをつけて針を刺そうとした瞬間、ガッと腕をつかまれた。

「何っ・・・・！」

「なるほど、これがおまえの暗器か」

「起きて・・・っ」

すっかり寝入っていると思った国王（リクハルド）は、ばっちり目を開けていた。

「ふん。だてに国王なんぞやっとらん。たいていの薬には抗体があってな。

幼少のみぎりから少量ずつ様々な毒や薬を飲まされている。お茶を飲んだ瞬間、睡眠薬だとわかった」

「くそ！」

飛びのこうとしたが、腕をつかまれていて身動きがとれない。
繰り出した蹴りは避けられ、体当たりも軽く受け止められた。
腕をひねって羽交い絞めにされる。

「うぅ・・・」

「どうした。殺らんと、犯るぞ」

「殺るなら殺れ！　任務に失敗したからには、生きて帰れるとは思わん！」

「くくっ・・・その殺るじゃないんだがな」

「なに？」

「さっきの続きだ。寝たふりをするのがつらかったぞ」

「続き？　ヤるって・・・」

床に引き倒され、黒装束をはぎとられた。自分の服で両手を縛られる。

「え、や、そういうこと？　あっ、やっ、だめっ」

「いまさらだめはないだろう。死ぬよりいい思いをさせてやる」

「なっ、ふざけるな！　殺せ！　早くころ・・・あぅっ、あっ、あああああああああ！」

「初めてだったのか」

「う・・・ひぃっく・・・うぅ・・・」

「暗殺者(おまえたち)はこういう訓練もするんじゃないのか？」

「尊師は・・・尊師はそんなことはしない」

「尊師、か。その呼び名、フィダーイーのものだな？」

「・・・！」

しまった。私は、敵の手に落ちただけでなく、なんてことを！

「やめろ！」

がつっ

舌を噛み切ろうとした。

口の中に血の味が広がる。

覚悟した痛みはない。

どうして？

「・・・っ・・・」

リクハルドの指が、私の口の中に入れられていた。

「おまえ、一回の失敗であきらめるのか？」

「え・・・」

「フィダーイーは、任務を果たすまで何十年でも追い続けると聞くぞ。私を殺すんだろう？　やってみろ」

「何だと」

「側近が優秀すぎてな。退屈していたところだ。狙えるものなら狙ってみろと言っている」

「言ったな・・・。ずいぶん余裕じゃないか」

「くくっ・・・いい目になったな。お、ちょうど雨も上がった。狩りに戻らねば。客人の機嫌を損ねては面倒だ」

私たちが身支度を整え終わるころ、外で馬の足音がした。扉が開き、家臣たちが飛び込んでくる。

「陛下！　陛下！」

「ご無事ですか！？」

「あぁ、この侍女と雨宿りをしていた。心配をかけたな」

「いえ、申し訳ありません！」

「ご無事でよかった・・・！」

国王（リクハルド）は私を振り返って目配せをすると、何事もなかったように馬に乗って狩りに戻って行った。

そして、私は今もまだ侍女として城に勤めている。
しかも、狩りのときに共に雨宿りをし、かいがいしく世話をしてくれて気に入ったとのことで、国王付きの侍女に指名された。

夜―
国王（リクハルド）の寝所に忍び込む。
すっかり寝入っている国王（リクハルド）の枕元に、気配を殺して近づく。
頸動脈に狙いを定めて、短剣（ナイフ）をすばやく振り下ろした。

ざく・・・！

枕に短剣（ナイフ）が刺さり、中身の羽毛が舞い散る。
また失敗した・・・！
飛び退（すさ）ろうとしたところを、あっと思う間に腕をとられた。
寝台に押し倒され、唇をふさがれる。

「ん、んん・・・・！」

「今夜も私の勝ちだな」

「くそっ、殺す！　絶対に殺してやる」

「くくっ・・・あぁ、いつでも来い。そのかわり、失敗したら・・・・」

「んぁぅっ、あああああぅっ」

「ふ・・・相変わらずキツイな」

「くっ、言うな・・・！」

くそっ
いつか絶対にその首、とってやる！

大きな出窓から、うららかな春の日差しが差し込んでくる。
私はなぜかドレスを着て、黒髪の女性二人を前にお茶を飲んでいる。

「えー、シャンタルってリックを殺そうとしてたの？」

「う、はい」

「リクハルド様も思い切ったことをなさいますわねぇ」

おもしろそうに、三日月型に瞳を細めているのはアンジェリカ。
頬を手に当てて心配そうに言うのはブランシュだ。
アンジェリカには何度か会っていたが、ブランシュに会うのは今日が初めてだった。

「で、その初恋の人はどうしたのよ」

「は、初恋!?」

「尊師って方がそうなのでしょう?」

「え、あ、う」

初恋・・・そうなのだろうか。

尊師は皆の尊敬の対象で、憧れで、あの方にほめてもらうためにがんばっていた。

いつかあの方の女になりたいと思っていたけれど、夜な夜な国王(リクハルド)に抱かれるうちに、殺せなくなってしまった。

今はもう組織からの連絡もなく、きっと見捨てられたのだと思う。

「それよりも、あの、ごめんなさい。お祝い・・・驚かせてしまったようで」

「あら、気にしないでくださいませ」

「そう言ってもらえると・・・。一つだけ願いごとをかなえてくれるという品だったから、いいかと思って・・・」

「まぁ、そうでしたの! では今度考えておきますわ」

「ほらね、こういう娘(こ)なのよ。嫌がらせなんかじゃなかったでしょう?」

「嫌がらせ!? とんでもない! あぁ、やはりそんな風に思われたんですね。ごめんなさい・・・」

縮こまる私を見て、女性二人はころころと笑っている。
特徴だけとらえて、自分が似ているだなんておこがましいにもほどがあった。
ぱっと目を引く美しさをもつアンジェリカと、控えめで可憐な美しさをもつブランシュ。
容姿だけでなく中身もすばらしく、どちらも国王（リクハルド）の妃にふさわしい。
それに比べて私は・・・。

「ねぇ、そういえば近所の奥さんが言ってたんだけど、おかかえ魔術士ってのが来たって本当？」

「えぇ。黒髪黒目小柄で童顔。私たちを全部足して割ったような方ですわ」

落ち込む私をよそに、お二人は最近来た女魔術士の話をはじめた。
彼女に関しては、私もまだ探りきれておらず、さしたる情報もない。

「それってさ」

「幼少の頃、一目ぼれだそうですの」

「リックの原点を見たわね」

「私たちはその方の代わりだったのですかねぇ」

「どうだかね。ってことでシャンタル」

「はい？」

「どんな女なのか探ってちょうだい」

「えぇ？」

それは、まぁ、頼まれなくても探るつもりではあったけれど。
容姿も中身も国王（リクハルド）にふさわしいとは思えない私は、せめて彼の役に立ちたいと城内のことは把握するようにしていた。
もし害をなすものがあれば、身に付けた技を使って排する覚悟（つもり）で。

「シャンタル様はそういうこともできますの？」

「さ、様はいりません・・・。できるといえば、できます」

「まぁた、謙遜して。あたしに会ったのだって、居酒屋（パブ）の屋根裏に潜んでたのがきっかけなのよ。
リュカが手伝いに来てたとき、熱湯ひっくり返したのを見てて、大火傷しかけたところを助けてくれたの」

「まぁ、大丈夫でしたか？」

「へーき、へーき。びっくりして大泣きしてるのを、わたわたしてシャンタルがなだめてるのが面白かったわぁ」

「アンジェリカ、それはちょっとひどいです・・・」

「では私のこともご存じでしたの？」

「あ、はい、すみません。何回かお部屋にお邪魔したことはあります。それで、とてもご弟妹想（きょうだい）いでいつも自分のことは後回しにしてらっしゃるから、魔女（サバト）の手でご自分の願い事をしてくれたらなと思

って・・・」

「そうでしたの。でも今度からは部屋に潜むのではなくて、正面からいらしてくださらない？」

「あ、や、ごめんなさい。そ、そうか、嫌ですよね、勝手にのぞかれてたら。もうしません」

「くすくす・・・。そうではなくて、お茶をしましょうとお誘いしているの」

「え？」

「ふふ、ね？　おもしろいでしょう？」

「そうですわね。いけない、ついいじめたくなってしまいそうですわ」

「リックもねぇ、たぶんそういうところが気に入ったのよね」

「魔術士さんはどうなんでしょうね」

「あ、そうそう、その話だったわ」

その後、もしその魔術士の代わりとして私たちを側に置いているなら、それがわかった時点で三人で出て行ってやろうと言う話になった。

「うちで働けばいいわよぅ。こんな美人揃い、絶対繁盛するわ」

「私の実家も持ち直して、今では結構貯えもありますし、しばらくこもっても心配ありませんわ」

「それでは国王（リクハルド）の手の内からは出られません。いっそ他国に旅行でもいきませんか」

「「それいい」ですわ！」

景色のいいところがいいとか、おいしいものがあるところがいいとか、温かい湯が沸き出る温泉というものがある国があるとか、旅の話で盛り上がる。

「あぁ、楽しかった！　そろそろあたし帰らないと。店を開ける時間だわ」

「またいらしてください」

「うん。ドレスは窮屈だけど、子どもたちとあなたたち二人に会いにくるわ」

「国王（リクハルド）は？」

「あはは、リックはいいのよ。気が向けば店に来るでしょ」

「私もお店、また行きます」

「本当？　待ってるわ」

「まぁ、いいですわね。私も行きたいですわ」

「ふふ、来てちょうだい。いつでも大歓迎よ」

アンジェリカを見送り、ブランシュの部屋を辞した。
自分に与えられた部屋に戻る。
こんな部屋、いらないのに。私には屋根裏で十分。

「茶会は終わったのか？」

「あ・・・」

扉を開けると、長椅子に寝そべる国王（リクハルド）がいた。
手まねきされて近づくと、手を取られて国王（リクハルド）の上に寝かされた。
ちゅっと唇を吸われる。

「暇なら、お茶会に来ればよかったのに」

「今まで会議だったんだ。会議中くしゃみがとまらなくて大変だったぞ。どうせろくでもない噂話をしていたんだろう」

「そんなこと、なくはない・・・かな」

「くくっ・・・どっちなんだ」

笑いながら、私の服を脱がしにかかる。

「あ、ちょっと・・」

「ん？」

「まだ日が高いのに」

「関係ない」

「ん・・・」

私の体を知り尽くした手が服の下をはいまわり、煽られる。

「あっ、あぁっ、あああ」

『シャンタル。国王の懐に入り込み、必ずその首をとってこい』

『お任せください、尊師』

自分の過去を忘れたわけではないけれど。

もうこの人は、殺せない―

妾妃の独白～Cの場合～（後書き）

Ｒ１８版を月光のほうに投稿予定です。
そちらを先に書いて、こっちはアレな部分を削りました＾＾；

王の独白（前書き）

リクハルドの話。

王の独白

月の明るい夜。
執務室で、コスティと酒を酌み交わす。

「即位１５周年、おめでとさん」

「あぁ」

杯（さかずき）を合わせ、一気に飲み干す。
親衛隊長として陰ひなたに私を支えてくれるこいつは、実は腹違いの兄だ。
母ひとすじだと思っていた父王が、若い頃遠征先で一人の女に手を付けて産ませた子で、私が成人して王位継承権が確定するまで侍従長（アン）がずっと隠していた。
母どころか父も知らず、またコスティ（コスティ）の母は彼を生んだときに死んでおり、私と兄、侍従長（シルヴ）のみが知る事実だ。

「親衛隊も１５周年だな」

「あぁ。ったく、俺ぁいらないといったのに、変な役職を押しつけやがって」

「そうでもしなければ、城に留まってはくれなかっただろう」

「はっ、そりゃおまえが無事王様になるのを見届けりゃ、俺の役目

は終わりだと思ったからなぁ」

「欲のない奴だ」

「うるせえよ」

コスティの杯に麦酒を注ぎ足す。
麦酒程度ではお互いどれだけ飲んでも酔いはしない。

「にしてもなぁ、おまえの女関係の手伝いをさせられたときには、心底逃げときゃよかったと思ったぜ」

「くくっ、そうか？」

「そうさ！　一人目は、まぁ、いい。街道の警備は重要だからな。ついでにあの女の近辺にも目を光らせるくらい、わけないさ。でも二人目！　おまえの身代わりなんざ、二度としたくないね！」

「王様気分が味わえただろ？」

「馬鹿言うなよ。あん時はひたすらダンスの相手をさせられて、百人組手をするより疲れた」

「ははは っ」

今度はコスティが私の杯を満たす。
なみなみと注がれたそこに映る月ごと、飲み干した。

「あとはあれだ、暗殺組織（フィダーイー）のお嬢ちゃん。追手がしつこいのなんのって。

背格好が似た死体を見つけてきて、顔焼いて送りつけるまで続いたぞ」

「そんなことまでしてくれたのか」

「そうさ。まぁ今はもうずいぶん面変わりしたから、やつらに見られても気付かれないかもしれないが、はじめの頃はいつばれるかとハラハラしたもんだ」

「美しくなっただろう」

「言っとけ。おまえは気楽なもんだよ。気に入った女、次々と手ぇつけやがって」

「王位が欲しけりゃいつでもやるぞ」

「いるか、そんな面倒なもの」

「ははっ」

酒の合間に、アンジェリカが持ってきた燻製肉をつまむ。相変わらずうまい。

「んで、今度は女魔術士か。それともヴィルヘルミーナの生き残りか」

「ルチノーはだめだな。カールが溺愛している」

「くくっ・・・あいつ、変わったな。あんな男じゃなかったんだが。昼休みにほぼ毎日白猫が来るんだ。もうデレデレで・・・。あん

なわかりやすい反応をしていて、周りの奴は気付かんものかね」

「ま、猫と人だからな。両方見てない限りはわからないんじゃないか」

「そぉかぁ？　そうかもな」

コスティには、エメの頼みもルチノーの背景も話してある。
この口ぶりでは、人の姿のルチノーも確認済みだろう。

「エメはな、正妃にしたい」

「また難しいことを・・・。あの女はおまえの手に負える相手じゃないぞ。
何百歳？　何千歳だ？　東の国の書物には、前（さき）の大戦であの女らしき記述があるっていうじゃないか。
それだって三百年は前だぞ」

「見た目は二十五、六じゃないか」

「見た目の問題じゃない。大臣たちはあわよくば、みたいな反応だったらしいが、俺は賛成はしないな。
第一、子どもは産めるのか？」

「子どもは別にいらん。もう五人もいるしな」

「まあな。なら正妃はブランシュでもいいんじゃないか？　彼女なら周囲も納得するだろ？
彼女を格上げして、女魔術士（エメ）は妾妃でいいじゃないか」

「嫌だ」

「嫌だって、おまえ・・子どもかよ。あぁ、子どもの頃に会ったんだったっけ？」

「・・・」

あれは、母を亡くしたばかりのころだった。
ヒューグラー家の跡取り息子が生まれたということで、父王の代わりに祝福を与えに、侍従長（シルヴァン）とともに祝いの席が設けられた屋敷を訪れた。

生まれたばかりの赤子は、はっきりいってかわいいとは思えなかった。
しかも夫人の手に抱かれる姿は、否応なしに母を思い出させて、とても祝福を与える気分にはならなかった。
そんなとき、英才教育の為呼び寄せられたエメに出会った。

『くすくす・・。赤ちゃんがうらやましいの？　うちの子も、妹が生まれたときにそんな顔をしてたわ。
　王子様とはいっても、ヒトの子ね』

『あなたも子どもがいるの？』

『えぇ。ずっと前に離れ離れになってしまったけどね』

そう言って私の頭を撫でた彼女の手は、とても優しくて―

「そうだ、エメは子どもがいると言っていた。ぬ・・・。どこの男の子どもだ？」

「はぁ？　じゃ結婚してんじゃねぇの？　王様でもさすがに重婚はまずいぞ」

「今は、夫も子どももいないはずだ」

「はずだって、おまえねぇ。んで、何、頭撫でられて一目ぼれ？」

「いや、それはその後また再会して・・・って、私にばかり話させるな。おまえこそどうなんだ」

「俺は女は遊びでいいよ。子供（ガキ）なんかなおさらだ。下手に俺の血を残すわけにもいかんしな」

「・・・すまん」

「馬っ鹿、おまえが気にすることじゃねぇだろ」

「おまえが望むなら、本当に王位は譲るぞ？
私とアンジェリカとブランシュ、シャンタル、子どもたちが暮らせるくらいの領地をもらえれば、いつでも引っ込む。
あ、エメもそのときは来てくれるとうれしいが・・・」

「いらねぇって！　それよりもおまえ、今あげた女たちに見放されないようにするほうが大変じゃねぇの？
よくまぁ、まめまめしくそれぞれに通うよな。俺には無理」

「アンジェリカが彼女たちをまとめて、ブランシュが子どもたちの世話をしてくれるからな。シャンタルも懐いているし、助かっている」

「ははぁ、仲がいいのか。珍しいな」

「そうか？　そうかもな。あとはエメ・・」

「欲張ると、全部なくすぞ」

「ぬ・・・」

そんなことを話しながら杯を重ねる。
コスティといるときが、一番素の自分でいられる気がする。

「そろそろお休みになられませんと、明日の御公務に差支えますよ」

「シルヴァン」

酒の匂いが充満する執務室に、年老いた侍従長がやってきた。
髪は元々白かったが、最近とみに皺が増え、体は一回り小さくなった気がする。
父王の代から仕えてくれている彼も、気を許せる貴重な存在だ。

「俺ぁ、子どもの頃、時々顔を出すおまえが父親だと思ってた」

「それはそれはコスティ様。光栄ですね」

「くくっ・・シルヴァンが父親なら、今頃、鎧より礼服が似合う男

に成長してるだろうよ」

「あぁ、あれは堅苦しくていけねぇな。背筋もな、そんなにピンとしてはいられない」

「お褒めの言葉ととってもよろしいので？」

「当たり前だ。その年でそんなに姿勢のいい老人はいないだろう」

「そうさ、いつまでも長生きしてくれないとな」

「そうですか。では老体に鞭打って、もう一働きいたしましょう。リクハルド様、これを」

「ぬ・・・」

シルヴァンが手巾（ハンカチ）に包んで差し出したのは、漆黒の鴉の羽根。

「羽根（これ）がどうした？」

「シャンタル様が見つけられたそうです。衣装棚（クローゼット）に入っていたようです」

「衣装棚（クローゼット）・・・。シャンタルが見つけ、侍従長（おまえ）が私に持ってくるということは、ただの羽根ではないのだな」

「えぇ、シャンタル様がおっしゃるには・・・」

シルヴァンが声を潜める。

私もコスティも、身を乗り出して、一言も聞き漏らすまいと耳を傾

ける。

「・・・だそうです」

「そうか」

「じゃ、俺、隊舎に戻って警備案練り直すわ。今の布陣は内からの攻撃には弱いんでな」

「頼んだぞ」

「あぁ。あ、そうだ。武術大会の許可くれ。親衛隊内でやるだけだけど」

「ん？　好きにしろ」

「ほい」

コスティが去った後、残った酒をシルヴァン相手に飲む。

「自己犠牲（フィダー）を厭わぬ者（イー）か・・・」

「過去の亡霊よりも、今を生きるもののほうが強ぅございますよ」

「だといいがな」

空が白み始める。
月は陽の光を浴びて、その姿を隠そうとしていた―

王の独白（後書き）

次回から本編に戻ります＾＾

1　王城の子ども

＊＊＊＊＊

とてとてとて。

高く上げた尻尾を揺らしながら、お城の中庭を歩く。
あ、エメさんに王様は連れて来るなって言われたんだ。どうしよう。
執務室に向かいかけた足が止まる。
庭の真ん中で悩んでいると、押し殺したようなかすかな泣き声が聞こえた。
声をたよりに歩いていくと、白い花を咲かせる林檎の木の下で、小さな子どもが泣いていた。
う、猫の姿で子どもは鬼門。
以前、猫になりたてのころ、追いかけまわされた忌まわしい記憶が蘇る。
でも小さい子が一人で泣いているのはかわいそうだし・・・。

「んなーぅ」

そっと近づいて、様子を伺ってみた。
私の鳴き声に気付いた子どもは、顔を上げてじっとこちらを見ている。
涙に濡れた真っ黒な瞳が印象的な、きれいな顔をした子どもだった。

「んな」

「ねこたん」

立ち上がった子どもは、よたよたと私のところまで歩いてきて、小さな手を伸ばしてきた。

「ねこたん、いいこ、いいこ」

「うに」

手の平をつっぱって頭を撫でる。

決して気持ちがいいわけではないけれど、泣き止んでくれたからいいか。

大人しく撫でられていると、ばたばたと走ってくる女性がいた。

「ジェラール様！　ジェラール様！？」

「あ・・・タマラ・・・」

「まぁ、こんなところにいらしたのですね！　お勉強の時間です。お部屋にお戻りください。

なんです、その猫は！　野良猫なんかに触ってはいけませんよ」

タマラと呼ばれた女性は、金切声をあげて私を睨みつけた。

なんだか、感じの悪い人だなぁ。

私を知らないってことは、新しい人なのかな。

「ねこたん、のらじゃないよ。ちゃんとくびわしてる」

「首輪？　あら、ほんと。猫にはずいぶん分不相応な代物ですこと。どれ・・・」

タマラの手が私の首輪（チョーカー）に伸びる。
あっ、ちょっと、何するの！
これ、はずれたらとってもまずいんだって！
毛を逆立てて威嚇するけれど、タマラはそんなことはおかまいなしに、ぐいぐいと首輪を引っ張る。

「あら、はずれないわ。鍵なんてかかってる」

こうなったらひっかいてやる！　そう思って爪を立てかけたとき、ようやくタマラは諦めてくれた。
カールのいたずら対策が、思わぬところで役に立ったみたい。

「ねこたん、だいじょぶ？」

「んなーぅ」

私を心配してくれる子どもの手を、ざりっと舐めた。

「んふふ、ねこたんのべろ、おもしろい」

そう？　気持ちいいでしょ？

「ああ、おやめください。汚いわ。さっ、家庭教師の先生がお待ちです」

「ねこたん、またね」

気に入らない女に手を引かれた子どもは、名残惜しそうに何度も振り向きながら去って行った。

＊＊＊＊＊

「それはたぶん、シャンタル様の御子だな」

「シャンタル様？」

夜、風呂からあがって、ルゥの髪を梳く。
銀の糸をつむいだような髪はさらさらと手触りよく、至福の一時だ。
タオル一枚を体に巻いただけで椅子に腰かけるルゥは、胸の谷間が覗き見えてなんともいい眺めだ。

「あぁ、第三妾妃で今年２３歳になられるのかな。大層控えめな方だそうだ」

「王様って三人も奥さんがいるんだ」

「普通じゃないか」

王ならば珍しくない。俺はそう思ったが、ルゥは違ったようだ。

「それなのに、エメさんに言い寄ってるの？」

「あー・・・。ま、気の多い方だから」

「そう。協力するなんていって、馬鹿みたい。
私、もしカールが他の女の人も奥さんにしたいっていったら、嫌

だな・・・」

ん、言いたかったのはそっちか？
両手を膝の上で握りしめて、うつむく姿が愛らしい。

「くす・・・絶対そんなことはないから安心しろ」

そう言って、華奢な肩を撫でて、小さな耳朶を甘噛みした。

「んっ・・・・あん、カール、せっかくお風呂に入ったのに、また汚れちゃう」

「そうしたらもう一度入ればいいさ」

「でも・・・あぁっ」

その後二回風呂に入り直して、ようやく寝台に落ち着いた。
すでに半分眠りに落ちているルゥを胸に抱き、髪を根元から毛先まで手で梳いて撫でる。

「そういえば、さっき髪を梳いていて気付いたんだが・・・」

「ん・・・なぁに？」

「ほら、ここ。内側の一房が、金色になってる」

寝ぼけ眼のルゥの前に、色が変わった髪をとって見せる。
その一房は、月明りに映えてきらきらと光っていた。

「あ・・・・、ほんとだ」

髪の色に劣等感をもつルゥは、驚いて目を見開く。

「ルゥ、もしかして元は金髪だったのか？」

「え、わかんない。あ、でもお母さんは金髪だったって、前エメさんが言ってた」

「そうか。大人になると色が変わるのかもしれないな。ここははじめから金色だし」

すっと下の茂みに触れれば、びくんとルゥが反応した。

「えっ、あっ、ちょっと、もう寝なくちゃ」

「うん、寝よう。おやすみ、ルゥ」

「そんなところいじられてたら、眠れないよぅ」

「そうか？　俺は眠れる。温かくて気持ちがいい」

「あぁん、もぅっ、カールの馬鹿っ」

紅玉の瞳を潤ませて、ぽかぽかと俺の胸を叩く。

あぁ、またそんな可愛らしい顔をして。眠らせたくなくなるじゃないか。

「わかった、わかった。ほら、これでいいだろう。おやすみ、ルゥ」

「ん・・・おやすみ」

髪をなで、腕枕をしてやる。

触れるだけの軽いキスに安心したルゥは、すぐに寝息を立て始めた。

俺の、愛しいルゥ。

こんな日々がずっと続くといいー

1　王城の子ども（後書き）

月光編あります＾＾

2　水鏡

＊＊＊＊＊

ブルクハルト王国の英雄の生誕何周年だかの式典だと言って、カールは朝早く出かけて行った。
元は内輪の式典らしいんだけど、今回はどこかの偉い人が参加するそうで、勉強会に向かう途中の城内は少しばたばたしていた。
親衛隊の正装をしたカール、格好よかったなぁ。
その式典、ちょっと覗いてみたい。

「きゃ！」

「あーぁ。ルチノーちゃん、何か余計なこと考えてたでしょう」

「ご、ごめんなさい」

エメさんの部屋で、どこまで細く高く伸ばせるかと挑戦していた水柱が、ぱしゃんとはじけた。
頭から水をかぶりびしょぬれになったけど、エメさんが手をさっと振るとあっという間に乾いてしまった。

「ありがと」

「はいはい。何か心配ごとでもあるの？」

エメさんは、集中を切らした私を、優しい色を浮かべた瞳でじっと見つめてくる。
私にお母さんやお姉さんがいたなら、こんな感じかなって思う。

「ううん、カール、今何してるかなぁと思って」

「・・・はぁ。毎日一緒にいてまだ気になるわけ？」

「うぅ。ごめんなさい」

「まぁいいけど。あ、そうだ。それなら水鏡をやってみましょうか」

水鏡？
見たいものを水面に映し出す術らしい。そんなことができるんだ。
すごい。
エメさんが重そうな銀の水盤を持ってきて、水差しの水をそそぐ。
教えられたとおりに、水の表面に意識を集中させて、カールの姿を思い浮かべた。

「あ・・・！」

「何か見えた？」

私の顔が映っていた銀盤の水面が揺らぐ。
風もないのにさざ波が立ったかと思うと、空から見下ろすような形で、紺の制服の一団が映った。
これは、お城の庭？　中庭じゃなくて、表の大きな庭園の方だ。色とりどりの花が咲き乱れ、噴水も見える。
カールはどこだろう。

さらに意識を集中させる。
あ、あの後姿、カールだ。隣にユハさんもいる。
もっと近づいて・・・お仕事中の顔、家と全然違うなぁ。そうだ、出会ったころ、こんな顔をしていた・・・ん？

「きゃ！」

ぱしゃん！　水面がはじけた。

「あら、どうしたの？」

「カールが私を見たような気がしたの」

「へえ。水鏡越しに気付くなんて、たいしたものね」

「そうなの？」

「ええ。普通の人は気付かないわ。だてに親衛隊にいるわけじゃなさそうね」

ちょっと気に入らなそうに、でもカールをほめてくれたみたいで嬉しい。
また濡れてしまったので、エメさんに乾かしてもらう。

「うん、初めてにしては上出来。慣れれば専用の器じゃなくても、ただのお椀に汲んだ水とか地面の水たまりとかでもできるようになるわ。結構便利よ」

「誰のことでも見られるの？」

「細かいところまで思い浮かべられる人のほうがやりやすいわね。知らない人は無理かな。その人につながる何かがあれば見られるけど」

「へぇ」

「浮気防止にもなるわよ」

「え！」

「いつ見られるかわからないと思えば、そうそう浮気なんてできないでしょう？」

なるほど。

カールに言っておくのもいいかな。

カールにそのつもりがなくても、言い寄ってくる女の人はいるかもしれないし。

「くすっ、まぁ、あなたたちはそんな心配いらないだろうけどね」

“あなたたちは”と言われて、気になっていたことを思い出した。

「あの・・・エメさんは、王様に奥さんがたくさんいること知ってるの？」

「ん？　あぁ、側室のこと？　知ってるわよ。子どもも五人いるわ」

「そうなんだ・・・。ごめんなさい、私」

そんなことも知らずに、王様に協力していたことを謝る。

王都にいる人なら、誰でも知っていることなのかもしれない。

「いいのよ。ったくあいつが悪いんだから、ルチノーちゃんが気にすることないわ。ただの女好き。
ルチノーちゃんも気を付けてね」

エメさんが、腰に手を当ててぱちんと片目をつぶる。

「き、気を付けてって・・・」

どういう風に？　と聞こうとしたところで、扉が開いた。

「私の話か？」

噂をすれば影。
毛皮で縁取りをされた、真っ赤なマントを羽織った王様がいた。
頭上には宝石が散りばめられた王冠。錫杖（ジェズル）まで持っている。
式典からまっすぐここに来たのかな。

「リック。式典は終わったの？」

「あぁ。疲れた」

手近な椅子にどかっと座り、王冠を無造作に机の上に置く。

「着替えくらいしてからいらっしゃいよ」

「カールが、ルゥに何かあったんじゃないかと気にしていたのでな、見に来た」

「あ、ごめんなさい。術の練習をしていただけなんです」

「術？」

「えぇ。水の表面に見たいものを映せる術だそうです。ほら、この銀盤に・・・」

机の上の銀盤に、王様が興味深げに目をやる。

私が失敗したせいで水かさの減った内側を、じっと見つめた王様の眉がわずかに寄った。

「この術には、特別な水を使うのか？」

2　水鏡（後書き）

中途半端ですみません＾＾；

＊＊＊　記念小話　チョコレート　＊＊＊（前書き）

お話の途中ですが、「白猫の恋わずらい」お気に入り登録２５００件、「同月光編」１０００件突破、さらに逆お気に入りユーザー１００名様を記念いたしましての小話です。

皆さま、本当にありがとうございます！！　今後とも精進いたしますので、何卒よろしくお願いします＾＾

＊＊＊　記念小話　チョコレート　＊＊＊

休日の午後、ルゥとお茶を飲んでくつろいでいると、玄関を叩く音がした。

「はい？」

扉を開けると、菓子屋の箱を持ったユハがいた。

「よお、カール。アドルフ菓子店の新作が・・・」

バタン！　鼻先で締め出す。

「なんだよ、せっかく休憩時間に抜け出して買ってきたんだぞ。今日からの販売なんだ」

「いいから仕事に戻れ。明日受け取る」

「今日食った方がうまいに決まっているだろう。ルチノーさんは？いるのか？」

「いない。出かけている」

「・・・嘘をつくな。開けろ」

「うるさい。帰れ」

扉越しにしばらく言い合っていたが、急に静かになった。あきらめたか。

「すまない、ルゥ、お茶の続きを・・・ルゥ？」

「わぁ、チョコレート？　ありがとうございます」

「いえ、中に何か入っているらしいんです。食べる時は一口でどうぞと言われました。気を付けてくださいね」

「はい。何が入っているのかしら、楽しみ！」

出窓から、菓子の受け渡しをするルゥとユハがいた。

「ルゥ・・・・・」

俺の苦労をなんだと思っているんだ。

脱力して、がっくりとうなだれる。

ユハはそんな俺を見て、にやりと笑う。

「では、これで失礼します。午後の勤務があるので」

「はい、ありがとうございました」

あっ、こら、なぜ手をとる。

あああ、手の甲にキスだと！？　ふざけるな！

「ユハを家にあげるなと言ったろう」

「窓越しでも？」

「だめだ」

「んもうっ」

菓子を置いてルゥの手をとり、石鹸を使って気のすむまで洗う。赤くなってしまった甲に口づけ、指の一本一本まで何度もキスをした。ついでに両手で頬を包んでたっぷり口腔を味わい、くだけた腰を支える。

「ん・・・ふぅ・・・・っ、カール、何なの・・・」

「消毒」

「・・・馬鹿」

うるんだ瞳で睨まれても、余計そそるだけだ。

いけない、まだ昼間だぞと自分に言い聞かせ、ルゥを抱き上げて、ソファに戻る。

「お菓子、食べていい？」

「あいつがもってきた菓子なんぞ食うな」

「お菓子に罪はないじゃない。いいよ、私一人で食べるから」

ルゥは俺の膝の上にちょこんと座ったまま、ユハが持ってきた箱を開ける。
一粒とって、口に運んだ。

「んっ、んんん！」

きゅっと目をつぶって、口元を押さえる。

「どうした？」

「おいしーい！　中に何か液体が入ってる」

ぱっと顔を上げての極上の笑顔。
これが、ユハが持ってきた菓子のおかげだと思うと悔しい。

「やっぱり食べたくなった？」

俺のしかめっ面をどうとったのか、あーん、とルゥが差し出したので、一つ食べてみた。
これ、口辺りはずいぶんいいが、中身は純度の高い蒸留酒じゃないか？
ルゥは酒を飲めただろうか。一緒に飲んだことはなかったような・・・。
箱を見ると、いつのまにか数がかなり減っている。

「おい、ルゥ、それくらいにしておいたほうが・・・」

「ん？　なぁに？　くすくす・・これ、おいしいねぇ」

やっぱり。

気付けば、耳まで真っ赤に染めて、すっかりできあがったルゥがいた。
以前またたびの実に触れたときのようだ。

「ねぇ、カール、もういっこ、あーん」

「いや、もういい」

「なぁにぃ？　せっかく私があげるって言ってるのに、いらないのぉ？」

じとっと睨んでくる。
ぐ。からみ酒か。

「わかった。食うよ」

「いいもん。嫌々食べる人なんかにあげないんだから」

ぷいっと前を向いて、一口齧る。
割れた箇所から琥珀色の液体がこぼれ出た。
白い顎を伝って、胸元に入り込む。

「いやぁん、こぼれちゃった。どうしよう」

「拭いてやる。こっちを向け」

「そんなこといって、カールはすぐえっちなことするからだめー」

「だめって、おい」

べたついて気持ちが悪いのは自分だろう。

「くすくす。拭かせてなんか、あげなーい」

そういって、ぴょんと俺の膝の上から降りて駆けだす。

「待てって、ルゥ！」

酔って走ったりなんかしたら、さらに酔いがまわる。案の定、ぐらりと小さな体が傾ぐ。

「ルゥ！」

「だめー」

支えようと伸ばした手を避けられる。

さらにソファの周りをぐるりと一周して、捕まえようとしたところをするりと逃げられた。

「くすくす・・・カール、こっちだよ」

台所を抜け、玄関ホールを二周したところで追いかけるのをやめた。

ルゥは笑いながら二階に駆け上がって行く。

どうなっても知らないぞ、俺は。

溜息を一つついて、追いかけっこで散らかった家の中を片づけることにした。

俺だって、いつもいつもルゥに振り回されているばかりじゃないんだ。

呼べばすぐ来ると思うなよ。

あぁ、掛けておいた上着が落ちてるじゃないか。
菓子の包みも散らかしっぱなしだ。

・・・声が聞こえなくなったな。
足音もしない。

いや、我慢だ。ユハの寄越した菓子なんか食うから悪い。
ルゥは酒を飲んだのは初めてだろうか。
あの中身、結構度数の高い酒だったな。
いやいやいや、俺は途中で止めたんだ。
服だって、拭いてやろうとしたのに、「えっちなことするからだめ」ってなんだよ。
そんないつでも手を出しているわけでは・・・ないとはいえないが。

「・・・ルゥ？」

少し心配になって、階段下から呼びかけてみる。
返事はない。
まさか急性飲酒中毒で倒れたとか！？
焦って二階に上がると、踊り場にぺたんと座り、真っ赤な顔をして服を脱ごうとしているルゥがいた。

「あ、カール」

どうも、服を脱ぐのに一生懸命になっていて、返事をしなかったらしい。

「だ、大丈夫か？」

「んんん、暑いぃ。暑いの・・・」

袖は脱げたが、襟から腕を出そうとして頭がつっかえて出せなくなっている。
ボタンをはずそうにも、酔っているせいでうまくできない。

「カールぅ、助けて・・・」

「君ね・・・、ははっ」

自分の服に絡まって助けを乞う姿に頬が緩む。
まったく、ルゥにはかなわない。
万歳をさせるように裾から持ち上げて脱がせた。

「ありがと。カール、好き」

下着一枚で抱きついてくる。
これは・・・困ったな。押し倒してもいいものか?

「ね、キスして?」

頬を染めてねだられれば、断れるわけもない。
酔っ払ったルゥ、いいかもしれない。
ユハ、よくやった!

ルゥの望み通り、濃厚なキスをしながら、抱き上げて寝室に運んだ。
寝台にそっと降ろし、髪を撫で・・・ん?

「ルゥ? おい、ルゥ!」

「ん・・・もう食べられない・・・」

むにゃむにゃと罪のない寝言を言う彼女は、すでに夢の中。
ゆすっても少々いたずらしても起きない。

「・・・それはないだろ・・・」

くそ、ユハめ、覚えてろよ。
楽しいはずの休日の午後を、一人悶々と過ごすハメになった俺だった。

次の日の隊舎。

「カール、すまん！　昨日の菓子の中身、酒だったろう。ルチノーさんは大丈夫だったか？」

「・・・ふっ・・・・。ユハ、ありがとうな」

「？　なんだ？」

「酔った彼女はすごかったぞ。ちょっと耳を貸せ」

「なんだ」

「あのあとな、彼女の方から、×××で×××で×××だったんだ」

「！！！？？？？？　×××で×××で×××！？　そんな・・・

！」

「しかもな、××××で××××で××××だ」

「～～～～！！！！！」

その日一日、ユハさんで憂さ晴らしをしたカールなのでした～。

3　狙われた王様

「いいえ、エメさんがそこの水差しの水を注いでました」

「そうか。飲んではいないな？」

「リック、どういうこと？」

すっと表情をなくした王様に、険しい顔をしたエメさんが詰め寄る。

「見てみろ」

王様の視線の先には銀盤。

？　何が言いたいんだろう。

「なんてこと・・・！」

まったくわからない私と違い、エメさんは何かに気付いたようで、銀盤を覗き込んで青くなる。

そんなエメさんの肩に、王様はそっと手を置く。

「すまんな。私のせいだ。

・・・ここに通うということはそなたたちを巻き込むことになるというのを失念していた。

しばらく来るのは止(よ)そう」

「えっと、あの、どうしたんですか？　巻き込むって何？」

「ルチノーちゃん、ここを見てみて」

王様の手をしっしっと振り払い、エメさんが指さしたのは銀盤の内側。

ちょうど私がこぼす前に水が入っていたあたりに、うっすら黒い線があった。

「毒よ」

「え！」

「銀製品は、砒素や硫黄に反応するんだ。大方、私の命を狙った者の仕業だろう」

「なんてこと・・・。あ！　私、頭からこの水かぶっちゃったけど？」

「それは大丈夫。私が乾かしたときに、成分ごと吹き飛ばして浄化してあるから。

偶然だけど・・・よかったわ。確か飲み込んではいなかったと思うけど？」

「うん、口には入らなかった」

「なら大丈夫。それにしても油断したわ。まさか私の部屋の水差しに毒を仕込まれるなんて」

「本当にすまない。ここのところ、少し不穏な空気があってな。警

備を強化していたところだったのだが」

そうだったんだ。全然知らなかった。
もしも王様が来なくて、あの水差しの水でお茶を淹れていたら、私やエメさんはどうなってたんだろう。

「口に入ってたら、もしかして、死・・・？」

「ふむ。私は平気だが、そなたのようなかよわい姫君ではわからんな」

王様は平気なの？　な、なんで？
混乱する私の横で、エメさんは銀盤を前に何やらやっていた。

「チッ、これだけじゃ誰かわからないわね」

「どうした」

「水から毒の成分だけ取り出してみたのよ。北の方の鉱山で採れた砒石（ひせき）が元になってるわね。
でも犯人までは特定できないわ」

エメさんの手中には、黒い小石が乗せられていた。
毒の結晶を拠り所に、犯人を水鏡に映そうとしたみたいだった。

「よくやった！　それがわかればかなりの手がかりになる」

「私としては不本意よ。警備を強化中ですって？　その警備、私にも一枚かませてちょうだい」

「エメさん？」

「私の部屋に持ち込まれたってとこが気に入らないわ。魔術士なめんじゃないわよ。」

「ふ・・・。おまえに入ってもらえるならこんなに心強いことはない。親衛隊長（コスティ）にも言っておこう。お前を組み込んだ警備案を立てさせる」

「えぇ。絶対犯人捕まえて、生まれたことを後悔するくらいの酷い目にあわせてやるわ。
そうだ、気休めだけど、加護はいるかしら？」

「もちろん」

「ちょっとかがんで」

エメさんは人差し指と中指を立てて口元に添え、口中で何かつぶやいてから、指先を王様の額にトンと当てた。
私を猫にする術と同じようにみえるけど、違うんだろうな。

「これで終わりか？」

「大仰な魔術陣でも描いて欲しいの？　効果は変わらないわよ」

「そうではなくてな。ふむ、ルゥ、少しの間、後ろを向いてくれ」

「？　はい」

二人に背を向け、窓の外を見る。

あ、鳥。鴉か。子猫のときに、追いかけまわされたことがあるなぁ。
鴉、嫌い。
空の高いところを行くのは渡り鳥かな。
初めてエメさんに出会ったときに、猫じゃなくて鳥になりたいって
願っていたら今頃どうしていただろう。
そんなことを考えていると、

「んっ、んんん！」

衣擦れの音に続いて、背後でエメさんのうめく声。
ええ？　ちょっとこれって・・・王様！？

「やめなさ・・・んんっ」

えーと、いつ振り向いたらいいんだろう。
ばちーんと頬を叩く音が響くまで、仕方なく私は空を行く鳥を数え
つづけた。

「毒！？」

家に帰って夕食を食べながら、私を心配していたカールに今日のこ
とを話した。
警備の強化は知ってはいたけれど、よくあることらしくまさか私に
影響があるとは思わなかったみたい。

「しばらく勉強会に行くのはやめたらどうだ？」

「そんなに危ないかな」

「まぁ、リクハルド様から離れていれば大丈夫だろうが・・・」

「勉強会は行きたいな。少しずつできることが増えていくのが、とっても楽しいの。
水鏡も、あんなことになっちゃったけど、カールに気付かれるまではうまくいったのよ」

「あぁ。気のせいかと思ったが、ルゥだったんだな。
たいしたもんだ」

「ふふ。エメさんが浮気防止になるわよって言ってた」

「ははっ、そんな心配いらないのに。むしろずっと見ていてほしいくらいだ」

「そうなの？」

「あぁ。ルゥが見ていてくれると思えば、仕事にも精が出る」

「私、そんなに暇じゃないもん」

「そうか？　残念だ。俺がその術、使えたらいいのにな。一日中ルゥを見ていたい」

「えぇ？」

「あぁ、でも行商人や玄関先の鉢植えにまで妬きそうだ。やっぱり

だめだ」

「ふふ、お仕事にならないね」

「ならないな」

その日のお風呂は、カールに体の隅々まで念入りに洗われた。

「エメさんが浄化してくれたから大丈夫だよ」

「ルゥには悪いが、魔術ってのはどうも信用ならん。大丈夫だとは思うが、洗わせてくれ」

そこまで言われたら断るわけにはいかない。
心配してくれているのは十分にわかってるし。
あ、でも、ほらやっぱりこの手！
カールの場合、洗うだけで済まないから・・・あぁんっ

お風呂から上がり、すっかりのぼせた身体を椅子に腰かけて冷ます。

「水、いるか？」

「ん・・・ちょうだい・・・」

カールが水を汲んで手渡してくれる。
冷たい水が喉を通り、火照った体にしみこんだ。
そうだ、水鏡、普通の入れ物でもできるって言ってたよね。
このコップでもできるのかな。

まだ半分残った水に意識を集中する。
水面が揺らぐ。
さざ波が立って、そこに景色が―

「きゃっ」

「どうした？」

髪を梳いてくれていたカールが手を止めて、私の顔を覗き込む。

「ううん、なんでもない。水がこぼれただけ」

「水が？　気を付けろよ」

髪を梳き終わったカールは、今度は私の髪を細く何本も編み始めた。

「何してるの？」

「こうして寝ると、明日ほどいたときに波打つような跡がつくんだ

「へぇ」

楽しそうに私の髪を編むカールに髪のことはまかせて、コップの水を見つめる。
そこには私の顔以外何も映っていない。

知らない人は見られない、か。

思い描いたのは、すでに遠い過去になった面影。

「待たせたな。終わったぞ」

はっと気づくと、髪が全部きれいに編まれていた。
胸に浮かんだ影を振り払うように、カールにぎゅうっと抱きつく。

「ありがと。明日が楽しみ」

おやすみのキスをして寝台にもぐる。
カールの腕の中は温かくて、世界で一番好きな場所。
背中を優しく撫でてくれる腕に安心して、いつしか私は眠りに落ちていた。

4　カールとごはん

＊＊＊＊＊

「そりゃぁ！」
「おう！」

訓練場の剣戟の音や掛け声が、隊舎まで聞こえてくる。
式典も終わり、武術大会まであと一週間となった。

「昼休みも練習とは、精が出るね」

「えぇ。隊長の家（うち）での合宿だけは避けたいんで、みんな必死ですよ」

「ははは、理由はどうあれ、訓練に励むのはいいことだ」

ヘルマン副隊長と昼食をとりながら話す。
傍らには遊びに来た白猫（ルウ）。
俺の机の上で丸くなり、時折あくびをしている。
エメの部屋の水差しに毒が混入されていた件以来、特に変わったことはなかった。

今、城ではひそかに厳戒体制がとられている。
警備の人員が増やされ、城内にはエメの魔術が網の目のように張り巡らされているという。

そんなときに武術大会などやっていいのかと思うのだが・・・。

「そうそう、これはね、午後発表しようと思うんだけど、武術大会は御前試合になりそうなんだ」

「リクハルド様が見に来られるということですか？」

「うん。あと城内の者は自由参観」

ルゥの耳がぴくりと動く。

何も言わないが、俺たちの会話を聞いているようだ。

「危ないのでは・・・」

「危ないよねぇ。でもそれが隊長のねらいかな。

ほら、あの人、待ってるより攻めに行きたい人だから。

陛下を囮に、一気に捕まえたいんじゃないかな。だめならだめで、親衛隊の実力を見せることで牽制にもなるからってことで、議会を納得させたらしいよ」

「囮ですか」

武術大会の会場は、隊舎の裏の訓練場だ。当然屋外なので、警備はしづらい。

武器の持ち込みも可能だし、城内の者が自由に来られるのなら、不審者が混ざっていてもわからない。

「魔術士がいるっていうのも大きいね。エメ女史は、当日きっと陛下の隣で守護をすることになるだろう。

そこで功績をあげれば、正妃にしやすくなるって腹も、陛下には

ありそうだね」

「リクハルド様も納得済みなんですね」

「うん。っていうより、二人で考えたらしいよ。腹黒いよねぇ」

「いや、まぁ・・・」

答えに窮していると、それまで黙って聞いていたルゥが立ち上がり、つんつんっと爪を俺の袖に引っかけて引いた。
そうだ、昼休みに模擬刀での練習の様子を見せると約束していたんだった。

「あ、じゃ、俺も訓練に行ってきます」

「うん。試合で陛下にいいところ見せられるようにがんばって」

「はい、ありがとうございます」

試合でとは言われたが、警備こそ力を入れなければならないだろう。
これは賭けどころではないな。マルリ達にも相談しておくか。
訓練場に向かいつつ考え込んでいると、

「んな？」

と肩に乗ったルゥが、小首をかしげて見つめてきた。
ぽん、と頭を撫でてやる。

「大丈夫だ。皆、親衛隊に引き抜かれるような連中だからな。抜かりはないさ。

隊長の狙い通り、リクハルド様を狙って賊が出てきたところを捕まえてやる」

そうすれば、ルゥを安心して勉強会に送り出すこともできる。

「なーぅ」

紅玉（ルビー）の瞳が、不安げに揺れる。

無理しないでね。

そう言われた気がした。

＊＊＊＊＊

とっとっと

隊舎からお城の裏口へと歩いていく。

練習とはいえ、さっきのカール、すごかったなぁ。

相手のオロフさん？はカールより少し背は低いけど、その分がっしりした体格で、剣を振るたびにぶんぶん音がしてた。

カールはそんなオロフさんの剣をかいくぐって、胴に寸止め。

模擬刀とはいえ、当たったら痛いもんね。

隣で練習してたユハさんも、家（うち）に来たときとは違って、とっても厳しい顔をしていたな。

差し入れに来たらしい女の子のことは、冷たくあしらってた。

あれ、そう言えば、カールのところにはああいう女の子って来るのかな。

それらしいものを持ち帰ってきたことはないけど・・・。

裏口を抜けると、こじんまりした庭がある。
幹の白いひょろりとした樹木が立ち並び、生い茂った葉が、少しずつ強さを増している太陽の光を心地よくさえぎってくれている。

「ねこたん！」

木漏れ日の中を歩いていると、声をかけられた。
ええと、ジェラール様だっけ。
短い脚を一生懸命動かして、駆け寄ってくる。どうして裏庭なんかにいるんだろう。

「んな」

無視をするわけにもいかず、座って待っていると、手の平をいっぱいに広げて背中を撫でてきた。
今日は泣いてないね。よかった。

「ねこたん、抱っこ？」

「なー？」

私にあなたは抱っこできないよ？
ピンクの肉球をわきわきして見せると、くしゃっと笑った王子様は、私の脇に腕をまわしてよいしょと引っ張り上げた。
あ、抱っこがしたかったんだね。

カールになら片手でひょいと持ち上げられてしまう私だけど、3，4歳に見えるこの子にはかなり重いみたい。

背中をそらして精一杯持ち上げても、私の後ろ脚は地面についたまま。
猫の胴って案外長いからねぇ。
顔を真っ赤にして頑張る王子様は、とうとうどすっと尻もちをついた。
私もそのまま王子様のおなかの上に乗ってしまう。

「う・・・ふぇ・・・」

あ、まずい。泣いちゃう。

「んにゃぅ」

泣かないで。
ぷにっと柔らかい頬を、ちろちろと舐める。
王子様は、一瞬びっくりした顔をしたけど、くすぐったそうに首をすくめた。

「んっ、あはっ、ねこたん、やっ」

「うにっ、うなー」

「あはは！　ね、ねこたんっ、うふふ、くすぐったいよぉ」

王子様が楽しそうにするのが嬉しくて、調子に乗った私は顔や首をどんどん舐めた。

「きゃー！　ジェラール様が猫に襲われてるー！！！！」

耳をつんざくような悲鳴に驚いて振り向けば、タマラとかいう感じ

の悪い女の人が駆け寄ってくるところだった。
襲われてるって・・・。
そりゃ、馬乗り（猫乗り？）になってはいたけど、舐めてただけだよ？

「どきなさい！！　あぁ、ジェラール様、ご無事ですか！？」

私を乱暴に押しのけたタマラは、王子様を抱き起すと背中やお尻についた土を払い落とした。

「こんなに汚れて・・・すぐお部屋に戻って湯あみをしましょう。
変な病気など持っていないといいけれど」

じろっと睨まれる。
病気ぃ？　そんなのないもん！

「王様の猫だかなんだか知らないけど、二度とジェラール様に近付くんじゃないわよ！」

フーッと威嚇する私にかまうことなく、タマラは捨て台詞とともに王子様を抱いて駆けて行った。
私が王様の猫だったことはわかったんだね。
それでも、なんて失礼な女なの。
そんなに大事なら、王子様を一人にしなきゃいいのに！

ぷんぷん怒りながら勉強会に行ったせいか、この日は炎の術がうまくできた。

「くすくす・・・。ルチノーちゃんってば、わかりやすいわぁ。水と火の初級はだいたいできるようになったから、雷系いきましょうか」

「はい。あ、そういえば、エメさんも武術大会を見に行くの？」

「耳が早いわね。見に行くっていうか、警護の手伝いをすることになってるわ」

手伝いか。正妃云々は言わないでおこう。

「ルチノーちゃんも行きたい？」

「行ってもいいの？」

「猫でならいいんじゃない？　私が抱いていてあげるわ」

「わぁ、本当！？」

絶対無理だと思ってたから、今日練習を見せてもらったんだけど、それならカールも許してくれそう。

「念のため、雷を使った防御の術を教えてあげるわ。体に雷気（らいき）を帯びて、相手をしびれさせるのよ。やってみる？」

「やる！」

早速教わった術は、術自体はすぐにできるようになったけど、力の加減が難しかった。

「ルチノーちゃん、それじゃ相手は死ぬわね。しびれるくらいに調節してごらんなさい」

練習台の丸太はすでにぼろぼろ。
一部は炭化して真っ黒になっている。
いくら身を守るためとはいえ、相手を死なせてしまうのは怖いから、なんとかできるようになりたい。
夕方ぎりぎりまでがんばったけど、ちょうどいい強さにはできなかった。

「今日はここまでかしらね。この術は家では練習しないでね。火事でも出したら大変だから」

「・・・」

「ま、そう落ち込まないで。雷系は難しいのよ。敵をやっつけることはできるんだから、いいじゃない」

「うん」

「あと何属性かできるようになれば、首輪（チョーカー）をはずせる日も近いわ。がんばりましょうね」

あ、そっか。
力の制御が目的だったっけ。
魔術の練習そのものがおもしろくて、忘れるところだった。

お城から出たところでカールに会った。

「ルゥ！？　こんな時間まで勉強会か？」

「なう」

「日が延びたとはいえ、あまり遅くなるなよ」

「んなー・・・」

お夕飯の準備がまだだったので、そのまま城下町に出てごはんを食べることにする。

猫でいいのかなと思ったけれど、道端にテーブルを出しているお店があって、カールの膝に乗って一緒に食べることができた。

「うまいか？」

「んな！」

カールが口に運んでくれるお料理はどれもとってもおいしい。

でも、男の人一人と猫の組み合わせって、傍からみたらかなり変だよね？

カールは気にしてないみたいだけど、せっかく格好いいのにちょっと残念なことになってる気がする。

あああ、カールがモテるのは困るけど、格好いいとも思ってほしいなんて、どうしたらいいんだろう。

「ヴュストさん？」

葛藤しつつもごはんを食べていると、道の向こうから声をかけられた。

アドルフ菓子店の店長さんだ。大きな箱を抱えている。

「こんばんは。お食事ですか」

「ええ。店長も？」

「いえ、私は納品です。閉店までに売れなかった分は、こちらのお店に置かせてもらってるんです」

なるほど。

お菓子屋さんってそんなに遅くまではやってないけど、こういう飲食店（おみせ）なら夜まで需要があるもんね。

アドルフさんは閉店ぎりぎりまでたくさん商品を並べて置けるし、お店側もおいしいデザートを提供できるから一石二鳥だね。

あとでカールに注文してもらおうっと。

「今日は奥様は御一緒じゃないんですか？」

「ん、あぁ、ちょっと出かけている」

「それで外食なんですね。ぜひまた店にもお越しください。季節の新作をご用意しています」

「あぁ。妻はおたくの菓子がずいぶん気に入ったようだから、また寄らせてもらうよ」

「おお、うれしいです」

そう言ってアドルフさんは、箱からベリーのたくさんのったタルトを2つ取り出すと、テーブルの上に置いた。

「よろしかったらどうぞ。奥様にもよろしくお伝えください」

うわぁ、うれしい！

せっかくのお菓子なので、猫じゃなくて人の姿で味わいたい。

家に持ち帰って、お茶を淹れていただいた。

「この酸味が、最高っ」

「俺のも食っていいぞ」

「ほんと!?　ありがとう!!」

アドルフさんがお菓子を卸してる店があるって、ユハさんは知ってるかな。

今度会ったら教えてあげようっと。

5　武術大会1

＊＊＊＊＊

「只今より、リクハルド国王親衛隊による武術大会を始める！」

コスティ親衛隊長の宣言の後に続き、「おう！」という気合の入った声が、訓練場に響き渡る。

いよいよこの日がやってきた。

試合は勝ち上がり方式（トーナメント）で、親衛隊員と他の師団からの希望者合せて３０名が参加する。

午前中に三回戦まで行い、午後は準決勝と決勝、夕方に最下位決定戦を行うという。

リクハルド様が見にいらっしゃるのは午後の準決勝からということで、午前中は試合をしつつも周囲の警備計画の確認をした。

訓練場の周りには即席の観覧席が設けられ、城勤めの人々が空き時間に見に来ている。

一回戦、二回戦と勝ち抜いたところで、ルゥがエメに抱かれてやってきた。

「あら、しっかり三回戦まで残ってるじゃない。偉いわね」

「当たり前だろう」

「んなぅ」

「あぁ、がんばってるよ」

「・・・そのルチノーちゃんだけに向ける蕩けそうな顔がムカつくわ」

「嫌なら見るな」

腕に覚えがあるとはいえ、精鋭ぞろいの隊員相手だ、決して楽に勝てるわけではない。

オロフとマルリは一回戦で敗退した。

マルリは元々一対一での勝負が得意ではないし、オロフは力任せの攻撃が読まれやすく、試合には向かない。

ユハとヴァイノはまだ残っている。

順調にいけば、準決勝で当たるだろう。

共に訓練をしてきてお互いの癖がわかっているだけに、やりにくい相手だ。

「お、エメ女史、ご苦労さん」

「親衛隊長（コスティ）。頼んだとおりに貴石（いし）を配置してくれたみたいね」

「あぁ。見てきたのか」

「術の仕上げがてら、一回りしてきたわ。
入れるけど出られない魔術陣って注文は、無茶にもほどがあるってもんよ。
単に侵入できないようにするっていうなら簡単なのに」

「ははっ。あんたならできるって国王（あいつ）が言うんでな。
で、その魔術陣からは誰も出られないのか？」

「それじゃ困るでしょ。リックに害意を持つ者だけに限定してあるわ」

「ほぉ。さすがだな。そんな細かい設定もできるのか」

「ものすごく大変だったんだからね。全く人使いの荒い・・・。かかった経費はリックに請求が行くようにしてあるからよろしく」

ルゥを受け取りそこなった俺は、大人しく二人の会話を聞いていた。しかし、どうもずいぶん大掛かりな罠をしかけているようじゃないか。

「あの、隊長」

「あ、すまんすまん。何か話しているところだったか」

「いえ、たいした話ではありません。しかし今日リクハルド様が狙われるというのは本当なんですか？」

我が国に表だって敵意を示している国もなく、内政も安定している。変事と言えば、エメの部屋の水差しに毒が盛られていたという話だけで、その他は聞いていない。

厳戒態勢が功を奏しているのだと思うが、逆に言えばこれまで何もないのだからあえて今日どうこうということもないのではないか。

「公表していないが、ここ一か月くらい不審な出来事が続いているんだ。

国王がよく通る中庭に毒蛇がまぎれこんでいたり、執務室を毒蜘蛛が這いまわっていたりな。

エメ女史の持ち物に毒針が仕込まれていたこともあった。
国王の寝室や居室に直接の襲撃はないが、何者かが入り込んでいるのは確かだ。
国王にはここのところ外出を控えさせていたから、そろそろ相手もじれてきているだろう。狙うなら今日だ」

「そうだったんですか。何も知らず・・・申し訳ありません」

「いや。先入観があると視点が限定される。隊員(おまえ)たちにはあえて詳細を知らせずに警備だけさせていたからな。
次は三回戦か？　がんばれよ」

「はい」

二人はまだ打ち合わせがあるようだ。
エメの腕から俺の腕に渡ったルゥを抱き、控室代わりの更衣室に入る。
誰もいないことを確かめ上着をかけてやると、するりと人の姿に戻った。

「カール」

上着の合わせ目から覗く肌が艶めかしい・・・が、今はそこに気を取られている場合ではない。

「観覧席で応援してるからね。がんばってね」

「あぁ」

細い腰を抱き寄せて、口づけた。

甘い舌を吸い、その口腔を存分に味わう。

「ふ・・・は・・・んん・・・・・」

口づけの合間に漏れる吐息すら愛おしく、一瞬試合のことを忘れそうになる。

試合への活力を得るはずが、違う方に向いてどうする。

下半身の高ぶりを無理矢理理性で抑えて、名残を惜しみながら唇を離した。

「続きは、家に帰ってからな」

「ん・・・もぅ、カールったら・・・」

頬を染めたルゥが、くたっと俺に寄りかかってくる。

頭を撫で、艶やかな髪の感触を楽しんでいると、扉を叩く音と共に「そろそろ出番だけどぉ？」とエメの呆れた声がした。

ルゥは慌てて猫の姿をとる。

ぱさりと落ちた上着を拾い、更衣室を後にした。

6　武術大会2

＊＊＊＊＊

訓練場の観覧席。
その中でも一段高くなった特等席に、王様の席はあった。
左右を近衛騎士が守り、後ろは親衛隊員が守っている。

「なんで私があなたの隣なわけ？」

エメさんが不満そうに王様に言う。

「私の側が最も警戒が厳重だから、安全だろう」

「そうね、最も安全で最も危険な場所だわね」

「ははっ、うまいこと言うな」

「言いたくて言ってるんじゃないわよ！」

がたんとエメさんが立ち上がった拍子に、膝から落ちそうになる。

「んにゃうっ」

「あっ、ごめん、ルチノーちゃん！」

慌ててエメさんが抱えなおそうとしたら、王様に抱き上げられた。

「カールは準決勝に出るのだろう？
せっかくだ、こっちで見たらいい」

「なぅ！」

ほんとだ。
席の位置も中央だし、体格のいい王様の膝の上は、とっても見晴らしがいい。

「何言ってるのよ。危ないって言ってるでしょ。
ルチノーちゃん、こっちにいらっしゃい。
リックが襲われたら巻き込まれるわ」

あ、そうか。
王様囮作戦だった。

「なぁに、何かあってもそなたは守る」

「それでリックに怪我でもされちゃ、ルチノーちゃんが気にするじゃない」

「私のことはエメが守ってくれるのだろう？　大丈夫さ」

「うなー・・・」

エメさんの膝の上の方が安全だと思う。
王様に抱かれてるとカールの機嫌が悪くなるかもしれないし。
でもなぁ、見晴らしはここが一番いいんだよね。

カールががんばってるところ、一番いいところで応援したいな。

「ではカールの出番だけでどうだ？」

私の心を読んだみたいに、王様が言った。

「うな！」

「ほら、ルゥも喜んでるぞ」

「うーん、まぁ、それなら大した時間じゃないかもしれないけど・・・」

「決まりだな。ではルゥ、今はエメの膝の上にいるがよい。
試合が始まったらこっちにこい」

「なぅ！」

ありがとう、王様！
嬉しくなった私は、後ろ脚で立ち上がり前脚を王様の胸にかけて、ほっぺたをぺろっと舐めた。

「お、猫っぽいじゃないか。かわいいもんだな」

「ルチノーちゃん、むやみに愛想振りまくのは考えものよ。
ほら、違う方向に闘志を燃やしちゃった人がいるじゃない」

エメさんが指さした方向を見ると、お昼の休憩を終えたカールが準備運動をしに訓練場に出てきていた。
ばちっと目が合った瞬間に睨まれる。

いや、睨んだのは私のことじゃなくて王様か。

「ははっ、怖い怖い」

「でしょ。さ、試合開始まではまだ時間があるから、ルチノーちゃんを渡して」

「まぁ待て」

そう言って王様は、持ち上げた私のお腹に頬ずりした。

「！！！！！」

剣をざくっと地面に刺したカールは、私たちの方に駆け寄ろうとしてとっさに踏みとどまり、訓練場の壁を殴り始めた。

そ、そんなに叩いたら拳を怪我しちゃうよ？

「あっはは！　おもしろいな」

「あなたねぇ、部下をからかうのはやめなさい」

そうだ、そうだ！

まったくもう、王様ったら。

今夜うちに帰ってからのことが怖いよ。

「んなぅ」

「そうね。私のところにいたほうがいいわよね。

さ、いらっしゃい」

今度は素直にエメさんの膝へ飛び移った。
うん、ここからでも十分見える。
カールに怒られるより、こっちにしようっと。

「只今より、午後の部、準決勝を始める！」

親衛隊長さんが、試合用に四角く描かれた枠の中央で叫ぶ。
わぁっと歓声と拍手が起こった。
いつのまにか、観覧席は城勤めの人々で埋まっていた。
あ、あそこにいるのはいつも見かけるお洗濯のお姉さんだ。
あっちにいるのは料理番のおばさん。
中庭のお手入れをしている庭師（おじ）さんもいる。
えーっと、他には・・・。
ぞわり
観覧席を見渡していると、悪寒が走った。

な・・・に・・・今の。

「ん？　どうかした？　ルチノーちゃん」

ぴぃんと耳を立てた私を、エメさんが覗き込む。
毛は逆立って、しっぽもばひばひになっている。

「んなぅあぅ」

「寒気？　歓声にびっくりしたの？」

歓声？　そうなのかな。

たくさんの人の熱気に当てられたのかな。
もう一度周囲を見渡す。
今度は何もない。
気のせいだったのか。

「カールの出番は次のようだな。
まずはユハとベントか」

王様の声で我に返る。
そっか、ユハさんも出てたんだ。
応援しなくちゃ。

「両者、向かい合って・・・礼！」

親衛隊長さんが号令をかける。
中央に進み出たユハさんと相手の人が、礼をして剣をかちんと合わせた。

「用意・・・はじめ！」

7　武術大会3

キィンと澄んだ音が響き、勝負は一瞬で決した。

「きゃあぁぁぁぁ、ユハ様あああぁぁ」

「素敵ー！」

「さすが、私のユハ様！」

「なんであんたのなのよ！　こっち向いて、ユハ様ー！」

黄色い歓声が響き渡る。

ユハさんはそんな女性たちに、申し訳程度に手を振った。

「きゃああ、こっち見た！」

「ユハ様あああ！」

さらに白熱した声援が送られる。

「え？　もう終わり？」

「あぁ。ユハめ、腕をあげたな」

「んなー？？？」

さっぱりわからない私とエメさんに、王様が解説をしてくれた。

「あいつの普段の得物はフランベルジェと呼ばれる片手剣だ。

刀身が波打つ形になっていてな、殺傷能力が極めて高い。

試合は一般的な模擬刀だが、片手剣（フランベルジェ）と同じように切っ先を揺らし

て相手に太刀筋を読まれないようにしていた。
ベントがしびれを切らして切り込んできたところを、剣に沿って受け流し、鍔（キヨン）に引っかけてはじいた」

「あー、そういえば、剣先をゆらゆらしてたわねぇ」

「うむ。片手剣（フランベルジェ）であれをやると、炎が揺らめいているように見えることから、ユハは戦場では炎の使い手と呼ばれている」

へぇ。
ユハさんってすごいんだなぁ。
でも見てそこまでわかる王様も、実は相当強いのかな。

「さて、次はカールとヴァイノか。
カールは長剣使いだったか。
手足の長さを生かして、なぎ倒すように敵を蹴散らしていたな。
ヴァイノは槍が専門で、騎馬戦が得意だったはずだ。
一対一の試合ではどうなるか・・・」

んん、王様の口ぶりだと、一緒に戦ったことがあるみたい。
この国で戦争って聞いたことないけど、実はあったのかな。
私は辺境でのカールしか知らないから、敵と戦うカールなんて想像もつかない。

「両者向かい合って―」

親衛隊長さんの号令がかかる。

「用意、はじめ！」

「きゃあぁ、カール様、がんばってー！」
「ヴァイノ様ー！」
「カール様ー！」

試合開始と同時に、声援が飛ぶ。
カールへの応援のほうがちょっと多いかな？
モテすぎるのは嫌だけど、こういう応援はうれしい。
私も、しゃべってよければ大声でカールの名前を呼びたい。

「ルゥ、こっちに来ないのか？」

「うにっ」

「んふ、余計ないたずらしたから嫌われたんじゃない？」

「なんだ、つまらんな」

「いいから、見てなさいよ。あ、ほら、動いたわ」

初めの立ち位置から、にらみ合ったままだった二人が、じりっと動いた。
ヴァイノさんが右に動けばカールは左へ。
カールが右へ動けば、ヴァイノさんは左に動く。
一定の距離を保ちながら、二人は円を描くように移動していた。

じり・・・じり・・・・

どれくらいの時間が経っただろう。
いつの間にか声援は止み、観覧席は緊張に包まれていた。
カール、がんばって！

心の中で応援する。

すっと、ヴァイノさんが腰の位置に剣を引いた。

「突きが来るぞ」

「え？」

エメさんにつられて王様の顔を見た瞬間、「わぁ」とも「おぉ」ともつかないどよめきが会場に広がった。

何？　どうしたの？

「勝者、カール＝ヘルベルト＝ヴュスト！」

「わあああああ」

「きゃー！　カール様あああああ！」

「あああ、あなたのせいで見逃したじゃない！」

エメさんがばしっと王様を叩く。

「人のせいにするなよ」

「うなー！！」

いや、王様のせいだ！

変なタイミングでしゃべるから！

「そなたまで・・・。うぅ、痛い」

エメさんに叩かれ、私の猫脚（パンチ）を受けた王様は、わざとらしくお腹（なか）を押さえた。

「演技はいいから解説しなさい」

「おまえ、私を誰だと思ってるんだ」

「ブルクハルト国王リクハルド陛下、わたくしどもに只今の試合についてご教授願えませんこと？」

「・・・いい性格をしているな」

「お褒め頂き光栄ですわ」

「気持ちが悪いからその話し方はやめろ」

「じゃ解説してくれる？」

「わかった、わかった」

降参、と両手をあげた王様は、なんだかとっても楽しそう。
そして私たちが目を離した一瞬の間に、カールがどうやって勝ったのか教えてくれた。

「まったく、偉そうにねぇ。はじめから素直にしゃべればいいのよ。何が“私を誰だと思ってる”よ。リックはリックでしょ」

「うむ」

ますますご機嫌になった王様は、私に手を伸ばし喉元を撫でた。

ごろごろ
つい喉が鳴ってしまう。

「陛下！」

がつん！
至近距離で激しい音がして、からからと地面に剣の鞘らしきものが落ちた。

「お怪我はありませんか」

「うむ、大丈夫だ」

「カール！　気を付けろ！」

「すみません、手が滑りました」

カールが投げたらしい鞘をはじき返したのは、丸眼鏡をかけたちょっと神経質そうな人。
いつもカールとお昼を食べている、副隊長さんだ。

「陛下、申し訳ありませんでした」

「かまわん。
そうだ、ヘルマン。優勝者への賞品はどうなっているんだ？」

「金一封の予定です。隊の予算ではなく、みんなから集めた金です」

「ふむ。わかった」

へぇ、賞金なんて出るんだ。
そういえば、カールが負けたら私がみんなに会うとかなんとか言われたなぁ。
王様との会話が終わると、副隊長さんは持ち場に戻った。

「いよいよ決勝戦ね。今度こそ見逃さないようにしないと」

「なぅ！」

「あいたた、ルチノーちゃん、爪立てないで」

あ、ごめんなさい。
つい、力が入っちゃった。

「ふふ、愛するご主人様だものね、勝つといいわね」

「ふに・・・」

愛するって、愛するって・・・。
そ、そうだけど改めて言われるとくすぐったい。

「いやん、耳垂れちゃって！　照れるルチノーちゃんもかわいいわぁ」

「エメ、ほどほどにしないとまた鞘が飛んでくるぞ」

「私は大丈夫よ。
よし、じゃぁ仕方ないからカールを応援してあげましょう」

「お、そうか。では私はユハにしよう。何を賭ける？」

「賭けぇ？　うーん、そうね。
私が勝ったら国王専用書庫の秘蔵本見せてくれるかしら」

「いいだろう。では私が勝ったら正妃に・・・」

「やめた。割に合わない」

「ではなくおまえからキスしてくれるか？」

「はぁ？」

「いつも私からだからな。どうだ」

うーん、と悩むエメさん。
本とキスって・・・賭けとしてつりあうの？？

「いいわ」

「よし」

「そうと決まれば・・・カール！　負けたら承知しないわよ！！」

「ユハ！　手加減はいらんぞ！　勝利の暁には望みの褒美を与えよう！」

「あ、なによ、それ、ずるい！　私は、えーっと・・・」

王様が応援に加わったことで、観覧席の声援は、試合開始前だというのに地響きがするほど大きなものになった。

みんな口々にカールとユハさんの名を叫ぶ。
訓練場の中央に、親衛隊長さんが出てきた。

「では、これから決勝戦を行う。
あらためて、選手の紹介をしよう。
東側、ユハ＝アウノ＝テラスト！」

「きゃあああ」
「ユハ様ー！」

「西、カール＝ヘルベルト＝ヴュスト！」

「カール様ー！」
「がんばってー！」

「決勝戦のみ、時間無制限。
降参するか、戦闘不能と俺が判断するまで続けてもらう。
試合だからといって気を抜くんじゃねぇぞ、本気でやれ！」

「「はい！」」

「よぉし。両者向かい合って、礼！」

ぞわり

え？
ひげが震える。
背中の毛が、ぴりぴりと逆立つ。
何？　この感じ。

「用意、はじめ！」

7　武術大会3（後書き）

カールが身動きとれないからって、王様、やりたい放題ですｗ

8　襲撃

＊＊＊＊＊

胸がむかむかする。
リクハルド様が、これ見よがしにルゥに触りまくっている。
ルゥもルゥで、なぜ触らせておくんだ。

「カール！　負けたら承知しないわよ！！」

エメの声が聞こえる。
なんだ、女魔術師のやつ、いつもは憎まれ口ばかりなのに、俺を応援してくれるのか。

「ユハ！　手加減はいらんぞ！　勝利の暁には望みの褒美を与えよう！」

「望みの？」

国王の声に、正面に立つユハがぴくりと反応した。
俺を見てにやりと笑う。

「では、勝たせてもらうとしよう」

「ふざけるな。勝つのは俺だ」

向けられた切っ先を剣先で払う。

「こら、おまえら、まだ試合前だ。合図を待て」

にらみ合う俺たちを、隊長がいさめる。
距離をとって、号令に合わせて礼をした。

「用意、はじめ！」

ガツ！

ヴァイノとの試合とは違い、はじめから打ち合いになった。
お互い一歩も譲らず、激しく剣を交わす。
刃先を潰してあるとはいえ、攻撃がもろに当たったら、良くて打撲、悪ければ骨折する。
キィン！
胴を狙ってきた一撃を、剣を立てて防ぎ、一歩下がる。
踏み込んで開いたユハの足元を、身を低くして一閃すれば、返した右足で蹴りを繰り出してきた。
顎をそらして避け、逆袈裟(けさ)に切り上げる。
それを体をひねって避けたユハは、飛び退(すさ)って間合いをとり、態勢を整えた。

ユハの剣先がゆらりと揺れる。
技量は五分五分。力は俺が、速さはユハが上だ。
奴の軌道を読み間違えば、一瞬で負ける。

右か。
左か。

上か、下か。

見えるものに頼っては、惑わされるだけだ。
剣を正面にかまえ、目を半眼（はんがん）にして気配を探る。

「！」

来る・・・！

ユハの狙いは右側面。
避けては間に合わない。
模擬刀の柄を返し、ひねりを加え、体重をかけて打ち下ろした。
ガツッ
鈍い音と共に、両者の剣が折れた。
ユハの剣先は地面に突き刺さったが、俺の方は前方にはね跳んだ。
しまった！

「陛下！」

何人かの近衛や親衛隊員がリクハルド様を取り囲み、他の者は周囲を警戒している。
折れた模擬刀の先は、リクハルド様のいる方向へ跳んだ。
もしや、お怪我でもさせてしまっただろうか。
両方の剣が折れてしまったので、試合は一時中断だ。
様子を伺いに、リクハルド様の元へ向かう。

エメを胸に抱き、しゃがみこむ国王の足元には、何本もの矢が落ち

ていた。
何が起こったのか。

「大事ない。私のことはいいから、賊を追え」

「「「はっ」」」

リクハルド様の無事な様子にほっとしつつ、どうしたものかと遠巻きにしていた俺たちに、副隊長が声をかけてくれた。

「カール、ユハ。
飛んできた剣先に一瞬気を取られた隙に、矢が射かけられた。
また、直後に襲撃を受けた。賊は逃走中。
試合は中止だ。指示を待つように」

「はっ」

なんと、本当に賊が現れたのか。
装備を整えるためだろう、ユハは身をひるがえし、控室へと足早に歩き出す。
俺は、ユハの後に続きながらも、目の端で白い影を探した。
そんな俺に、エメが気付く。

「カール、探し物はここよ」

リクハルド様の腕の中から抜け出したエメの手に、白猫が抱かれていた。
猫は俺に目を留め、ひと声鳴く。

「にゃ〜ん」

「・・・違う」

「え？」

「ルゥじゃない。ルゥ？　ルゥはどうした！？」

白い毛並み。赤い瞳。
金の首輪にはまった双子石の色合いも同じ。
しかし、何かが決定的に違う。
眉をひそめたエメは、ついっと猫に手をかざした。

「なんてこと」

猫の輪郭がぼやけ、くすんだ茶トラの猫に変わる。
首輪はしていなかった。

「幻惑の術だわ。いつの間に！」

親衛隊（なかま）により発見された賊は三名。
いずれも、訓練場の裏で、舌を噛み切って自害していた。
エメの術により、この場から出られなかったためと思われる。
作戦成功と喜ぶ隊員たちを横目に、俺は必死でルゥを探した。
事後処理を終えたエメも手伝う。

「カール・・・。私がついていながら、ごめんなさい。

実は、もう一つ知らせたいことがあるの」

「・・・なんだ」

「これはまだ極秘なんだけど、ジェラール様もいないのよ」

「何？」

エメの話によれば、一人で訓練場に向かうのを目撃されたのを最後に、行方不明だという。
ルゥと違い、王子（ジェラール）のことは近衛中心に八方手を尽くして探された。
しかし、夕闇が迫った今もまだ見つかっていないそうだ。

「ルゥと王子？　関連があるのか？」

「わからないわ。でも、時を同じくして消えたとなると、無関係とは言い切れないかもしれない」

「・・・くそ・・・っ」

そういえば、ルゥは王子（ジェラール）と何度か会ったことがあるような話をしていた。
もしや、他の猫とすりかえられ、王子（ジェラール）をおびき寄せる道具にされたのか？
だとすれば、彼女は今どこに・・・。

王子（ジェラール）なんぞ、俺はどうでもいい。
ルゥ。
無事でいてくれ！

ヴィルヘルミーナの最後の女王？（前書き）

本編の途中ですが、ルゥのお母さんのお話です。
シリアス展開。全六話（予定）。

ヴィルヘルミーナの最後の女王？

幾重にも重なった桃色の花びらが、風にのって湖へと舞い落ちる。
数多くの魔術士を輩出し、大陸きっての魔術王国として栄えるヴィルヘルミーナの城は、美しき湖上の名城としても有名だった。

「ナタリー！　マクシミリアン！　こっちよ」

陽光にきらめく見事な金髪に、可憐な菫（すみれ）を思わせる青紫（バイオレット）の瞳の少女が、湖のほとりを駆ける。

「お待ちください、ルミエール様！」

昼食の入った籠を抱えて追うのは、赤毛にそばかすの少女。
幼少の頃よりルミエールに仕えてきた、侍女のナタリーだ。

「あっ」

ナタリーは主君を追うのに夢中になって、足元の小石につまずいた。
自分はどうなろうとも、主（あるじ）の昼食だけは守らねばと籠を抱え込んだが、覚悟していた衝撃はいつまでたっても来なかった。
代わりに、力強い腕が彼女を支える。

「おまえな、それ以上鼻が低くなったらどうするんだ。ただでさえ十人並みなのに、城に置いてもらえなくなるぞ」

そう憎まれ口を叩くのは、ナタリーの幼馴染であり、次期ヴィルヘルミーナ女王たるルミエールを守る、宮廷騎士のマクシミリアンだ。

「ううう、うるさいわね。
ルミエール様は鼻の高低で侍女を選んだりしないから大丈夫よ」

「ルミエール様がいいといっても、へちゃむくれにお側をうろうろされるのは俺が嫌だ」

「へちゃ……！？」

なんて言い草！　と口をぱくぱくさせるナタリーの手から、マクシミリアンが籠を取り上げる。

「俺が持っていくから、おまえは昼食場所を確保しろ」

「それはどうもありがとねっ。ついでにいちいち指図するのはやめてくれる？」

「おまえがぐずぐずしているからだろ。言われるのが嫌ならさっさと動け」

「なぁんですってえぇぇ」

「あの……ナタリー、マクシミリアン。
ここでいいから、お昼にしましょう？」

二人が言い合っていると、先に行っていたルミエールがいつの間にか戻ってきて、遠慮がちに声をかけた。

「ルミエール様、ここでは景色があまりよくありません。
今、ナタリー（こいつ）がいい場所を見つけますから、もうしばらくお待ち

ください」

「でも……」

「お気に召した場所がありますか？　どこぞなりとお申し付けください。すぐに準備いたします」

「ちょっと、その準備ってあたしがするのよ？　わかってる？」

「ごめんね、ナタリー。私が急にピクニックに行きたいなんて言いだしたから……」

「あ、いえ、ルミエール様！　それはいいんです。ただこの馬鹿がさっきからごちゃごちゃうるさいから」

「馬鹿とはなんだ。ルミエール様に謝らせるなぞ、おまえの方が馬鹿だろう。
侍女の仕事をなんだと思ってるんだ」

「ルミエール様のためなら、剣山の上にだって休憩場所を作って見せるわよ！
ただそれをあんたに言われるのが気に入らないわ！」

「なんだと！？」

「もうっ、二人ともいい加減にしてっ。
明日からはこんな時間はとれないんだから、楽しく過ごしましょうよ」

「あ……ルミエール様……申し訳ありません」

ナタリーが小さくなって謝る。
マクシミリアンも、長身をかがめてばつの悪そうな顔をした。
元々の童顔もあって幼く見られることの多いルミエールだが、明日で１８になる。
ヴィルヘルミーナの女王は世襲制であり、代々１８歳の誕生日に次の女王の戴冠式が行われる。
少し前に二十歳になったマクシミリアンと、ルミエールの二つ年下のナタリーは、それぞれ両親が城で働いていたため幼い頃に出会い、兄妹のように育った。
年の近い遊び相手として紹介され、ルミエールにとっても、二人はもっとも気の許せる相手になった。
即位しても、ナタリーはルミエール付きの侍女でありマクシミリアンは宮廷騎士であることに変わりはないが、これまでのように三人でかけることは難しくなる。
最後の思い出にと、ピクニックを提案したルミエールだった。

「ルミエール様、この先に少し開けた小高い場所があります。
そこで昼食にしませんか。
城と湖が一望できて、とてもきれいなんですよ」

ぷぅっと頬を膨らませたルミエールの機嫌をとるように、マクシミリアンが言った。

「今日のお弁当は、ルミエール様の好きなほうれん草のキッシュですよ。
料理長秘蔵の葡萄酒も持ってきちゃいました」

ナタリーも、マクシミリアンの持つ籠の蓋を開けて、中身をちらっと見せてルミエールの様子を伺う。

「景色がよくても、おいしいお料理があっても、二人が喧嘩をしていては意味がないわ」

「喧嘩なんて！」
「してません！」

二人の声が重なる。

「本当？」

「本当ですとも！　ほら」

と言って、ナタリーがマクシミリアンに抱きつく。
マクシミリアンも、にかっと笑ってナタリーを抱きしめた……というより羽交い絞めにした。

「ち、ちょっと、マクシミリアン！　苦しいわよ！」

「俺の愛だ、受け取れ」

「あんたの愛なんていらん！」

「……いらないの？　やっぱり喧嘩……」

「いるいるいる！　います！　マクシミリアン大好きよっ
ルミエール様も一緒に、ほぉら、仲良しっ」

ナタリーがルミエールの手を引き、二人の間に入れる。
三人でぎゅうっと抱き合い、だんごのようになった。

ずいぶんとおかしな構図だが、ルミエールは嬉しそうにしている。
その反面、年上の幼馴染は、複雑な表情(かお)をしていた。

「うふふ、確かに苦しいわ」

「あ、すみません、ルミエール様」

マクシミリアンがぱっと離れる。

「大丈夫。二人が仲直りしてくれてよかった。
さ、行きましょう。その、景色がいいっていう場所を教えて？」

「はい」

先導するマクシミリアンのあとを、ルミエールとナタリーで手をつないで歩く。
小さな頃ならいざ知らず、立場を理解した今ではこうした触れ合いは恐れ多いと思うナタリーだったが、ルミエールは何かにつけてくっつきたがる。
特に今日は、一種の躁状態のようだ。
ルミエールなりに、明日の戴冠式が不安なのかもしれない。

咲き乱れる花々や、空を行く鳥のことを楽しそうに話すルミエールに相槌を打ちつつ、ナタリーはマクシミリアンを盗み見る。
さっき、ルミエールを間に挟んだとき、マクシミリアンは何を思ったのだろう。
ナタリーは、彼がいつからかルミエールに想いを寄せていることを知っている。
ただの宮廷騎士の自分と、ゆくゆくはどこかの王族か貴族を婿に迎えるルミエール。

かなうはずのない、恋―

大好きな二人に幸せになって欲しいけれど、二人が結ばれることはない。

きっとマクシミリアンもどこかで区切りをつけ、身分に合った相手を見つける事だろう。

「もうすぐですよ」

振り返ったマクシミリアンが、前方を指さす。

その瞳に、親しみ以上のものは見られない。

ま、せいぜい道を踏み外さないようにね。いつか来るその日には、なぐさめるくらいはしてあげるから。

そう思い、ナタリーはルミエールとともに歩を進めた。

「わぁ、すてき！」

マクシミリアンが案内してくれた場所は、ヴィルヘルミーナ城と湖が一望できて、とてもいい景色だった。

敷物を広げ、その上に料理長が持たせてくれた昼食を並べる。

「あら？　これは……」

中に、ナタリーには見覚えのない箱が入っていた。

「ケーキだ」

「わ！　マクシミリアン、作ってくれたの？」

「明日、お誕生日ですから」

「ありがとう！」

マクシミリアンには、剣を振り回す騎士には似つかわしくない趣味がある。

菓子作りだ。

昔気まぐれに母を手伝って作った菓子を、ルミエールが大層喜んで食べた。

それ以来菓子作りに熱中し、日々の差し入れはもちろんのこと、毎年ルミエールの誕生日にはケーキを焼いてきた。

明日は一緒にケーキを食べるどころではないだろうからと、今日持ってきたのだ。

「おいしい！　マクシミリアンは本当にお菓子作りが上手ね！」

ナタリーが切り分けたケーキに、真っ先に手をのばすルミエール。

「ルミエール様、ちゃんとキッシュ（こちら）も召し上がってくださいね。ケーキでおなかいっぱいにしちゃだめですよ」

「わかってるわ。でも残しちゃもったいないじゃない」

「それは他のお料理も同じです。

余ったら持ち帰りますから、夜また召し上がってください」

一見普通に見える籠だが、中は時間を固定する魔術がかけられ、冷たいものは冷たいまま、温かいものは温かいまま保てるようになっている。
術が切れるまでは、食品の鮮度もそのままだ。

「夜……。そうね、寝台（ベッド）で食べてもいい？」

「寝台（ベッド）？」

葡萄酒を注ぎ分けていたマクシミリアンが、不思議そうに問う。

「この間書庫で見つけた絵本に、お姫様が寝台（ベッド）で朝食をとっている挿絵があったのよ。
夜着（やぎ）のまま起き上がって、細長いテーブルを寝台（ベッド）に横切らせてたわ」

「病気の姫だったのか？」

「違うわ。なんだっけ、えーっと」

「寝ていてね、紅茶と蜂蜜トーストの香りで目が覚めるのよ。
起き上がると目の前においしそうな朝ごはんが並んでるの。
それをゆったり食べて、お姫様の一日が始まるの。すてきじゃない？」

「お行儀が悪いです」

「そうだな。怠惰な感じがする」

「ええ？　そうかしら。いいと思うんだけど」

だめと言われればやってみたくなるのが、心情だ。
食事ひとつとっても礼儀作法の時間となるルミエールは、一度そんな朝食をとってみたいとナタリーにせがんでいた。
朝食がだめなら夜食でもいい。

「ね、今日だけ、特別。夜、こっそり」

「寝台（ベッド）で食べたら、歯磨きはどうするんですか？」

「食べ終わったら磨けばいいじゃない」

「寝台（ベッド）の上で？」

「起きるわよ」

ナタリーもマクシミリアンもいい顔をしない。
半分意地になったルミエールは、なんとか実現しようと駄々をこねる。

「一回やれば気が済むわ。ね？」

「寝る直前に食べたら、太りますよ」

「消化も悪いです」

「直前じゃなくてもいいわ。一回寝台（ベッド）に入って食べて、また起きるから」

「それなら普通にテーブルで食べればいいじゃないですか。

何も寝台（ベッド）じゃなくたって」

「そういうことじゃないのよぅ」

ルミエールの頬が、また、ぷぅと膨れる。

「そんな顔なさらないでください。明日からは女王様でしょう？」

「ナタリーがさせてるのよ」

「まぁ、今夜だけっていうならいいんじゃないのか？
せっかくの誕生日ケーキだし……」

「そうよね！　そうよね、マクシミリアン！」

「この裏切り者っ。
……ふぅ、じゃぁ、今夜だけですよ」

「きゃぁ！　ありがとう、ナタリー！」

結局は、ルミエールに甘い二人である。

「では、ケーキはそこまでにして、お料理をいただきましょう。
甘いものだけでは、お食事になりませんからね」

「ええ！」

敷物の上には、サラダ、ほうれん草のキッシュ、鴨肉の燻製、具沢山のスープなどが並んでいる。
景色を眺めながら料理に舌鼓を打ち、城内の面白おかしい噂話や、

国で流行っている店の話などをするうち、あっという間に楽しいひと時は過ぎて行った。

「そろそろ戻りましょうか」

日の傾きを見て、マクシミリアンが言う。
城では明日の準備が進められている。
主役のルミエールは、もう今日となってはすることもないので、慌ただしい城にいるよりはと外出の許可を得ていた。
とはいえ、夕方から最終的な打ち合わせがあると聞いている。

「いよいよ、明日ですね」

「うん……。二人とも、私が即位しても、変わらずにずっとそばにいてね」

「もちろんです」

「いつまでも、誠心誠意こめてお仕えさせていただきます」

ナタリーはスカートの裾をつかみ、マクシミリアンは片膝をついて礼をする。
ルミエールは、そんな二人を見て一瞬寂しそうな顔をしたが、気持ちを切り替えて礼を受けた。

翌日。

「女王万歳！」
「ルミエール様、万歳！」

戴冠式を終え、城で最も高い塔の上から手を振るルミエールに、人々が歓声をあげる。
うすく化粧をして正装をし、金髪を結った上には歴代の女王が守ってきた冠（ティアラ）。
その中央には、涙型の深い青色をした貴石がはまっている。
第８３代女王の誕生だ。
ヴィルヘルミーナは、国の中心に湖があり、その真ん中に城が建っている。
民の暮らす街と城とは、跳ね上げ橋でつながっていた。
今日は城の庭が解放され、祝いに駆け付けた国民で橋の上まで埋め尽くされている。
それでも入りきれなかった人々は、少しでも近くで新女王の姿を見ようと、湖に船を浮かべていた。

「おめでとう、ルミエール」

「お母様」

ルミエールが振り返ると、つい先ほど娘に位を譲った母、ルクシールが立っていた。
ルミエールと同じ、金髪に青紫（バイオレット）の瞳。
四十を過ぎてなお可憐な容姿と高い魔力で、国内外に熱烈な信者（ファン）がいる。

「成人の儀も戴冠式も無事終わってよかったわ。あとは継承式ね」

「それが一番緊張するわ。私……大丈夫かな」

「ふふ、ルミエールなら大丈夫よ。
私(わたくし)も歴代女王の中でも指折りの魔力を持つと言われているけど、
あなたはそれ以上の素質を感じるわ」

新女王は、これから七日間、城の地下にある魔術陣に通い、ヴィルヘルミーナに伝わる魔術の全てを受け継ぐ。
膨大な魔術の中には、人の役に立つものから、一歩間違えば全世界を破滅に導く秘術まである。
秘術は書物に残すわけにはいかないため、代々女王の体に刻み、封じられてきた。
しかし魔術は強ければ強いほど、たとえそれが封じるだけであっても、術士に負荷をかける。
一人の人間が無理なく秘術を封じられる時間―それが娘が１８になるまでという女王の在任期間の理由だった。

「さぁ、胸を張って。国民に応えてあげなさい」

「はい」

再び民に向き合ったルミエールは、にこやかに微笑み、手を振る。
人々の歓声がひときわ大きくなった。

「女王万歳！」
「ルミエール様、万歳！」

そんな、新女王(ルミエール)に歓声を送り続ける人々の中に、外套(フード)を目深にかぶ

った二つの影があった。

「ちっ……戴冠式に間に合わなかったわ」

「気にするでない。このあとの魔術の継承こそ本当の儀式。クラリス、おまえこそが正統なる後継者だ」

ヴィルヘルミーナの最後の女王？

城が、落ちる。
城内のいたるところに火の手があがり、通路には絶命した兵士や使用人が倒れていた。
新女王の誕生からたった七日で、美しきヴィルヘルミーナの城は、湖の底へ沈もうとしていた。
ナタリーは外に逃げようとする人々に逆行して、必死に城の奥へ奥へと進む。

「ルミエール様！　ルミエール様！！」

声が枯れるほど呼び続けているのは、唯一無二の主の名。
長い階段を駆け下りた最下層に、女王の姿はあった。

「ルミエール様！」

「ナタリー！　来てはだめ！　早く逃げて！！」

巨大な魔術陣の中央で、術の媒介となっているのはルミエールその人。
ドレスの裾は破れ、日の光のような明るい金髪も、今は術風を受けて乱れていた。
白い頬には泥がつき、涙の痕が残っている。
先日受け継いだばかりの冠（ティアラ）の石だけが、術に反応して強く光っていた。
魔術陣の割れ目からは、次々と水が噴き出してくる。

「ルミエール様！」

ナタリーに遅れること数瞬、マクシミリアンも駆け込んできた。
手にした剣には血がしたたっている。

「マクシミリアン！　お願い、ナタリーを連れて逃げて！」

「あなた様を置いては行けません！」

マクシミリアンが、陣の中に入ろうとする。
ばちんと火花が散って、伸ばした手がはじかれた。

「くそっ」

「ルミエール様！　術を解いてください！　あたしたちと共に脱出しましょう！」

「だめよ！　私は最後の女王として、ヴィルヘルミーナに伝わる秘術を永遠に封印するため、共に沈まねばならないの！」

「そんな……」

がくりとナタリーが膝をつく。
あふれだした水が、侍女服を濡らした。
呆然とするナタリーの隣で、マクシミリアンがぎゅっと拳を握る。

「ルミエール様。ならば私も、共に沈むまでです」

驚いたナタリーは、幼馴染の顔を見上げる。

煤と血で汚れたその顔には、ゆるぎない決意が見て取れた。
あんた、そんな形で想いを成就させていいの？
ナタリーとて、ルミエールをただ黙って死なせる気はない。
だからといって、一緒に死んでどうなるというのだ。

「マクシミリアン……」

ルミエールの頬を、新たな涙が伝う。

「だから、ルミエール様、俺をこの中に入れてください」

「……だめよ……だめ……」

陣の真ん中に立つルミエールは、マクシミリアンから顔をそらし、
自分の身体を抱く。
ナタリーは、なんとかみんなで生き延びる術（すべ）はないのかと唇を噛む。

「ルミエール様」

マクシミリアンが一歩踏み出す。
ルミエールがびくりと顔を上げて、すがるような瞳を向けた。
彼女も、逃げてと、女王として死ぬと言いながらも、今の状況が怖
くて仕方ないのだ。
涙を流すルミエールに、唇を噛んで思案するナタリー。
一人、マクシミリアンだけが迷いのない顔つきで歩を進めようとし
ていた。

「ちょっと待って！」

さらに陣に近付こうとするマクシミリアンの足を、ナタリーがガッ

とつかむ。

「なんだ、邪魔をするな。おまえはいいから、逃げろ」

「うるさいわね！　あんた間違ってる！
ルミエール様も間違ってます！　なんで死のうとするんですか。
共に生きましょう！」

「ナタリー……。だって秘術が……」

「秘術なんて！　生きていれば対応策だって見つかるかもしれません！」

ぐいぐいと進もうとするマクシミリアンに引きずられるようにしながらも、ナタリーは決して足を離さない。
水が跳ね、顔を、服を濡らすが、そんなことは気にしていられない。

「秘術“なんて”とは、どういう言い草だ。ルミエール様が命を懸けて封じようとしているものだぞ。
おまえも臣下なら、主君の命に従って逃げろ。
さぁ、ルミエール様、ここを開けて。俺も一緒にいきます」

「マクシミリアン。ナタリー。
あぁ、どうすればいいの……」

ルミエールが両手で顔を覆う。
その間にも床の亀裂は拡がり、部屋の壁にもひびが入って、横からも上からも水が噴き出してきた。

その時、落ち着いた声音が室内に響いた。

「逃げなさい」

自分たち以外の声が聞こえて、三人は同時に部屋の入口を見る。

「ナタリーの言う通りよ。あなたたちは逃げなさい」

「お母様！」

驚くナタリーの横を通り過ぎ、マクシミリアンが火花に阻まれて入れなかった魔術陣の壁も易々と通り抜けて、ルクシールは娘の元へ向かった。

「お母様！　お父様と共に賊の手に落ちたのではなかったのですか！？」

「お父様は、ね。私はこの通り無事です。
こんなことになったのも、私のせいよ。責任はとらせてちょうだい」

ルクシールは、ルミエールと並んで魔術陣の中央に立つ。
新たな力ある存在を受けいれて、魔術陣が安定した。
術風が和らぎ、もはや膝まで達しようとしていた水が、引いて行った。

「お母様のせい？　それは一体……」

「詳しい話をしていなかったわね。あなたの戴冠式の日に尋ねてきた男を覚えてる？」

「男？」

◆◆◆◆◆◆

あの日、戴冠式を終え、国民へのお披露目も済ませたルミエールは、母とともに城の大広間で客人の挨拶を受けていた。
そこへ一組の男女が訪れた。

『お初にお目にかかります。ルミエール女王陛下。
そして……お久しぶりですね、ルクシール様』

『あなたは、ザイル』

四十がらみの男はザイル、外套（フード）を被った小柄な女はクラリスと名乗った。
このザイル、大陸ではそれなりに名の知れた魔術士で、ルクシールの在任期間中に何度もヴィルヘルミーナを訪れては、婚姻をせまっていた。
結局女王（ルクシール）が、国内の有力貴族の中でも特に術資質の高い者を選んで伴侶とし、子を成すまで、つきまとった。
ようやくあきらめたかと思ったら、新女王の誕生当日、十数年ぶりに現れた。

『何の用？　娘の即位を祝うのでなければ、帰ってちょうだい』

『くくっ……。そんなことを言っていいのですか？

あなたがたは今、国民を騙しているのですよ』

『どういうこと？』

『まぁ、立ち話もなんですから、お茶でもいただきましょうか』

不遜に言い放つザイルに、ルクシールは眉が寄りそうになるのをぐっとこらえる。

ザイルは、厚い面の皮とともに、魔術大国の責任者として無視できないほどの力を持ち合わせていた。

ルクシールの在任時、力は強くとも禍々しいものを感じる彼に生理的な嫌悪感を覚えつつも、無下にできなかったのはそのためだ。

『あの、お母様？』

『あなたはお客様の対応をしなさい。
彼らは私（わたくし）が話をするわ』

そう言ってルクシールはザイルらとともに、別室に消えた。

◆◆◆◆◆◆

上階では、物が破壊される音や人々の悲鳴が聞こえる。

突然城に入り込んできた黒ずくめの集団。

“フィダーイーだ！”と誰かが言っていたな、とナタリーは思い出す。

傭兵か何かなんだろうか。

「ザイルは言ったの。
クラリスこそが正統な女王であると」

「正統なって……どういうこと？」

ザイルの言に寄れば、何代か前の女王が双子を生み、片方は忌子として秘密裏に処分されようとした。
側仕えの一人が機転を利かせて生き延びることはできたが、貧しく、苦労ばかりの人生だった。
クラリスはその子孫だという。
そしてクラリスにこそヴィルヘルミーナの血は色濃く引き継がれており、身の内に秘めた魔力もルミエールを凌ぐという。

「私やあなたの瞳の色は青紫でしょう。
クラリスの瞳は深い青なの。
今あなたの頭にあるヴィルヘルミーナに伝わる秘宝、涙石と同じ深い青。
それが何よりの証拠だとザイルは言うのよ」

ルクシールたちの先祖は、残す双子を誤った。
クラリスとクラリスの後見人である自分に、ヴィルヘルミーナの王座を明け渡せ。
そうザイルは要求してきた。

「もちろん私はつっぱねたわ。
そうしたら、王座の代わりにヴィルヘルミーナに伝わる秘術を教えろといってきたの。
クラリスにはそれを知る権利があると。

あの男の目的はクラリスがどうとかいうより、秘術だったのかもしれないわ」

「……そんなことがあったの」

「えぇ。私はもちろんそれも断って……。
やけに大人しく帰ったと思ったら、こんなことになるなんて」

それまで冷静に語っていたルクシールだったが、初めて悔しそうな思いを声音にのせた。
女王として、いかなるときも感情をあらわにしないよう心掛けてきた彼女であったが、国を失いかけた今となってはその努力すら虚しい。

「彼らの要求を、馬鹿げた話として軽んじた私のせいよ。
秘術は私が封じます。ルミエールはナタリーたちと一緒に逃げなさい」

「でもそうしたらお母様が！」

「誰かが封じなければならないのだもの」

「封じる必要はないさ」

「何奴！」

不意に聞こえた若い女の声に、それまで大人しく母子の会話を聞いていたマクシミリアンが反応した。
ナタリーを背にかばうようにして立ち、剣先を声のした方へ向ける。

「ようやく入れた。
ったくババァが面倒な仕掛けをしていくから、苦労したよ」

“ババァ”とはルクシールのことか。
彼女はここに来る道すがら、他の者が追えないように術をかけていたらしい。

外套（フード）を脱ぎ捨て、服についた埃を払うクラリスは、見事な金髪と深い青色の瞳をしていた。
白い肌、すらりと伸びた手足もどことなくルミエールを思わせる。
しかし粗暴な言葉遣いと歪んだ表情は、似ても似つかない。

「あなたは……クラリス？」

「そうだよ。死ぬだの生きるだの、何を騒いでるんだい。
あたしこそ真の後継者だって言っただろう。封じる必要なんかない。
さぁ、ヴィルヘルミーナの全てをこの身に！」

自信に満ちた表情で、魔術陣へと近づいていくクラリス。
マクシミリアンは、その動きを剣で追いながらも、どうしたものかと迷っている。

「あなたが継いで、どうする気です」

「新生ヴィルヘルミーナの誕生さ。
正統な後継者を迎えて、この国は益々栄えることになる。
ほら、どきな！」

クラリスはなんなく魔術陣に入り込む。

マクシミリアンをはじいた陣が彼女を受け入れたということは、クラリスがヴィルヘルミーナの血を継いでいることに間違いはないようだ。

「やめなさい！」

「やめて！」

ルクシールとルミエールがクラリスを止めようとする。

育ちの良い二人は他人と直接もみ合ったことなどなく、陣の中ではおいそれと他の魔術を使うこともできない。

押し合った結果、当然のように、勝ったのはクラリスだった。

「あたしが女王だ！」

クラリスが陣の中央に手の平を押し当てた。

宙に呪文が浮かび上がり、クラリスの詠唱が始まる。

ルクシールとルミエールが陣の外にはじきだされる。

転びかけたルミエールをマクシミリアンが支え、ナタリーはルクシールに付き添った。

こうなっては誰も止められない。

「無茶よ！　やめなさい！！」

ルクシールが叫ぶ。

術風が吹き荒れる中、クラリスはすべての術文を一度に読み上げていく。

いままで女王たるべく修練を積んできたルミエールでさえ、七日の時をかけて習得しようとしたものなのに。

「きゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

クラリスの服が裂け飛び、裸身に呪（じゅ）が刻まれる。
青く光る文様は、耐えがたい痛みを肌に与えることを、経験者であるルクシールもルミエールも知っている。

「あ……や……何……。そんなはず……だって、あたしは正統な……」

呪がもうすぐ体表を覆い尽くすと思われた瞬間、陣の中央から漆黒の闇が噴き出した。
気体とも液体ともつかない闇はクラリスを飲み込み、天井に当たって、また陣へと落ちた。
そのまま陣の中央に吸い込まれるように戻る。
闇が消えた後に、クラリスの姿はなかった。

「なんてこと……」

「闇に、喰われたんだわ。
何の心得もなく、秘術に手を出すから……」

しんと静まり返った魔術陣を、一同は呆然と見つめる。
ひび割れから浸み出した水だけが、さらさらと流れていた。

「では……この魔術陣はこのまま私（わたくし）が封じるから、ルミエールは逃げなさい」

「お母様、それはできません」

「ルミエール……」

母子の押し問答がまた始まろうとしたその時、

「心得とは、何があればいいのです？」

部屋の入口に、新たな声が響いた。

ルクシールが溜息をつく。

「来ると思ったわ」

「お待たせしてしまって申し訳ありませんね」

ルクシールの視線の先に、埃ひとつその身につけることなく立つザイルがいた。

「上はもう落ちますよ。

優秀なフィダーイーの面々には、報酬をはずまねばなりませんね」

「フィダーイー！　そんなものを雇っていたのね！」

「フィダーイー？　上でも聞いたわ。何？」

マクシミリアンの背に守られたナタリーがつぶやく。

「俺も詳しくは知らないが、暗殺や工作を生業としている連中だそうだ」

不吉なその名は、政（まつりごと）に関わる者の間で密かに語られてきた暗殺者集

団の名。
自分たちの仕事に誇りを持ち、依頼を完遂するまでは、地の果てまでも追うという。

そんな者たちが、この城に入り込んでいたなんて！
施政者の仮面はすでにはがれおち、ルクシールはぎりぎりと歯噛みする。
大事に大事に守ってきたこの国を、娘に譲った矢先にこの出来事。
自分がもっとうまく立ち回っていれば。
娘のために盤石の基盤を築いてさえいれば、こんな輩に入り込まれる隙を与えなかったのに……！

「秘術ではなく、私（わたくし）の命が望みだったの？
それなら、フィダーイーでも何でも使って持っていけばいいわ！
なぜ国ごと滅ぼそうとするの！」

「ふふっ、私は欲張りでね。秘術もあなたも欲しかった。
だから婚姻を申し込んでいたのですが、断られてしまいました。
残念です。
なぜ秘術も欲しいのかって？　これまで私は世界中の魔術を習得してきました。
残るはこのヴィルヘルミーナの秘術のみ。
この術を手に入れれば、私は世界中の魔術士の頂点に立つことができる」

「あなたには無理よ。ヴィルヘルミーナの直系でなければ使えないわ」

「無理かどうかは、やってみなければわからないでしょう？」

「……つまらぬことを。
では、それほどの力を手に入れて、どうする気？」

「それは手に入れてから考えますよ。
さて、ルクシール。年経てなお、あなたもまだまだ魅力的ですが、秘術を知る頂点（もの）が複数いるのはおかしい。
都合よくクラリスも消えたようだし、ヴィルヘルミーナの血は……」

にやり。
ザイルの口の端が、上方に歪む。
あまりにも禍々しい笑みの形だった。

「根絶やしにします」

「なっ……」

ザイルが片手をあげると、室内に黒装束の男が数人、音もなく現れた。
ルクシールの顔から血の気がひく。

「すでに城内の者は一人として生きてはいません。
外に逃れた者も、この者たちが仕掛けをしましたから、生き延びることはできません」

「なぜ国民を巻き込むの！」

「ヴィルヘルミーナの秘術を知る可能性のある者を、一人残らず始末するためですよ」

「外道……！」

ザイルの、そしてフィダーイーの所業に、ルクシールは怒りで身を震わせ、目前の敵を睨みつける。

「くくっ……。取り澄ました顔より、そういう表情のほうがあなたは美しく見える。

フィダーイーのみなさん、最後の大物ですよ。

ルミエールを血祭りに！　ルクシール、あなたは私が直々に手を下しましょう。

あなたの血に染まった魔術陣で、ヴィルヘルミーナの秘術を発動させるのも一興です」

「ふざけたことを！　城が落ちるというなら遠慮はいらない。

あなたが欲しがった秘術、目の前で見せてやるわ！」

ルクシールが魔術陣の中央に駆け込む。

両手を胸の前で合せ、詠唱を始めた。

本来ならすでにルミエールに引き継がれているはずの術だったが、七日目の今日、最後の儀式がまだ済んでいなかった。

そのため、ルクシールにも術が使えた。

魔術陣から光がほとばしり、目を焼く。

術風が陣の外まで吹き出した。

ルミエールとナタリーを背にかばい、マクシミリアンは剣を床に突き立てて強風に耐える。

ザイルたちは、詠唱と同時にルクシールに術をかけられ、動けないでいるようだ。

「あなたは生きて、自分の幸せを見つけてちょうだい」

陣の中にいるはずのルクシールの声が、ルミエールたちのすぐ近くで聞こえた。

「お母様、何を……あ！」

三人の足元に、転移の陣が現れる。

ルクシールはルミエールたちを逃がし、秘術でもってザイルたちを抹殺したあと、城ごと封じるつもりだ。

「お母様！　無茶だわ！　せめてこれを！」

ルミエールが差し出そうとしたのは涙石がはまった冠（ティアラ）。

「大丈夫。意地でも封じてみせる。
マクシミリアン、ナタリー。ルミエールを頼んだわよ。あなた……私に最後の力を……」

「お母様あああああぁぁぁぁぁぁ！」

転移の術が発動する。

ルミエールは、城の外へと放り出された。

ばしゃーん！

水柱があがる。

「ぷはっ……ごほごほっ……ここは……」

湖の中に落ち、初めに岸に上がったのはナタリー。
マクシミリアンはルミエールを抱いて泳ぎ、後に続いた。

「この間ピクニックをしたあたりだな。
城が……沈んでいく」

「ルミエール様、大丈夫ですか？」

マクシミリアンの腕の中でぐったりしているルミエールに、ナタリーが声をかける。

「ルミエール様？　ルミエール様！」

ナタリーがルミエールの肩をつかみ、がくがくと揺する。
青ざめたルミエールに、反応はない。

「どうした？」

「ルミエール様が」

「どけ！」

周囲を警戒していたマクシミリアンが、ナタリーのただ事でない様子に気づいて、ルミエールの呼吸を確かめる。

「水を飲まれたのか？　くそっ」

「あんた、何を」

マクシミリアンはルミエールを柔らかな芝の上に横たえると、顎をつかんで口を寄せた。
そのまま息を吹き込む。

「ちょっ、血迷ったの!?　やめなさい、マクシミリアン!」

ルミエールに覆いかぶさるマクシミリアンの肩を、焦ったナタリーは力一杯ひっぱる。

「邪魔をするな!　人工呼吸をしているだけだ!」

「じんこう……?」

「うっ、ぐっ……ごほっ」

何度目かの口づけのあと、ルミエールが息を吹き返した。

「あ……私……?　っ、痛っ……!」

びくっと身を震わせたルミエールが、おそるおそる自分の裾をまくる。
湖に落ちた拍子に切ったのか、足に大きな傷を負っていた。
ドレスの内側が真っ赤に染まっている。

「大変!」

ナタリーが自分の裾を引き裂いて、ルミエールの足に巻く。

「とりあえず止血します。
あぁ、結構深く切れてる……。どこか安全な場所を見つけて手当

しないと」

ナタリーが辺りを見回す。
美しかったヴィルヘルミーナの城は半分以上湖に沈み、黒煙をあげている。
湖の水位は、徐々に下がっている。
城のあった中央にできた大穴に、湖の水が流れ込んでいるせいだろう。
城が完全に沈み切れば、反動で津波のように水が岸辺に押し寄せてくるかもしれない。
ここに長居はできない。
どうしよう、とナタリーがマクシミリアンを振り仰いだのと、マクシミリアンが懐の短刀を茂みに投げたのは、ほぼ同時だった。

「……っ、はぁっ、危ないですね。
ルミエールの手当の必要はありませんよ。すぐに死ぬのですから」

「おまえ、生きて……！」

短刀で狙った茂みから現れたのは、ザイルだった。
どうやって城から脱出したのか。
けれど彼も無傷ではいられなかったようで、半身をかばい、あえぐような息をしている。
だらりと下がった腕からは、血がしたたり落ちていた。

「ふぅ……。ルクシールはフィダーイーの面々を巻き込んで、城と共に沈みました。
秘術は永遠に失われたかと思いましたが……不幸中の幸いですね。
その娘を殺し、体に刻まれた残りの秘術を奪うとしましょう」

「そうはさせるか！」

マクシミリアンが切り込む。

身をひるがえしてよけたザイルだったが、よろめいてがくりと膝をつく。

「く……っ、もうすぐ……もうすぐ秘術が手に入るというのに……」

「ナタリー！　ここは俺が押さえる」

ザイルに剣を向けながらも横目でナタリーを見ると、ルミエールの手当てを終え、互いに支え合いながら立っていた。

「あんたはどうするのよ！」

「後から追いかけるから、早く行け！　こんなときまでぐずぐずするな！」

「マクシミリアン！　あなたを置いていくなんて！」

「行ってください、ルミエール様！　あなたがいれば、国を再興できるんです！」

「はぁっ、はぁっ。

き、宮廷騎士ごときが私の邪魔をするとは、笑止千万」

肩で息をしていたザイルが、深呼吸をして息を整える。

空中に円を描くと、額に指を押し当てて、何かを唱えた。

一呼吸おいて、ザイルの術が発動する。

マクシミリアンが捧げ持った剣が、爆風を両断した。

「何！」

「ヴィルヘルミーナの宮廷騎士を馬鹿にするな。
この剣はルクシール様から直々に戴いた宝剣。汚れた魔術士の術など効かん！
ナタリー！　今のうちだ、行け！！」

「マクシミリアン……。生きて、必ず会うわよ……！」

「あぁ。ルミエール様を頼んだぞ」

ナタリーは、マクシミリアンの背中に力強くうなずく。
幼馴染の横顔が、淡く微笑んだような気がした。

「そうはさせるか！」

ザイルがナタリーたちに向けて術を放とうとする。

「うるさい！　おまえの相手は俺だ！」

すかさず、マクシミリアンが足元の土を剣先ではじきとばし、ザイルの目つぶしとした上で切りかかって行った。

「マクシミリアン、あぁ……」

「ルミエール様、急いで。
あいつの気持ちを無駄にしないでください」

「でも……うっ……」

ルミエールが泣き崩れる。

「泣いている場合ではありません！　ほら！」

足に傷を負ったルミエールを支えて叱咤激励しながら、ナタリーは水が押し寄せつつある岸辺をあとにした。

「ん……」

「ルミエール様！　お目覚めですか」

「ナタリー……。城は？　お母様は！？」

ルミエールは、がばっと起き上がろうとして強い眩暈を感じ、再び寝台に体をうずめた。

柔らかだが、自室とは違う寝具。

見慣れぬ天井。変わらないのは、ベッドサイドの椅子に腰かける侍女（ナタリー）だけ。

「ここは……どこ？」

「私の遠い縁者を頼って訪ねた、ベルトランという国です」

「ベルトラン……たしか魔術を全く信じない人々の国だったわね。いつの間にそんな遠くまで」

「ルミエール様は、足の傷が元であの魔術士から逃れてすぐ気を失われて、高い熱を出されたんです。

人々の助けを得てなんとかここまで来ることができました」

「そうだったの。ナタリー、あなたにばかり苦労をかけてごめんなさい。

それで、マクシミリアンは？　国は！？　どうなったの？」

眩暈を起こしている場合ではない。

ルミエールは今度こそ起き上がって、ナタリーに迫った。

「マクシミリアンは、きっと今頃私たちを追ってきてますよ。

国は……」

ナタリーが言いよどんだその時、ノックもなしに、部屋の扉が開いた。

「ヴィルヘルミーナは国ごと湖に沈んだ」

入ってきたのは、ルミエールより少し年かさの、くすんだ金髪に薄い青色の瞳、角ばった頬の居丈高（いたけだか）な男だった。

「国ごと……沈んだ……？」

「バルトロメウス様。お借りしているとはいえ女性の部屋に無断で入ってらっしゃるのは、礼を失するのではありませんか」

「相変わらず口の減らない侍女だな。

気に入らないならいつでも出て行け」

バルトロメウスと呼ばれたベルトランの第一王子は、冷たい目線でナタリーを受け流す。

「くっ……」

ナタリーは悔しそうに顔をしかめるが、ルミエールはそれどころで

はない。

「あの、えぇっと、バルトロウルス様？　国が沈んだとは一体……」

「バルトロメウスだ。

報せによれば、半月ほど前だな。ヴィルヘルミーナ城が炎上、陥落。

城が沈むときに湖の水が津波のように、国民の住む地域に押し寄せたと聞いている。

生き残った民は、周辺の国に逃れたそうだ」

「あ……逃れた……。民は助かったのですね」

フィダーイーが仕掛けたという国を滅ぼす手立ては、うまくいかなかったのか。

ザイルの言い方だと、国民すべてを殺しかねない話だった。

「全員助かったかどうかは知らんがな。

ヴィルヘルミーナの民は、みな魔術が使えると聞くから、どこでも歓迎されているようだ。

我が国には必要ないが」

「そうなのですね。あぁ、一人でも多く助かってくれているといいのだけれど……」

「ふん。あやしげな術などに頼るから、滅ぶはめになるのだ」

「なっ」

バルトロメウスの一言に、ナタリーが腰を上げる。

それをルミエールが制して、毅然とした態度でバルトロメウスに向き直った。

「助けていただいたことは感謝いたします。
しかし私の国を悪くおっしゃるのはやめてください。
魔術にもきちんとした理論があり、結果があります。
決して不確かなものではないのです」

「ふん。侍女も侍女なら主も気が強い。
俺は魔術など嫌いだ。信じてもいない。
おまえのようなものがうちの城に滞在しているだけでも、虫唾が走る」

強烈な悪意に、生まれてこの方、人々に愛されはしても侮蔑されたことのなかったルミエールは、顔色を失う。

「バルトロメウス様、いい加減にしてください。
ルミエール様はベルトラン国王陛下ご夫妻、つまりあなた様のご両親のご招待を受けてここにいらっしゃるのです。
それをつべこべ言うなら、陛下に進言しますよ」

「言うなら言え。
俺の意見は父上も母上も知っているからな。
あぁ、その母上が、その女が目覚めたかどうか気にしていたから見に来たんだった。
起きたという事で報告しておくから、母上を迎える準備でもしていろ」

そう言い放ち、バルトロメウスは靴音も高く部屋を出て行った。
ナタリーは閉められた扉に向かって、イーッと歯を剥く。

「あんの、鉄面皮っ」

「……魔術を信じない国とは聞いていたけれど、信じないどころか魔術が嫌いなのね」

「あんなやつの言うこと、真に受けないでいいですよ。ベルトランといっても、全く魔術を受け入れないわけではないんです。保冷石や保温石は普通に使っているみたいですし」

「そうなの」

「あぁ、ルミエール様。顔色が悪いです。目覚められてすぐたくさんお話になったから。さぁ、横になってください」

「ん。ねぇ、ナタリー。国王ご夫妻のご招待でっていうのはどういうこと？あなたの親戚がお城に勤めていらっしゃるの？」

ルミエールは寝台に横になると、気を取り直して、ナタリーからベルトランの城にやっかいになることになった経緯を聞いた。ヴィルヘルミーナを出たナタリーは、逃げる国民に紛れてできるだけ遠くへ移動しようとした。たまたま通りがかった馬車に乗せてもらい、街道を進むうち、ベルトランにナタリーの従姉妹の伯父の連れ合いの妹が住んでいることを思い出した。

「それって、親戚っていうのかしら」

「いいんです。遠くても親戚は親戚です」

三日間馬車を乗り継いで、ベルトランまでたどり着いた。
ヴィルヘルミーナ陥落の報せはまだ届いていなかったことが幸いし、その遠い親戚は訳ありの様子を不審に思いつつも、ナタリーとルミエールを保護してくれた。
その日のうちに、ナタリーはベルトラン国王夫妻にだめで元々と手紙を書き、次の日に城から迎えがきた。

「親戚には、ルミエール様は侍女仲間ってことにしてあります。職場でいじめに遭って、二人で逃げてきたって」

「いじめって……侍女頭（じじょがしら）が聞いたら泣くわよ」

「あはっ、そうですね」

二人が思い浮かべたのは、ヴィルヘルミーナの城で侍女をとりまとめていた年配のふくよかな女性。
優しく、おおらかで、時に厳しいこともあったけれど、侍女たちに母親のように慕われていた。
もちろん侍女同士も仲が良く、いじめなど聞いたことがない。

「お城には侍女として雇ってもらえないかって書いたと話しました。早速仕事をもらえてよかったねって、送り出してもらいました」

「私、気を失っていたのでしょう？　それでよく信じてくれたわね」

「ん～、ルミエール様は記憶にないみたいですけど、ずっと気を失っていたわけではないです。

途中受け答えをしたり、あたしが支えながらですけど、自分の足で歩いたりはしてました」

「そうだったの。全然覚えてないわ」

「まぁ、そうじゃなければ、いくらあたしでもここまで逃げてくることはできません」

「うん……。本当に迷惑をかけてしまったわ。ごめんね。ありがとう。

それで、お手紙には本当はなんて書いたの？」

「ヴィルヘルミーナの事情と、ルミエール様を保護して欲しいと言うお願いを。

なぜ即日受け入れてくれたかは、あたしもわかりません」

「そう……。王妃様がいらっしゃるというなら、お礼方々聞いてみましょう」

しばらくして、こちらはきちんと侍女の案内を通して、ベルトラン王妃がやってきた。

赤みがかった金髪の、落ち着いた雰囲気の女性だった。

ナタリーが勧めた椅子に腰かけ、半身を起こしたルミエールの手をとる。

「目覚められてよかったわ。気分はいかが？」

「おかげ様で、熱もありませんし、ゆっくり過ごさせていただいております。

このたびのご好意、なんとお礼を言ったらいいのか……」

「いいのよ。お国は大変だったようですね。
ベルトラン（うち）は御存じのように魔術嫌いの多い国だから、おおっぴらな親交はなかった　けれど、ルクシール様とは一度だけ文（ふみ）を交わしたことがありましてよ」

「お母様と？」

「えぇ。
私がこの国に嫁ぐ前、外遊先でたまたまお会いしたことがありますの。
お茶をご一緒して……そのお礼でしたわ。
開封したとたん、ふわりと花の香りが部屋中に広がって、花びらが舞ったの。
その花びらは、幻だったのかしら、すぐに消えてしまったのだけれど、今でもあの香りと手紙の美しい文字は覚えていますわ。
このたび、あのルクシール様のご令嬢が城下に身を寄せており、困っているらしいと聞いて、お手伝いを申し出ましたの」

開封と同時に香ったというのは、花の香りを封じる術を手紙にかけていたのだろう。
花びらも、幻影の術を仕込んでいたに違いない。
ヴィルヘルミーナでは、遊び心でそんな手紙を贈り合うことがある。
ベルトラン国王夫妻が、ルミエールをすぐに受け入れてくれた理由（わけ）がわかった。
母が若い頃ほんの気なしに出した一通の手紙が、今、ルミエールを救ってくれたのだ。

「おかげさまで、本当に助かりました。
私にできることはありませんか。あの、起きあがれるようになっ

たら、なんですけど」

「そんなことは気になさらなくていいのよ。困ったときはお互いさまでしょう」

王妃は優しく微笑む。

その微笑みと握られた手の温かさに母を思い出し、涙があふれそうになる。

「そういうわけには」

「そうね。ならば、後でフロリアンのところに顔を出してくれるかしら」

「フロリアン？」

「次男なの。今年１４になるんだけど、病弱で寝台から起きられない日が多いわ。

話し相手になってくれれば、気がまぎれるかも」

「わかりました！　喜んで」

ルミエールがぱっと笑顔になる。

それを見た王妃も、にこやかに微笑んだ。

次の日には、国王も見舞いにきてくれた。

年は取っているがバルトロメウスそっくりの容姿で、一瞬身構えたルミエールとナタリーだったが、話して見れば気さくな人柄の王だ

った。

「うちの息子が失礼を申したようで、すまんなぁ」

「いいんです。私こそ、王子様に生意気な口をきいてしまって」

「ほっほっほ。なぁに、ルミエール姫はあやつに言い返したのか。それはそれは、見たかったのぅ」

どうやらバルトロメウスの不遜な態度は、国王も手を焼いているようだった。

「あやつは儂の若い頃とそっくりで、格好いいじゃろ？
なんぞ口が悪くても態度が大きくても、かえってそこがいいというご令嬢もいてな。
女性に不自由はしていないようなんじゃが、あのままでは心配じゃ。
ルミエール姫。回復なされたら、バルトロメウスのところにも顔を出してやってはくれまいか」

「あ……えっと、それは……」

「無理にとは言わん。時々で良い。
自分の思い通りにならん女性もいると、思い知ってもらわねばな」

つまり、王様公認で口答えをしてもいいということだろうか。
変な具合に気に入られてしまったようだ。

「では、頼んだぞ。
おぉ、そうだ、ルミエール姫は病み上がりとはいえ細すぎる。

もっと栄養のとれるものを出すよう、料理長に言っておくからな。たくさん食べて、早う元気になられよ」

「ありがとうございます……」

言いたいことを言って、ベルトラン国王は去って行った。

「人当たりはいいですけど、強引なところはやっぱり親子って感じですよね」

「ナタリーもそう思う？　私も……言おうと思ったところだったの」

一週間後。

第二王子フロリアンの部屋に、車椅子に乗ったルミエールの姿があった。

「まぁ、フロリアン様ったら……ふふふ」

「本当だよ？　庭師が言っていたんだから」

フロリアンが面白おかしい話をし、それを聞いたルミエールがころころと笑う。

するとルミエールの笑顔を見たフロリアンが、また嬉しそうに笑うのであった。

ベルトランの料理長の特製料理のおかげか、ルミエールの体調はすっかり良くなった。

しかし足の傷が完全には治っていない為、移動には車椅子を使っている。

昨日、ルミエールは初めてフロリアンの部屋を訪れた。
たくさんの侍女に囲まれ、寝台に横たわる第二王子は、光を集めたような容姿のルミエールを一目見て気に入り、毎日来てくれるよう頼んできた。
ルミエールも、これで恩返しができると喜んで通うことにした。

笑顔で語り合う二人を見て、侍女たちが噂する。

「昨日、今日と、フロリアン様のあんなに楽しそうな顔を見たのは久しぶりだわ」
「ほんと、ルミエール様のおかげね」
「ああして大人しくしてれば、かわいらしい王子様なんだけどね」
「いつまで続くことやら。あの姫に飽きたときが恐ろしいわ」
「そうよね、また王子の我が儘に振り回される日々が来るかと思うと」
「しーっ、万が一にでも王子に聞かれたらどうするの。あたしたちの首なんてその日のうちに刎ねられるわよ」

「そんなに我が儘なの？」

「ひぃっ……あ、なんだ、あなたはルミエール様の。おどかさないでよ」

「ごめんごめん。で、フロリアン王子ってそんなに我が儘なの？
ついでにバルトロメウス王子はどうなのかな？」

主人たちが二人の世界にいるのをいいことに、その日、ナタリーは

情報取集にいそしんだ。

ヴィルヘルミーナの最後の女王？

ルミエールとナタリーがベルトランに来て、一か月が過ぎた。

「もう車椅子はいりませんね」

「えぇ。本当にこの国にはお世話になったわ。
きちんとお礼をして、ヴィルヘルミーナに帰りたいけど……」

これからのことを、ルミエールとナタリーは、何度も話し合ってきた。
二人とも、一度は祖国を見に行き、現状を確かめたいという思いがある。
そして、できるだけ早く、国を再興（ヴィルヘルミーナ）したい。
そのためにはどうすればいいのか。
国土の状態にもよるが、ルミエールが一人で呼び掛けても、各国に散った国民がすぐに戻ってくれるとは思えない。
諸々のことを考え合わせ、ベルトラン（この国）の協力をあおぎ、再興の準備を進めるのが現実的かと思う。
でも、と二の足を踏んでしまうのは、いつも一緒だったはずの存在が欠けているから。

「ったく、あいつ、何してるんでしょうね。遅すぎます」

「ふふ、私たちが見つけられないのかも」

「そうですかね。呑気にお菓子作りなんてしてたら許しません」

「そうねぇ。新作の研究をしてくれてるなら、許してあげてもいいわ」

名は、口にしない。
言ったら泣いてしまいそうだから。

他にも、不安要素ならいくらでもある。
ザイルは死んだのだろうか。
フィダーイーはどこへ行ったのか。
国へ戻っても安全なのだろうか。

わからないことばかり。
唯一はっきりしているのは、ルミエールが持っているのは、ナタリーが隠し持っていてくれた冠（ティアラ）だけということ。
他はすべて失ってしまった。

「どうしたもんですかね」

「そうねぇ……」

そろって溜息をついていると、扉を叩く者があった。

「失礼します。ルミエール様、あの、フロリアン様が午後のお茶をご一緒にとご所望です」

「……また？」

ナタリーが眉根を寄せる。

「昼食もご一緒したばかりなのですが……」

ルミエールも困り顔で答えた。

「……はい。今度は午後のお茶をとのことなんです」

「そうですか……」

「あの、ご都合が悪いでしょうか」

フロリアン付きの侍女は、うつむいてもじもじと両手を合わせている。

ナタリーが聞いてきた噂話と、この一か月の付き合いから、フロリアンの我が儘ぶりはよくわかっているルミエールである。

自分が行かなければこの侍女が叱られる。

「わかりました。準備ができ次第お伺いするとお伝えください」

「ありがとうございます！」

ルミエールの返事を聞いた侍女は、ほっとした表情でフロリアンの元へ戻って行った。

「いくら王妃様の頼みだからって、そこまでお付き合いしなくてもいいんじゃないですか？」

あんな甘えたがりの我が儘王子の相手をするより、ヴィルヘルミーナのことを考えたい。

いつまでもベルトランに頼っているわけにはいかないのだから、今後の生計について少しでも見通しを立てたい。

そう思うナタリーは、行くと返事をしたルミエールを呆れたように見つめる。

「決めたわ、ナタリー」

「何をですか？」

そんなナタリーの心情など知らぬふりで、ルミエールはぎゅっとナタリーの両手をつかんできた。

「この国への恩返(お礼)しよ。フロリアン王子の我が儘を直す」

「はい？　そりゃ無理ですよ。あの王子の我が儘は筋金入りです」

「う。じゃぁ、我が儘は無理でも、起き上がれるようにする」

フロリアンが我が儘なのは、自分で動けないからだ。
一日中寝台で寝ていれば、当然退屈するし、苛々もする。
何の病気なのかは知らないが、見たところさほど悪いようにも見えない。
起きて、散歩でもできるようになれば、気が晴れるのではないか。

「それならできるかもしれませんね」

「でしょう？　王子様が身も心も元気になれば、王妃様も喜んでくださるわ。
　今の私には他にできそうなこともないし、やってみる」

ナタリーの賛同を得たルミエールは、まずは手本を見せようと、フロリアンの部屋まで歩いて行くことにした。

念のため、ナタリーは空(から)の車椅子を押して横を歩く。

フロリアンは、寝台に半身を起こして待っていた。
ベッドサイドにお茶の用意がしてある。

「遅いよ！」

ルミエールの顔を見た途端、フロリアンは拗ねたように言い放った。
短めに切られたくせっ毛は蜂蜜色で、幼さの残る輪郭を飾る。
薄青の瞳は、機嫌が良ければくりくりとして可愛らしいのだが、今は気持ち吊り上がって見える。
部屋に控える侍女たちは、一様にぐったりした顔をしていた。
ルミエールが来るまで、駄々をこねるフロリアンの機嫌をとっていたのだろう。

「申し訳ありません。今日は自分の足で歩いてきたものですから」

「え……。あ、ほんとだ。
治ったの？　ルミエール」

「まだ完全ではありませんが、こうして動けるようにはなりました。
自分の足で歩けるってすばらしいですね」

「ふぅん」

「フロリアン様もたまには起きて、歩いてみませんか？
好きなところに行けるってすてきですよ」

「……僕はいいよ」

予想通りの答えに、ルミエールはこっそり笑みをもらす。

「そうですか？　残念です。フロリアン様と一緒にお散歩できたらいいなと思って、歩行訓練（リハビリ）をがんばりましたのに」

「散歩？」

「えぇ」

「一緒に？」

「はい。ベルトランのお庭は手が込んでいることで有名なんですよね？

ぜひ見てみたいんです。

あと、フロリアン様のお話によく出てくる庭師さんにも会ってみたいですわ」

「そっか。そうだよね。僕も昔はよく庭で遊んだんだ。

いつの間に、部屋から出なくなっちゃったんだろう。

うん、いいよ。僕が歩けるようになったら、庭を案内してあげる」

フロリアンの顔がぱっと明るくなる。

そしてあたかも自分で思いついたことであるかのように、散歩の計画を話しはじめた。

「……ってことで、庭師には連絡しておくからね。

ルミエールも、庭が見たいなら見たいって早く言ってくれればよかったのに。

僕だって準備がいるんだよ」

「申し訳ありません。
お世話になっている身としては、あまり贅沢を言ってはいけないかと思いまして」

「庭の散歩が贅沢ぅ？
ルミエールの国ってどんだけ貧乏だったの。
あ、保冷石も自分で作るんだっけ？　そんなの買えばいいじゃない。
魔術って節約のために習得するわけ？」

フロリアンの言い様に、傍らに佇むナタリーはイラッとするが、ルミエールは涼しい顔で受け流した。

「節約になるかどうかはわかりませんが、便利ではあります。
もしよければ、治癒力を高める魔術陣というのがあるのですが、お書きしましょうか？」

「そんなのがあるの？」

「はい。足の傷が治るまではと魔術を使うのを控えていましたが、もう大丈夫です。
もしフロリアン様が嫌でなければ、ですけど」

バルトロメウスの魔術嫌いを思い出す。
フロリアンも、魔術に嫌悪感があるだろうか？

「それを使えば早く歩けるようになるんでしょう？　頼むよ」

「わかりました。では後程準備してお持ちしますね」

「うん！　ルミエール、大好きだよ！」

「ありがとうございます」

フロリアンの現金な反応に内心あきれつつも、ルミエールは王妃への恩返しの一歩になったと胸をなでおろす。

侍女達にお茶の準備をさせるフロリアンは、ルミエールが入室してきたときのような、拗ねた様子はない。

きっとこの方は自分に素直なだけなのだ。

そう思うことにして、午後の一時を少しでも楽しく過ごせるよう気持ちを切り替えた。

「なんだこれは！」

翌朝、自室でナタリーと共に朝食後のお茶を飲んでいたルミエールの元に、バルトロメウスが飛び込んできた。

手には昨夜急いで仕上げて届けた、魔術陣が書かれた羊皮紙が握られている。

「おはようございます、バルトロメウス様。

女性の部屋に無断で入ってらっしゃるのは、礼を失すると以前も申し上げ……」

「うるさい。これは何の呪(のろ)いだと聞いている」

バルトロメウスの前に立ちふさがり、ルミエールを守ろうとしたナタリーを押しのけて、第一王子はぐいぐいと迫る。

「呪いではありません。治癒力を高める魔術陣ですわ。
ほら、私の元にも同じものが」

飲みかけのカップをテーブルに置いたルミエールは、文机の引き出しから同じ文様の羊皮紙を取り出す。
右手人差し指と中指を自分の額に、左手は取り出した羊皮紙に描かれた魔術陣にかざして術文を読み上げる。
すると、ルミエールの魔術陣とバルトロメウスの持つ魔術陣とが反応して、淡い光を放った。

「うわっ」

驚いたバルトロメウスは、羊皮紙からぱっと手を離して飛びのく。

「そんなに驚かなくても……。
ヴィルヘルミーナでは、医師が薬と一緒にこの魔術陣を処方するんですよ。
腕のいい術士は腕のいい医師でもあります。
ルミエール様の魔術陣はとってもよく効きます」

「何をわけのわからないことを！
これがフロリアンを害するものではないと、どうやって証明する！」

「証明と言われても……。フロリアン様のところへ行かれたのですか？

お元気そうではありませんでしたか？」

「それは……、顔色はよかったが」

行ってきたのか。

フロリアンの部屋でバルトロメウスに会ったことはなかったが、案外弟思いのようだ。

今だって、フロリアンのために怒っているのだ。

「その魔術陣のおかげですよ。

ついでにルミエール様の作戦のおかげです。

一緒に散歩をするんだとはりきってましたから」

「作戦？

あぁ、まぁ、散歩がどうとかは言っていたが。

しかしそれとこれとは別だ。魔術なんぞ、信用できん」

「よく効きますのに」

ルミエールが、残念そうに手元の魔術陣に目を落とす。

せっかく恩返しをしようと思ったのに。

魔術陣（これ）がなくても、フロリアンはその気になっているようだから、近々散歩は実現するかもしれないけれど。

「どうすれば信じてくれるんですか？」

ナタリーが問う。

「……そうだな。

馬屋に、先日事故で脚の骨を折り、処分を待つ馬がいる。

それを治してみろ」

「馬、ですか」

「どうせできんだろ。こんなもの、紛い物だ」

ふんと鼻を鳴らしたバルトロメウスは、取り落とした魔術陣を拾ってルミエールに突き返す。

「できますよ」

「何？」

「人と馬とでは少し術式を変えなければなりませんけど。脚の骨ですね。わかりました」

魔術陣を受け取ったルミエールは、その場で羽根ペンを取り、さらさらと陣に書き足しはじめた。

「馬屋はどこですか？　案内してください」

すっと立ち上がったルミエールを胡散臭そうに見つめながらも、バルトロメウスは馬屋までの案内を引き受けた。

バルトロメウスに案内されてやってきた馬屋には、栗毛の立派な馬が横たわっていた。

右前脚には痛々しい手当の跡がある。
親切な馬屋番が教えてくれたことには、馬は怪我をすると痛がってその箇所を振り回したり無理に立とうとしたりしてしまい、なかなか治らないそうだ。
しまいには自分の体重で他の脚まで故障させてしまったり、仮に腹に布をまわして吊して脚の負担を減らしたとしても、吊るした腹の皮膚が炎症を起こしたりして死んでしまう場合が多いという。

今も、馬は荒い息をして、体に汗をかきながら起き上がろうともがいている。

「痛いの？」

ルミエールは、一通り馬屋番の話を聞くと、苦しむ馬にそっと手を伸ばす。

「おい、やめろ」

「姫様、危ないですぜ。気が立ってますから、特に後ろ脚には気を付けてくだせぃ」

バルトロメウスと馬屋番が声をかけたのは、ほぼ同時だった。

「大丈夫よ」

心配してくれた二人には感謝の微笑みを向け、苦しむ馬の瞳をじっと見つめた。
脚をばたつかせ、細かく震えていた馬は、ルミエールと見つめ合ううちに大人しくなる。

「うん、ここが痛いのね」
馬が落ち着いたのを見計らって、ルミエールは包帯が巻かれた脚を優しく撫でた。
「こりゃ驚いた。どうしことでぃ。
王子様、この方はどなたです？」
「……」
馬屋番の問いには答えず、バルトロメウスはしかめっ面で腕組みをした。
ヴィルヘルミーナの元女王たるルミエールがベルトラン城に滞在していることは、公にはされていない。
ルミエールの周辺の世話をする侍女や、フロリアンの侍女たちには口止めをしてあり、一般の使用人には王妃の旧友のご息女とだけ言ってある。
馬屋番は不機嫌そうな王子に肩をすくめ、たおやかな姫が馬の患部に何かを巻きつけて固定するのを見守った。
「姫様、それはなんです？」
「魔じゅ……いえ、お守りですわ。
この馬が早くよくなりますようにと」
「へぇ。姫様のお守りなら効きそうですねぃ。
よかったですね、王子。ご自分のせいで怪我をさせたと、気になさっておいででしたから」
「この馬はバルトロメウス様の馬ですの？」

「へぃ、それはそれは生まれたときからかわいがられて」

「余計なことを言うな」

馬屋番の言葉を途中でさえぎったバルトロメウスは、ぷいと横を向く。

拗ねたような横顔は、フロリアンとよく似ていた。

馬屋を後にした二人は、ルミエールの部屋へ向けて連れ立って歩く。

バルトロメウスは馬に付き添いたそうなそぶりをしていたが、案内してきた手前、勝手に帰れとは言えなかったのだろう。

渋々と言った体でルミエールの横を歩く。

それでも、怪我の治ったばかりのルミエールに合わせてゆっくりと歩いてくれているようで、この冷たいのか優しいのかわからない王子に、ルミエールは少し興味をそそられた。

そういえば、第一印象があまりに悪く、つい足が向かなかったのだが、国王にバルトロメウスのところにも顔を出してやってくれと頼まれていたのだった。

せっかくだから、何か話してみよう。

えーっと、会話、会話……。

「あの、フロリアン様は何のご病気ですの？」

ルミエールは、自分よりずいぶんと背の高いバルトロメウスを、首をのばして見上げながら話しかける。

「何ということはない。ただ、弱い」

バルトロメウスはといえば、ルミエールを一瞥もせずに、まっすぐ前だけを向いて答える。

「寝台から起きられないほど、お体が弱いのですか？」

ルミエールはあきらめずに会話を続けようとする。

バルトロメウスは、馬屋から城内につながる渡り廊下の途中で足を止めると、ゆっくりと瞬きをして、ルミエールを正面から見つめた。薄青の瞳に、探るような色が宿る。

「それを知ってどうする。
　王族の健康状態を知りたがるなど、叛意があると思われても仕方ないぞ」

「そんな。ただ私は心配して」

予想外の言葉に驚いたルミエールは、胸の前で手を組んで身を縮めた。

バルトロメウスは、じっとルミエールを見つめる。

短くはない時間、そうして見つめられて、居心地悪く感じたルミエールが身じろぎした。

それが合図だったかのように、バルトロメウスは、片手を額に、もう片方の手を腰に当てて、はぁ……と長い溜息をついた。

「ニヨルド号は、走れるようになるのか？」

「え？」

ニヨルド号？
急に変わった話題に、一瞬ついていくことができないルミエール。
しかし、走れるかどうか、とルミエールに聞いてくるということは、先ほどの馬のことかと見当をつける。

「一晩たてば、ずいぶんとよくなっているはずです。
二～三日で骨もくっつくはずですわ。
でもあくまでも治癒力を高めるだけですから、走れるかどうかはあの馬のがんばり次第ですね」

「そうか」

「フロリアン様のことも、少しでもよくなれば、みなさん喜んでいただけるかと思っただけで、他意はありません」

弁解をするなら今しかないと、ルミエールは急いで付け足す。
そんなルミエールにちらっと視線を送って、「ふ」とバルトロメウスが微笑んだ。

「まぁ、そうだろうな。
おまえはその手の嘘をつけるようには見えない」

微笑みというより微苦笑といった感じだが、初めて見た笑みにルミエールはどきりとする。

「嘘なんてつきません。正直であれと幼い頃から言われて育ちました。
施政者が嘘つきでは、国民はついてきませんわ」

「そうか？　優しさと正直さだけでは国は切り盛りできんと俺は思

うがな。
　よくそんなふわふわした考えで、その年まで生きてこられたな」

「私、ふわふわしてますか？」

「している。さらに言うなら、その小さな体でおそろしい魔術を使えるなど、信じられん」

「魔術は、さっきの治癒の魔術陣もそうですけど、おそろしいものばかりではありませんよ」

渡り廊下から一歩出て、足元に咲く白い花の花びらを一枚とる。
ルミエールは口中で何事か唱え、手のひらに乗せた花びらにふぅっと息を吹きかけた。
一枚の花びらが二枚に、二枚が四枚にと増え、ルミエールとバルトロメウスの周りを舞った。
折よく吹いてきた風が、ルミエールの金色の髪を揺らし、翻(ひるがえ)ったドレスの裾を花びらが彩る。

「……美しいな」

目を細めたバルトロメウスは、ルミエールに一歩近づき手を伸ばす。

「でしょう？」

伸ばされた指先が、雪のように舞う花びらの一枚に触れた。
触れられた途端、幻影の花びらはふわりととけて、空中に消えた。
次々と生まれ、舞い踊る花びらの中、ルミエールが微笑む。

「いや、美しいのは花びらではなく……」

バルトロメウスが言いかけたその時。

ざぁっ……！

ひときわ強い風が、花びらをさらった。

ルミエールは髪と裾を手で押さえる。

風が収まった時には、幻影の花びらはすっかり消えてなくなっていた。

「何か、おっしゃいましたか？」

「なんでもない」

バルトロメウスが顎で先をうながす。

そろそろ戻らないと昼食の時間だ。

フロリアンから呼び出しがあるかもしれない。

髪を整え、服に着いた埃を払って、ルミエールはバルトロメウスの隣に並ぶ。

ふと見上げたルミエールと、バルトロメウスの目が合った。

反射的に、ルミエールはにこっと笑いかける。

バルトロメウスは、ルミエールが期待した笑みを浮かべることはなかったが、さりとて拒絶される感じもなかった。

ゆっくりと、二人で歩く。

少しだけ、王子との距離が近づいた気がした。

渡り廊下を通り中庭を横切るバルトロメウスとルミエールを、上階から見下ろす存在があった。
侍女に手伝ってもらい、歩行訓練を始めたフロリアンだ。

「あれは、ルミエール？」

窓枠にしがみつき、無意識に立ち上がる。
寝たきりでいたために萎えた足は、自分を支えられずにすぐによろめいた。
慌てた侍女が腕を差し出す。

「なんで……。一緒に散歩しようって約束したのに」

フロリアンは、唇を噛む代わりに、侍女の腕をぎりっとつかむ。

「うっ。フロリアン様、痛いです」

「兄さんも兄さんだ。
何でも持っているのに、僕がようやく見つけた光（ルミエール）まで奪うなんて」

「フロリアン様、爪、爪が！
あううぅ……！」

侍女の白いブラウスに血が滲むのにも構わず、フロリアンは眼下の二人を睨みつけた。

ヴィルヘルミーナの最後の女王？

ルミエールは、国について、ベルトラン国王夫妻に相談してみた。
夫妻は心配しつつもルミエールが落ち着くまではと様子を見ていてくれたそうで、快く支援を申し出てくれた。

「情報は、少しずつ集めておりますの。
裏付けが取れ次第、お知らせしますわ」

「ありがとうございます」

ルミエールとナタリーが国に帰るときには、警護もつけてくれるという。
ルミエールは知らなかったが、ナタリーに聞いたところによると、ベルトランは軍事大国としても有名だそうだ。
一つの国の支援をうけて自国を再興するとなると、相手国にはある程度従わなければならない関係になってしまう。
それは十分にわかってはいるのだが、今のルミエールたちには他に選ぶ道がなかった。

「時にルミエール姫。王子たちとは仲良くやっておるようじゃな」

国の話を終え、薫り高いお茶をいただいていると、何気ない風で国王が話しかけてきた。

「はい。おかげさまで、フロリアン様にもバルトロメウス様にも親切にしていただいております」

「それはよかった」

にっこり微笑んだ国王が、隣に座る王妃を意味ありげに見やる。

「特にフロリアンがあなたを気に入って、よく部屋に呼んでいるようですね」

「えぇ、そうなんですけど……」

実は、散歩の約束をして一週間ほどたつのだが、あれ以来、昼食も午後のお茶も誘いがなかった。

知らないうちに何か怒らせるようなことをしてしまったのかと、気になっていたところだった。

そう話すと、

「あの子も気分屋ですからね。

他におもしろいものを見つけたのかも知れません。

もしよかったら、ルミエール姫のほうから声をかけてやってくださいな」

と言われた。

「わかりました」

ルミエールがかしこまって了承すると、国王と王妃は顔を見合わせて、うんうんとうなずき合ったのだった。

国王夫妻の前を辞し、ルミエールはナタリーに声をかけてフロリア

ンの部屋へ向かった。
ナタリー経由で侍女に取り次ぎを頼み、部屋に入ると、きちんと衣服を身に付け侍女に手袋をはめてもらっているフロリアンがいた。

「まぁ！　もう起きられるようになったのですか？」

「ルミエール。久しぶりだね。僕のことなんて忘れちゃったかと思ったよ」

「えぇ？」

忘れられていたのは自分のほうではないかと喉まで出かかったルミエールだったが、服のせいかいつもと違う雰囲気のフロリアンに戸惑って、結局黙り込む。

「ふふ、冗談だよ。庭師に会いに行くところだったんだ。ルミエールも一緒に行くよね？」

「あ、はい。お願いします」

有無を言わせないフロリアンに、是と答えるしかないルミエールだった。

「なんてすてき……！」

フロリアンに案内されたベルトランの本庭は、縦長の形をしており、階段状に段差がつけられていた。
城の正面から軸線（ビスタ）が延び、左右対称に植物が配置されている。

一段ごとに動物を模した彫刻が配され、一番下には噴水。
歩道にはレンガが敷き詰められ、複雑な文様を描いていた。

「本庭を見るのは初めて？」

「はい」

あまり人目については行けないと思っていたので、一度バルトロメウスと馬屋まで歩いた他は、外出を控えていた。

「嘘つき」

「え？」

「なんでもない」

フロリアンと並んで庭を歩く。
ナタリーは侍女の見本のように、黙って二人の三歩後ろをついてくる。
他にフロリアンの侍女が二人付き添って、主とルミエールに日傘を差しかけてくれていた。

「あれ？　おかしいな。
庭師にこの時間に待っているように言ったんだけど」

しばらく歩いて本庭にある四阿（あずまや）につくが、誰もいなかった。

「ちょっと待ってようか」

フロリアンがそう言うと、付き添っていた侍女がすばやくお茶の準

備をはじめた。
ナタリーも手伝っている。
四阿には心地よい風が吹き込み、その風に乗って花の香りが漂ってくる。
ほどなくして恐縮した庭師がやってきて、フロリアンに聞いていたような面白おかしい話をたくさんしてくれた。
庭師といるときのフロリアンは、終始笑顔で、年相応に見えた。
棘があるように思えた口調も、いつしか元通りになっており、ルミエールは気のせいだったのかと胸をなでおろした。

「じゃ、あっしはまた仕事に戻りますんで」

「うん、また明日ね」

「へい」

「ありがとうございました」

庭師が帽子をひょいとあげて四阿を出て行く。
背中に背負(しょ)った籠には、庭の手入れに使う道具がたくさん入れられていた。

「あぁ、本当に楽しい方でしたね。
毎日会われているんですか」

「うん。ここ三日くらいね。ルミエールが言った通り、歩けるっていいね」

話を聞くと、フロリアンはルミエールと約束をしたその日のうちに起き上がり、歩行訓練を始めたと言う。

魔術陣は兄に取り上げられてしまったが、少しがんばってみると、すぐに歩けるようになった。
フロリアンは、いままでもったいないことをしていた、と笑った。

「あとどこか行きたいところはある？」

「そうですね……。あ、馬屋に行きたいです」

「馬屋？」

「えぇ、実は……」

バルトロメウスがフロリアンから取り上げた魔術陣がその後どうなったのか、かいつまんでルミエールは説明した。

「なんだ、そうだったの。
いいよ、一緒に行こう」

侍女に日傘を差してもらい、二人は馬屋に向かった。

馬屋につくと、以前会った馬屋番が桶に水を汲んでいた。

「こんにちは」

ルミエールが声をかけると、「あっ」と嬉しそうな顔をして手を止める。

「これはこれは姫様。

おかげさまであいつ、元気になりましたよ」

「そうですか！　よかった！」

馬屋番からニヨルド号の様子を聞くルミエールの横で、フロリアンは物珍しそうに辺りを見回している。

「フロリアン様は、こちらはあまりいらっしゃいませんの？」

「うーん、まぁね。何年も来てないな」

ルミエールがそう声をかけると、それまでルミエールにばかり気を取られていた馬屋番の男は、初めてフロリアンの存在に気づき、慌てて帽子をとって礼をした。

「あ、王子様、ご機嫌麗しく。
フロリアン様のお馬様も、いつでも乗れるように仕上げてありますんで、顔を見ていってやってくだせぃ」

「フロリアン様の馬もありますの？」

「まぁね。乗ったことはないけど。
この中に入るの？　なんか臭くない？　僕、嫌だなぁ……」

顔をしかめ、ハンカチを口元にあてるフロリアン。
そんなに嫌ならやめようかと尋ねたが、

「さぁ、こちらです。
ちょうどバルトロメウス様もいらしてますよ」

「兄さんが？」

馬屋番に促され、今度は進んで馬屋の中に入っていった。

バルトロメウスは、上着を脱ぎ、腕まくりをしてニヨルド号を梳（くしけず）っていた。

時折鬣（たてがみ）を撫でながら、何事か話しかけている。

「王子！　弟君がおいでです！」

馬屋番が声をかけると、バルトロメウスが顔をあげた。

額に汗が浮かんでいる。

「フロリアン。珍しいな。具合はいいのか」

「うん」

ニヨルド号も、ブルルと鳴いて挨拶をする。

バルトロメウスは櫛を棚に置くと、桶の水で手を洗って馬房から出た。

フロリアンの後ろに立つルミエールに気付き、目で会釈をする。

ルミエールも控えめに微笑むと、そんな兄とルミエールの様子をみたフロリアンが、急に手をつないできた。

「フロリアン様？」

「今ね、ルミエールと庭を散歩してきたんだ。

四阿でお茶もしたんだよ。ね、ルミエール？」

「えぇ。とても楽しかったですわ」

フロリアンの弾んだ声に、庭師の話を思いだし、ルミエールもにっこりと微笑み返す。

「明日も行こうね。遅咲きの薔薇が開花するって言ってたから、一緒に見よう」

「そうですわね」

ルミエールより少し背の低いフロリアンは、背伸びをして目線を合わせてくる。

手をつなぎ、顔を近づけて、今にも抱きつかんばかりだ。

急にどうしたのだろう、とルミエールは内心困りながらも、笑顔で話を合わせた。

「楽しみがあるのはいいことだ。体を動かすことも。母上も喜んでいたぞ」

「ふうん。兄さんは？」

「おまえが元気になるのは、俺ももちろん嬉しい。その調子で、励め」

「本当に、僕が元気になっていいの？」

「何？　当然だろう。おかしなことを言う奴だな」

バルトロメウスが、ぽんとフロリアンの頭に手を乗せる。

すると、フロリアンはその手を乱暴に払った。

「子ども扱いしないで」

「あぁ、すまん。つい昔の癖で」

バルトロメウスは、心底申し訳なさそうに詫びる。
フロリアンはきつい瞳で兄を睨んでおり、ルミエールはそんな二人をハラハラしながら見守っていた。

「奥におまえの馬がいる。会って行け」

「わかってる。
ルミエール、さ、行こう。
真っ白の、きれいな馬なんだよ。撫でさせてあげる」

ルミエールとしては、ニヨルド号の様子を見たかったが、フロリアンに手を引かれ、仕方なくついていった。
後に残されたバルトロメウスは、振り返ったルミエールと一瞬視線を合わせたが、すぐに櫛をとってニヨルド号に向き直った。

「なんか、今日のフロリアン様、変でしたよね」

「そうね……」

夕食後、ルミエールがナタリーと一日のことを話していると、部屋

付きの侍女がバルトロメウスの来訪を告げた。

「侍女を介していらっしゃるなんて、明日は雪ですか？」

ナタリーが席を譲りながら軽口をたたく。

「おまえな……」

言い返すかと思われたバルトロメウスだったが、今日はその勢いはなく、勧められた椅子に大人しく座った。

ナタリーがバルトロメウスのためにお茶を淹れる。

沈黙のまま一杯目を飲み干し、ナタリーが二杯目を注いだところで、バルトロメウスはようやく口を開いた。

「今日、ニヨルド号に馬場を走らせてみた」

「どうでしたか」

ルミエールは、緊張して尋ねる。

「良い。まだ以前の通りにとはいかないが、しばらく訓練すれば大丈夫そうだ」

「それはよかった……！」

馬屋番に話は聞いていたが、バルトロメウスから直接様子を聞き、ほっとした。

「おまえのおかげだ。ありがとう」

バルトロメウスが茶器を置き、頭を下げる。
予想外の出来事に、ルミエールも側に控えるナタリーも驚いた。

「あああの、顔を上げてください、バルトロメウス様」

「……」

ルミエールが何度も頼んだ末、顔を上げたバルトロメウスは、照れくさそうに自分の頬をこすった。

「こういうのは、あまり慣れてなくてな。
しかし、礼は言わねばと思って。
あと、頭から魔術を毛嫌いしていて悪かった」

「いえ、そんな……」

「ニヨルド号は、本当にもうだめだと馬屋番とも話していたんだ。
それが元気になった。感謝してもしきれない。
フロリアンも、今日会って驚いた。あれも魔法か？」

「魔術は魔法とは違うのですが……。
フロリアン様には、一晩魔術陣を処方した以外、何もしていないんです。
急にあんなに活発になられて、私も驚きました」

「ほお」

その後、魔術のこと、国のことなどバルトロメウスに問われるままに話し、馬や庭について語り合ううち、あっという間に時間がすぎた。

「遅くまで邪魔したな。
ナタリーだったか。なかなか、茶を淹れるのがうまいな」

「本当に明日は雪かも……」

「人間、誰しも一つくらい取り柄があるということだな」

「前言撤回します。明日もいい天気です」

「ははっ。おやすみ、ルミエール姫」

「おやすみなさいませ」

片手を上げてルミエールに挨拶をし、バルトロメウスは出て行った。

「まったく口の減らない……ルミエール様？　どうなされました？
顔が赤いですよ」

「え、あ、なにかしら。
ナタリーこそ、なんでバルトロメウス様にはそうつっかかるの？」

「うーん、そういえば、なんでしょう。
あの顔を見ると、一言(ひとこと)言いたくなるんですよね」

「あの顔？　まぁ、少しくらい言ったって、全然気にしなさそうな
お顔はなさってるわね」

「気にしないどころか、涼しい顔で受け流して、何十倍にもして返
しますよ」

「うふふ。結構ごつごつしたお顔よね」

「ごつごつ？　そうですね。えらが張ってるというか」

「男っぽい」

「角ばってるだけじゃないですか？　偉そうで、お堅い感じが顔にも出てるんですよ」

「私はふわふわしてるって言われたわ」

「は？　バルトロメウス様にですか？　いつの間にそんな会話を」

「秘密～。
ナタリーはぷにぷにね」

そう言うと、ルミエールはナタリーの頬をつんとつつく。

「うぅ、太ったと言いたいんですか。
確かにこの国（ベルトラン）の食事は脂っこいものが多くて、ヴィルヘルミーナにいたころより太っちゃったんですけど」

「そお？　わからないわ。そうじゃなくて、ほっぺたが柔らかくってかわいいってこと。ここも気持ちがいいわ」

今度は脇腹をつつく。

「ひゃっ。くすぐったいです。やめてください」

「あ、思ったより確かにちょっと……」

つんつんつん。
肉の感触を確かめるように、ルミエールがつつく。

「あぁ、もぅ、だから太ったって言ったじゃないですか！
触っちゃだめ！」

「えぇ～？　いいじゃない。ほら、つまめるわ」

「つままないでください！」

うにっとルミエールがナタリーの脇腹の肉をつまむ。
焦ったナタリーが必死に抵抗するが、ルミエールは楽しそうに腹や背中をつつき続けた。

「あっ、やぁんっ、そこ、だめです」

「あっちもこっちも、柔らかくって気持ちがいいわ」

つんつんつん。
つんつんつん。
くすぐったがって身をよじるナタリーにはおかまいなしだ。

「く～、明日から減量（ダイエット）します！
しますから、もうやめてください～！！！」

夜更けまで大騒ぎした主従は、次の日二人そろって寝不足だった。
ルミエールはともかく、ナタリーは部屋付きの侍女《先輩》に少し怒られた。

曰く、主人の体調管理も侍女の仕事のうちなのだから、あまり遅くまで起きているような状況を作ってはいけませんよ、と。
ナタリーよりもずっと年上の彼女は、ベルトランに来た時から親切にいろいろ教えてくれた。
姉のように母のように感じ、ナタリーも素直に言うことを聞いている。

「ところでナタリー」

「何？」

先輩侍女が、声を潜めて聞いてきた。

「ルミエール様は、バルトロメウス様とフロリアン様のどちらがお好きなの？」

「えぇ！？」

聞けば、城内の侍女たちの間では、ルミエールがどちらを選ぶかというのが今一番の関心ごとだという。
ルミエールは１８歳。
バルトロメウスは２２歳だそうだ。
フロリアンは１４歳だと聞いているから、ずいぶん年の離れた兄弟だ。
国王夫妻も、遅くにできた子だからかわいくて仕方なく、つい甘やかしてしまったのかもしれない。

「普通に考えればバルトロメウス様だけど、フロリアン様とだって４歳差でしょう？
ないわけじゃないじゃない。

会ってる頻度ではフロリアン様が有力よね。昨日も仲睦まじく手をつながれていたとか」

「そうだけど……」

「でも昨夜のバルトロメウス様とのご様子じゃわからないわ。あぁ、おもしろくなりそう……！」

おもしろいって、あのね……。

うきうきと予想をする侍女を横目に、ナタリーは溜息をつく。

侍女たちにはそう詳しく話してあるわけではないが、ルミエールはヴィルヘルミーナの女王だ。

行く行くは国を再興し、婿をとって子を成さなければならない。

その婿とて、できれば術資質の高いものがいい。

全く魔術を使わないベルトランの民など、問題外だ。

ん？　でもそういえば、とナタリーは思い当たる。

ヴィルヘルミーナの秘術に関しては、ルクシールが落城の際に封じていた。

必ずしも、女王が継いで術を継承していく必要はなくなったのだろうか。

ヴィルヘルミーナが女王制をとっているのには諸説あるが、最も説得力があるのは、女王が生んだ子は確実に女王の子だから、というものだ。

王が男性で、他の女に子を産ませた場合、もしも女が複数の男と関係していたら、本当に王の子であるかどうかは女本人にすらわからない。

魔力と術資質と血が問われるヴィルヘルミーナの継承式では、ヴィルヘルミーナの血を持たないことは、即刻死につながる。

王が女性であれば、子の父親が誰であれ、血は受け継がれるのだ。

「ルミエール様のお相手、か。
マクシミリアン……。あんた、どこ行っちゃったの……」

今なら、もしかしてもしかすれば、想いがかなうかもしれないのに。
生きているかどうかも分からない、たぶん生きてはいないのだろうと思うけれど、そう信じたくはない幼馴染を思い浮かべ、ナタリーはまた溜息をついた。

それからしばらく、ルミエールはまたフロリアンに会えなくなった。
一緒に庭を散歩した次の日から、熱を出したという。
実は、フロリアンは外出するようになったとはいっても、まだ庭で庭師と少し話をするくらいしかしていなかったらしく、先日ほど長い時間外にいたことはなかったそうだ。
ルミエールは、自分が馬を見たいと言ったからだと責任を感じ、お見舞いに行こうとしたが、断られた。
魔術による治療も、やんわりと止められた。

「俺じゃないぞ。フロリアン自身が嫌がっているんだ」

そう告げるのは、ルミエールと三日に一度ほどお茶をするようになったバルトロメウスだ。
場所は、はじめの頃こそルミエールの部屋だったが、だんだんと、中庭だったり本庭を見下ろせるバルコニーだったりするようになった。
バルトロメウスの部屋に招かれたこともある。

最近の侍女たちの噂では、やっぱり第一王子が本命、ということになっている。
今日は久しぶりに、ルミエールの部屋で午後のお茶を楽しんでいた。

「そうですか……。
お見舞いもさせていただけないなんて、残念です」

「そう気に病むな。好きな女に情けない姿を見せたくないのだろう」

「好き？」

「違うのか？」

「フロリアン様が私を、ということですか？」

「そうだな」

「まぁ、光栄ですわ」

にこにこにこ。
嫌われて見舞いを断られているわけではないのか。
安心したルミエールは、機嫌よくお茶を口に運ぶ。

「バルトロメウス様、だめですよ。
ルミエール様はものすんごくにぶいんです。
どうせ姉のように慕われてるとかなんとか思って、にこにこしてらっしゃいます」

「姉？」

「なによ、ナタリー。違うの？」

「ほらね」

「むぅ」

好きは好きでも、家族のような愛情。
ルミエールが思っているのは、その“好き”だ。
バルトロメウスやナタリーが思うのとは違う。

「私、ずっと弟が欲しかったんです。
一人っ子で育って、兄のような存在や妹のようなナタリーも側にいてくれましたけど、兄弟は多いほうがいいですよね！
フロリアン様はかわいい弟ができたみたいで、うれしいです」

「あたし、妹ですか？
どっちかっていうとルミエール様の方が頼りないような……」

「ちょっと、ナタリー？」

「弟。そうか、では噂通り俺でも……いや、しかし、父上の思惑通りになるのは……」

「噂？」

「いや、では俺は兄か？」

バルトロメウスは、何気なく口にしたつもりだった。
年の順で言うなら、妥当だろうと。
元々冗談の上での話だ。軽く「そうですね」と帰ってくるだろうと

思ったが、バルトロメウスの予想に反して、ルミエールはじっと考え込んでしまった。

「え、兄。バルトロメウス様が私の」

「ルミエール様？」

「兄っていうのとは違うような……。
でもお父様でもないし」

バルトロメウスが、ぶっとお茶を吹きかける。
お父様？　そんな年じゃないぞ、とでもいいたげな顔だ。

「やっぱり兄なのかしら。
バルトロメウス兄様？　長いわね。
バルト兄様？」

どうかしら、というように、ルミエールはバルトロメウスを見つめて小首をかしげる。

「うっ……」

「バルト兄様。ね、いいかもしれません」

小さな白い顔を彩る金の髪が揺れ、青紫（バイオレット）の瞳が期待に煌めいた。

「ね、兄様。ルミエールを妹にしてくださいます？」

「おまっ……。
うっ、くっ……。まぁ、いい。しかし人前で兄と呼ぶのはやめろ」

「そうですわね。ではお茶会のときだけの兄妹ごっこということで。普段は、そう、バルト様でよろしいかしら」

「うむ」

「バルト様、バルト様……」

「なんだ」

「練習しているのですわ。間違えて兄様と呼ばないように」

「……はぁ……。ナタリー、俺はどうすればいいんだ」

「あはは、あきらめてください。ご同情申し上げますよ」

「他人事だと思って」

「弱り顔のバルトロメウス様を見ているのも楽しいですからね」

疑似兄妹ごっこがすっかり気に入ったルミエールは、バルトロメウスとお茶をするたびに彼を兄と呼び、親しげに接した。

ナタリーは、そんなルミエールを見て、痛々しく感じる。

ルミエールが言った“兄のような存在”。

それはナタリーにとってもルミエールにとっても、大切な幼馴染のこと。

彼の代わりは、決していないのだ。

バルトロメウス様は、きっとルミエール様のことがお好きなんだわ、とナタリーは思う。

兄と呼ばれ弱りながらも、ルミエールにつきあっているのがその証拠だ。
衆目の前で“バルト様”と愛称で呼ばれた時には、見ていて恥ずかしくなるほど嬉しそうにしていた。
あんな顔、出会ったころには想像もできなかった。

ルミエールは、この国で居場所を見つけつつある。
でも、あたしは……？

ヴィルヘルミーナについての情報は、一向に届かない。
国王夫妻が調べてくれていると言うが、こんなに時間がかかるものなのだろうか。
もしや、何者かが邪魔をしている？
情報はあっても、悪い事柄ばかりで、教えてもらえない？
いっそのこと、一人でヴィルヘルミーナに帰ってみようか。
ナタリー一人なら、いくらでもごまかして旅をすることができる。
そうだ、そうしよう。
ルミエール様のことは、バルトロメウス様にお願いしして、一度国に帰ってみよう。
ナタリーがそう決心して、主に申し出ようとしていたその矢先―

「フロリアン様が、謀反の疑いで捕まった？」

ルミエールからのお見舞いの花を預けようとしたナタリーに、先輩の侍女が驚愕の知らせを告げた。

「フロリアン様が！？」

ナタリーから聞いたルミエールも、驚きのあまり言葉もなかった。
国王夫妻は健在で、兄もいる中、１４歳のフロリアンが謀反とは、一体どういうことなのか。

「詳しいことは、あたしもわからないんです。
体調を崩されて、臥せっていたはずですし」

「そうよね。
あぁ、無理にでもお見舞いに伺って、お話をお聞きすればよかったかしら」

花や手紙を贈るだけでなく、直接顔を見て話をすればよかった。
そうルミエールが口にしたとき、部屋の扉が音もなく開かれた。

「その役、今からでも頼めますか？」

「王妃様！」

王妃によると、フロリアンの謀反は疑いようもなく、いくら実子であっても監禁せざるを得なかったという。

「監禁……。それで、フロリアン様は今どちらにいらっしゃるのですか？」

「地下牢です」

「……！」

王子である彼が地下牢に！？

監禁とはいっても、自室に見張りがついている程度だと思っていた。

「フロリアンは、兵を集め、諸国から魔術士を呼び寄せていました。密告があり、未然に防ぎはしたのですが、父と兄を殺害し、自分が王たらんとしていたそうです。

なぜそんな無茶をしようとしたのか……。誰が尋ねても、一言もしゃべりません」

「それで、なぜ私に……」

「牢番が、言ったのです。

夜中、たった一度だけ、あなたの名をつぶやいた、と」

「！」

ルミエールは知らなかったが、フロリアンが投獄されたのは一昨日だという。

その間、国王が訪れても王妃が訪れても、何も話さなかった。

バルトロメウスにはまだ知らせていないという。

「弟思いの子です。

自分を殺そうとしたと知ったら、どんなに傷つくでしょう。

フロリアンは誰かに騙されたのではないでしょうか。
ルミエール姫。あの子を訪ねて、真実を聞きだしてください！」

王妃の悲痛な叫びに胸を打たれ、ルミエールはフロリアンを訪ねることにした。
ナタリーを従えて地下牢への階段を降りる。
次第に日の光が届かなくなる回廊を、蝋燭を片手に進む。
最下層まで降りると、重苦しい鉄の扉があった。
槍を持った牢番が、二人を出迎える。

「ここから先はルミエール様お一人でお願いします」

「そんな！　あたしも行きます」

「ルミエール様お一人でお願いします」

「ルミエール様に何かあったらどう責任をとるつもり！？」

「中に他の牢番がおります。
ルミエール様お一人でお願いします」

ナタリーが食い下がるが、牢番は同じ言葉を繰り返すだけだ。

「いいわ。一人で行きます」

「でも、ルミエール様！」

「大丈夫。相手はフロリアン様だもの。無体なことはなさらないわ」

フロリアンだから不安なのだ。

ルミエールは、我が儘放題のフロリアンの所業を知らない。
ナタリーが噂に聞き、ルミエールに伝えていないことがいろいろあるというのに。

ギィ……
鉄の扉が、耳障りな音を立てて開く。
中から、湿った空気が流れてきた。

地下牢は、岩をくりぬいて作られたようで、周囲の壁は一続きになっていた。
岩の間からは水がしみ出し、冷たい床を濡らしている。
三つほどある房は、大きな岩を積み重ねた壁で仕切られ、それぞれ太い鉄の柵がついている。
換気口にも鉄格子がはめられていた。

真ん中の牢の奥、壁に据え付けられた蝋燭の光の届かぬ場所に、毛布にくるまりうずくまる人影があった。
ルミエールはおそるおそる話しかける。

「フロリアン様……？」

びくっ
人影が動いた。

「フロリアン様。ルミエールです。大丈夫ですか？」

「ルミエール？」

毛布をかぶった人影が、のっそりと立ち上がり、ふらふらと鉄柵に近付いて来た。
ルミエールも歩み寄ろうとするが、牢番が間に立ちはだかったため、あまりそばには寄れなかった。

「ルミエール」

毛布から白い手が覗く。
いや、白いのは手ではなく、手袋だった。
確か庭の散歩をしたときも、フロリアンは手袋をしていた。

「ルミエール」

鉄柵の間から、フロリアンが手を伸ばす。
その手を握ろうとして、牢番に止められた。

「姫様、あまり近づいてはいけません。
お話だけになさってください」

「でも……」

牢番の肩越しにフロリアンを見る。
フロリアンは浮いた手で鉄柵を握り、下を向いてしまった。
頭からすっぽり毛布をかぶっているため、顔は見えない。

「ルミエール」

突然、フロリアンがぐんっと両手で鉄柵をひっぱった。
しかし頑丈な鉄柵はびくともしない。

「ルミエール、ルミエール」

フロリアンは、涙声になって何度も何度もルミエールの名を呼ぶ。
牢番の背中越しにそんなフロリアンを見つめるルミエールは、せつなくなって、もう一度手を伸ばした。
フロリアンも、ルミエールの動作に気付き、手を柵の間から伸ばしてくる。

「ルミエール」

「フロリアン様」

「いけません」

あと少しで指先が触れる。
そう思った時、牢番の手が、二人の間を遮った。

「ルミ……」

「姫様、お下がりください。お話だけになさっ……ひぐっ」

フロリアンは、ルミエールの手の代わりに牢番の手を引き、勢いよく引っ張った。
フロリアンより一回りも二回りも体格のいい牢番が、軽々と宙を飛び、柵にぶち当たった。

「おまえ、邪魔するな」

フロリアンが手を離すと、牢番はがくっと床に崩れ落ちた。
手足が痙攣し、口からは泡を吹いている。

「フ、フロリアン様？」

「ルミエール。邪魔者は消えたよ。こっちにおいで」

フロリアンが手招きする。

ルミエールの背中をぞくりと悪寒が走った。

「ルミエール？　どうしたの？」

ちょっと待て。

こんな力が、彼にあるはずがない。

目の前の人物は、本当にフロリアンなのか。

「フロリアン様。あの、私、お話をしにまいりましたの。
お顔を見せていただけませんか？」

「……いいよ」

あっさり毛布を脱いだフロリアンは、顔色が少々悪いものの、ルミエールの知るフロリアンだった。

しかし、その瞳が、暗い。

とても１４の少年がする表情ではない。

視界の隅には、動かなくなった牢番。

ルミエールは、思わずヴィルヘルミーナに昔から伝わる守護のまじないを唱えた。

魔術というほどのものではない。

暗がりを怖がる子どもを安心させるために、母親が唱えるようなもの。

「「ルミエール？」」

すると、フロリアンの声が二重に聞こえた。
輪郭がぼやけ、不確かな存在が重なる。
蜂蜜色の髪には白いものが混じり、薄青の瞳は、何ものも映さない深淵の黒へ。
目元や口元には、皺がよって見える。

どこかで見覚えのあるその顔は……。

「ザイル……！」

「！」

言ってから、しまったと思った。
気付いていないふりをすることもできたのに。

「くっ……くっくっくっ……。
ふはははははははは！
こんなに早く気付かれるとは。
あなたを甘く見ていたようですね」

「な、何、どういうこと！？　フロリアン様は！？」

「私がフロリアンですよ。
今、ちょっと体をお借りしてましてね」

フロリアンに重なったザイルが、手袋をとった。
華奢な手の甲には、禁術の一つである傀儡（くぐつ）化の魔術陣が描かれていた。

「なんてことを！」

「別に無理矢理描いたわけじゃないんですよ。
この王子がね、自ら望んだんですから」

「そんなわけないでしょう！　フロリアン様から離れなさい！」

「ふふ、まぁ、知らぬは本人ばかりなり、ということですかね」

フロリアン（ザイル）が鉄の柵に手をかざす。
すると、あんなに頑丈だったはずの柵が、ぐにゃりと曲がって溶け落ちた。

「ヴィルヘルミーナだけでなく、この国（ベルトラン）まで滅ぼそうというの……？」

フロリアン（ザイル）が一歩、牢から進み出る。
ルミエールは気丈にふるまいつつも、足が震えるのを止められなかった。

「いいえ。
魔術のかけらもないこんな国に興味はありませんよ。
私が求めるのはただ一つ」

「な、何？」

また一歩、フロリアン（ザイル）がルミエールに近付いて来る。
ルミエールは震える足を叱咤して、ザイルとの距離をとる。

「ふっ……。ルミエール女王、あなたですよ。
ヴィルヘルミーナの地下に眠る秘術は失われましたが、あなたの体に継承された秘術はまだ生きている。
さぁ、その体をよこしなさい！」

ぶわっとフロリアンの体からザイルが飛び出した。
フロリアンがどさりと床に崩れ落ちる。
恐ろしい勢いでルミエールに迫りくるザイルの体は半透明で、後ろの壁が透けて見えていた。

「何を！　やめて！！」

ザイルがルミエールにのしかかる。
とっさに、ルミエールは術を使おうとした。

「無駄ですよ。
私がただここに囚われていたとお思いですか。
私以外の者の術は無効になるようにしてある。
まぁ、さきほどの術とはいえないような代物にはしてやられましたが」

実体のないはずの、ザイルの右手が肩にくいこむ。
手甲？　違う、義手だ。
ヴィルヘルミーナのあの湖のほとりで、最後にザイルを見たとき、確か腕から血を流していた。
あのあと、その腕を失ったのか。

ザイルの義手が、ルミエールの服を引き裂く。
白い肌が露出し、爪がかすった後に血が滲んだ。

「いやぁ、誰か！　誰か助けて！
ナタリー！　母様！
……マクシミリアン……！」

髪を振り乱し、なんとか逃れようとするルミエール。
ザイルは左胸のふくらみに爪を立てると、ぎりぎりと傀儡の魔術陣を刻みはじめた。
焼けるような痛みが胸を襲う。

「いやあああぁぁぁぁぁ！！！！」

「ルミエール姫！」

「ルミエール様！」

もうだめ……ルミエールがそう思ったとき、バルトロメウスとナタリーが飛び込んできた。

「大丈夫か！
ナタリーが知らせに来たんだ。
母上め、何かこそこそやっていると思ったら……。
ハッ！」

バルトロメウスが、ルミエールを押し倒すザイルに気付き、剣を投げる。

「ちっ」

剣を避けたザイルは、牢の奥に飛びのいた。
暗がりに姿が消える。

バルトロメウスは剣を拾って、ザイルを追った。
ナタリーは、よろよろと身を起こすルミエールの横に膝をついて、背中を支える。

「ルミエール様！　あぁ、なんてこと！　美しいお肌に傷がっ」

血のにじむ肌を手巾で押さえ、ナタリーは手早くルミエールの衣服を整える。
ザイルを見失ったらしいバルトロメウスが房から姿を現し、倒れていたフロリアンを抱き起した。

「フロリアン！　しっかりしろ！」

「う……、兄さん……。ここはどこ？　僕、どうしたの？」

「なぜ王子のおまえが地下牢（こんなところ）に……
くそっ、父上も母上も俺に一言もなく！」

フロリアンの弱り切った様子に、バルトロメウスは膝の下に腕を入れて抱き上げようとする。
それに気付いたルミエールが、鋭く声をかけた。

「バルト様、待って！！」

にやり
フロリアンの顔が、歪んだ。

「馬ァ鹿」

ざしゅ！

フロリアンの懐中刀が、バルトロメウスの脇腹を貫いた。

「ぐっ……」

抱きかけたフロリアンを突き飛ばし、バルトロメウスが傷口を押さえる。

指の隙間から血が滴った。

「くっ……フロリアン、なぜ……」

「だって僕、兄さんのことが嫌いだもの。
なんでもできて、なんでも手に入って。
ルミエールまで僕からとるんだ」

「フロリアン、そんな……。おまえが望むなら、俺は……」

「望むなら、なぁに？
ルミエールを僕にくれる？」

「それは……」

「だめ？　じゃぁ兄さんの体でもいいよ。
ねぇ、手の甲を出して？」

「いけません、バルト様！
それはフロリアン様であって、フロリアン様ではありません。
ザイルという魔術士が、フロリアン様の体を乗っ取っているんです！」

「な……ルミエール姫？　それはどういう……」

ルミエールを振り返ろうとしたバルトロメウスだったが、傷が思いのほか深いのか、うっと息をつめて膝をつく。

「余計なことを。もう少しで第一王子も傀儡にできたのに。
まぁ、いい。
私はあなた(ルミエール)の体さえ手に入ればいいんですからね」

うずくまるバルトロメウスの前を、悠々と歩いてルミエールに近付くフロリアン(ザイル)。
ナタリーは、がたがたと震えながらも、必死にルミエールを背にかばおうとする。

「うぅ……待て……」

バルトロメウスが、力を振り絞って、フロリアンの脚めがけて剣を払う。

キィィィン！

フロリアン(ザイル)に触れる直前、甲高い音がして剣が折れた。

「何……ベルトランの名工が打った剣だぞ」

「そんなただの剣に私の術が破れるわけはありませんね」

フロリアン(ザイル)がひょいと左手を振る。

「！」

バルトロメウスは見えない何かにはじきとばされ、牢の壁にぶつかった。

「バルト様！」

「さぁ、ルミエール、体をよこしなさい。
今こそヴィルヘルミーナの秘術を我がものに！」

「そう、は、させる、か」

折れた剣を杖にして、バルトロメウスが体を起こす。
額には脂汗が浮き、脇腹から浸み出た血が腰から下を濡らしていた。

「あぁ、バルト様……。
それ以上動かれてはいけません」

ナタリーと握り合ったルミエールの手は、力を籠めすぎたため血の気を失い、冷えて震えている。

「他人（ひと）の心配をしている場合ではありませんよ」

フロリアン（ザイル）が、勝利を確信し歓喜の笑みを口の端にのせる。
息がかかるほどルミエールに近付くと、蝋燭の光をうけて鈍く光る金の髪を一房とって、唇を寄せた。

「私が欲しいのは秘術ですからね。
術を奪い取った後は、その身体、可哀想なフロリアンにでも差し上げましょう」

「あぁ……」

「ル……ミエール姫！」

ルミエールの瞳がきつく閉じられる。
ナタリーは、ぎりっと唇を噛み、フロリアン（ザイル）を睨みつける。
バルトロメウスは、大量の血液を失って力の入らない四肢と折れた剣を、絶望的な思いで交互に見やった。
せめて、せめて奴に一矢報いることのできる武器があれば……！

そのとき。

「王子！　これを！」

見知らぬ若い男の声とともに、換気口から一振りの太刀が降ってきた。
細身の優雅な剣は、魔術の心得のないバルトロメウスでさえわかるほどに、聖なる輝きをまとっていた。
反射的に柄を握ると、体が軽くなり、傷がふさがった。
得物を手にしたバルトロメウスは、フロリアン（ザイル）に切ってかかる。
先ほどは触れる寸前で弾き飛ばされた剣が、術を切り裂き、ザイルに届いた。

「ぎぃやあああぁあぁぁぁぁ！」

魔術士がフロリアンの体から抜け出る。
不思議の剣はザイルのみ切り裂き、フロリアンは、服一枚すら切れていなかった。

「そ、その剣……なぜここに……」

切られた背中をかばいながら、ザイルが牢の入口に向けて逃走をはじめる。
剣の威力を知ったバルトロメウスが、大股で踏み込んで一閃した。
魔術士の首が飛び、血しぶきが上がった。

断末魔の叫びが牢にこだまする。

首を失った魔術士の体が、ゆっくりと倒れていくのを、ルミエールはただ見つめていた。
床に血だまりが広がっていく。
血(それ)の色が、赤いことが不思議だった。
こんな、人を人とも思わぬ所業をした輩の血が、自分たちと同じ赤色をしているなんて。

「ルミエール様。
ルミエール様！」

ナタリーに呼びかけられて、はっと我に返った。
お互いにしがみつき合う形になっていたナタリーが、そっと体を離す。
心細く感じたルミエールがすがろうとすると、

「お相手が、違うようです」

と突き離された。
宙に浮いた手を、しっかりとつかんだのはバルトロメウス。

「大丈夫か、ルミエール姫」

「バルト様……」

ルミエールの頬が涙に濡れる。
ナタリーが抱き合う二人を複雑な表情で見守っていると、背後でがたんと音がした。
換気口の鉄格子がはずされ、人影が滑り込んできた。

「あんた、マクシミリアン……！」

「ナタリー、久しぶりだな。遅くなってすまない。
ここに忍び込むのに手間取って……あー……、俺、いろんな意味で本当に遅くなってしまったみたいだな……」

マクシミリアンの目線の先には、バルトロメウスの腕の中に納まったルミエールがいた。
額に手の平をあて、がっくりとうなだれるマクシミリアン。

何か月も待って。
もう死んでいるのかと思って。
あの剣を見て、もしかしたらとは思ったけど。
ようやく再会して、そこで落ち込むの？

「馬鹿！」

ナタリーが幼馴染に飛びつく。
油断したところに、いきなり全体重をかけられたマクシミリアンは、一歩よろめいて耐えきれず、尻もちをついた。

「おまえ、太った？」

「ううう、うるさい！　あんたの鍛え方が足りないのよ！！」

騒ぐ二人に気付いたルミエールが、また新たな涙を流す。

「マクシミリアン！　よかった……」

バルトロメウスの腕をするりと抜けて、駆け寄ってくる。

ナタリーもマクシミリアンも、幼い頃からそうしてきたように、ルミエールのために片方ずつ腕を広げた。

ぎゅうぎゅうとだんごになって抱き合う三人を、苦い顔で見つめるバルトロメウス。

「あいつがマクシミリアン？
さっきルミエール姫が口にした男（やつ）か。
一体どういう関係だ……」

この後、バルトロメウスは、仲の良すぎる三人の関係にしばらく頭を悩ませることになる。

あれから十年。

魔術士に体を使われた後遺症か、自我を手放してしまった第二王子を引き取って、国王夫妻が隠居した。

後を継いだ第一王子が、ベルトラン国王となった。
若き王の隣には、金髪の美しい女性。
ヴィルヘルミーナの女王は、ベルトランの王妃となった。

結局祖国（ヴィルヘルミーナ）は国土のほとんどが水に沈み、再興はかなわなかった。
ナタリーも、紆余曲折ありながらマクシミリアンと結婚し、娘を産んだ。
そして今日、ベルトランに姫君が生まれた。
すっかり父親の顔になったバルトロメウスが、ゆりかごに眠る赤子を見て目を細める。

「ルーテウス、と言うのはどうだ。“黄金”という意味だ」
「黄金（ルーテウス）。ヴィルヘルミーナ風に言うとルチノーね。“光り輝く”という意味だわ」

出産という大仕事を終えたばかりのルミエールは、人生で一番の幸せをかみしめながら夫と我が子を優しく見つめる。

「ルチノー。
うん、いいわね。この子の名前はルチノーよ」

「ルーテウスだぞ」

「ルチノーだっていいじゃない。ルーテウスじゃ、男の子みたいよ」

「いいじゃないか。燃えるような見事な金髪にぴったりだ」

ルミエールが生んだ姫は、母親譲りの美しい金色の髪に、父親に似た薄い青色の瞳をしていた。

幸せな二人に魔の手が伸びたのは、それから2年後のこと。
ヴィルヘルミーナの滅亡時に、ルクシールの術で手練れを失ったフィダーイーが、態勢を立て直し、“ヴィルヘルミーナの王族を根絶やしに”という依頼を遂行するためルミエールの命を狙ってきた。
バルトロメウスは全力でルミエールと我が子を守った。
しかし、結果として再びフィダーイーの手によって一つの国が滅ぼされた。

「はぁっ、はぁっ、はぁっ」

夜半、複雑な路地を、幼子を抱えた赤毛の女がひた走る。
２０代後半くらいだろうか。
そばかすの残る頬は、焦りのため引きつっていた。

「どこか……どこかにルチノー様を隠さなくては」

たどり着いたのは一軒の孤児院。
扉は固く閉じられていたが、玄関の横に子どもを預けるための小窓があった。

女―ナタリーは、迷いなく小窓を開け、子どもを中に入れた。
窓を閉めると内鍵が降りる音がし、リンゴーンと鐘の音がした。
ヴィルヘルミーナにはなかったが、他の国では捨て子が多く、以前孤児院の前に捨てられた赤子が発見が遅れて死んでしまったことがあり、それ以来、“命のゆりかご（カル・パ・ラ・ヴィータ）”と言われる小窓がつけられるようになったという。
この孤児院でも、命のゆりかご（カル・パ・ラ・ヴィータ）を採用しており、さらにさきほどの鐘の音（ね）によって、孤児院の者が見に来てくれるだろう。

ほっと一息ついたナタリーは、次は自分の身を隠すべく、足を返す。
夜明けまで逃げ切れば、マクシミリアンと合流できるはずだ。
急ぐナタリーの背後に黒い影が迫る。

「女！　子どもはどこだ！」

あと少しというところで、路地に追い詰められた。
こいつらがやってきたということは、ルチノーの身代わり（フィダーイー）においてきた我が子はすでにこの世にはいないか。

こんな母親でごめんね……。
命の灯（ともしび）が消える瞬間、ナタリーの頬を一筋の涙が伝った。

ルミエール様……。

マクシミリアン……。

ルチノー様、どうかご無事で……。

「ナタリー！　ナタリー！！」

朝焼けに染まる町に、マクシミリアンの叫び声が響く。

「俺は、また遅かったのか……。
はっ、今度の遅刻は取り返しがつかないな……」

「いらっしゃいませ！」

夕方の菓子店に、一組の男女（カップル）が入ってきた。
背の高い男性は、街を歩けば十人中九人は振り返るだろうと思われる美丈夫。
隙のない物腰が、なかなかの使い手と見て取れる。
連れの小柄な女性は、つばの広い帽子を目深にかぶり、男性の後をひっそりとついてきた。
しかし店内に自分たちしかいないとわかると、うきうきした様子で

菓子を眺めはじめた。

「今日のおすすめはなんだい？」

入口を視界の隅に納め、連れの女性を守るかのように立った男性が、軽い調子で話しかけてくる。

「うちは全部おすすめですよ、なんてね」

これまで何人もの客に言ってきた台詞を口にした菓子店の店主は、男性の視線の先にいる女性に、自然と目をやった。

すると、品物に影を作る帽子を、わずらわしそうに持ち上げながら菓子を選ぶ姿が目に入った。

「あ、ん。これ、邪魔」

「帽子、とればいいじゃないか。誰もいないし」

「そうね」

男性に促されて、女性が帽子に手をかける。

さらりと流れた髪は、若い女性には珍しい白。

同じ色の長い睫に彩られた瞳は、紅玉のような赤色をしていた。

「……！」

店主の目が、驚愕で見開かれた。

「髪の色のことなら言ってくれるなよ。彼女はとても気にしている」

男性が、そっと店主に言う。

色？

色がなんだというのだ。

その瞳。

その唇。

その姿かたちのすべてが、彼の人を思い起こさせる。

あぁ、ルミエール様……！

「奥様の、お名前は？」

喉が、干上がる。

店主は、なんとか男性との関係を聞きだし、確証を得るべく名を訪ねた。

しかし、突然すぎたのか、男性の瞳に不審げな色が宿る。

「初めてお越しいただいたんですよね、これからもご贔屓にしていただきたいので、お名前入りのお菓子をおまけしますよ」

営業用の笑みを浮かべ、とっさに口から出まかせを言った。

男性は感心した様子でペンを受け取る。

差し出した紙に、さらさらと書かれた名は“ルチノー”。

おお、神よ。
姫君は生きておられた……！

「どうしたの？　父さん」

客が出て行った先を呆然と見つめる店主に、奥から出てきた娘が声をかけた。
若い娘らしく頭の高いところで結わえられた髪は赤。
頬にはそばかすが浮いている。
ナタリーの忘れ形見だ。
王女の身代わりとなった我が子は、偽物とわかった瞬間、暗殺者（フィダーイー）の標的からはずれた。
子どもの首をひねる間も惜しむほど、奴らが急いていたのは幸いだった。

「懐かしい人に会ったんだ」

「昔の知り合いかなんかが来たの？」

「知り合い……。そうだな。
なぁ、アンナ。おまえに父さんの初恋の人って話したことあったかい？」

「初恋ぃ？　母さんじゃないの？
やっだー！　何なに？」

父の恋愛話（コイバナ）と聞いて、興味津々の娘に苦笑する。

「夕飯食べながら話そう。
今日はもう店じまいだ」

「いいの？　ずいぶん早いね」

「あぁ」

ご機嫌になったアンナが、店舗と一続きの自宅に戻る。
店主は、店先に“閉店《ＣＬＯＳＥＤ》”の札を下げた。

「今日は特別うまい酒になりそうだ。
なぁ、ナタリー」

かつてヴィルヘルミーナの宮廷騎士として一国の存亡に関わり、今は老舗菓子店の店主となったマクシミリアン＝アドルフ＝バルデスは、あの日の朝焼けにも似た夕方の空を見上げてつぶやいた。

ヴィルヘルミーナの最後の女王？（後書き）

外伝はこれで終わりです。
つじつまの合わないところなどありましたら、ご意見いただけたらと思います＾＾；
次回から本編に戻ります！

9　さらわれた王子

ルゥと王子（ジェラール）が消えてから三日が過ぎた。
王子誘拐となれば大事件だ。
親衛隊を中心に、秘密裏に捜索部隊が編成された。
俺もその一員として動いてはいたが、部隊が探しているのはあくまでもジェラール王子。
白猫（ルゥ）のことなど、皆知らないか忘れている。
俺一人、違う焦燥感に駆られていた。

「なんだこれは」

「休暇願です」

朝一番で訪れた親衛隊長室で、俺は一週間の休暇を願い出る書類を差し出した。
外交問題がからんでいたら迂闊には動けないということで、城では会議が開かれている。
そのため、今日の午前中は隊舎で待機だそうだ。
ルゥが攫われたと言うのに、待機だと？
そんな悠長な指示になど従っていられない。

「この忙しい時に何を馬鹿なことを言っている。
却下だ、却下」

コスティ隊長は、ふんと鼻をならすと、俺の休暇願を指先ではじきとばした。

「ではこちらで」

休暇はどうせだめだろうと、あらかじめ用意しておいた除隊願を隊長の手に押し付けた。

「はぁ？

あ、おい、待て。

待て、カール！」

隊長の静止の声には答えずに、俺は隊長室を後にした。

「辞めたぁ？」

隊長室を出ると、まっすぐエメの部屋に向かった。

この女魔術士を頼るのは癪だが、他に当てはない。

「あぁ」

「隊にいたほうが情報が入るんじゃないの」

話しながらも、エメはずっと水を張った銀盤を覗き込んでいる。

「そう、だが」

「いてもたってもいられないってやつね。

んで、私に何の用？
情報を流せとでも？」

ようやく顔を上げたエメと視線を合わせ、黙ってうなずく。

「ま、いいでしょう。
わかっていることは、リックに害意のある者は城内から出られなかったんだから、別の目的のある者が入り込み、王子とルチノーちゃんを攫って逃げたってことよね」

別の目的。
王子が目的なら、一緒に連れ去られたであろうルゥは余計な荷物になる。
ルゥが目的なら、ルゥ自身に危害が及ぶ。
どちらにせよ、早く見つけてやらねば。

「実は、それらしい者が街道を出たって目撃情報があるわ。
それが確かなら、ルチノーちゃんも王子も城下町にはいないわね」

エメがまた銀盤を覗き込む。

「水鏡（これ）で見つかるかと思ったんだけど、白い靄がかかったみたいになって、何度やっても映らないのよ。
時々おぼろげに見える景色から、なんとか居場所を特定したいんだけど、そのためにも」

にやり。
女魔術士が不敵に笑う。

「思い通りに動いてくれる手足が欲しいところだったのよね」

手足だと？
偉そうな態度に腹が立ったが、なんと言われようとも、ルゥを見つけ出すまでは我慢せねば。
むっつりと黙り込み、腕組みをする俺に、エメは笑みをひっこめる。

「言い返しもしないの？
つまらないわね。
これまでに見えた場所を記したものがあるから、見てちょうだい」

エメが広げた羊皮紙には、三日間の時間ごとの景色が記されていた。
彼女なりに、探していたらしい。

「レンガ造りの家々、木、店、砂利、林、森・・・。
ここでたぶん城下町を出ているわ。
移動手段も変わったかも。
そのあと、これは西に移動しているかしら。
王子とルチノーちゃんが一緒に連れ去られたとして、三日で移動できる距離とすると・・・」

エメが地形図を広げて、記録と照らし合わせる。

「・・・で、ここでこう行ったとして、この花はこの辺りに多く自生しているから・・・」

手がかりは、エメが見えたという建物や動植物の特徴だけだ。
俺の持つ双子石とも、今回は反応しない。

「私が飛んで探せば早いんだけど、おかかえ魔術士なんて立場だからおいそれと動けないの。

今言った経路（ルート）を馬で辿ってくれる？
あなたのことなら水鏡で見えるから、違っていたら連絡するわ」

連絡？
どうやって？
俺の疑問を察してか、エメがなにやらごそごそ探し始めた。

「えぇっと、確かこの辺に前作った通信用の魔術具が」

そんなものがあるのか。
魔術に頼るのは嫌だが、この際、好き嫌いは言っていられない。
己の体と剣一つで生きてきた者たちにとって、魔術はあまり好まれない。
俺も、エメをいまいち好きになれないのは、彼女自身と言うより魔術への不信感があるからだ。
ルゥと出会ってから、ずいぶんと魔術が身近なものになり、ルゥが魔術の練習をするのも温かく見守ってはいたが・・・。

エメに、複雑な文様が描かれた球体の嵌（はま）った指輪を渡される。

「それ、ずっと使ってなかったから、月の光に一晩あてる必要があるんだけど。
今から出る？　そうよね。
じゃ、今晩どこかで野営したときに外に出しておいて。
くれぐれもなくさないように」

エメの手には巨大な水晶球。
そちらにも指輪と同じような文様が描かれている。

「私が力を送ったときしか使えないから、あなたのほうから好きな

ときに連絡を取ることはできないのよね。
　でも、何か見つけるかもしれないし・・・。時間を決めておきましょうか。
　朝昼晩、力を送るから。何かあったら、そのとき教えてちょうだい」

他にもいくつかの魔術具を持たされ、城を出た俺は出発の準備をした。
馬に荷物を括り付け、街道を駆ける。

ルゥ。
今行くから。
無事でいてくれ。

＊＊＊＊＊

体が、揺れている。
この感じ、馬車かなぁ。

私、馬車なんて、なんで乗ってるんだろう・・・。

ガタガタと揺れながら進む馬車は、かなりの速さで駆けているらしく、時折ガッタンと石を踏んで大きく跳ねる。
私はその衝撃で目覚めたみたい。

目覚めた・・・。
私、寝てたの？
ぼやけた頭で、記憶をたどる。
今日はお城で武術大会があって、カールの応援をしてたんだよね。
カールは決勝戦まで残って、ユハさんと対戦したんだ。
すごく拮抗した試合で、二人の剣が折れて、王様めがけて跳んできた。
警護の人が動いたと思った瞬間、鋭い音がして何本もの矢が降ってきた。
あぁ、そうだ。
だんだん思い出してきた。
みんな、折れて跳んできた剣に気を取られてたから、矢への反応が遅れて、王様だけがマントで矢をはじきながら私とエメさんを抱きこんで守ってくれた。
びっくりして、エメさんと王様の下で小さくなって震えていた私は、観覧席の台の隙間からくりくりっとした真っ黒な目が覗いているのに気付いて、さらに驚いた。
王様のマントの外では剣戟の音がしていて、マントの中はと言えば、「ちょっと、どさくさにまぎれてどこ触ってんのよ！」とかいう別の攻防が繰り広げられている。
隙間からするりと台の下に降りた私が出会ったのは、ジェラール王子だった。
「ねこたん」

私を見止めた王子様は、嬉しそうに笑った後、すぐに真剣な表情になった。

「かくれんぼ。
しー、よ？」

しーっと言って口元に人差し指を立てる。
いや、王子様？
この状況わかってる？

「なう」

「しー！」

「しー」じゃないってばぁ。
出ようよ、と前脚で王子様を軽くひっかいたその瞬間。
だん！　と真上で大きな音がした。
そして、私と王子様がいるこの場所にも、黒装束を着た男が飛び込んできた。

「！？」

「！」

私も驚いたけれど、飛び込んできた男も驚いたようだった。
手には、針を太く大きくしたような、尖った武器を持っている。
この人、下から王様を狙おうと、忍び込んできたの！？

とっさに、エメさんに習った雷の術を使おうとして、躊躇した。

制御を誤って、もしも王子様を傷つけてしまったら!?
練習台にしていた黒焦げの丸太が思い浮かぶ。

私の迷いと比べ、男の動きはすばやかった。
武器をしまうと、私と王子様を同時にはがいじめにして、口元に布を押し当てた。
う、何これ。
ツンと頭の奥に響くようなきつい臭いがして、意識が遠のく。

台の上からは、

「陛下!」
「ご無事ですか!?」

などという声が聞こえてくる。

「大事ない。私のことはいいから、賊を追え」

「「「「「はっ」」」」」

王様が指示を出して、バタバタっと複数の足音が遠ざかって行った。
待って。
行かないで。
閉じかけた目に映る、台の隙間。
王様とエメさんは、辺りを警戒している。

「う・・・・な・・・・」

声をあげようとしたけれど、すでに体に力が入らない。

男は、私と同じくぐったりした王子様を小脇に抱えると、訓練場をぐるりと囲むように作られた観覧席の骨組みの隙間を、身をかがめて駆け出した。

あ、や、やめて。
助けて。

王様、王子様が攫われちゃうよ。
エメさん、私たちはここよ。

あぁ。
どうしよう。

誰か、助けて。

助けて。

カール・・・！

私が憶えているのはそこまで。
たぶんそのまま気を失って、この馬車に乗せられたんだと思う。

暗闇に、目が慣れてきた。
私たちが乗せられているのは、幌付きの荷馬車みたい。
さっきから私が枕にしてる温かな感触は、王子様のおなかかな。
規則正しく上下する胸から、とりあえず無事に生きていることがわかる。

外の音から場所がわからないかと、耳を澄ましているうちに、馬車が止まった。
がさがさっと音がして、幌が開けられる。
まぶしくはない。
もう夜になっちゃったのかな。
誰かが中を覗き込んでくる。
とっさに私は、気絶しているふりをした。

「この子どもは何だ」

ぞく

「一緒にいたからよぉ」

ぞくぞく
聞こえるのは二人の男の声。
その一人の声に、聞き覚えがある。

「俺は猫を連れてこいと言っただろ」

悪寒が止まらない。
記憶にあるよりも、いくぶん低くはなっているけれど、この声、まさか。

「うるせえな、猫もいるだろ。アヒムさんよ」

やっぱり！

遠い過去に置いてきたはずの、幼い頃の私をいじめた相手がそこにいた。

１０　犯人の正体

アヒム！
なぜ彼がこんなところに！

馬車は、木が鬱蒼と生い茂る、森の中で止まっていた。
薄目を開けて、荷台の入口に立つ黒装束の男二人を盗み見る。
がっしりした男が幌を持ち上げ、細身の男は腰に手を当ててこちらを覗き込んでいた。
話しぶりから、幌を持ち上げているのが私たちをさらった男で、偉そうに覗き込んでいるのがアヒムなのか。
月光が差し込んでくるものの、二人の顔まではよく見えない。

アヒムは猫を連れて来いと言った。
彼の目的は猫（わたし）だったのか。
偶然さらわれたのではなく、あの男は、私を狙ってあの場所に現れたということ？
どうして猫なんかを？
王様の猫だから？
じゃぁ、王子様は私の巻き添えになってしまったの？
疑問ばかりが頭に浮かぶ。

「逃げ出そうなんて思うなよ。
　夜のこんな森で迷ったら、あっという間に獣に襲われて食われるからな」

王子様にだろうか、アヒムはそう言い置いて幌を閉めた。

馬車が再び動き出す。
道はどんどん悪くなり、上り坂になっていった。
幌に木の葉がこすれる音が聞こえる。
山に入ったのかな。

「ん・・・。
夜？　おかぁしゃま？」

目をこすりながら、王子様が起きた。
安心させるように、頬を舐める。

「ねこたん」

幌の隙間から差し込む月明りで、白い私のことはすぐにわかったみたい。
王子様が私を抱き寄せる。

「ねこたん、ふわふわね。きもちぃ」

「なーぅ」

王子様は状況がわかっていないのか、ご機嫌で私を撫でる。
ここで泣きだされては大変だから、落ち着いていてくれてよかった。
しばらく二人で撫でたり舐めたりしていたら、馬車が止まった。
男の声が聞こえる。

「こんなところが待ち合わせ場所か？
ずいぶん変なところだな・・・うっ、あっ、おい、アヒム、何をす・・・。
ぐっ、あああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

え。
な、何？
外で何が起こったの？

叫び声におびえる王子様と身を寄せ合っていると、幌が開いた。
辺りを伺うと、やはり山の中で、しかも切り立った崖の上だった。

「なんだ、子(ガキ)ども起きたのか。面倒だな」

アヒムは荷台にあった縄をとると、王子様をぐるぐる巻きにして大きな袋に押し込んだ。
王子様は、ひきつった顔をしてされるがままだった。
私も、小さな袋に体を押し込まれ、顔だけ袋の口から出される。
アヒムは馬から荷台の部分をとりはずすと、私と王子様の袋を馬に括り付け、荷台は崖から落とした。
がらがらと大きな音がして、荷台が落ちていく。
残されたのは、二頭の馬とアヒムと、大小の袋に入れられた王子(わたし)と私(たち)。
もう一人いた、私たちをさらった男は・・・この崖から落とされたのか。

「さっきも言ったが、逃げようなんてするなよ。
あっけなく迷って食われるだろうし・・・おまえが逃げたら、この子どもを殺すからな」

アヒムは、今度は明らかに私を見てそう言った。
何？
もしかして、私が人だって、わかってる？

「なんだよ、返事くらいしろ。
昔馴染みだろ。・・・ルチノー」

「・・・！」

ルチノー、と呼ぶとき、アヒムは猫の私の耳元に唇を寄せた。
驚きと共に全身を嫌悪感が走り、総毛立つ。

「くくっ。時間はたっぷりあるからな。
これから俺の隠れ家へ行く。人型になったらゆっくり昔話でもしようぜ」

馬が走り出す。
王子様は袋の中でもごもごと動いている。
私はといえば、ただ流れていく景色を呆然と見つめていた。

どれくらいの時間が経ったのだろうか。
山を越え、川を渡って、森の中にある一軒の家についた。
家といってもかろうじて屋根があるだけの、掘立小屋のような建物だ。

アヒムが王子様の入った袋を乱暴に床に転がす。
どこか打ったのか、「あぅっ」という声がして、そのあと泣き声に変わった。
助けてあげたいけれど、私はまだ袋の中で、アヒムの腰にくくりつけられている。

アヒムは馬をつなぐと、小屋の中の蝋燭に火を灯した。
その間も、王子様は泣き続けている。

「んだよ、このクソガキ。うるせぇな」

ガッ
アヒムが袋を蹴る。
泣き声が一瞬詰まり、また大きくなった。

「うるせぇ！　うるせぇって言ってるだろ！！」

ガツッ、ガツッ
アヒムが袋を蹴る。
王子様の入った、袋を。

「う・・・あ・・・う・・・。
やめて！！！！！」

とうとう、私は猫のまま叫んだ。
袋の中で、じたばたと暴れる。

「お。
なんだよ、ようやくしゃべる気になったか」

アヒムが袋の紐をほどき、私を持ち上げた。
いままで直視を避けていたけれど、顔の前に持ってこられて、視線を合わせないわけにはいかなかった。

「相変わらず気持ち悪(わり)ぃ真っ赤な目ぇしてんな」

そういうアヒムの瞳は、焦げ茶色。
少し離れ気味の、細い目に意地悪そうな色が浮かんでいる。
髪はざんばらで、黒かった。
記憶の中では、もう少し茶色っぽい髪だったような気がしたけれど、
大人になるにしたがって色が濃くなったのかもしれない。
頬はこけ、顔色が悪い。
体も病的に痩せていて、私より2歳年上なだけだったはずだけど、
ずいぶん老けて見えた。

「んー？　なんだぁ？
何黙ってんだよ。しゃべったと思ったのは聞き間違いか？」

アヒムが片眉を吊り上げる。
私は黙ってアヒムを睨んでいた。

「おら、何か言え」

「・・・」

「何か言えよ」

「・・・」

「ガキ、蹴るぞ」

あれは痛い。
身をもって、知っている。
アヒムに二度三度蹴られてから、王子様は動かなくなってしまった。
大丈夫だろうか。

「・・・やめて」

「へっ。しゃべれんじゃねぇか。
俺のこと、忘れちまったか？」

「忘れてないわ。アヒム」

二度と、もう二度と呼びたくなかった名前を呼ぶ。
するとアヒムは、にたりと不快な笑みを浮かべた。

「そうだよなぁ。忘れてないよな、ルチノー。
俺はおまえの、一番の友だちだったもんな」

友だち？
友だちですって？
この人の頭の中はどうなってるの？

「その格好（猫のまま）じゃ話しにくいな。
人型になれよ。な？」

アヒムが私を床に降ろす。
私はたたっと走り、できるだけ彼と距離をとって、部屋の隅に身を寄せた。
毛を逆立てて威嚇する。
この男、どこまで私のことを知っているの。

「ほら、早くしろ。俺は気が短いんだ」

「王子様を袋から出して」

「あぁん？
てめぇ、ルチノーのくせに、俺に命令すんのか？」

「出さなきゃ、人型にはならない」

「はぁん。いっちょ前に交渉すんのか。
おまえも成長したなぁ。
わかった。俺も少しは懐がでかいところを見せないとな」

にやにやと笑うアヒムは、私の方をちらちらと見ながら、じらすようにゆっくりと紐をほどいた。

「う・・・ふ・・・うぁ、うわあぁぁぁぁぁぁぁん」

手足が自由になった王子様は、ぷはっと息を吐いてから、火がついたように泣き出した。
慌てて駆け寄り、血が滲んだ口元を舐める。

「あ・・うぁぁ・・ね、ねこたん。
うあああぁぁぁ」

「あー、あー、うるせぇな！
ほら！　これでいいだろ！」

アヒムが苛立ったように、音を立てて手近にあった椅子に座る。
これ以上引き延ばすのは、無理みたい。
私は王子様が入れられていた袋を引き寄せると、人に戻るよう意識を集中した。
体の輪郭がぼやけ、手足が伸びていく。

目の前での変化に、王子様が泣くのも忘れてぽかんと口を開ける。
アヒムは、ピューィと口笛を吹いた。

「こりゃぁ、なかなか。
くくっ・・・楽しくなりそうだ」

11　追跡

袋で身体の中心をかろうじて隠した私は、王子様を背にしてアヒムと対峙する。

「ほらよ」

すると、アヒムが粗末な服を投げてよこした。
このまま何かされるのではと思っていた私は、意外に思いつつも素早く服を身に付ける。

「俺は出かけてくる。
明け方には戻るから、そのガキ、適当に寝せとけ。
水だの食いもんだのはその辺にある。
くれぐれも外には出るな。脅しじゃぁなく、危険だからな」

言いたいことだけ言って、本当にアヒムは出て行ってしまった。
後には私と王子様だけ残される。

「・・・ねこたん？」

つん、と裾を引かれた。
不思議そうな顔をする王子様の前で、もう一度猫になり、また人になって見せた。

「ねこたん！　しゅごい！！」

「ルチノー、と言います。ジェラール王子」

「わあぁぁぁ、しゃべれるぅ。
ねこたん！　ううん、ルチノー！　しゅごいねー！」

黒い瞳をきらきらと輝かせて、私に抱きついてくる王子様。

「痛いところはありませんか？
さっき蹴られたところ、だいじょうぶ？」

「んん、くち、いたい。せなかもいたい」

王子様が言うところを一つ一つ確認していく。
口の端は切れていて、背中にはあざができていた。
しかしどれも命にかかわるようなけがではない。
おなか側ではなかったのは幸いだ。

「ルチノー、のどかわいたよ。おなかもすいた」

そういえば、攫われたのは午後早い時間。
今はもう外の様子から深夜だろう。
アヒムが言い置いて言った場所を探し、水甕と固いパンを見つけた。
ミルクがあれば、パンを煮てあげられるんだけど、せめてと、お湯を沸かしてちぎったパンを浸す。
王子様は文句ひとつ言わずそれを食べ、板の間に体を横たえて、私の膝を枕に眠った。

粗末な小屋の中は、ジジ・・・っと蝋燭の芯が燃える音だけがする。
遠くで、獣の鳴き声のようなものが聞こえた。

これから私はどうなるんだろう。

アヒムの目的はなんなんだろう。

カール、心配しているだろうな。

カール、会いたいよ・・・。

＊＊＊＊＊

馬を潰さない限界ぎりぎりまで飛ばし、夕方には王都から遠く離れた森の入口にいた。

森に入ってしまうと獣に襲われる危険があるし、月明りが届かなくても困る。

今日はここで野宿にしよう。

水場を見つけ、馬を休ませる。

携帯食料で簡単な夕食をとるころには、白い月が昇り始めていた。

エメから預かった指輪型の魔術具を、月の光に当てる。

しばらくすると、球体がぼぉっと白く輝いて、淡い光を放った。

『カール？　聞こえる？』

指輪をぼんやり見つめて、ルゥは今頃どうしているだろうかと考えていると、突然すぐ近くでエメの声がした。

驚いて辺りを見回すが、こんなところにいるはずもない。

『もしもし、カール？』

見れば、球体の光がちかちかと点滅し、そこからエメの声がしていた。

そうだ、通信用の魔術具だと言っていたではないか。

「聞こえている」

『あ、そう。よかった。どう？　そっちは』

「とりあえず、森の入口にいる。

木の特徴から、方向は合っていると思う」

『そうね。

こっちは、聞き込みの結果、一昨日幌付きの荷馬車が街道を抜けて行ったって話がでてる。

やけに荷物が軽そうで、御者も不似合な感じだったから通り沿いの店主が覚えてたって』

「そうか」

『あと、あなたは休暇扱いになってるみたいよ。

親衛隊長さんが何やら細工してくれてたから、もし会ったらうまく話を合わせることね』

「・・・」

『ねぇ、あなた酷い顔してるわよ。

そんなんじゃルチノーちゃんに会えてもかえって心配かけちゃう

わ。
　無理するなってのも無理な話だけど、できるだけ体を休めながら行ってね』

「この魔術具が伝えるのは、声だけじゃないのか」

『そっちはね。私は水鏡も併用してるから、あなたの姿も周りの景色も見えてるわ。
　指輪（それ）、明日からは指にはめてて。
　夜だけ月の光に当ててね』

エメの言葉に、一人うなずく。
見えているというなら、これで問題ないだろう。

『・・・あなた、そんなに無口だったっけ？
　いつもなら勝手に見るなとか、こんなのはめられるかとか言いそうなんだけど。
　あー、なんか調子狂うわぁ。しっかりしてよね。
　じゃ、また明日の朝連絡するからね』

球体の点滅が止まる。
月の光を集め終わったのか、白い光もおさまり、辺りは夜の闇に包まれた。
空には無数の星がまたたいている。

「しっかりしてよね、か」

言われなくてもわかっている。
ルゥが攫われたとわかって、自分でもどうにもできないほど動揺した。

何も手につかず、かといって何からしたらいいかもわからず、闇雲に探し回った。
昼間は捜索部隊の一員として隊長の指示に従って動きつつ、夜は城下町をさまよった。
家に帰ってからも、もしかしたら、今この瞬間帰ってくるかもと思い、一睡もできなかった。
このままではいけないと、三日目にして隊長室を訪れた。

胸元から、双子石のペンダントを取り出して手の平に乗せる。
ルゥは今どこにいるのか。
エメの話によれば、攫われた当日、すでに城下町を出ていたというではないか。
もっと早く動くのだった。
賊は城を出られないと言う思い込みが、部隊の動きを鈍らせた。
自分は親衛隊員であるという自負が、決断を遅らせた。

手の上で、ペンダントを撫でる。
ルゥの瞳と同じ色の貴石は、月明りに鈍くきらめいていた。
彼女(ルゥ)が隣にいない今、エメにもらったペンダント(これ)だけが、俺とルゥをつなぐ唯一のものとなっている。
他人(エメ)にもらったものなどではなく、ちゃんと自分たちで選んで、形あるものをそろえておけばよかった。
そう思いながらも、双子石に口づける。
指先に、ざらりとした感触がある。
あの日以来髭を剃っていなかったか。
通りで酷い顔だと言われるわけだ。

「まるでルゥに出会ったころのようだな。
明日は髭を剃ってから出かけるか」

独りごちて、ルゥを思いながら無理矢理眠りについた。

12　暴走

＊＊＊＊＊

アヒムは、明け方ではなく日が高くなってから戻ってきた。
手に食料を持っている。
木をくっつけただけのようなテーブルの上に並べ、椅子というより丸太に座って食べることにした。

「追っ手はまだかかっていないが、食ったら移動するぞ」

「どこへ？」

「おまえの故郷だ」

アヒムがパンとチーズを手渡してくる。
私が一口食べてみてから、膝の上の王子様にも渡した。
王子様は、起きてからずっと私にしがみついている。
この子がいなかったら、私、アヒムとこんな風に向き合えなかった。
今だって、本当はこの人の前からなりふり構わず逃げ出したいのを、ぐっとこらえている。
会話するのも嫌だけど、私のせいで巻き込まれた王子様を無事に帰すためには、できるだけ状況を把握しなくちゃ。

「故郷って、孤児院のある町？」

「はっ。何言ってるんだ。あんなところが故郷なわけないだろ。
ヴィルヘルミーナだよ。おまえ、ヴィルヘルミーナのお姫様なんだろ」

「それは・・・」

そんなことをエメさんに言われたこともある。
調べてみると言われて、それっきりになっていた。
私も知らないことを、なぜアヒムが知っているのだろう。

「孤児院じゃ、よくみんなで言ってたよな。
そのうち金持ちの両親が迎えに来るんだとか、本当はどっかの国の王子や姫で、召使いが迎えに来るんだとか。
おまえは、本当にお姫様だったわけだ。
そして俺は・・・」

アヒムが懐から短剣を取り出す。
何をする気かと、王子様を抱く手に力を籠めて身構える。

「暗殺者組織（フィダーイー）の跡取り息子だったってわけだ」

ダン！
びくっと体が震える。
アヒムが短剣を突き刺したのは、りんご。
刺さった短剣ごと渡してくる。
剥けってこと？

「おまえの暗殺命令が出てるぜ。
いったん引き受けた依頼は必ずやり遂げるってのがフィダーイー（うちら）の信念（モットー）なんだと。

３０年前の依頼だかなんだか知らないが、そんなのほっとけばいいのによ。
でもまぁ昔のよしみで、俺がおまえを助けてやったんだ。感謝しろよ」

おそるおそる受け取ったりんごの皮を剥きながら、話を聞く。
私の暗殺命令？
狙われていたのは私？
え？

「ヴィルヘルミーナでは、水が引いて国の再興が始まってるらしい。ついでに、薄くてもいいから王家の血を引く者を探してるとかなんとか。
おまえをおまえの国（ヴィルヘルミーナ）に連れて帰れば、俺は英雄だな。
そんで、俺とおまえは結婚するんだ。
お姫様を救った英雄は、お姫様と結婚して国を継ぐってのがおとぎ話の王道だろ。
俺は王様だ。ははははは！」

アヒムは上機嫌で私の剥いたりんごを食べる。
アヒムが食べたのを見て、私も食べ、王子様にもあげた。

「待って。狙われていたのは王様じゃないの？」

「あぁん？
違（ちげ）ぇよ。
組織（おれら）はずっと、昔取り逃がしたおまえを探してた。
ただ身体的特徴が違ってたんで、おまえが探してる標的だってのは、気付けなかった」

王子様が私にもたれかかってくる。
おなかがいっぱいになって、また眠くなったのかな。

「でも、なんだっけなー。
確かエメとかアメとかいう魔術士が涙石のことを調べてるって情報が入ったんだ。
そんでその魔術士の近辺を探ってみたら、おまえがいた。
俺はすぐわかったぜ。子どもの頃孤児院で一緒だったルチノーだって。
それ言ったら上層部のやつらが、ベルトランの姫の名前はルチノーだったって言いだしたんだ」

「ベルトラン？」

「おまえ、ほんとに何にも知らねぇの？
おまえの父親の国だろうが。
ま、俺らが潰しちまったみたいだけど。
でな、おまえの母親の顔を知ってる奴が、おまえのこと見に行ったんだ。
そしたら髪の色と目の色以外はそっくりだってんで、おまえ、お姫様決定。
誰が殺しに行くかって話になったから、俺が立候補したんだ」

いきなりいろいろなことを言われて、頭の中が混乱する。
王子様を抱える手にも、力が入らない。

「初めは本当に殺してやろうと思ったんだけど、途中でさっき言った王様計画を思いついたんだ。
苦労したぜぇ？　殺さないように、でも狙ってるように見せるのにさ。

おまえを攫う隙を伺ってたら、じれた上層部が直接仕掛ける計画を立ててた」

そうだったのか。

毒蜘蛛も、毒蛇も、私を殺すために送り込まれたもの。

昨日も、狙われたのは私。

「国王は、狙われてるのは自分だと思ってたみたいだから、好都合だった。

派手に国王を狙っといて、下からおまえを殺す計画だったんだ。

これは好機（チャンス）だと思って、俺の言うこと聞く奴と組んで、昨日みたいなことになったってわけだ。

ま、あわよくば国王の首もとっとこうなんて思った奴がいたみたいで、いい目くらまし（カムフラージュ）になったな」

「じゃぁ、王子様《この子》は巻き添えになった、だけ、よね。

王様の元に・・・帰してあげて」

「そりゃおまえ次第だな。

見慣れりゃ、この髪の色も悪くないぜ。

なぁ」

アヒムがテーブル越しに髪に触れる。

う、嫌、気持ち悪い。触らないで。

言おうとしたけど、うまく口がまわらなかった。

あれ？　私、おかしい。

「宵闇に紛れて移動したほうがいい。

出発前に、ちょっと楽しもうか」

下卑た笑みを口の端にのせて、アヒムがにじり寄ってくる。
逃げようとして、椅子から落ちた。
お尻と背中を床に打ち付ける、けど、あまり痛みを感じない。
王子様は、と見やれば、眠っているというよりぐったりしていた。
これは！？

「おまえ、猫になったり人になったりしてたから、毒の量が難しくてな。
仮死状態にして攫おうと思ってたけど、狙いにくかったんだよなぁ。
だから時間かかってよ。
あ、今日のはしびれ薬だから大丈夫だ」

な・・・んで・・・。
だって、同じもの、食べてたのに・・・。

アヒムは私の胸の上から王子様を持ち上げて、部屋の隅に無造作に放りなげた。
縄を手に取り、昨日のように縛って袋に入れながら、勝手にしゃべる。

自分はフィダーイーの代表である尊師が、組織の女に産ませた子どもだったこと。
その女は、子どもを暗殺者にするのが嫌で、組織を抜け出して隠れて子どもを産み、育てていたこと。
しかし病気で死に、身よりがなかったため孤児院にあずけられたが、組織に見つかって連れ出されたこと。
尊師の血を引く後継者として期待されたけれど、幼い頃から暗殺者になるべく育てられた他の人たちと違って後から訓練を始めたから、周囲の期待通りの結果が出せずに苦しんだこと。

ならば、と毒使いになる道を選び、様々な毒に体を慣らしていって、どんな毒や薬も効かない体になったこと。

「そのせいで、こんな見た目になったけどな。
顔色はいっつも悪いし、太ろうと思っても太れねぇ。
ま、白髪赤目のおまえとは、似合いの夫婦だろ」

アヒムがいったん外に出て出発の準備をする間に、私は全身しびれて動けなくなってしまった。

「いい頃合いだな。暴れられるのは面倒だからな。
大人しくしてれば、俺は優しいんだぜぇ。くくっ・・・」

筋張った手が、裾を割る。
内股を撫でられて、鳥肌が立った。

「う・・・。い・・・や・・・・。
や・・・めて・・・・」

「大人しくしてろって言っただろ」

「うっ」

アヒムが胸をわしづかみにする。

「お、なんだ、結構育ったんだな。
どれ・・・」

アヒムが服を脱がしにかかる。
服・・・。あ、そうだ。

体は動かないけど、意識ははっきりしている。
私は浅く息をついて、猫になった。
猫相手じゃ、手は出せないでしょ。

「・・・てめぇ、馬鹿にしてんのか！」

細目を吊り上げたアヒムが、私を投げ飛ばした。
体が宙に浮き、小屋の壁に背中をぶつける。
その衝撃で、粗末な小屋全体が揺れた。

「調べはついてんだよ。この首輪だろう！」

アヒムが首輪（チョーカー）に手をかける。
そんなことまで？　フィダーイーって一体！？
鍵が壊れる音がして、首輪（チョーカー）がはずれた。
猫から人に戻り、カッと体が熱くなる。

「う・・・あ・・・」

「ん？　おい、なんだ？」

いけない。
床にうずくまってなんとか止めようとするけど、体がしびれているせいで、いつも以上に力の制御ができない。
しゅうしゅうと白い靄が体中から湧き上がり、周りの空気が渦を巻き始める。
私を中心に風が巻き起こり、椅子や荷物が浮き上がって回る。

「首輪をとったからか！？
こんなこと聞いてないぞ！

おい、はめてやるから、渦(これ)をなんとかしろ！」

なんとかと言われても、できるものならとっくにやっている。
乱れ飛んだ家具が壁にぶつかる。
小屋が揺れ、いまにもばらばらになりそうだ。

「うぅ、くそう！
このままじゃ俺も・・・」

きつく閉じた目の奥を、白い光が明滅する。
光の合間には、見知らぬ文字や文様が浮かんでは消えた。
明滅の間隔が短くなっていく。
光。
文字。
光。
どこかの景色。
そしてまた光。

「あ・・・あああああ！」

あれは、お城？
私に似た女の人が、楽しそうに笑っている。
小さな私の頭を撫でる、大きな手。
私の髪・・・金色？

光が瞬く。

水と、炎。
黒装束の男たち。

『ごめんなさい、ルチノー。
今はこれしか・・・。
あなたの中に封じるしかできない母を許して』

冠（ティアラ）から取り外された涙石が、私の胸の上に置かれる。
すっと石が私の中に溶けたと思ったら、体中を針で刺されるような痛みが襲った。

『きゃあああああああ！』

『あぁっ、ルチノー！　ルチノー！』

髪の色が、変わる。
金から白へ。

今と同じ、白い髪。
あれは私の過去なの？

渦が、ますます酷くなる。
乱れた髪が宙に舞う。

白い、髪。
カールがきれいだと言ってくれた、私の髪。
薄く開けた目の端に、赤いものが映った。
髪の端に結ばれたリボンだ。

まだ私が猫の姿しか見せていなかった頃に、カールがくれたリボン。
双子石のペンダントをもらってからも、王都で立派な首輪をするようになってからも、ずっと私のしっぽに結ばれているリボン。

屋根が飛び、床板がはがれた。

小屋が、崩れる。

力の暴走が、止まらない。

「あぁぁぁぁぁぁ・・・！」

意識を失う前、最後に見たのは、ほどけて飛んでいくリボンだった。

13　発見（前書き）

短くてすみません（＜＞）

13　発見

＊＊＊＊＊

「な・・・んだ、これは」

エメの指示通りに進んだ山中で、竜巻にでも襲われたような場所に出た。
周囲の木々はなぎ倒され、元は家でもあったのか、生活用品や木材が散らばっている。
何か手がかりがないかと馬を降りると、足元に赤いリボンが落ちていた。
子どもでも住んでいたのか？
いや、どこかで見覚えがあるような・・・。
他に何かないか調べようとすると、

「ヒイィィン・・・！」

連れてきた馬が呼んだ。
振り返ると、木立の中から一頭の馬がこちらを伺っていた。
背には荷物を載せている。

「なんだ、どこの馬だ」

怖がらせないように、そっと近づく。
手綱を持って首を撫でれば、ブルル・・・っと鼻先を寄せてきた。

人には慣れているようだ。
水を与え、荷をほどく。
一番大きな袋を開けようとしたら、中身がびくっと動いた。

「！」

危うく取り落としそうになる。
中からうめき声が聞こえた。
危険な動物でないことを祈りつつ袋を開けて、驚いた。

「ジェラール王子！？」

「う、うぅッ」

中から現れたのは、猿轡（さるぐつわ）をされ縄で縛られたジェラール王子だった。

「ゆっくり召し上がってください。
まだまだありますから」

手近な倒木に腰かけて、俺が差し出した水と食料を、王子はがつがつと食べた。
いつからあんな状態でいたのだろう。
まさか攫われてからずっとなのか。
よくご無事でいてくれたものだ。

満足するまで飲んで食べて、ふぅ、と王子が人心地ついたところで、

最も尋ねたいことを口に乗せた。

「ジェラール王子。白猫は一緒ではありませんでしたか？」

「・・・っ」

お父上の親衛隊員ですと名乗った俺に対して、それまで少なくとも警戒はしていなかった王子だったが、ルゥのことを尋ねた途端、あきらかに怯え、不審そうな目を向けてきた。

「白猫です。王子と一緒に攫われたはずなのですが」

「しらない」

本当か嘘かわからないが、ぷいと横を向いて言い切られてしまった。しかしここであきらめるわけにはいかない。

「本当に？　王子とお城で何回か遊んだことのある白猫ですよ」

「しらないよ」

「そうですか・・・」

一緒に攫われたのではなかったのか？
そのとき、左手中指に嵌めた魔術具が光った。
エメからの通信だ。

『カール、どう？　なんだかすごいところにいるわね。
あら？　隣にいるのは？』

「あぁ、こちらは・・・」

俺がエメに王子のことを説明しようとしたとき、その王子がびっくりした顔で俺に飛びついてきた。

「カール!?　おまえ、カールっていうの?」

「え?　あ、はい。カール＝ヘルベルト＝ヴュストと申します」

そういえば、親衛隊員だとはいったが、名前は言わなかったか。
ぱぁっと王子の顔が明るくなる。

「うわぁ、ルチノーのいうとおりだ。カールがさがしにきてくれた」

「!
ルゥを知ってるんですね!」

それから俺は、ルゥと共に過ごした時間のことをジェラール王子から聞き出した。
幼い王子から情報を得るのはひどく苦労したが、根気よく言葉を重ね、エメも魔術具を通して助け船を出してくれて、どうにか必要な事柄を知ることができた。
はじめにルゥのことを知らないと言ったのは、またルゥを狙ってきた輩だと思ったからだそうだ。

『フィダーイー、か。
私のせいで、ルチノーちゃんが見つかっちゃったってことね』

「ルチノーは、ぜったいにカールがきてくれるっていってた。
だからだいじょうぶだよって」

王子の話を聞きながら、先ほど拾ったリボンを見つめる。
やはりこれはルゥのリボンだったのだ。
かなり乱暴だと思われる男の存在。
木端微塵の小屋。
ルゥはどれほど恐ろしい目にあったのか。

「それで、ルゥは今どこに？」

「・・・わかんない。
ぼく、ふくろいれられた。
そのあと、ごおっておおきなおとがして、うま、はしった」

『たぶん力が暴走したんだわ。
その後、自分でどこかに移動したのか、そのフィダーイーの男に連れ去られたのか・・・』

「くそっ・・・！」

拳で自分の膝を打つ。
ようやく追い付いたと思ったのに、手がかりがここで途絶えてしまった。
こうなったら、ヴィルヘルミーナがあったという土地まで行ってみるしかない。
俺は王子を近くの領主の館まで送り届け、ルゥの痕跡を探すことにした。

１４　ヴィルヘルミーナ領

＊＊＊＊＊

「ん・・・」

「お目覚めですか、姫君」

見慣れない天井が目に映る。
姫君？　誰のこと？

「起きたか」

ぼんやりと寝台から体を起こすと、一歩進み出た人影が私の肩を抱き、こめかみに口づけた。
見上げたそこにいたのは。

「・・・ひっ・・・」

アヒム！
なんでこの人が私に触るの！！
反射的にばしっと手を振り払い、寝台ぎりぎりまで逃げる。

「姫君？」

近くにいた女の人が、心配そうにこちらを伺ってきた。
身をすくめながら改めて周りをみれば、そう広くはなさそうな部屋

に、老若男女、大勢の人がおり私を取り囲んでいた。
石造りの壁や木の板が張られた床は、ごく一般的なものだけれど、
壁掛けの布の模様がどことなく懐かしさを感じさせる。
ここは一体・・・？

「彼女は混乱しているようです。
しばらくすれば落ちつくでしょう」

戸惑う私をよそに、アヒムは周りの人と私を交互に見ながら、泰然と言った。

「僕がわかるかい？」

「・・・アヒム」

私が答えると、周りの人たちからはほっとしたような様子が見えた。

「そうだ。僕のことを忘れてしまったのかと思ったよ。
ルチノー、こちらは君の故郷（ヴィルヘルミーナ）の再興のために尽力してくださっている方々だよ。
僕たちはフィダーイーの手にかかりかけて、命からがらここまで逃げてきたんだ。
もう逃げ切れないと思ったときに、この方々が助けてくださったんだ。
ここについてから丸一日、君は眠っていたんだよ」

おぼろげな記憶が蘇る。
あの山の中の小屋で、アヒムに首輪（チョーカー）を奪われて、力が暴走した。
一時的に力を使い果たした私はその場に倒れ、馬に乗せられて運ばれたような気がする。

途中・・・そうだ、何度か襲われた。

『アヒム、血迷ったか！　その娘を渡せ！』

『うるせぇ！　尊師（おやじ）に言っとけ！　二度と組織には戻らねぇとな！』

そんな会話を聞いたような気がする。
首に手をやれば、そこには元通り首輪（チョーカー）がはめられていた。
それにしても“僕”って何？
取り繕ったようなしゃべり方も、気持ちが悪い。

「いや、しかし、お目覚めになられて本当によかった。
これでヴィルヘルミーナも安泰です。
全てアヒム様のおかげ、ありがとうございます」

私を囲む人々の中で、特に恰幅のいい年長のおじさんが言った。
おじさんの声音には、喜びとアヒムに対する信頼がにじんでいた。
他の人たちも、口々に感謝の言葉を述べている。

「いえいえ、当然のことをしたまでです」

当たり前のように感謝を受け、鷹揚にうなずくアヒムは、まるで人々の主のようにふるまっている。
私が眠っている間に、何があったのだろう。

「夕食のご用意ができてはいるのですが、姫様は召し上がることはできますでしょうか」

おじさんは、人のいい笑みを浮かべて問いかけてくる。

せっかくの好意だけど、食欲もないしアヒムと食事を共にする気もない。
私が静かに首を振ると、アヒムは上品な仮面をかぶって微笑んだ。

「もう少し眠ったほうがよさそうだね。
とはいえ、事情もわからないのは不安だろう。
みなさん、ここは僕が話をしますから、どうぞ先に階下(した)に降りていてください」

「わかりました」

アヒムとおじさんに促され、人々は部屋から出て行った。
二人きりにされて、余計に身がすくむ。
そういえば王子様はどうしたんだろう。
断片的な記憶をたどるけれど、小屋を出たあとのことがよくわからない。

「すげぇ、何もかもうまくいってるぜ」

閉めた扉に耳を当てて廊下の様子を伺っていたアヒムは、振り返ってにやりと笑った。

「ここはどこ。あの人たちは何？　王子様はどうしたの」

「まぁ、そう急ぐんじゃねぇよ。
くくっ。ようやく俺にも運が向いてきたってもんだ」

「アヒム！」

「んだよ、うるせぇな

旧ヴィルヘルミーナ領だよ。んでもってあいつらは元ヴィルヘルミーナの民だ。
ここは城のあった湖のほとりに奴らが作った集落の中の一軒。
王子？　あぁ、あのガキか。そういえばブルクハルトの王子だったっけな。
邪魔だから置いてきた」

「置いて・・・！？　どこに？」

「さぁな」

そんな！
あんな小さな子一人で、放り出すなんて信じられない。
焦る私にかまうことなく、アヒムは寝台に腰かけて得意満面で話を続ける。

「ここの奴らはいいやつらだぜぇ。
おまえを連れてきた俺のことを、すっかり信じきってやがる。
なぁ。余計なことはいうなよ。
ヴィルヘルミーナのお姫様は、ブルクハルトに誘拐されて監禁されてたことになってんだ。
そこでフィダーイーに襲われたってな。
奴ら、おまえを女王にまつりあげて、復国の宣言をする予定だ。
もちろんそのときの王様は俺って寸法さ。
来年の春には、俺は王様、お前は女王様だな」

「何言ってるの。
私は女王になんてなりたくない」

「はぁ？　おまえこそ何言ってんだ。

昔からの夢だろ。
いっつもお姫様だの王子様だのの絵を描いてたじゃないか」

「それは・・・」

その絵はたぶん、両親を描いた絵。
ヴィルヘルミーナの女王だったお母さんと、ベルトランの王様？だったお父さんなのかな。
どうして二人が出会ったのかとか、どうして私は孤児院に居たのかとかはわからないけれど。

「いい子ぶるんじゃねぇよ。俺にまかせとけって。
おまえの夢をかなえてやろうってんだ。
感謝しろよ」

勘違いをしたままのアヒムは、上機嫌で私の髪を一房つかむと、ぐいっとひっぱって口づけた。
嫌悪感に顔をしかめる私を気にすることなく、鼻歌を歌いながら扉を開ける。
すると、階下（した）からは人々のにぎやかな声が聞こえてきた。

「姫様（おまえ）が見つかったってんで、昨日から宴会なんだよ。
なかなかうまい飯が食えるぜ。
気が向いたら降りて来い」

ばたんと扉が閉められた。
ほぅっと息をつく。
知らず、ずいぶん体に力が入っていたみたいだ。

ここはヴィルヘルミーナで王子様は行方不明？

壁掛けを懐かしいと思ったのは、どこかで見覚えがあったからなのかな。

あぁ、私を女王にして自分は王様になんて、本気なの？
どうしよう。
このままじゃアヒムの計画通りになっちゃう・・・！

＊＊＊＊＊

ジェラール王子を預けた先は、リクハルド陛下の第二妾妃、ブランシュ様の弟の館だった。
家族ぐるみで付き合いがあるらしく、王子と領主は面識があり、すぐに話が通じた。

「では、王子。こちらでお待ちください。
すぐに城から迎えが来ます」

「わかった。カール、ぜったいルチノーをみつけてね」

「御意」

エメとも魔術具で話をし、現状を伝える。
城ではまた会議を開いているそうだ。
エメの話しぶりから、彼女も、そして陛下もうんざりした様子でいることがわかる。

『ルチノーちゃんにはまだ会えないのよね？
私だけ先にそっちに飛んでいくことにしたから。
本当はリックだって今すぐにでも城を飛び出したいくらいいんだろうけどね』

エメの話によると、水鏡で見える景色から、どうやらルゥはまたアヒムとやらに連れまわされているようだ。
せめて食事をとって一休みしたらどうかという領主の心遣いを丁重に断り、水鏡に映る景色から見当をつけた方角へと馬を走らせた。

＊＊＊＊＊

いつの間にか眠っていたみたい。
燭台の蝋燭がずいぶん短くなっている。
素足のまま床に降り、扉を細く開けて階下を伺うと、大声で笑い合う声が聞こえた。

「そうですか！　幼い頃に孤児院で」
「たまたま立ち寄ったブルクハルト城で成長した姫様を見かけられたそうですな」
「曲者の手が伸びていることを噂で聞いて、いても経ってもいられず、でしたっけ？」
「まさに運命ですね」
「素敵～！　絵物語みたい」
「おお、やはりお二人はそういう間柄で？」
「それにしても姫様を間近で拝見したときには驚きました」
「うちに残る家宝の絵姿にそっくりですものね」

「そうそう、先代ルミエール様もそれはそれは美しい方で・・・」

嘘と真実をたくみに織り交ぜて、アヒムが調子を合わせているのがわかる。

ああやって、みんなを丸めこんだんだ。

飛び出して言って、自分の口から本当のことを言いたい衝動に駆られる。

アヒムはそんないい人じゃない。

幼い頃、ずっと私をいじめてた。

お城でだって、ずっと大事にされて、たくさん優しくしてもらった。

それに私には・・・

「カール・・・！」

扉を閉め、背中でもたれてずるずると座り込む。

アヒムに攫われたとわかったとき、はじめはそんなに焦ってはいなかった。

アヒムのことは、昔を思い出して怖かったけれど、すぐにカールが迎えに来てくれると思ってたから。

私はエメさんの作った双子石を持っているし、水鏡で居場所を特定することもできるだろうと思った。

でも、未だ何の連絡もない。

石も反応しない。

何かあったのかな。

「う・・・ふっ・・・」

知らず、嗚咽が漏れる。

カール、私はここよ。
早く来て。

＊＊＊＊＊

田畑を越え、森を抜けると、何もない平らな土地に出た。
ここが、３０年前に滅んだというヴィルヘルミーナか。

夕闇がせまる。
どこか野営できるところはないかと、馬をゆっくりと進める。
ほどなく、大きな湖に出た。
湖沿いを歩いて行くと、さほど遠くはないところに小さな集落を見つけた。
石造りの家々には、あたたかな光が灯っている。
宿屋はなさそうだ。
何か情報を得られないかと、特に大きな家の扉を叩いた。

「はい？」

扉が開くと、中からわっと人々が騒ぐ声が聞こえた。

「すみません。人を探しているのですが」

応対に出てくれた女性に、ルゥの特徴を話す。

「・・・少々お待ちください」

すっと目を伏せた女性が奥へと入って行く。
心なしか顔が青ざめていたように感じたのは気のせいか。
玄関先でしばらく待っていると、先ほどの女性が恰幅のいい男性を連れて戻ってきた。

＊＊＊＊＊

膝を抱えてしばらく泣いたら気が済んだ。
階下に行って真実を話すこともできるけれど、他にすることがある。

窓から外を見ると、私がいる部屋は二階で、手近に飛び移るのにちょうどよさそうな木があった。
服を脱いで猫の姿をとり、窓から枝へと飛び移った。
悩んでいても仕方ない。
迎え(カール)が来ないなら私から行く。
それに、王子様を探さなきゃ。

＊＊＊＊＊

「人をお探しとか」

「えぇ。人、もしくは猫なのですが」

「猫？」

「はい。真っ白な猫です。瞳だけは紅玉のような赤で」

「さぁ。知りませんな」

男性は顎に手をあてて思案顔だ。

「そうですか。ではこのあたりで少女を見かけませんでしたか。小柄で白い髪の、やはり目の紅(あか)い・・・」

「うーん・・・」

「ご存じですか？」

「・・・」

「ご存じなんですね？」

女性が、男性を伺うように仰ぎ見る。

これは！

「彼女はここにいるんですか！？」

思わず男性の肩をつかみ、がくがくと揺さぶった。

「ちょっ・・乱暴はやめてください！」

「う、あ、あなたは、姫様とはどういうご関係で？」

「姫様？　俺はルゥの・・・」

「騙されちゃいけない！」

騒ぎを聞きつけてか、奥からやけに顔色の悪いひょろっとした男がまろび出てきて叫んだ。

「こいつは、ルチノーを隠していた国の兵士だ！」

１４　ヴィルヘルミーナ領（後書き）

試行錯誤の結果、単に読みにくくなっただけのような＾＾；
言い訳は活動報告にて。

15　湖にて

＊＊＊＊＊

てってってっ。
月夜をしばらく歩くと、大きな湖に出た。
湖面に月が映り、美しい。

「ルチノーちゃん！？」

突然、声をかけられた。

「エメさん！！！！！」

振り返ると、空を飛ぶエメさんがいた。
我を忘れて飛びつく。

「あぁ、よく無事で・・・！」

私を抱きしめるエメさんは、涙声になっていた。

「遅くなってごめんなさいね。
カールも近くまできているわ。
方角的にもうヴィルヘルミーナしかないと思って、飛んできたの」

そっか！　やっぱり探してくれてたんだ！
さらにエメさんから、王子様が無事であることを聞いた。

「とにかく一度ブルクハルトに戻りましょう。
ヴィルヘルミーナの人たちには、あとできちんと説明するから。
あっと、カールにもルチノーちゃんに会えたことを伝えないとね」

エメさんが懐から手の平大の水晶球を取り出す。

「ちょっとまってね。代用で持ってきたから調整が必要なのよね。
えーっと、ここがこうなって、あれがこうで・・・。
えぇい、面倒くさい！　とりあえず水鏡でいいわ」

エメさんが湖を覗き込む。

「カール、カールっと・・・・あらぁ？」

「エメさん？」

「うーん、これはちょっと・・・まずいことになってるみたい」

まずいこと？

「ルチノーちゃんがさっきまでいたところのこと、詳しく教えてくれる？」

エメさんにうながされ、知っていることをすべて話した。
アヒムに首輪（チョーカー）をはずされ、力が暴走したこと。
気を失っている間に旧（ここ）ヴィルヘルミーナ領に連れてこられたこと。
ヴィルヘルミーナの再興を願う人々の集落にいたこと。
アヒムは・・・私を女王にして自分は王様になる気でいること。

「あと私の髪の色、昔は違ったみたいなんだけど・・・」

生まれつきだと思っていた白い髪は、本当は金色だったのかもしれない。

「そうね。ちょっと人の姿に戻ってくれる？」

「え」

ここで？

きょろきょろと辺りを見回す。

湖のほとりは夜露に濡れる柔らかな草が生い茂り、ところどころに小さな紫の花が咲いている。

湖面は凪ぎ、しんと静まり返って他人の気配はない。

「でも、裸になっちゃう」

猫のまま、何も持たずに出てきてしまったから。

「大丈夫。ほら」

エメさんが懐から服を取り出した。

するりと出てきた服は、平服ではなく上等なドレス。

エメさんの紫の法衣の下って、どうなってるの？

「こんなこともあろうかと思ってね。

え？　どこに入ってたかって？　細かいことは気にしないの！」

エメさんに手伝ってもらって、ドレスを身に付ける。

青みがかった白い布地は光沢があって、たくさんの襞が手足を動かすたびに揺れる。

胸元は逆三角形に大きく開いていて、金縁の刺繍が襟と袖口にされている。

「これ、胸見えちゃう」

上から覗き込むと、谷間がくっきりと見える。
こんな服、恥ずかしいんだけど。

「このレースをつけるの」

エメさんが手に持っていた生地をボタンでとめると、谷間は見えなくなって鎖骨だけ強調された。

「あとベルトね」

取り出された太いベルトを腰に巻く。
外付けのコルセットのような意匠（デザイン）で、胸の下から腰骨までを覆って、おなかの前で交差させた紐で結んだ。

「うふん、いい出来」

一歩引いて全身をながめたエメさんはとっても満足そう。
あの、私の髪の色の話だよね？
カールも、大変なんじゃなかったっけ？

「あと靴とー、ブレスレットとー」

「エメさん」

「髪型はどうしようかしら。こっちの飾り紐が」

「エメさん」

「あ、この留め具忘れてた」

ごそごそごそ。
袂(たもと)を探る。

「エメさん！　カールは！」

「あ、そうだった」

ぽとっと靴を落としたエメさんは、本当に忘れてたみたい。

「ごめんなさい、ルチノーちゃんに会えたのが嬉しくて、つい、ね？」

「ね？　じゃありません」

かわいく片目をつぶってみせるエメさんをじとっと睨む。

「はいはい。じゃぁ靴だけね。裸足じゃ歩けないでしょ。
首輪(チョーカー)は・・・。あぁ、これはもう役に立ってないわ」

腰を下ろして編み上げ靴を履く私の後ろで、エメさんが首輪(チョーカー)の留め金をはずした。

「あっ」

力が暴走しちゃう！

「大丈夫」

ぎゅっと目をつぶって身構えたけど、何も起こらなかった。
変化のない自分に驚き、エメさんの手に乗せられた首輪（チョーカー）を見つめる。

「なんで・・・はずしたのに」

「力が暴走してそのあと気を失ったって言ってたわよね。
不幸中の幸いっていうのかな。
その時に、ルチノーちゃんはもう自分の力を制御（コントロール）できるようになってたのよ。
首輪（これ）がなくちゃだめって思い込んでただけで。
その姿も、自分の姿はこれって思い込んでるだけだわ」

「思い込んで・・・？」

「そう。本当は何色なの？」

「ええと」

おぼろげな記憶にあるのは、金。
以前カールが一房だけ金の髪があると言っていた。
多分その色。
そして、瞳の色はお父さんと同じ薄い青。

「あら、いいわね。似合うわ」

「え？」

エメさんに手招きされて湖を覗き込めば、月光の元、見知らぬ女性が映っていた。

「これ、私・・・？」

「うん。色が違うし、魔力が解放されているから、ちょっと印象が違うけれど、それがルチノーちゃんの本来の姿だわ。
いままでは自分の思いこみで色や姿を形作っていたのね」

風に揺れる、腰まで届く金の髪。
頬は興奮のせいか紅潮し、産毛の先まで力がみなぎって、全身から淡い光を放っている。
こころなしか、顔立ちも大人びた気がする。
唯一の名残は、瞳の色。
青（ブルー）の虹彩は記憶にあるよりも赤みを帯びていて、薄青というより青紫（ヴァイオレット）になっていた。

「成人の儀のとき、ろくな魔術の訓練もなしによくいままで無事だったって思ってたけど、違うのね。
孤児院に預けられる前に、力を封じられたんだわ。
あんまりその力が大きかったから、衝撃で色素が抜け落ちたんでしょう。
それが、今戻ったのよ」

「そうなんだ・・・」

自分の手の平をじっと見つめる。
指の一本一本が光ってる。
目を凝らすと、不思議な文様が体に刻まれているのが浮かんだ。
これは何？

「さらわれたとき、もしかして力を使おうとした？
そこから解放がはじまってたのね。
あふれだそうとする力と封じようとする力が相まって、双子石は割れて水鏡でもところどころしか見られなかったんだわ」

「割れちゃったの？」

カールとおそろいの石。
絆が断たれてしまっていたような気がして、手の平の文様のことはすっかり抜けた。
あとでエメさんに聞けばいい。

「えぇ。ほら」

首輪（チョーカー）からころりとはずされた石は、裏側にひびが入っていた。

「水鏡もねぇ、今のルチノーちゃんを見ようとしたら、太陽を直視するようなもんだわ。
これじゃ映らないわね」

そうなんだ。
私を探そうと、きっといろいろしてくれてたんだな。
カールも、たぶん必死になって・・・。

「あの、で、カールは」

「うん。この先に広場があるみたい。
そこで磔（はりつけ）にされてるわ」

「！！！？？？」

16　集落の広場

＊＊＊＊＊

「殺せ！」
「殺せ！」
「殺せ！」

丸太に縛り付けられ、興奮し叫ぶ群衆に担いで運ばれる。
顔色の悪い男が「ルチノーを隠していた国の兵士だ！」と叫んだ途端、その場にいた人々に押さえつけられた。
武器も持たない民間人に手を上げるわけにはいかず、ろくな抵抗もできないままに剣をとられ、上着を剥がれた。
そしてどこからか運ばれてきた丸太に縛られて、今に至る。
この程度の縄、すぐに抜けられるが、ルゥの所在がわからない。
ルゥのことを知っていそうなこいつらから、なんとか情報を得たいものだが・・・。

うおおぉぉぉぉぉ
歓声があがり、丸太が立てられる。
集落の中心らしい広場には、大勢の人が集まり俺に向かって石を投げてきた。
顔に当たると地味に痛い。

「殺せ！」

「殺せ！」
「殺せ！」

「うるさい！　ルゥはどこだ！」

負けじと声を張り上げる。

「姫様は俺らのもんだ！」
「ブルクハルトめ！　馬鹿にしやがって！」
「ヴィルヘルミーナ万歳！　敵国の兵士は死ね！」

群衆はどんどん興奮していく。これでは埒（らち）が明かない。
こいつらの長（リーダー）は誰だ。
辺りを見回すと、俺を取り巻く人々の輪から一歩離れたところに、初めに応対に出た恰幅のいい年かさの男と、顔色の悪いひょろりとした男が立っていた。
細いほうの男は、手に香炉のようなものを持っている。
細い男が、年かさの男になにやら耳打ちした。

「アヒム様のご指示だ！
その男を殺せ！」

うおぉぉぉぉ
人々が叫ぶ。

アヒムだと！？
あの細い男がルゥをさらったフィダーイーの男か！
ならば奴を捕えて締め上げるまで。
足元には藁が積まれ、火のついた松明を持った数人の男が駆けてきた。

俺は丸太から落ちない程度に縄をゆるめ、反撃の機会をうかがう。

松明が降ろされる。

フィダーイー（アヒム）の男の口の端が歪んだ。

縄をほどき、落ちる途中で丸太を蹴って火のついた藁を飛び越えようとしたそのとき。

「やめなさい！　何の騒ぎだ、これは！」

俺を取り囲む輪の、アヒムたちがいるのとは反対側から声がとんだ。

目を凝らして見ると、一人の旅姿の男がいた。

「マクシミリアン！」

「マクシミリアンだ」

「戻ってきたのか」

人々がざわつく。

マクシミリアン？　あれは・・・。

男がこちらに進み出てくる。

人の輪は自然に割れ、ごく近くで対面することができた。

丸太を囲んだ藁に火が付き、辺りを煌々と照らす。

「菓子店の店主？」

「どうも、ヴュストさん。

私の旧友たちが失礼をしたようで」

店主は外套（フード）をとり深々と頭を下げる。
大きな焚火に照らされた男は、ルゥが好きなアドルフ菓子店の店主だった。

「マクシミリアン。なんだ、知り合いか？」

恰幅のいい男がやってきた。

「ロイド。久しぶりだな。
朗報を持って帰ると連絡しただろう」

「あぁ、そういえばそうだったか・・・。
いや、こちらこそいい話があるんだ。姫様が見つかったんだよ」

「・・・それがなぜこの方を縛り上げるようなことになるんだ」

「なぜって、だってこいつは姫様を監禁してた国の」

「監禁？」

縄で固定されていた体をほぐしながら、二人の会話に耳を傾ける。
店主とこの男、どういう関係だ？

「どこでそんな話になって・・・ん？」

店主が眉根を寄せて、鼻を利かせた。
甘いような、埃臭いようなにおいがただよってきた。
急に人々が騒ぎ出す。

「マクシミリアンは犬だよ・・・」

「ブルクハルトで店をやっていたじゃないか」
「敵国の犬になったんだ」
「マクシミリアンも敵だ！」
「殺せ！」
「殺せ！」
「殺せ！」

俺たちに迫る人々の目が尋常ではない。
俺も店主もたじろいで、お互いに背を預けつつ、突破口を探した。

「おい、ロイド。みんなを落ち着かせてくれ」

店主が困ったような目を、ロイドと呼ばれた恰幅のいい男に向ける。
ロイドは、顔中の筋肉が弛緩し、口から涎を垂らしていた。

「敵・・・敵だ・・・。
姫様に害なすもの・・・ヴィルヘルミーナの再興を邪魔するもの・・・すべて敵・・・」

ロイドが落ちていた松明を拾う。
火は消えていたが、こん棒のように振り回し、こちらに向かってきた。

「店主！　どういうことだ、これは！」

「す、すみません。みんな誰かに操られているようです！」

「誰か・・・くそっ、アヒムか！」

丸太の上から見かけた方向に首を巡らせれば、香炉を高く掲げて群

衆を煽る男がいた。

「こっちだ！」

店主に声をかけ、俺たちを捕まえようとする人々の手を振り払いながら、アヒムを目指す。

あと少し。

そう思ったとき。

がつっ

誰かが投げた大きな石が、後頭部に当たった。

衝撃と共に意識が遠のく。

伸ばした手の先には、にやにやと笑う気味の悪い男がいた。

「カール＝ヘルベルト＝ヴュストか。

ルチノーの旦那だっけな。それも今日までだ。

安心しな。ルチノーは俺と幸せになるからよ」

気を失う寸前、そんな声を聞いた。

ふざけるな。

誰が誰と幸せになるって？

う・・・。

ルゥ・・・・・・・・・。

＊＊＊＊＊

「もっと！　もっと早く飛んで！！」

「わかったから！　暴れないでよ、ルチノーちゃん！」

エメさんにつかまって空を飛ぶ。

カールが磔！？

何でそれを先に言ってくれないの！

「余裕ありそうだったから大丈夫よぅ。
いっくら相手が大勢だって、民間人にやられるカールじゃないでしょう」

「そうだけど、そうだけど急いで」

「はいはい」

上空に上がると、遠くに炎が見えた。

「あら、火をつけられちゃったのかしら。
確かに急いだ方がよさそうね」

「エメさん～～～！！！」

ぴゅうっと飛んでいく間に、見えていた炎が消えた。

カール？

まさか？

空から近づいていくと、円形の広場にはたくさんの人が集まっているのがわかった。

その中央には太い木が立てられ、誰かくくりつけられている。
あぁ、カール！
夜明けが近づく薄闇の中、ぐったりと顔を伏せるカールがいた。

「もう一人いるわね。誰かしら」

エメさんに言われてよく見ると、周りを取り囲んだ松明の火に照らされて、カールの横にもう一人縛られているのがわかった。
人々は、カールたちの足元に新しい藁を運んでいる。

「エメさん！　早く、助けにいこう！」

「ちょっと待って。この広場、何かおかしいわ」

「何かって何！」

「だから、待ってって」

そうこうする間にも藁はどんどん高く積まれ、カールの膝くらいの高さになった。
あんなところに火を点けられたらひとたまりもない。

「円形の広場。ところどころ色の違うタイル・・・。
人が邪魔でよく見えないけど、どこかで見覚えが・・・」

松明が近づく。
エメさんは考え込んでる。
私はぐいぐいと引っ張って、下降をうながす。

「エメさんってば！」

「うーん、もしかしてこれ・・・」

「点火！」

下で、声がした。
もう、知らない！！！

「やめて！」

「あっ、ルチノーちゃん！」

火を点けられる直前、エメさんを突きとばした。
魔術で飛んでいるエメさんと違って、もちろん落ちるのは私。
目指したのはカールのところ。

「カール！」

私の呼び声に、ぴくっと反応した気がした。
ばさばさばさー！
藁の中に落ちる。

「な、何だ！？」
「姫様！？」
「やめろ！　点火、待て！！」

「う・・・ごほっ、ごほっ・・。カール・・・」

「・・・ルゥ！？」

藁をかき分け見上げれば、意識を取り戻したカールと目が合った。
久しぶりに会えたカールに、じんわり目頭が熱くなる。

「カール、待ってて。今助けるから」

丸太を登ろうとする。
私よりもずっと高いところに縛られているカールには、なかなか手が届かない。

「ルゥ？　本当にルゥか？」

カールは不思議そうな顔で私を見る。
そっか、色が変わったんだっけ。

「詳しいことはあとで話すわ。
とにかくここから降りないと」

「わかった。
大丈夫だから、ルゥ、離れろ」

カールがもぞもぞと動く。
縄をほどこうとしているみたい。
東の空が明るくなりはじめ、丸太に縛られたカールを照らす。
私の大好きな錆色の髪には、べっとりと血がついていた。

「カール、怪我したの？」

「こんなの怪我のうちに入らないさ」

「怪我したのね」

「大丈夫だよ」

カールはついでに隣の人の縄もほどいてる。
それが誰なのかは、逆光でよくわからない。

「誰がやったの」

私はゆっくりと丸太を取り囲む人々を見やる。

「姫様」
「姫様」
「あぁ、そのお姿。なんと輝かしい・・・」

私が睨みつけると、私の周りの人から順々に跪いていった。
広場にいたすべての人が頭を下げると、たった一人、鼻の頭に憎々しげな皺を寄せてこちらを見ている人がいた。
アヒムだ。
手に持った香炉からは、変な煙が出ている。

「なんだよ、おまえ。
いつの間に逃げ出したんだ。
余計なことはするなって言っただろ！」

「あなたがカールをこんな目に遭わせたのね」

しゅうしゅうと体から湯気が上がる。
魔力がもれだしてる。

「あぁん？　いいじゃねぇか。

そいつ、もういらねぇだろ。おまえには俺がいる」

「あなたなんか、カールと比べる価値もないわ。
私だけじゃなく、カールに怪我をさせるなんて」

いつもなら、こんなに魔力が高ぶったら冷静ではいられないんだけど、今日はやけに気持ちが落ち着いている。
あふれた魔力で気分が悪くなることもない。
まるで何かに吸い取られているかのよう。

「なぜだ！
女王になりたくないのか！
これ以上ないってくらい、ぜいたくな暮らしができるんだぞ！」

一歩、また一歩とアヒムに近付いていく。
周りの人々は、頭を下げたままずるずると下がり、広場の端まで移動していた。
円の中心にはカール。
端にはアヒム。
私はその間をゆっくりと進んで行く。

「カールの側にいられる以上のぜいたくなんて、私にはないわ」

「馬鹿じゃねぇのか、おまえ。
ったくもっと早くそいつを殺しておくんだったな」

「殺す？　カールを殺す？」

恐ろしい言葉に、ぞわりと体の中に渦ができる。
私の中で、何かが起きてる。

「そうさ、そいつがいるから悪(わり)ぃんだろ。
俺のほうがいいぜ。俺は昔からおまえのこと」

「見えた！
いけない、ルチノーちゃん！」

空中から声がとんだ。
何がいけないっていうの。
この人はカールを殺すって言ったのよ。
あの日、冷たい雨の中、寂しくて寂しくて、もう死ぬしかないって思ってた白猫(わたし)を拾ってくれた。
温かな食事と温かな居場所をくれて、私に生きる意味を与えてくれたカールを。

この人、嫌い。
絶対、排除する。

「・・・あなた、許さない！！！！」

「ルゥ？」

「ルチノー！」

「姫様？」

「広場(そこ)で力を使っちゃだめよ！！」

カッ――

私の中に生まれた渦が、広場にあるすべてのものを、はじきとばした。

17　再会と発動（前書き）

大分重複します。すみません。

17　再会と発動

＊＊＊＊＊

「カール！」

ルゥの呼び声で気が付いた。
続いてばさっと何かが落ちた。

「・・・ルゥ！？」

藁の中から顔を出したのは、金髪に青紫の瞳を持った可憐な少女。
ほっそりとした体の線（ライン）を強調するドレスが、よく似合っている。
色味は違うが、まぎれもなく俺の愛するルゥだ。

「カール、怪我したの？」

ルゥが俺の頭を気にしている。
気を失うとき、何か固いものがあたったから多少切れたか。
言われてみればずきずきと痛むが、命にかかわるほどではない。

「こんなの怪我のうちに入らないさ」

「怪我したのね」

「大丈夫だよ」

ルゥを安心させようとするが、怒気を孕んだ彼女の声はますます鋭さを増していく。
朝日のせいだけではなく、ルゥは光を集めたように輝き出していた。
その迫力に、人々はたじろぎ跪いていく。

「誰がやったの」

早くルゥの元へ降りようと、俺は縄をほどくのを急ぐ。
店主も一緒に縛られていたようで、二人分ほどかないと降りられそうになかった。
その間に、ルゥはアヒムと対峙している。

「俺のほうがいいぜ。俺は昔からおまえのこと」

なんだと？
ちょっと待て。聞き捨てならない会話が聞こえてきた。
もしかしてこいつ(アヒム)はルゥの昔の男なのか？

「おい、ル・・・」

なんとか丸太から降りてルゥの元へ行こうとした瞬間。

「見えた！
いけない、ルチノーちゃん！」

空中から声がとんだ。エメも来ていたのか。

「・・・あなた、許さない！！！！」

「ルゥ？」

ルゥの髪が、風を受けたように浮き上がった。
襞の多いドレスも、風にはためいている。
この風は、どこからきている？

「ルチノー！」

アヒムが叫ぶ。

「姫様？」

店主も、丸太から降りルゥを見つめた。

「広場（そこ）で力を使っちゃだめよ！！」

カッ――
ルゥから生まれた風が、広場にあるすべてのものを、はじきとばした。

「うわっ」

腕で目を覆って風に耐える。
ふわっと体が浮き、次に猛烈な勢いで飛ばされた。
広場の周りにあった家の壁に、背中を強く打ちつけて落ちる。

「う・・・っ、くっ・・・ルゥ・・・！」

「大丈夫!?　カール!」

とん、と俺の前に降り立ったのはエメだ。

「あぁ、なんとか。
ルゥは、どうしたんだ」

「魔術陣よ。
この広場のタイルの模様は、ヴィルヘルミーナの城の地下にあった魔術陣とそっくり同じ模様をしている。
それがルチノーちゃんの力を増幅してるんだわ」

「城の魔術陣?」

「なんと・・・では継承の儀の・・・」

つぶやいたのは、同じく飛ばされて隣に落ちたらしい店主。

「あなた誰?　何を知ってるの?」

店主の存在に気付いたエメは、すぐさま詰め寄って、専門的な質問を始めた。
俺にはわからない内容ばかりなので、とにかくルゥをと風が吹き荒れる広場の中心に目を凝らす。
ルゥは、魔術陣の上で手の平一つ分宙に浮いていた。
ドレスの袂から見える肌には、文字のようなものが浮かんでいる。
ルゥの視線の先には、アヒムという男。
ぎりぎりと見えない何かに体を締め付けられているようで、体を奇妙な形にそらせている。
あのまま力が加われば、あいつ、死ぬんじゃないか?

それをしているのはルゥ？
ルゥが、人を殺す？

そんなことはいけない、と思う。
若い頃、戦地に出ていた俺が言うのは何だが、戦で人を殺すのと私怨で人を殺すのとでは、後の後悔が全く違う。
しかも今ルゥは俺の為に力を振るっている。
どんなに許せない輩でも、我に返って落ち込むのはルゥだ。

「ルゥ、やめろ」

彼女を止めようと、手を伸ばす。
ばちんと何かにはじかれたように、広場の中には入れなかった。
うっ、なんだこれは。

「ルゥ、やめろ！　俺は大丈夫だから！」

ならばと叫ぶが、暴風に遮られて声が届く気配はない。
どうしたらいいのかと奥歯を噛む。
すると、

「これを使ってください」

と店主が一振りの剣を差し出してきた。
エメとの話は終わったのか。
店主の手にあるのは、俺が使うには頼りない細身の優美な剣。
それを見たエメが息を飲む。

「ヴィルヘルミーナの宝剣！　そんなものまで持っていたの」

「えぇ。私、本名（フルネーム）はマクリミリアン＝アドルフ＝バルデスと申します。
遠い昔、この国で宮廷騎士などをやらせていただいておりました」
通りで菓子屋の店主にしては、鍛えられた体をしていたわけだ。
ここにいた人々が一目置いていたのにも得心がいく。

「継承の儀がなされているなら他の者は入れませんが、エメさんの話によると、姫様の術が陣の力を借りて行使されているだけのようです。
ならばこの術風は、この剣で切り裂けます」

「俺が行っていいのか」

エメを伺う。
自慢じゃないが、魔術はさっぱりわからない。

「私は無理よ。術の性質が違うから、跳ね飛ばされちゃう。
それにああなった原因がカールなら、ルチノーちゃんを止められるのは・・・あなたしかいないそうだわ」

ならば、と剣を抜く。
刀身が淡い光を放った。
すっと剣を降ろすと、その場所だけ風が凪ぎ、またすぐに風が戻った。
どうやら一瞬だけ入口を開けるようだ。
深く息を吸って、吐く。
呼吸を整えて、いざ、店主から受けとった剣を振り下ろした。

中に入ってみると、外よりも強い風が吹き荒れ、すぐ後ろにいるはずのエメたちの姿すら見えなくなった。
退路を確保できないまま進むのは正直言って不安だが、この先にルゥがいる。
そう思って歩を進めた。

「ルゥ！　どこだ！」

風はルゥから噴き出していた。
ということは、風の強い方へ向かえばいい。

「ルゥ！」

剣を振るい、腕で目を守りながら進む。
先に、光るものが見えた。ルゥだ。
そこではたと気が付いた。
エメは俺にしか止められないと言ったが、ルゥのところまでたどり着いたとして、どうすればいいんだ？
ルゥに会って、俺にできることといえば・・・。

光に近付く。
波打つ髪は風に乱れ、見慣れぬ青紫（ヴァイオレット）の瞳には、何をも映していなかった。

「ルゥ、もう大丈夫だ」

剣を地面に突き刺す。

両手を広げ、光を抱きしめた。

「・・・・カール？」

「あぁ」

「カール、大丈夫？」

焦点が合い、俺を見止める。

「あぁ。これくらいの怪我、平気だって言ったろ」

「カール・・・！」

ぎゅうっとしがみついてくる。

髪を撫で、額に、頬に口づけていくと、次第に嵐がおさまっていった。

宙に浮いてぎりぎりと締め付けられていたアヒムが、どさりと落ちる。

「ルゥ、ようやく会えた」

「ん・・・カール・・・。
ごめんなさい、私のせいで」

「ルゥのせいじゃない。悪いのはあのアヒムとかいう男だろう」

「アヒム・・・そう・・・。
カールに怪我をさせて。しかもカールを殺すって・・・。
アヒム、嫌い。あんな人、いらない」

ルゥが地面に倒れるアヒムを睨みつける。
再びルゥの周りに風が巻き起こる。

「だめだ、ルゥ」

頬を両手で包み、乾いた唇に口づけた。

「ん、何、カール。止めないで」

「だめだ。君の手を汚す必要なんてないんだ」

アヒムはすでに虫の息で、びくびくと痙攣していた。
これ以上やったら本当に死んでしまう。
アヒムの方へ向かおうとするルゥを、抱きしめ口づけた。
無理矢理俺の方を向かせて下唇を舐め、また角度を変えて口づける。

「んっ、カール、行かせて」

「だめだ。他の男のところなんて行くな。
俺だけ見てろ」

「そ、そういうことじゃないんだけど・・・。
あっ・・・ふ・・・」

口づけの合間に、歯列を割って舌を差し込む。
髪を撫で、舌をからめれば、だんだんとルゥが蕩けてくるのがわかった。

「あとは、俺にまかせて。エメもいるから、ルゥが無理することな

い」

「そう、なの？　もういいの？」

風が、おさまる。

ルゥが体の力を抜いて、俺に寄りかかってくる。

「あぁ」

そっと離して瞳を見つめれば、かすかに微笑んでがくっと膝が折れた。

「ルゥ！？」

慌てて揺する。

呼吸に乱れはない。気を失っただけのようだった。

「よかった、ルゥ・・・」

細い腰を支えてほっと息をつくと、急に辺りの音が聞こえてきた。

これは、戦いの音！？

「カール！　のんびりしてないで、こっちを手伝ってちょうだい！」

手で印を結び、正面の黒ずくめの男をエメがはじきとばす。

店主も手に剣をもち、応戦していた。

「これは一体！？」

「暗殺者集団（フィダーイー）よ！　様子を伺ってたのね！

日の出と同時に攻めてきたわ。
くっ・・・朝日を背にしていたから、気付くのが遅れて・・・」

エメの足元には、刺されたらしい民衆が倒れていた。
ルゥを抱え上げ、宝剣をとって駆ける。

その背後で、一人の男がアヒムに近付いていた。
倒れたアヒムの髪をつかみ、強引に起き上がらせて喉仏に短剣を押し当てた。

「裏切り者には死を。
たとえ尊師の息子であっても例外はない」

「ひっ・・・」

何気ない動作で引かれた短剣が、どす黒い血をその首から吹き上がらせた。

18　その後

＊＊＊＊＊

その後のことは、家に帰って落ち着いてから、カールから聞いた話。
私が気を失うと魔術陣の効力が切れて、広場で大乱闘になった。
人々は逃げ惑い、カールとエメさん、アドルフさんで応戦したけれど、かなり苦戦したそうだ。
厳しい状況に追い込まれたそのとき、現れたのは騎馬の一軍。
王様率いるブルクハルトの軍団が、ぐるりと広場を取り囲んだそうだ。

王様は、エメさんを通じて王子様保護の連絡を受けてすぐ動いた。
親衛隊と、ブルクハルトの第一師団を連れて、こちらに向かったらしい。
途中、フィダーイーの本部も潰した。
ヴィルヘルミーナにいた数人のフィダーイーは、カールたちによって粛清された。
王様にはフィダーイーに関する独自の情報源があったらしく（それがどこなのかはカールも知らないらしい。親衛隊長（コスティ）さんは知ってそう）、二度と組織として活動できないようにしたと言っていた。

アヒムは、仲間（フィダーイー）の手によって殺されていたそうだ。
死んだと聞いても、何の感情もわかないのは薄情かしら。

彼の亡骸は、地中深く埋められたと聞いている。
体そのものが毒を持っていて、その処分方法に頭を悩ませたらしい。

彼が持っていた香炉には、幻覚と催眠の作用がある毒が仕込まれていたそうだ。
だからあんなにみんなすぐにアヒムを信用したし、狂ったようにカールを殺そうとしたんだって。

ヴィルヘルミーナの人々は、私に残って欲しいと強く願ったそうだ。
カールと王様は、とにかく私の意見を聞かないことにはと言って、半ば強行にブルクハルトに戻ったみたい。
その後、アドルフさんの尽力もあって、旧ヴィルヘルミーナ領に魔術学院を作ることになった。
場所は広場の魔術陣の上で、初代院長はエメさん。
他に辺境で会ったウーリーさんが、講師として勤務するそうだ。

私の故郷（ヴィルヘルミーナ）はブルクハルトに属する町のひとつとして、再出発することになった。

エピローグ

＊＊＊＊＊

数週間後。

「なんで俺の家で飲み会なんだ」

「大会前に約束しただろ。奥さんに会わせるって」

「負けたときだろ？　俺は負けてないぞ」

「勝ってもいないな」

「ヴァイノには勝った」

「この期に及んで往生際の悪い！　もう玄関前だろうが！」

そう、俺は今、マルリ、ユハ、ヴァイノ、オロフと共に家の前に立っている。

俺は散々嫌がったが、こいつらに押し切られてとうとうここまで来てしまった。

観念して玄関を開けると、中からいい匂いが漂ってきた。

台所から、ぴょこんとルゥが顔を出す。

髪は白。瞳は真紅。

日常生活を支障なく送るため、力をエメに封じ直してもらったため

だ。
どんなルゥでもルゥはルゥだが、俺にはやはりこの色合いがしっくりくる。

「あ・・・みなさん、ようこそおいでくださいました。
ルチノーです」

髪をゆるい三つ編みにして、白いエプロンをしたルゥは、いつも通り可愛らしい。
こいつらに見せるのは本当にもったいない。

「萌え！」

マルリが叫んだ。

「も、もえ？」

「おおおおまえ、なんてうらやましいやつ！！！」

興奮したマルリが、俺の襟首をつかんでがくがくと揺さぶってくる。

「うるさい！　やめろ！　首がもげる」

「おまえの首なんぞどこへでも飛べ！　く～！」

「なんなんだ、おまえは！」

などと俺がマルリの相手をしている隙に、ユハがルゥに近付いていた。
どこに隠し持っていたのか、大きな花束を手渡す。

「ルチノーさん、体調はいかがですか？」

「まぁ、きれい！
いつもすみません、ユハさん。
お見舞いのお菓子も、たくさんありがとうございました。
もうすっかりいいんです。でもカールがなかなか起きさせてくれなくて」

俺の頭の怪我はすぐ治ったが、ヴィルヘルミーナから戻ってきたルゥは、熱を出しやすくなっていた。
寝たり起きたりの日々が続いて、ようやく最近元気になったのだ。

「おい、なんだかユハのやつ、様子が違うな」

「あんなにマメな奴じゃなかったよな」

「というより女嫌いのはずじゃなかったのか？」

「カール～？　いいのか？」

マルリたちは、驚いた様子でささやき合う。

「いいはずないだろう。毎日毎日毎日何かと理由をつけては来やがって。
おい、ユハ！　いつまで立ち話をしている気だ。
ほら、こっちが食堂（ダイニング）だ！　さっさと来い！」

ユハの襟首をつかまえてずるずると引きずる。
俺と背丈の変わらないこいつを引っ張るのは、なかなかに重労働だ。

「あ、私ったらお引止めしてすみません。どうぞ」

他の面々も、ルゥに促されて室内に入る。
食堂（ダイニング）には、ルゥの心づくしの料理が並んでいた。

「うっわぁ、うまそう！」

「こんなにたくさん、大変だったでしょう」

ヴァイノが感嘆の声をあげる。
おまえ、ちょっと立ち位置が近いんじゃないか？
確か婚約者がいただろう。

「ふふっ、みなさんにお会いできるのが楽しみで、昨日からはりきっちゃいました」

微笑みかけられたヴァイノ、そしてマルリは、でれっと鼻の下を伸ばしている。
こいつら、要注意。
オロフは料理の方に目がいってるから・・・大丈夫か。

ルゥの給仕で食事が始まる。
食べている間も、俺は気が気じゃない。

こら、ユハ！　ルゥにばかり話しかけるな！
ルゥ！　マルリなんかにそう何度も麦酒を注がんでいい！　勝手に呑むから！
ヴァイノ、その目つきは怪しくないか？　婚約者に告げ口するぞ！
あん？　オロフはおかわりか。まぁいいかって、手が触ってる！

やめろ！

食事を終えるころには、はらはらし通しだった俺は疲れきり、他の奴らは上機嫌だった。

腹がいっぱいになったので、居間に場所を移して本格的に呑む態勢になる。

酒も蒸留酒に変えた。

甘党のユハの前には、ルゥが漬けた果実酒がある。

その果実酒を一口飲んだユハは、奴の取り巻き（ファン）が見たら一目で腰が砕けるであろう笑みを浮かべてルゥを見た。

「この果実酒、美味しいですね」

「よかった。私、お酒強くないから、あんまり味見もできなくて、どうかなって思ってたんです」

「そうなんですか。全然飲めないんですか？　ミルクで割って、氷も入れればかなり薄まりますよね。せっかくだから一緒に少しどうですか」

「うーん。ちょっとだけなら、飲んでみてもいい？」

上目づかいに俺を見て、伺いを立ててくるルゥ。

「少しだけな」

「ありがとう、カール！」

これだけ準備をしてくれて、みんな楽しく飲んでいるというのに、

ルゥだけ仲間外れはかわいそうだろう。
そう思ったのだが。

「んふふふふ、マルリさんって面白いですねぇ」

案の定、たった一杯で顔を真っ赤にさせたルゥは、ご機嫌で笑い続けている。

「あはは、ルチノーちゃんもかわいいよぉ。
んで、何？　いつ出発するって？」

「来年の春だ」

「あー、もうそのころには建つのかー」

現在、旧ヴィルヘルミーナ領には、ブルクハルト王国管轄の魔術学院を建設中だ。
ルゥも、魔術学院の生徒としてヴィルヘルミーナに行くことになった。
当然、俺も行く。

「おまえは行って何するわけ？」

「町の警護団の団長だな。
町と言っても元々は一つの国だったところだ。
かなりの規模になるだろう」

「団員は？」

「その土地で集める」

「おまえひとりでできるの？　組織作りとか」

「以前辺境で一緒だったギュンターという男がいるんだが、そいつが一緒にやることになった」

「へぇ・・・」

リクハルド様からはすでに任命書が出ている。
好きな者を連れて行けと言われ、真っ先に浮かんだのがギュンターだった。
辺境とは勝手が違うだろうが、彼の柔軟さは俺に足りないものを補って余りある。

「マルリ、寂しいんだろう」

「だな。一緒に行ったらどうだ」

酒片手に、ヴァイノとオロフが言う。

「な、何言ってんだ。
おい、ユハ、おまえこそ行けよ。
新しい土地で、あの子と菓子屋ひらけばいいじゃん」

「菓子屋？」

「おうおう、カール、聞いてくれよ！
城の女の子に聞いたんだけど、ユハのやつ、いつの間にか」

「だまれ」

にやにやとからかい口調になったマルリに、ユハが腰にはいていた剣をするりと抜いた。

「あっぶね！　本気（マジ）で抜く奴があるか！」

「うはは、オロフ、ユハを押さえてろ。
んで、ユハが何だって？」

「・・・ヴァイノ、殺す」

「うるせぇ。そうか！　とうとうユハにも春が！」

「そうなんだよ。ユハが休憩時間に抜けて行ってた菓子屋があるだろ、そこの看板娘とな」

「おお、通りで頻繁に行ってると思った」

「あれはルチノーさんへの見舞いを買いに行ってたんだ！」

「見舞いを買ってたのがどうなったんだ？　おい」

ルゥとは関係のないところで盛り上がりだした面々に一安心していると、とんっと肩に重みがかかった。
ルゥだ。

「みんな、いい人だね」

「そうだな」

何の話もせず、勝手に親衛隊を飛び出した俺を、こいつらは何もなかったように迎え入れてくれた。
後で事情を話したら、水臭いだの馬鹿野郎だのと言ってどつかれた。
憎まれ口を叩きながらも、その実、ずっと心配してくれていたことを知っている。
今日も、ルゥに会わせろといいながら、今後のことを気遣って訪ねてきてくれたのだろう。

「ルゥはもう上で休め」

「うーん、でもおつまみとか・・・」

俺に寄りかかるルゥは、酒のせいで頬を染め目を潤ませており、その上眠そうで、相手の出方次第でどうにでもなりそうな風情だ。

「大丈夫。あとは俺がやるから」

「でも・・・」

「頼む」

こんな姿、やつらに見せるわけにはいかない。
俺の懇願を受けて、ルゥは渋々と二階に上がって行った。

夜中、ユハたちは帰って行った。
寝室を覗くと、ルゥは寝台の上にうつぶせになって、エプロンをしたまま倒れ込むような形で眠っていた。
服をくつろがせ、掛け布をかけてやる。

「ん・・・」

「起こしてしまったか」

「あ・・・寝てた・・・。みんなは？」

「帰った。たくさん用意してくれてありがとう」

ちゅっとこめかみに口づける。
くすぐったそうにしたルゥは、微笑んで俺を見つめてきた。

「お見送りできなくてごめんなさい」

「いいんだ、あんな奴ら。
水、飲むか」

「うん、ちょうだい」

用意しておいた水差しから水を汲んで、手渡す。
こくこくと、細い喉が動く。
見るともなしに見ていたその動作に、ずくんと体がうずいた。

「気分はどうだ」

「ん、大丈夫だよ。
ちょっと寝たからすっきりした」

「そうか。体調は？」

「良いよ。もう、カールは心配しすぎだから」

「まぁな。
じゃぁ、そろそろいい？」

「？　何が？」

水を置いて横たわったルゥに、覆いかぶさる。

「俺にしては、ずいぶん我慢したと思わないか？」

「あ、えっと、それって」

「そう」

せっかく掛けた布だが、邪魔なので取り払う。
元から寛がせておいた服は、あっさりと脱げた。

「あの、でもカール、今日呑んでるし」

「む。呑んで勃たなくなるほど年じゃないぞ」

「え、そういうことじゃなくて。
あっ、んっ」

滑り込ませた手に、ルゥが反応する。
滑らかな肌はすぐに上気したけれど、何から動きが固い。

「ルゥ、嫌？」

「嫌、じゃ、ないよ。嫌じゃないけど」

久しぶりだから、恥ずかしい・・・。
そう耳元でささやかれて、理性のたががはずれた。

「あっ、んっ、やっ、カール、待って」

「そこ、だめっ、あああんっ、はぁっ、激し・・・っ」

「え？　もう一回・・・？
もうだめ、眠らせて・・あっ、はぁっ、あぁぁぁぁぁ！」

気絶するように眠ったのは明け方近く。
目覚めた時には、昼すぎだった。
俺の腕の中には、すやすやと眠るルゥがいる。
その身体には、愛し合った証拠の赤い花が散っている。

ルゥ、ようやく取り戻した。
離れていたのは一週間にも満たないほどだったが、その間生きた心地がしなかった。

王都に帰ってきてからも、ルゥが熱を出すたびにおろおろした。
ヴィルヘルミーナに来てほしいという打診は、ルゥが俺よりも故郷を選ぶのではと思い、気が気じゃなかった。
しかしそんな俺にルゥは、「カールがいるところが私の故郷（いるところ）」と言って微笑んだ。
だから、かえって俺がついて行こうという決心につながった。
親兄妹も親衛隊員の地位も関係ない。
俺こそ、ルゥがいるところが俺の居場所なのだから。

あの雨の日、偶然耳にした猫の声。
あの出会いが俺を変えた。
もしあそこでルゥに出会わなかったら、俺は辺境で腐って一生を終えていたに違いない。

「ん・・・」

ルゥが寝返りを打つ。
白い肌が、日の光を浴びて輝く。
うっすらと開けられた唇に、吸い寄せられるように口づけた。

「・・・っ・・・あ・・・。
おはよう、カール」

「おはよう」

挨拶を返すと、ふわっと幸せそうに微笑み、紅玉の瞳が俺だけを映した。
胸の内から愛しさがこみあげる。
何度抱いても、次の瞬間には再びつながりたくなってしまう。
しかし、今日はこれ以上は我慢しなければ。ルゥを壊してしまう。

そのかわりに、と耳元に口を寄せた。

「ルゥ。ルチノー・・・愛してるよ」

「きゃ！　なぁに、急に」

「言いたくなっただけ」

なんで驚くんだと顔を起こすと、真っ赤になったルゥがいた。

「もうっ、カールったら」

「カールったら、何？」

「何って・・・。わ、私も愛してるっ」

照れ隠しに抱きついてきたルゥをきつく抱きしめる。
そのまま口づけたら、結局最後までいってしまった。
今日はもうやめておこうと思ったのに。

「あっ、はぁっ、カールっ、カール！」

俺を呼び、伸ばされた手をつかむ。
数えきれないほど重ねた唇を、再び合わせてささやいた。

ルゥ、愛してる。

命ある限り、君をずっと守り抜く――。

エピローグ（後書き）

月光編あります。
エピローグ、ですが、まだ続きます＾＾

＊＊＊＊＊

とてとてとて。
城下町を歩く。
首輪はない。
しっぽの先に、カールが持っていてくれた赤いリボンだけが結ばれている。

今日は、カールは親衛隊に出勤する最終日だといって出かけて行った。
王都にいるのも残り一週間。
思えばいろいろなことがあったなぁ。
これまでのことを思い返しながら歩いていると、人ごみの中にカールを見つけた。
あれ？
昼休みかな？

「なーぅ」

カールっ
ととっと駆け寄って、その肩に飛び乗ろうとして慌てて止めた。
カールの隣・・・すごくきれいな女の人がいた。
誰？

妹（ミレイユ）さんではない。
カールに見つからないよう、人ごみに紛れて耳をそばだてる。

「・・・ったよ、ブランディーヌ」

「ふふっ、またね」

聞こえたのはそれだけ。
二人は手を振って、すぐに別れてしまった。
ブランディーヌ。
確かにカールはそう言った。
その名前には聞き覚えがある。
お城のお姉さんが言っていた、カールが行きつけだったっていう高級娼館？の女の人の名前じゃなかった？
カール、どういうこと。
もしかして、浮気？

＊＊＊＊＊

「ただいま・・・っと、ルゥ？　いないのか？」

最終日の仕事を終え帰宅すると、家の中は真っ暗だった。
隊舎に置いていた私物や、餞別などが入った袋を玄関に置いて、明かりを点ける。

「ルゥ？　出かけてるのか？」

家の中に呼びかける。
すると、一週間後に控えた引っ越しの為荷造りされた箱の影から、すっと白い姿が見えた。

「なんだ、驚かすなよ。
どうした？　具合でも悪いのか？」

「なーう」

抱き上げて肩に乗せる。

「ははっ、こうしてると、昔みたいだな。
今日は猫のままっていうのもいいな」

俺は冗談のつもりでそう言ったのだが、ルゥはどういうわけかそのあともずっと猫のままだった。

「本当にどうしたんだ？　まさか人に戻れなくなったのか？」

ルゥと二人、湯船に浸かる。
ルゥは白い毛がお湯に濡れてぺしゃんとつぶれ、情けない姿になっていた。

「んなー」

心なしか、元気もない。

「ルゥ？　一体どうした」

抱いたルゥの喉を撫でてやる。
ごろごろと喉を鳴らして気持ちよさそうにするものの、しゃべりはしない。

「ルゥ？」

真紅の瞳をじっと覗き込む。
すると、不意にその瞳にぶわっと涙が浮かんだ。

「えっ、おい、どうした！」

「う・・・ふにっ・・・うな・・・」

ふわあぁぁ！
猫のまま泣きだしたルゥは、目が溶けるんじゃないかと思うほど涙を流し、風呂から上がってタオルで拭いてやり、白い毛がふかふかに乾いてからも、目の周りだけはずっと濡れていた。

「う・・・ひっく。ふぇ・・・」

「あー、それで、浮気かと思ったわけだな」

「う、うぅぅ〜」

腕が疲れるほど撫で続けて、ようやく人型に戻ったルゥは、寝台の上で丸まりながら泣いていた。

「ルゥに言わずに彼女に会ったのは悪かった。
昔はともかく・・・そんな関係じゃないんだ」

「う、うぅ・・・。
な、何、昔って・・・昔って・・・」

「昔？　しまった、藪蛇だったか・・・。
まぁ、昔は昔だ。
それより、大事なのは今だろう。
俺が愛してるのは、ルゥ、君だけだよ」

「そんなの、信じられない。
だって、あの人、すっごくきれいで、私よりずっとカールに似合ってた・・・」

童顔で、ちっちゃくて、特殊な事情を抱えた私（ルゥ）なんかより、女にしては背が高く、派手な容姿のブランディーヌのほうが俺に似合うんだと。
そんなの、誰が決めたんだ。

「いい加減にしろ。
ほら、目元を冷やして。そんなんじゃ明日かぶれて大変だぞ」

強引に起き上がらせて、俺の膝の上に乗せる。
真っ赤に腫れたまぶたに、保冷石を手巾で包んだものをあてた。

「冷たい・・・。気持ちいい・・・」

「だろうなぁ。そんなに腫れてちゃ」

「だって、カールが悪いんだもん」

「あぁ、はいはい、俺が悪いんだよな」

「何よ、その言い方」

「すまん。二度とルゥに黙って他の女には会わない。
本当に悪かった」

「・・・わかってくれればいいけど・・・何にやけてるの」

幾分腫れの引いた目で、ルゥが俺を睨んでくる。
ついつい緩んでいた口元を、手で覆って隠した。

「いや、こうも強烈に妬かれるとは思わなかったから、嬉しくて」

「妬っ・・・！
違う、妬いたわけじゃないもん」

「そうか？」

「そうよ。別に、焼きもちじゃないよっ」

「なんだ、違うのか。残念だな」

「残念？　カールは私に妬いて欲しいの？」

「あぁ、いつもいつも俺ばかり騒いでるからな。
たまにはそういうのもいいだろ？」

「たまにはって・・・私すごくショックだったのに・・・。
私に妬かせるために、あの人に会ったの？」

「そうじゃないさ。ルゥに見られたのは偶然だしな。
彼女に会ったのは・・・」

寝台の横に持ってきておいた小箱をとる。
ルゥの小さな手の平にも収まるその箱は、昼間ブランディーヌにつきあってもらった店で買い求めたものだ。

「開けて」

「いいの？」

「あぁ」

ルゥがそろりと小箱を開ける。
少なからずどぎまぎしながら彼女の反応を伺っていた俺は、ぱあっと表情が明るくなったのを見てほっと息をついた。

「きれい・・・」

箱の中に納まっていたのは、一対の指輪。
それぞれに小さな紅玉（ルビー）が埋め込まれている。

「双子石のペンダントは割れてしまったからな。
俺からルゥに贈り物ってほとんどしたことがなかっただろう。
王都に戻ったら何か買おうと思っていたのだが、どの店で買ったらいいかわからないし・・・。
それでブランディーヌに店を教わっていたんだ」

「そうだったの」

ルゥが小さいほうの指輪を取り出す。
女性向けに作られたこの指輪は、紅玉（ルビー）の左右に金剛石（ダイヤモンド）もちりばめられていた。

「カール？」

ルゥが自分で指に指輪をしようとするのを止めて、ほっそりした手を握りこむ。

「どこかの国ではな、婚姻の約束に揃いの指輪を作るそうだ。
そしてお互いの指にはめるんだと」

「お互いの」

「あぁ。だからこれは俺がはめる」

指輪を取り、大きさの合いそうな指に入れた。
指輪は、ルゥの薬指を美しく彩った。

「素敵・・・。
じゃぁ、カールのは私がするわ」

「右手は剣を持つからな。左にしてくれ」

「うん」

こちらは紅玉一粒だけの、太めの指輪だ。
ルゥと同じ指におさまり、同じ色に輝いた。

「嬉しい・・・。ありがとう、カール」

指輪のはまった手をからめる。
どちらともなく、自然と唇が重なった。
たっぷりと味わって、銀糸を引きながら唇が離れるときに、ルゥが体を寄せながらつぶやいた。

「あぁ、でもくやしいな。
今日のことでわかっちゃった」

「なんだ？」

「私の方が、カールのこと好きだってこと」

きゅうっと俺の服をつかんでくる。
髪を撫でれば、頬をすりよせてきた。

「そんなことはない。俺の方が好きだ」

日々どれだけ焼きもちを妬かされていると思っているんだ。

「私の方が好きよ」

「俺のほうが好きだ」

「私よ」

「俺だ・・・ってどっちでもいいんじゃないか？」

ふっと笑ってまた口づけた。

意地になって尖っていたルゥの唇も、すぐにほどけて俺を受け入れる。

「でもきっと、恋したのは私が先ね」

「それは・・・」

俺は、初めは猫だと思っていた。

「ね？」

「まぁ、きっとそうだな」

やっと勝ったと満足そうな笑みを浮かべるルゥ。

この勝ち負け、俺を喜ばせるだけだとわかっているのだろうか。

「この指輪、猫になったらとれちゃうかなぁ。

鎖にでも通して、首にかけておいたほうがいいかしら」

「猫にならなければいいんじゃないか？」

「え？」

「猫のルゥもかわいくて好きだが、魔力の制御（コントロール）はできるようになったんだろう？
ずっと人の姿でも問題はないと思うが」

「あ・・・そうだけど・・・。
そっか、もう猫には・・・」

俺は当たり前のことのように言っただけだったのだが、ルゥはじっと考え込んでしまった。
ぶつぶつと何やらつぶやいている。

「元々生活のためだったし、エメさんの魔術は切れてるし、ヴィルヘルミーナに行ったら容姿をごまかす必要もないし・・・」

「そんなに悩むなら、好きな時に猫になってもいいが。
指輪（これ）はルゥが言うように」

「うん、決めた！」

「鎖に通せばいい・・・って、決めた？」

「もう猫にはならない」

「そうなのか？」

「うん。なるにしても、どうしても必要なときだけにする。
私、ずっと自分に自信がなくて、猫の姿に逃げてたようなところがあったの。
これからはそれじゃいけないでしょう？
ちゃんとカールに似合う女の人になるためにも、もう猫にはなら

ないわ」

「そうか。
　ルゥはそのままでルゥなんだから、俺に似合うっていうのは必要ないが、前向きに何か決めたなら応援する」

「うん、ありがとう」

晴れ晴れとした笑顔を見せるルゥは、目のまわりの腫れもすっかり引いていた。

「じゃぁ、もう寝よう。
　今日は疲れたんじゃないか」

「ん、そうだね。おやすみ、カール」

「あぁ、おやすみ」

＊＊＊＊＊

翌朝。
昨日迷惑をかけちゃったから、朝ごはんは気合を入れてがんばろうと早起きした私は、玄関に置かれた袋に気が付いた。

「もう、こんなところに置きっぱなしにして。
　隊舎にあった荷物かな。

ごはんを作る前に片づけちゃおう・・・って・・・何これ」

袋の上の方にあったのは、確かにカールの持ち物だった。
でもその下にあったのは。

「大好きなカール様へ、カール様愛してます、カール様遠くに行っても忘れないで・・・何これ、何これ!!!」

どんどん出てくるプレゼント。
そのどれもに熱烈なメッセージがついていた。

「なんでこんなのもらってくるのッ」

最後は袋を逆さまにして乱暴に全部出したところに、カールが起きてきた。

「おはよう、ルゥ。何を騒いでる・・・」

「カール！　何これ！」

「ん？　何って餞別だが」

「餞別ぅ!?　全部女の子からじゃない！」

「隊長やマルリたちからのもあるぞ。
ユハからのは・・・嫌味たっぷりの手紙つきだったな」

「そんなのごく一部でしょっ。
もう、カール、酷い！
カールなんて知らない！！」

ばんっと玄関を開けて飛びだす。

「あっ、おい、ルゥ、服っ、指輪っ
もう猫にならないって昨夜言ってたじゃないか、おい――！」

「・・・で、飛び出してきたのぉ？
朝っぱらから何事かと思えば・・・」

耳を垂らしてえぐえぐと泣きついたのは、城下町にあるエメさんの家。
エメさんももうすぐ引っ越しだから、お城の部屋は引き払って、今は自宅にいる。

「だって、だって、あんなにいっぱい女の子から・・・。
私が知らない間に、どんな顔して受け取ってたのかと思うと・・・」

「いいじゃないの、最後くらい。
女の子たちだって、別に本気でカールとどうこうなりたいって思って騒いでるわけじゃないんだから」

「そうだ。単に騒ぐ相手がほしいだけのようなものだ」

「え？」

エメさんだけだと思ってたら、奥から誰か出てきた。
この声、まさか。

「あんた、何で出てくるのよ」

「そろそろ城に戻ろうかと思ったら、声が聞こえたものでな」

癖のある栗色の髪に、濃い灰色（グレー）の瞳。
鍛え上げられた上半身には、隙のない筋肉がついていて・・・筋肉？

「な・・・んで王様がエメさんの家に・・・。
こんな朝早く、しかも裸・・・」

「あー、まー、成り行き？
最後だとか言って、押し切られちゃって」

「たゆまぬ努力の成果だな。ここまで本当に長かった。
しばらく寂しい思いをさせるが、時々は私もヴィルヘルミーナに行くから。
ちゃんと私のことを待ってろよ、エメ」

「はぁ！？　あんた、それ話が違うじゃない！
来なくていいわよ」

「なんだと？　一回きりで終われるわけがないだろう。
私がどれだけ我慢したと思って」

「妾妃三人も抱えて我慢とか、どの口が言うのよ、この女好きー！！！」

ばちっとエメさんから火花が散る。
慌てて逃げた王様だったけれど、家の奥の方でぎゃあっと叫び声が聞こえた。
たぶん、雷気にあてられたんだと思う。

「ふんっ。
あんなのと比べればカールなんて。
口と態度は悪いけど、本当にルチノーちゃん一筋じゃない。
あなたは奥さんなんだから、自信持って。
女の子のプレゼントくらい笑って開けて、カールの代わりにお返し選ぶくらいの余裕を持ちなさい」

「そ、そうね。私、帰る」

エメさんに言われて帰ってきたのはいいけれど、なんだか家に入りづらい。
玄関の前でうろうろしていたら、苦笑したカールが迎え入れてくれた。

「焼きもちは嬉しいが、飛びだすのはやめてくれ。
心配する」

「うん、ごめんなさい。
今度からは、雷落とすくらいにするわ」

「は？　雷？」

猫の私を抱き上げたカールに、エメさんの家でのことを話した。

「それは・・・恐ろしいな。
陛下も本当にエメに手を出すとは、勇気がおありになる・・・」

結局カールが作っておいてくれた朝ごはんを食べて、プレゼントの山は一緒に片づけた。
お返しも城下町で一緒に選んで（アドルフさんのところのお菓子にした）、でもカールが会って渡すのは私が嫌だったから、マルリさんに頼んで返してもらうことにした。
猫になったときに落としちゃった指輪は、改めてカールにはめてもらった。

「駆けて行くルゥと残された指輪（これ）を見たときは、何が起こったのかと呆気にとられて、そのあと俺の贈り物はその程度かと落ち込んだ」

「ご、ごめんなさい。もうしない」

そうだ、せっかくもらった指輪を放り出すことになっちゃったんだ。すごく悪いことをしてしまった。

「戻ってきてくれたから、いいけどな。元はと言えば不安にさせた俺のせいだ。
ルゥが信じてくれるまで何度でも言うさ。
愛してるよ、ルゥ」

「信じてないわけじゃないのよ。カールはすごく私を大事にしてく

れて」

「あぁ。わかってる。
では、俺が言いたいから言う。
愛してる。愛してるよ、ルゥ」

「そ、そんなに何度も言わなくてもいい」

「言いたいんだ」

どんどん頬が熱くなっていく私を、蕩けそうな瞳で見つめてくるカール。
こんな顔、他の誰にも見せたくない。
私だけを、ずっと見ていてほしい。

髪を撫でられ、口づけをしながら考える。
でもなぁ。
ヴィルヘルミーナに行ってからも、きっとモテちゃうんだろうなぁ。
その度に私は焼きもちを妬くんだわ。

猫でも人でも同じよね。

きっと、私。

ずっと、あなたに恋わずらい。

白猫の恋わずらい――――完

白猫の恋わずらい（後書き）

焼きもちルゥちゃんの回でした＾＾
本編はこれにて終了。
番外編があります。

カールのおうちへいこう（前書き）

王都に来たばかり～現在までのお話。

「延び延びになっていた食事会、次の休みならみんなの予定が合いそうなんだが、どうだ？」

夕食の後、ソファの上に寝そべってくっついていると、「今日のおやつは何がいい？」くらいの気軽さでカールが聞いてきた。
びっくりしてがばっと起き上がる。

「ええ？　食事会って、食事会って、カールのご家族と会う食事会！？」

「あぁ。二番目の兄貴が急に帰ってくることになってな。ミレイユもその日なら来られると言うし」

「行商に出てるっていうお兄さんね。
ミレイユさんは猫の姿でなら会ってるけど・・・ってそういう問題じゃないわ！
次の休みって言ったら明後日じゃない！」

「何か予定があるか？」

「予定はないけど、服！　手土産！　それより心の準備が・・・」

「みんなで飯食うだけだから、別に気にしなくていい」

「よくない！　きゃあぁ、どうしよう」

混乱して手足をばたつかせる私を、カールは不思議そうに見ている。

「服は、この前仕立てたのがあるだろう。手土産はなくてもいいと思うが、どうしても気になるなら途中で買って行けばいいんじゃないか」

「そんな適当に選んだみたいなの、失礼じゃない。お義父さんは何が好き？　お義母さんの好きな食べ物は？」

「あー・・・なんでもいいんじゃないか」

「もう！」

ばふっとクッションで叩こうとしたら、避けられてしまった。
腕をとられて、くるっと一回転。
あっという間にカールの下敷きにされる。

「なぜ怒る？」

「当たり前でしょう？　カールのご家族に会うんだもん、気を遣うわ」

「遣わなくていいって。ルゥはそのままでいい」

「そんなわけないもの・・・んんっ」

唇を塞がれて、いたずらな舌がすぐに入り込んできた。

「あ・・・ふ・・・。ごまかさないで」

「怒った顔がかわいくて、つい」

「そんなこと言って・・・あっ、あぁん」

結局そのままソファの上でされてしまって・・・手土産は決まらなかった。
どうしよう、もうっ。

「ルチノーさん！　いらっしゃい」

食事会当日、出迎えてくれたお義母さんは、相変わらずふんわりとした雰囲気の、とても優しい笑顔だった。
おずおずと差し出した手土産（エメさんに相談。王室ご用達のお茶にした）も、嬉しそうに受け取ってくれた。よかった。

以前も通された、お店と一続きになっている応接室のソファに落ち着く。
近所の小料理屋に頼んだ昼食がもうすぐ届くから待っていて、と言われた。
その間に、以前会えなかったご家族を紹介してもらった。

「おー！　君がカールの！　初めまして、二番目の兄、クィールです」

「・・・妹のミレイユです」

「は、はじめまして、ルチノーです」

クィールさんは、カールより少し背が低くて、カールほど女性受けはしなそうな感じだけどひょうきんな感じが親しみを持てる人だった。

ミセイユさんは、なぜか初めからきつい目でカールを睨んでいる。

「あれ、ミレイユ、おまえも会ったことなかったのか？」

「そうよ。カール兄さんったら、辺境から帰ってきたと思ったら、結婚するだなんて言って、一言も相談なし！」

「別におまえに相談する必要はないだろ」

「兄さん！」

「おいおい、落ち着けって。カールもそんな言い方するなよ」

いまにも兄妹喧嘩がはじまりそうな雰囲気にたじたじになる。

ミレイユさん、怖いよぅ。猫で会うのとは勝手が違うな。

小さくなって、とにかく時間が過ぎるのを待つ。

ようやく現れた救いの神は、お義母さんだった。

お昼が届いたわよーと言われて、カールと一緒に運ぶのを手伝った。

本当は私だけでやるべきなのかもしれないけど、カールから離れたら人の姿を保てない。

「何、あれ」

「ははっ、かわいいなぁ。
カールもべたぼれみたいだね。一時も離れない」

「何言ってるのよ。
ずっとカールにくっついてて気に入らないわ」

「おまえなぁ」

ミレイユさんの刺すような視線が気になりつつも、食事会はなんとか無事終わった。
食後のお茶をいただいていると、さきほどまでどこかに行っていたミレイユさんに、手招きされた。

「ねぇ、ちょっとこっちに来て」

「あ、はい」

カールも一緒に立とうとしたら、

「兄さんはだめ！　女同士の話があるの！」

と言って止められてしまった。
カールが目で「大丈夫か」と問いかけてくる。
家の中なら大丈夫だと思うと答えて、ミレイユさんについていった。
そういうことじゃないんだけどなぁ、とカールが後ろでつぶやいて

いた。

ミレイユさんは、どんどん廊下を進んで行く。

「あの、どこまで・・・」

「もうちょっとよ。ここじゃ兄さんたちに聞こえちゃう」

店舗と一緒になっているためか、思ったより家が広い。
どうしよう。これ以上カールから離れると・・・。

「あの、ミレイユさん」

まだ奥へ案内しようとするミレイユさんを、勇気を出して呼び止めた。
これ以上一歩でも動いたら、猫になっちゃう。

「お話なら、ここで聞きます。
もう十分カールたちから離れたと思いますし」

「何言ってるのよ。ほら、もっと、こっち！」

ぐいっとミレイユさんに手を引かれた。
ここで猫になるわけにはいかないと、私もふんばる。

「や、やめてください。
ここだっていいじゃないですか。
やめて！　やめて！！」

必死に抵抗するけど、ミレイユさんはすごく力が強くて・・・。

「あっ」

＊＊＊＊＊

「きゃあああああ」

家の奥から悲鳴が聞こえた。
ミレイユに何かされたかと、慌てて声がした方に向かう。

「ルゥ！」

「かわいいぃぃぃぃ！」

そこには、白猫になったルゥと、ルゥに頬ずりするミレイユがいた。
ルゥは耳としっぽを垂らしてしょんぼりしている。

「何コレ、何コレ、どういうこと!?
わかんないけど、かわいいからいいぃぃ！」

「うなー」

「あー・・・」

俺は、手の平で目を覆って、天を仰いだ。

「つまり、ルチノーさんは魔術で猫になる体質にされてしまったってことかい？」

「あぁ、まぁ、そうだ。
で、それを治すために、城に魔術を習いに行くことになった」

「まぁまぁそうだったの！　急に帰ってきて何事かと思ったら、まぁぁぁ！」

予想通り、というか、親父もおふくろもルゥの姿を見ても驚かなかった。
だてに長く王都で店をかまえてはいない。
心の中では驚いていても、それを表に出すようなこともないだろう。
それどころか、無類の猫好きのおふくろは、ルゥの美しい毛並みに一目ぼれしたようだった。
そしてそれは妹のミレイユも同じだった。

「兄さんも水臭いわぁ。ルチノーさんが、あのとき私が会った猫ちゃんだって教えてくれたら、いじわるしようなんてしなかったのに」

「やっぱりいじめようとしてたのか・・・」

女同士の話、なんてろくなものはない。
あのまま連れていかれていたら、どんなことをされていたか。

しかし、今はルゥはミレイユにはがいじめにされ、撫で繰り回されている。

「はぅん、この毛並み、最高！」

「ミレイユ、お母さんにも抱かせて」

「えぇ～？　ちょっとだけよ」

「次は父さんな」

「え、じゃぁ俺も」

「ちょっと待て、男はだめだ」

「え！　何言ってるんだよ、けちくさいな」

「ふざけんなよ、クィール。
おまえの彼女が裸で男に撫でまわされてもいいのか」

「あ、何、今のルチノーさんってそゆこと？
うはっ」

「何を想像した、何を！　鼻血を拭け！」

ルゥの服は袋に入れてもらって、猫のまま連れ帰った。
おふくろやミレイユはともかく、親父やクィールにルゥの着替えを見せるわけにはいかない。

たとえ隣室で着替えるにしても、妙な想像をしていた次兄（クィール）に、衣擦れの音一つ聞かせたくはなかった。

手垢を落とすべく入れた風呂で、人の姿に戻ったルゥが、膝を抱え顔半分湯につかってぶくぶくと泡を吹く。

「気にするな。災い転じて福となす、か？
俺の実家公認になってよかったじゃないか」

「そうだけど・・・そうだけど・・・」

ぶくぶくぶく。
頭の上まで沈んでいく。
ルゥなりに俺の家族に気に入られようと張り切っていたから、無理もない。
人（ルゥ）のままだといじめられそうになって、猫になった途端かわいがられるなんて、おもしろくないよな。

「まぁ、妹（ミレイユ）もああいう感じだけど、根は悪いやつじゃないんだ。
うまくつきあってくれると助かる」

「うん、がんばる・・・」

その後、クィールから猫用の服が大量に届いた。
いや、着ていればいいというものではないだろう。
今後のために、一応もらってはおくが。

ミレイユは、時々遊びに来るようになった。
ルゥが作った菓子をつまみながら、旦那の悪口などを言っていくらしい。

「あのね、子どもができて、そのとき猫になっちゃったら、おなかの子はどうなるの？」

「えっ・・・」

ある晩、やけに強硬にルゥが誘いを断るものだから、問い詰めたらそうミレイユに言われたと言っていた。
そんなこと、できてから考えればいいじゃないか。

「でも、わからないから、エメさんに聞いてからにしよ？　ね？」

結局その晩はおあずけだった。
ったく、ミレイユのやつ、余計なことを言いやがって。
問題なしの返事をもらうまで、三日も俺は我慢するはめになった。

しかし、そんなこんなはありつつも、ヴィルヘルミーナに引っ越すころには、家族の一員としてルゥは溶け込んでいた。
引っ越し当日、挨拶がてら馬車を店に横付けしたら、家族総出で見送りをしてくれた。
その中で、泣きながらルゥに抱きついていたのはミレイユだった。

「体に気を付けて。

いつか私も遊びに行くからね。
手紙、書くね」

「ありがとう、ミレイユさん」

「ミレイユさんだなんて他人行儀な！　お姉様と呼んでっていつも言ってるじゃない！」

「おまえ、俺のルゥに何をさせようとしている・・・」

「いいじゃない。ルチノーさんは私にとっても大事な義妹・・・え、あれ？　違うか。
カール兄さんの奥さんなんだから、私が義妹？
ルチノーさんが私のお姉様？　あら、それもいいわね」

「はいはい。ミレイユのことはいいわ。
カール、元気でね」

「おう」

「ルチノーさん、愚息をよろしくな」

「はい・・・！
みなさん、ありがとうございます。
では、行ってまいります」

ルゥに手を添え、馬車に乗せる。
がたごとと走り出した馬車の中で、ルゥはいつまでも後ろを振り返って手を振っていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7296w/

白猫の恋わずらい

2011年12月13日07時51分発行